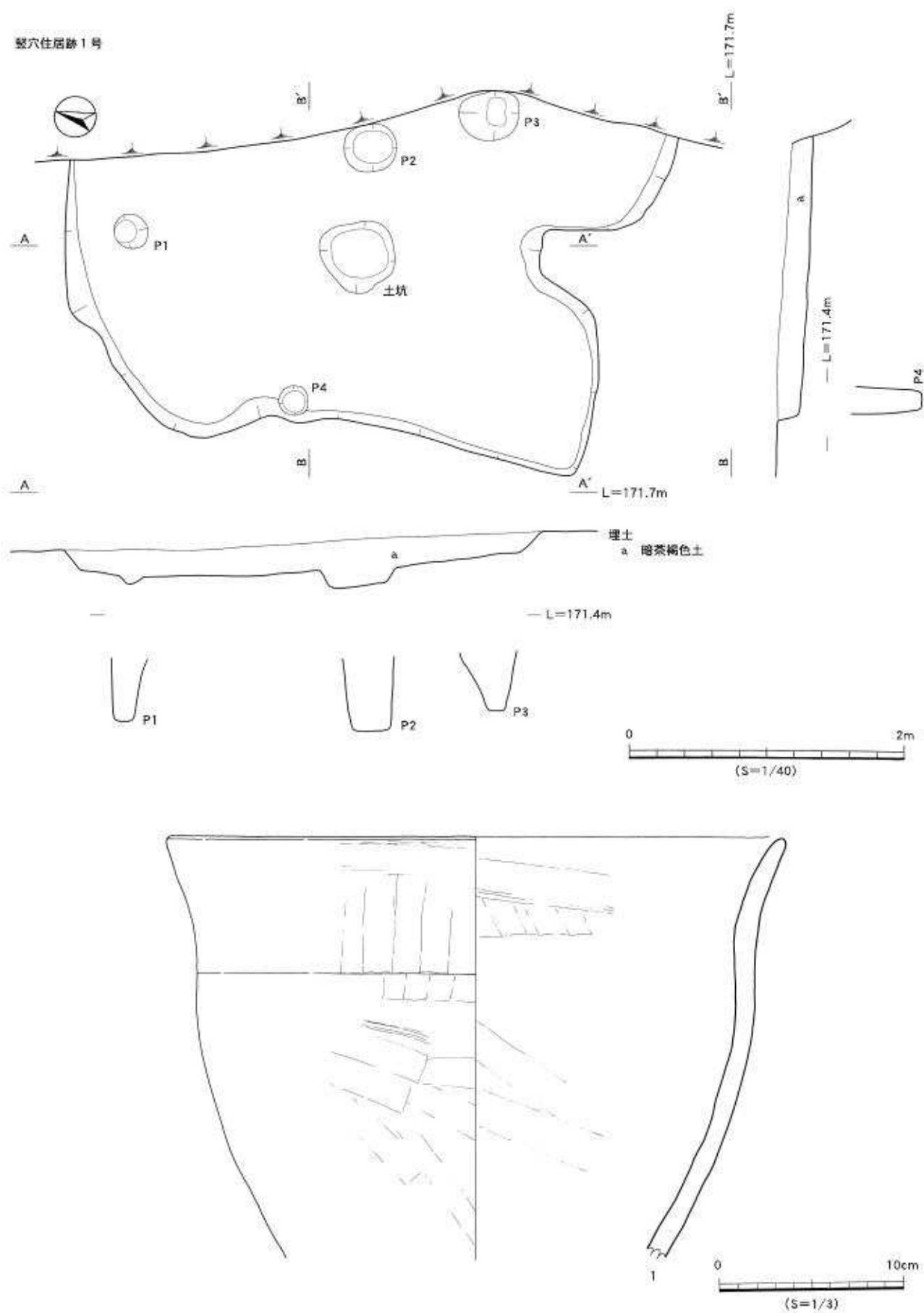
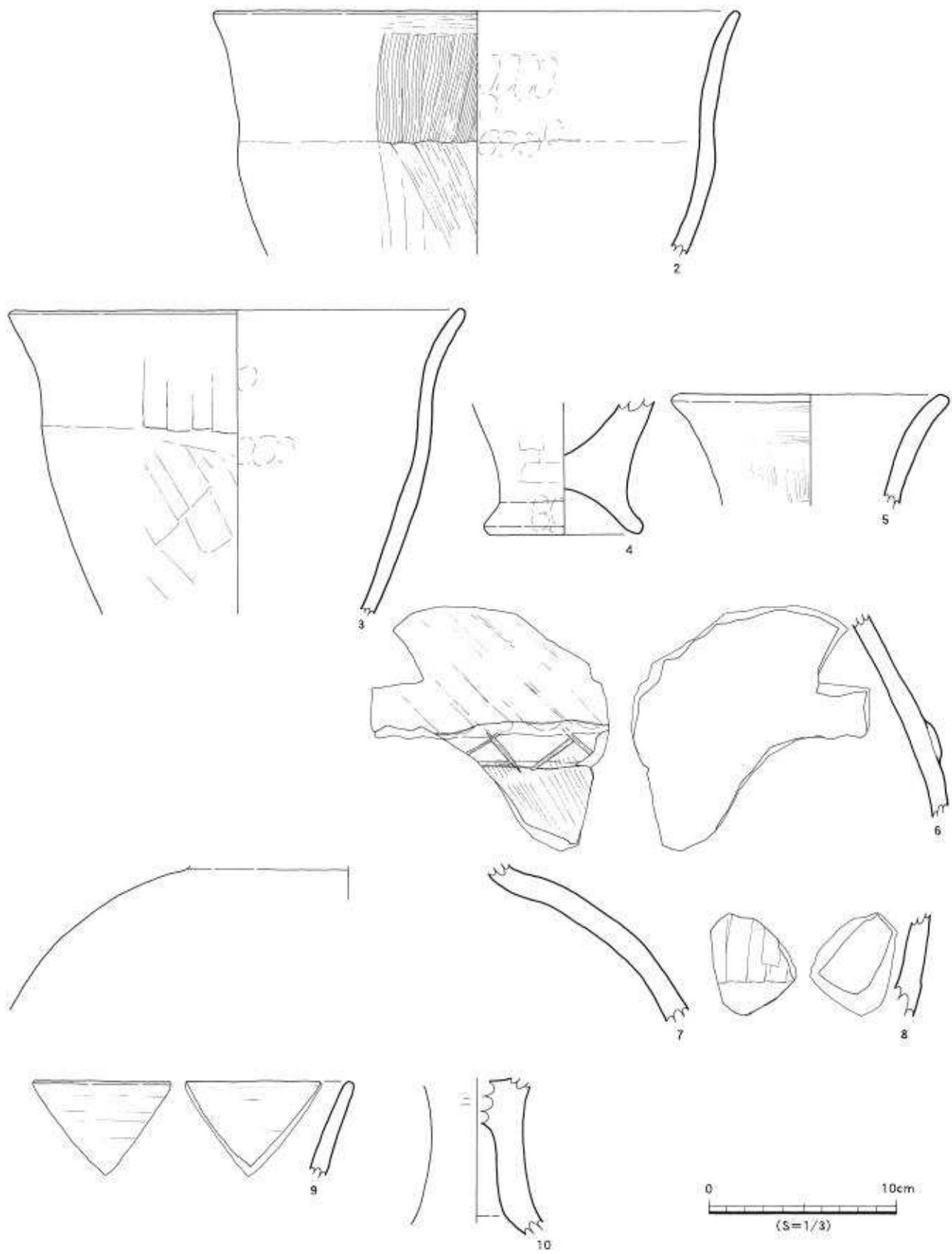


豎穴住居跡 1号



第195図 豊穴住居跡 1号・出土遺物①



第196図 積穴住居跡 1号出土遺物②

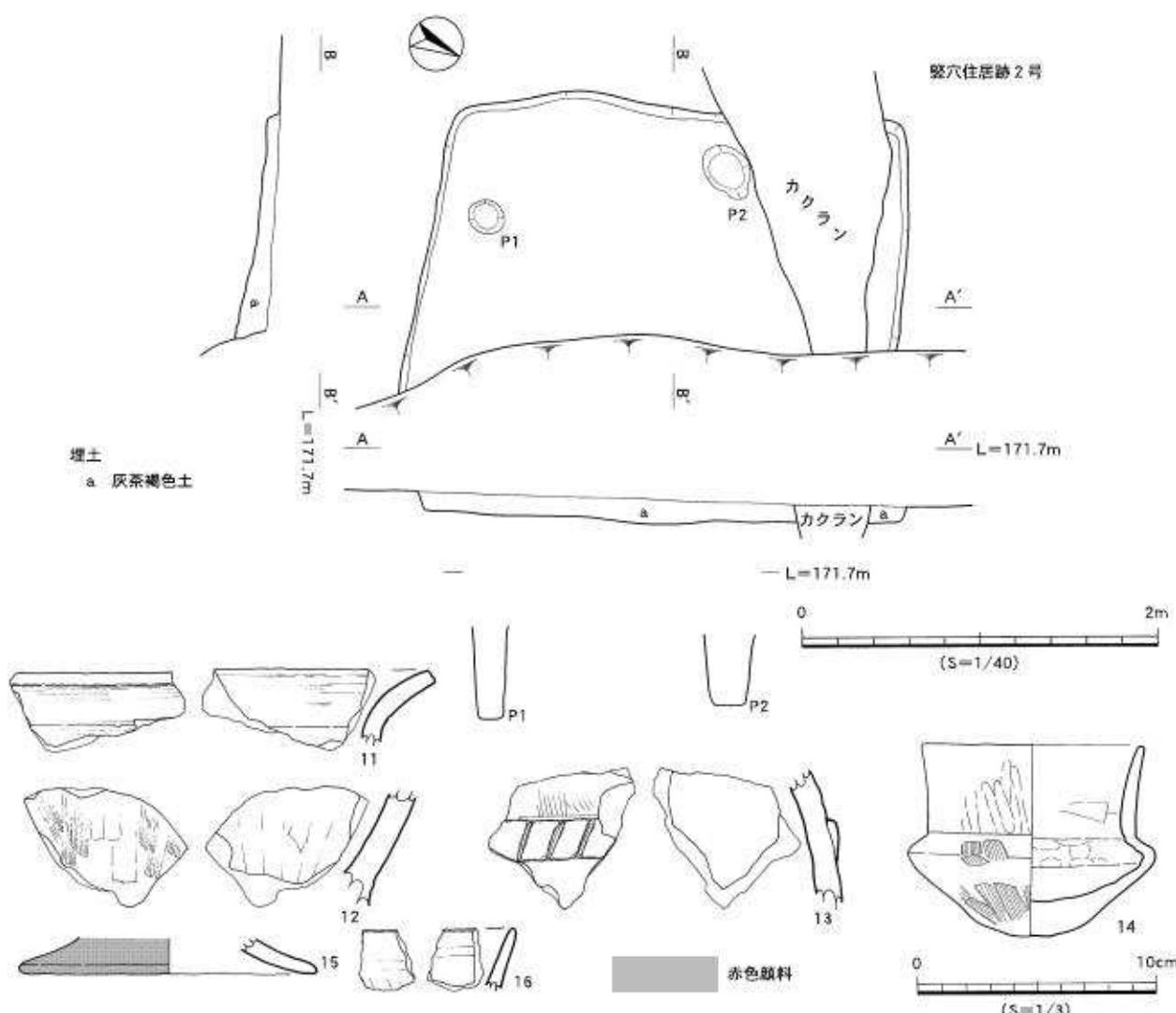
### 堅穴住居跡 2 号（第197図）

K-6区において埴層上面で検出された。東側は、羽月川方向へ落ち込んでおり、住居跡の半分以上が消失していた。また、排水管の埋設により北側に搅乱を受ける。検出時のプランは、長辺2.8m、短辺1.3mで、残存している南北軸から本来の平面形状を想定すると、1辺が2.8mの隅丸長方形ないしは隅丸方形のプランが予想される。調査は、残存する部分の中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は單一層であり、床面は東側の落ち込みに向かうように運動して緩やかに傾斜している。柱穴などの付帯施設は、ベルトを除去した後に、床面を精査した段階で確認、2基の柱穴が確認された。床面には硬化面は見られない。炉・焼土や炭化物の広がりも見られなかった。遺物は、総点167点でこの内6点図化した。11・12は壺の破片である。11は口縁部が外反し、口唇部は比較的平坦面を有する。13は、壺の胴部素帶片である。14は堆で、直線的な口縁部

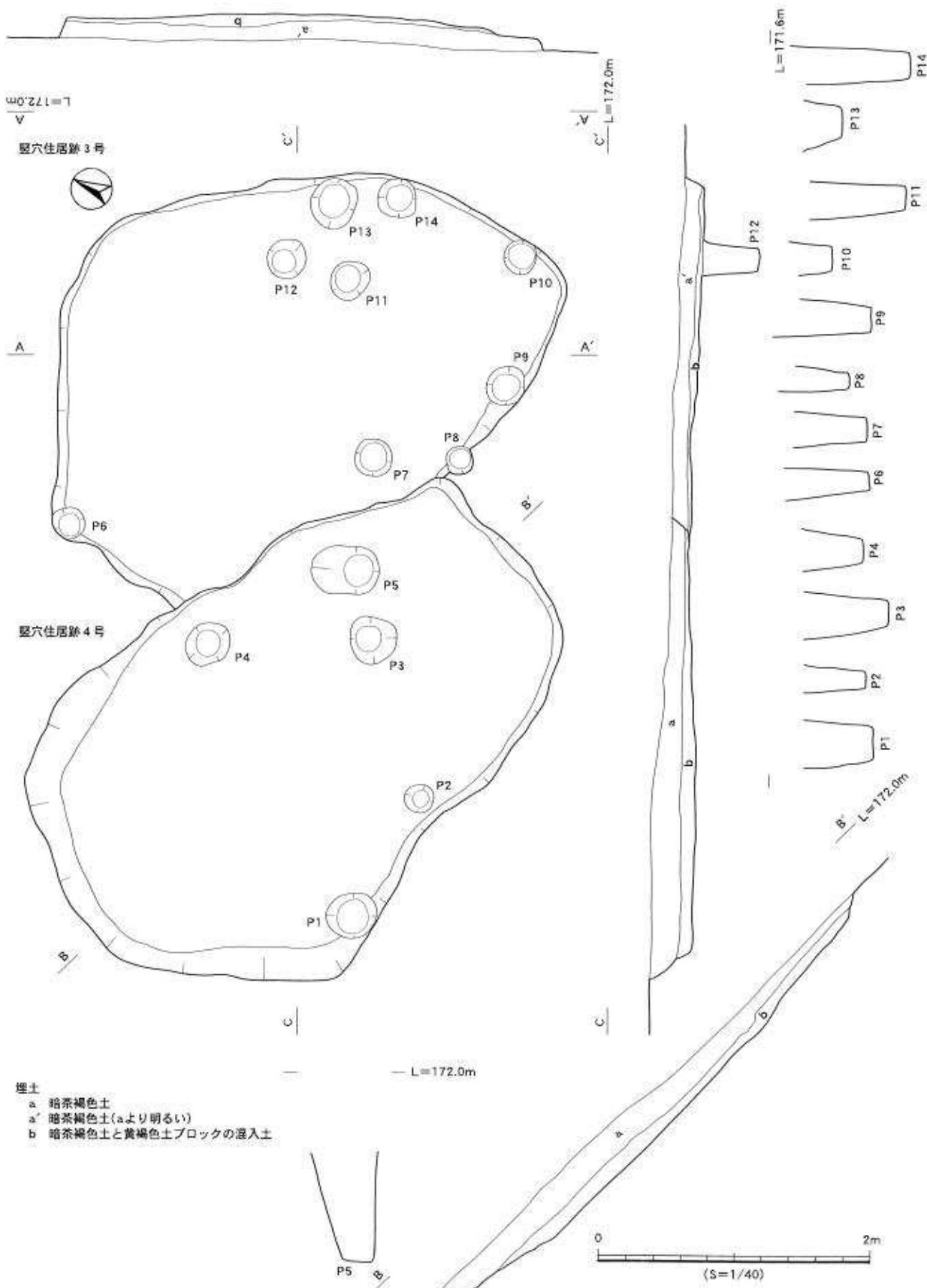
から胴部で強く屈曲し、丸底の底部へ至る器形である。

堅穴住居跡 3:4量 (第198~20図)

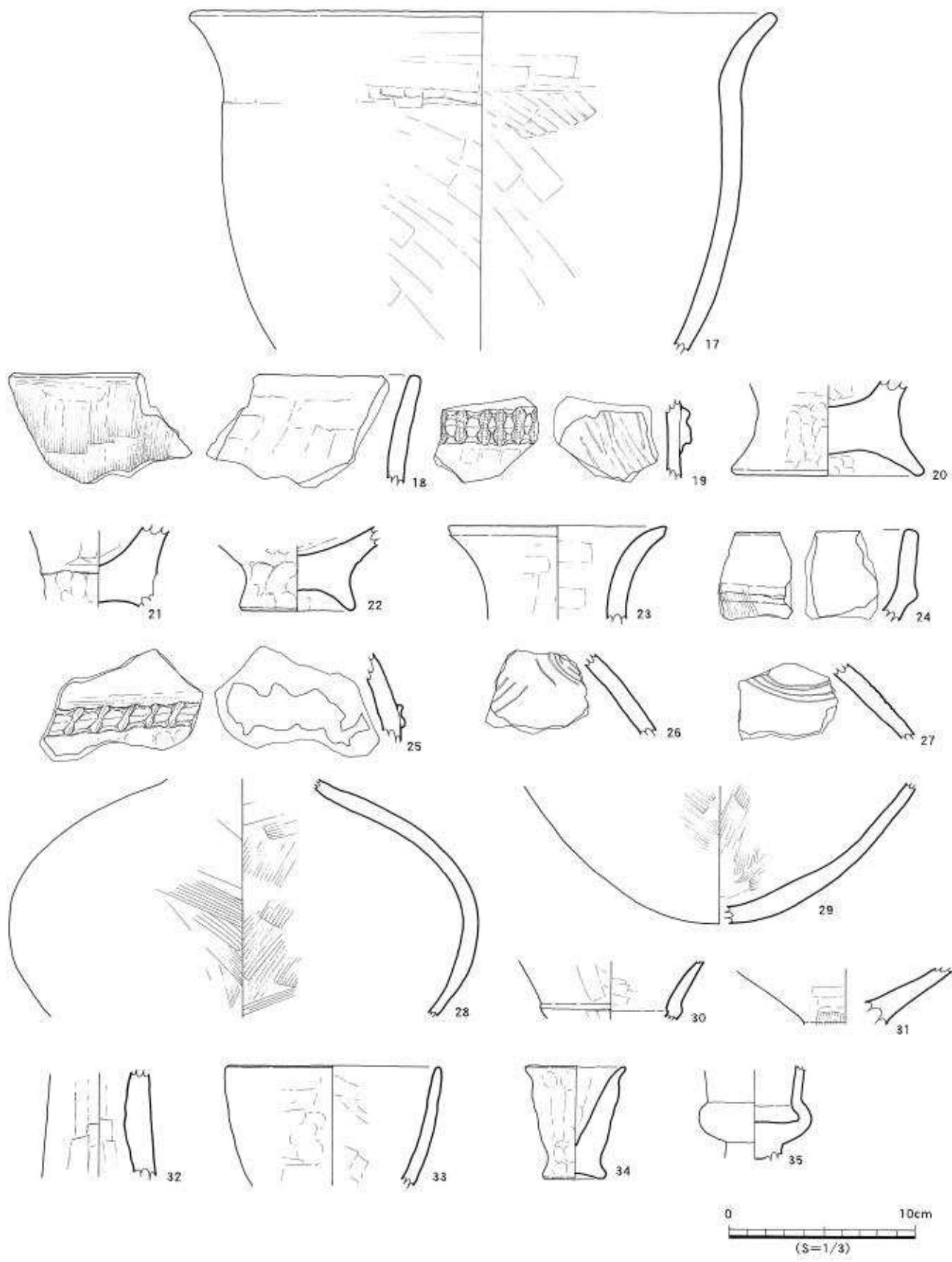
J・K-6区において畠層上面で検出された。検出時のプランは、長辺5.9m、短辺3.8mの不定形で、東側の色調が西側より明るく2軒の切り合い関係が想定された。このため、調査は、切り合いを検討するための長軸ベルトを基準に各々の中央を通るベルトを設定して掘り下げを開始した。最終的なプランは、3号が $3.6 \times 3$ mで、4号が $4.2 \times 2.9$ mであった。床面と思われる埋土の変化は、埋土bの上面がやや硬質であり、この埋土bが暗茶褐色と黄褐色ブロックの混入土で、他の住居で貼床に使用される土であったことなどからこれを床面と判断した。柱穴などの付帯施設は、埋土bを除去した段階で確認された。その結果、柱穴が14基確認された。また、埋土bは厚いところで10cm近く見られ、両住居共にレベルに大差はない。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしない。4号の埋土中出土の炭化物については放射性炭素年代測



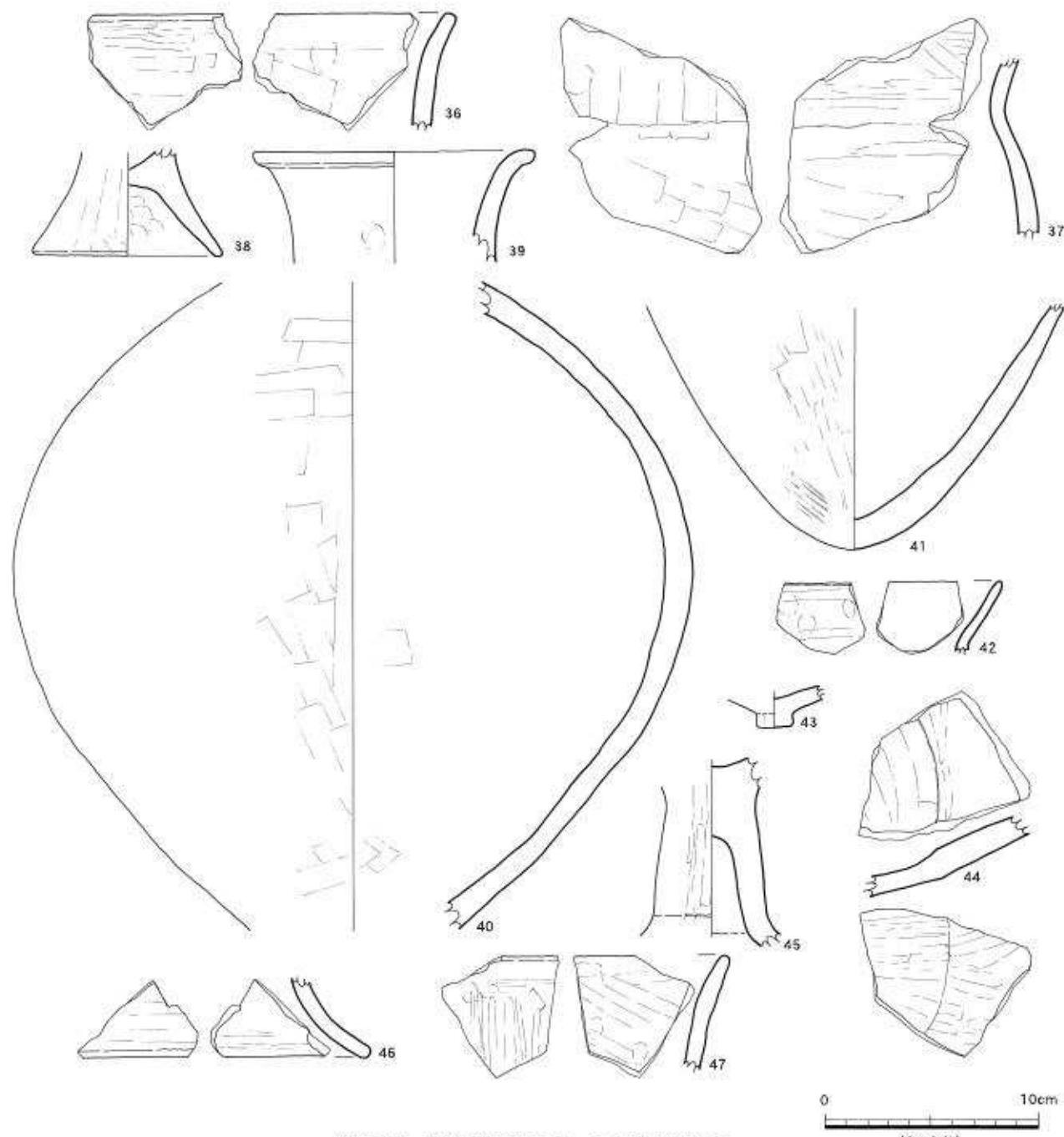
第197図 竪穴住居跡 2号・出土遺物



第198図 坑穴住居跡 3号、4号



第199図 積穴住居跡3号、4号出土遺物①



第200図 竪穴住居跡3号、4号出土遺物②

定を実施し、 $1,760 \pm 20$ yrBPという結果が示されている（第4章参照）。

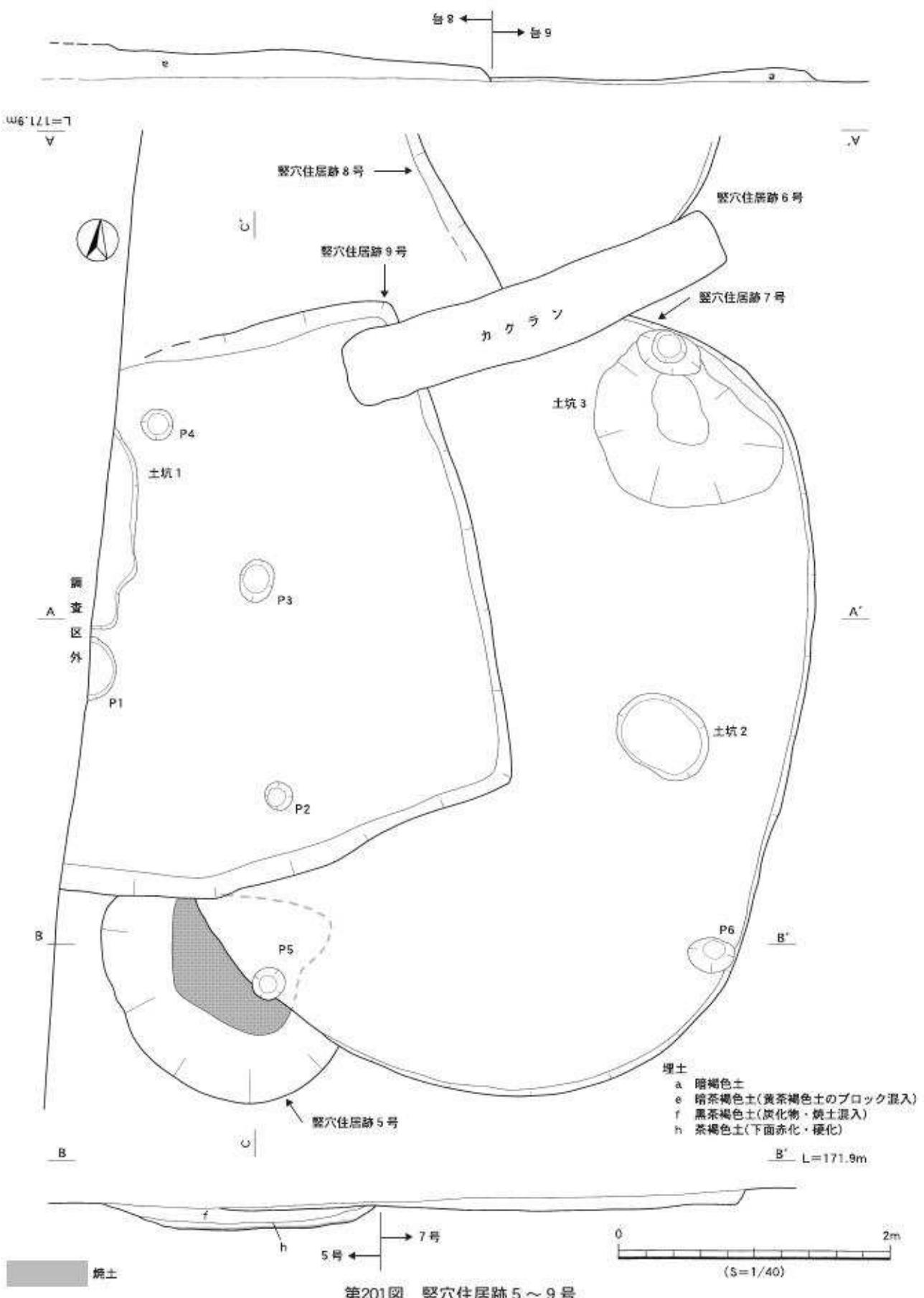
遺物は、総点で3号が665点、4号が908点出土し、この内3号が18点、4号が12点図化した。17～35が3号出土遺物で、36～47が4号出土遺物である。17は口縁部が外反する器形で、内面はわずかに稜を有しない。19は、やや幅広の突帯で、中央を凹ませた後にキザミが施されている。26・27は細沈線により重弧文が施されている。28と29は胎土や色調などから同一個体の可能性がある。壙としては大型で、壙とするには胴張りが強くて器高が低い。30は壙の胴部片と思われる。34はミニチュアである。35は精錬された素地土であり、充実した筒状の脚がある。

わずかに残存していることから脚を有する壙であると思われる。36は、鉢の脚の可能性もある。43はつまみ上の突起がある。44はやや大型の高環の皿部片かと思われる。

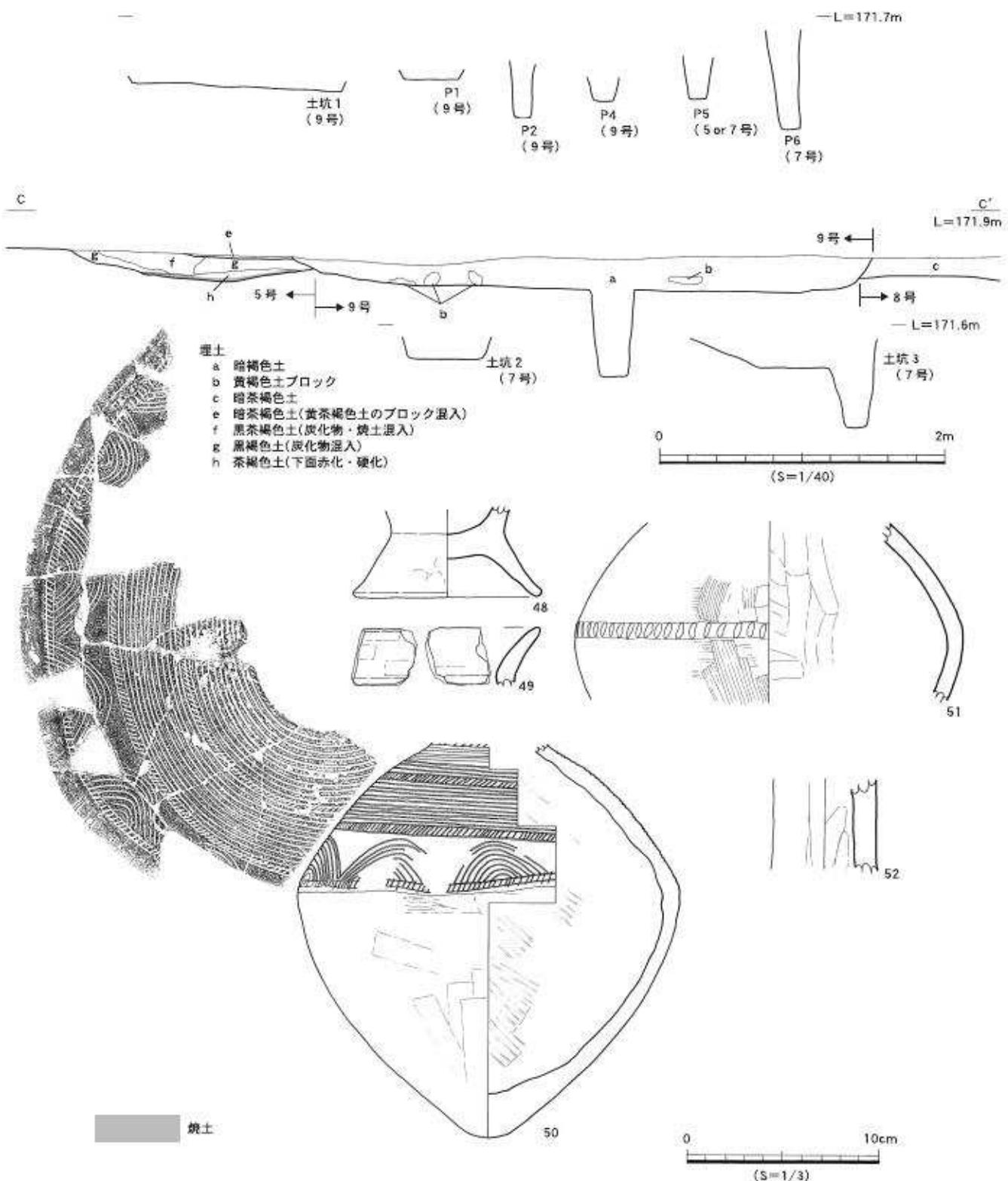
#### 竪穴住居跡5～9号（第201～207図）

J-5・6区においてⅢ層上面で検出された。

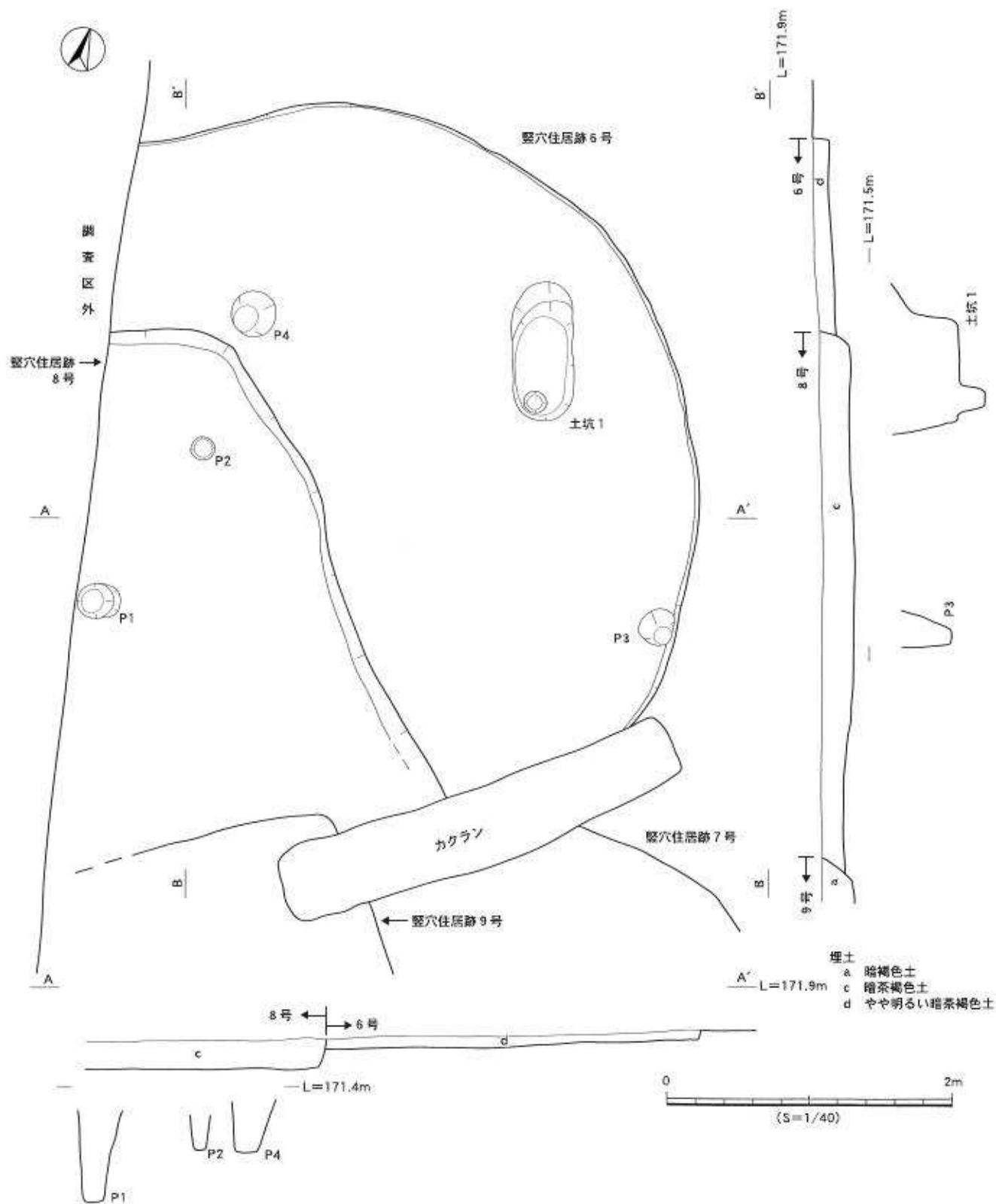
北側の壁際で多数の切り合いが考えられる不定形の大型プランで検出された。最大長12m、最大幅が5.5mある。当初、基数やそれぞれのプランが判断できず、南北通しのベルトを基準に、3本の直行するベルトを切り合いが予想される部分に設定して掘り下げを開始した。中央には、芋穴と思われる擾乱があり、これを掘り下げることで、中心部分から硬化面の変化を追いかけて壁面の



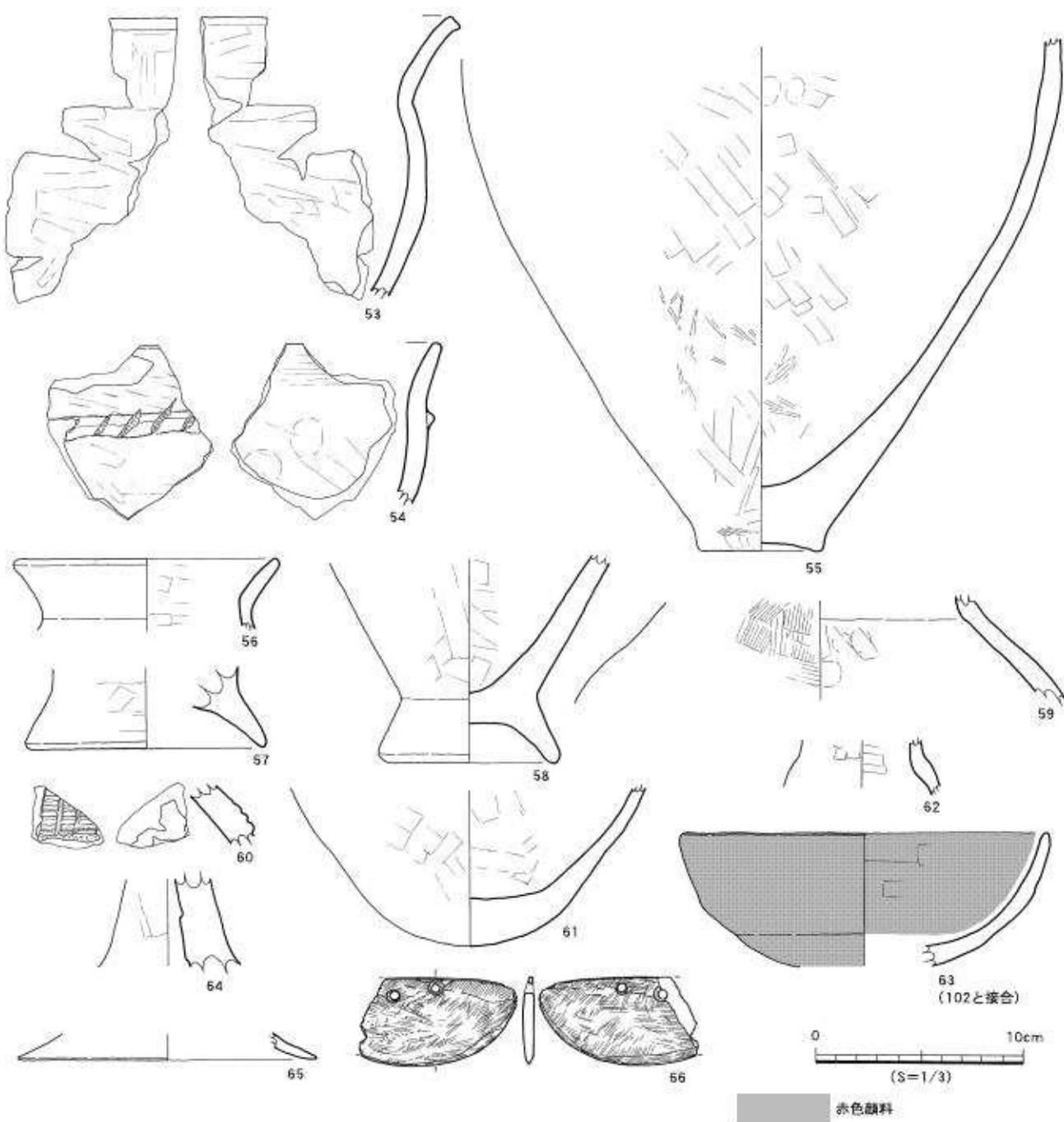
第201図 竪穴住居跡 5~9号



第202図 積穴住居跡 5～9号・積穴住居跡 5号出土遺物



第203図 竪穴住居跡 5～9号

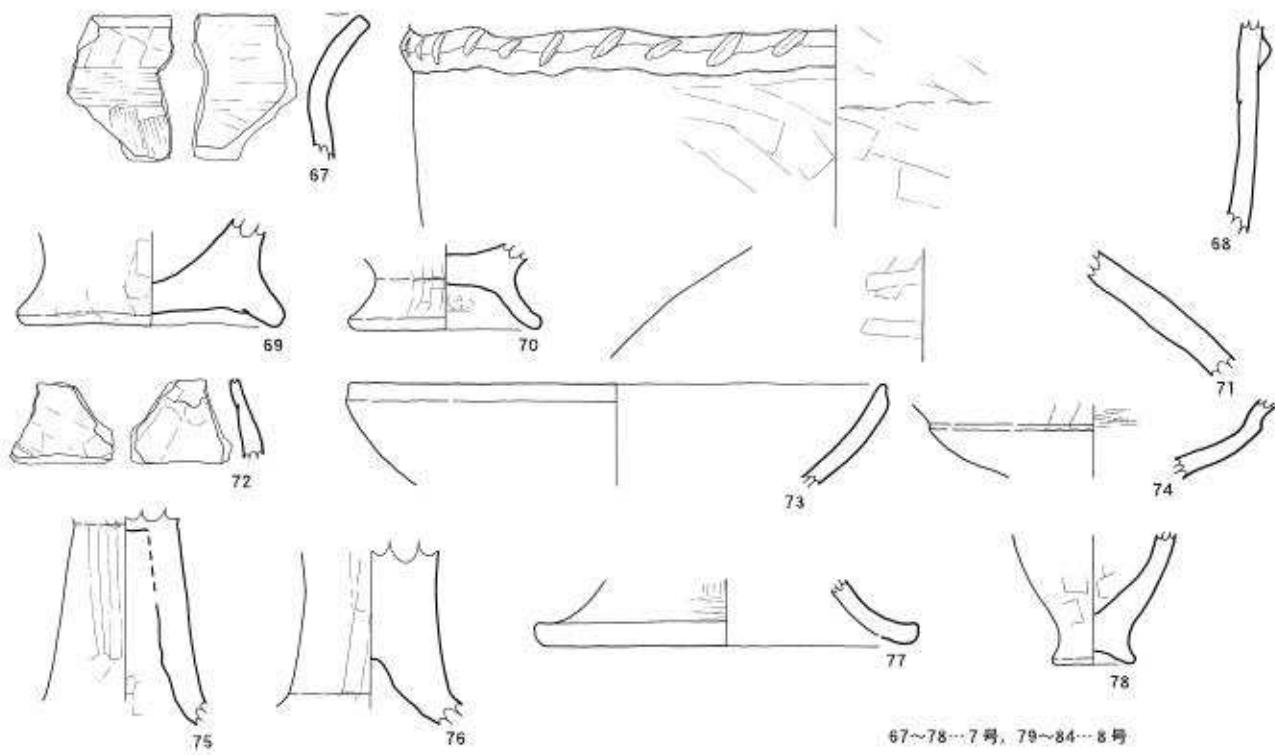


第204図 竪穴住居跡6号出土遺物

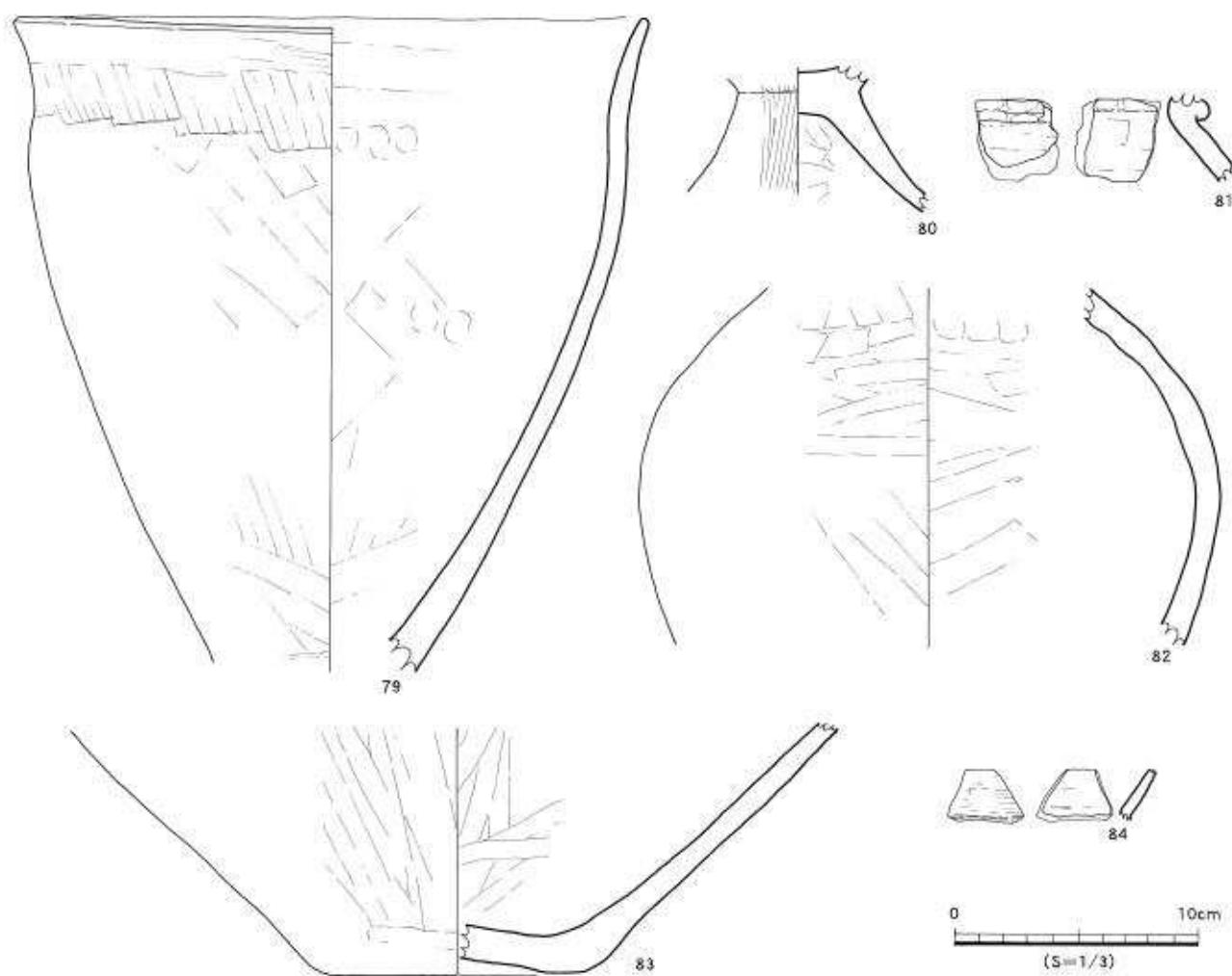
立ち上がりを捉える作業や、切り合い関係を掴む作業を実施し、その結果、5号が古く7号及び6号、その次に8号となり最も新しいものが9号という関係を捉えることができた。プランで見ると、円形が古く方形が新しいということになる。ただし、7号と6・8号との関係は、はっきりとしない。各竪穴住居跡内の炉・焼土や炭化物の広がりは把握できなかったが、5号の埋土中には炭化物を多く含む層の堆積が見られた。遺物は、5号が総点で204点出土し5点を図化、6号が総点で970点出土し14

点を図化、7号が総点で314点出土し12点を図化、8号が総点で456点出土し10点を図化、9号が総点で854点出土し19点を図化した。

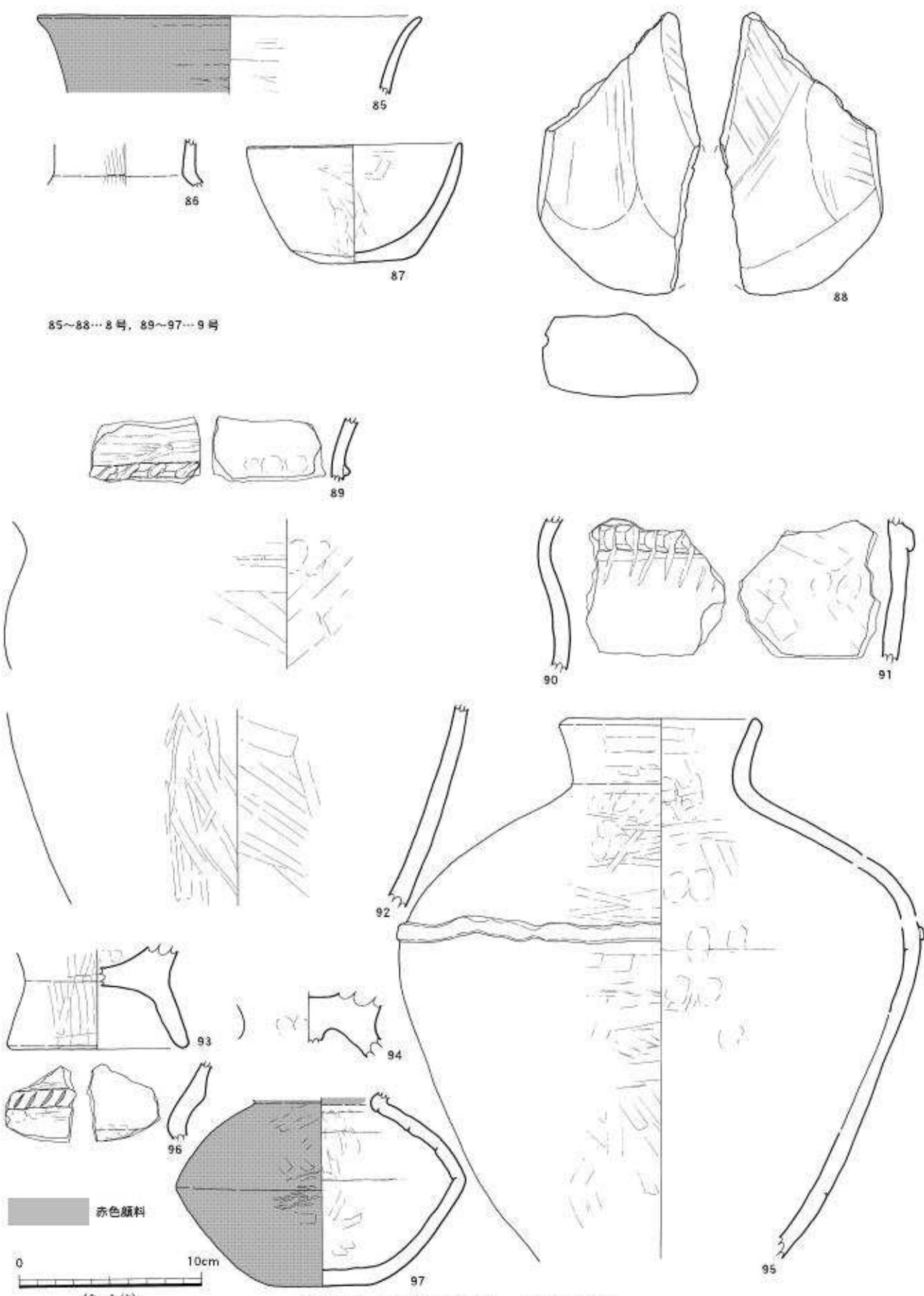
5号は直径2mの円形で、埋土中に炭化物を多量に含む。形状や規模的に竪穴住居跡とするには疑問も残る。遺構内遺物の中には、いわゆる重弧文土器が出土しており、この遺構が祭祀的な機能のあることも考えられる。時期的には他の竪穴住居跡よりわずかに古いと考えられるが、小破片での判断は困難であり、弥生時代終末から



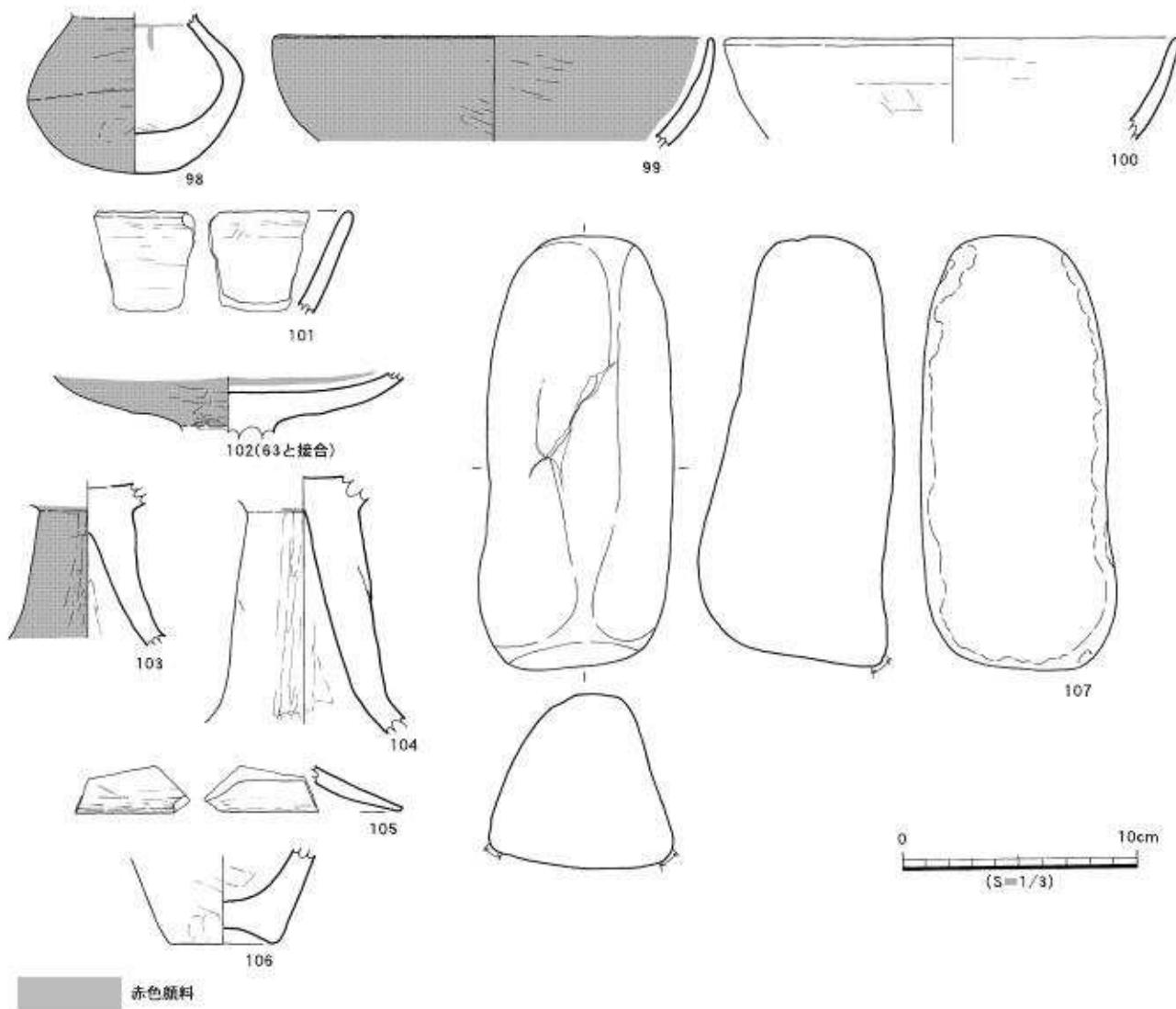
67~78…7号, 79~84…8号



第205図 竪穴住居跡7号, 8号出土遺物



第206図 窪穴住居跡 8号、9号出土遺物



第207図 竪穴住居跡9号出土遺物

古墳時代初頭という時間幅の中で考えここに掲載した。

6号は直径5.4mの円形である。東側に2段掘りで底面に小ビットを有する土坑が検出されている。55の底部は平底で、端部をつまみ出すようにした結果上げ底状を呈している。66は石庖丁片である。穿孔部分が端部に偏っており、再加工を施した結果であろうかと思われる。

7号は、直径5.9mの円形である。北側に大型の土坑がありその底面にビットが1基検出された。69は甕の底部である。脚と呼ぶには短い張り出しが見られる。

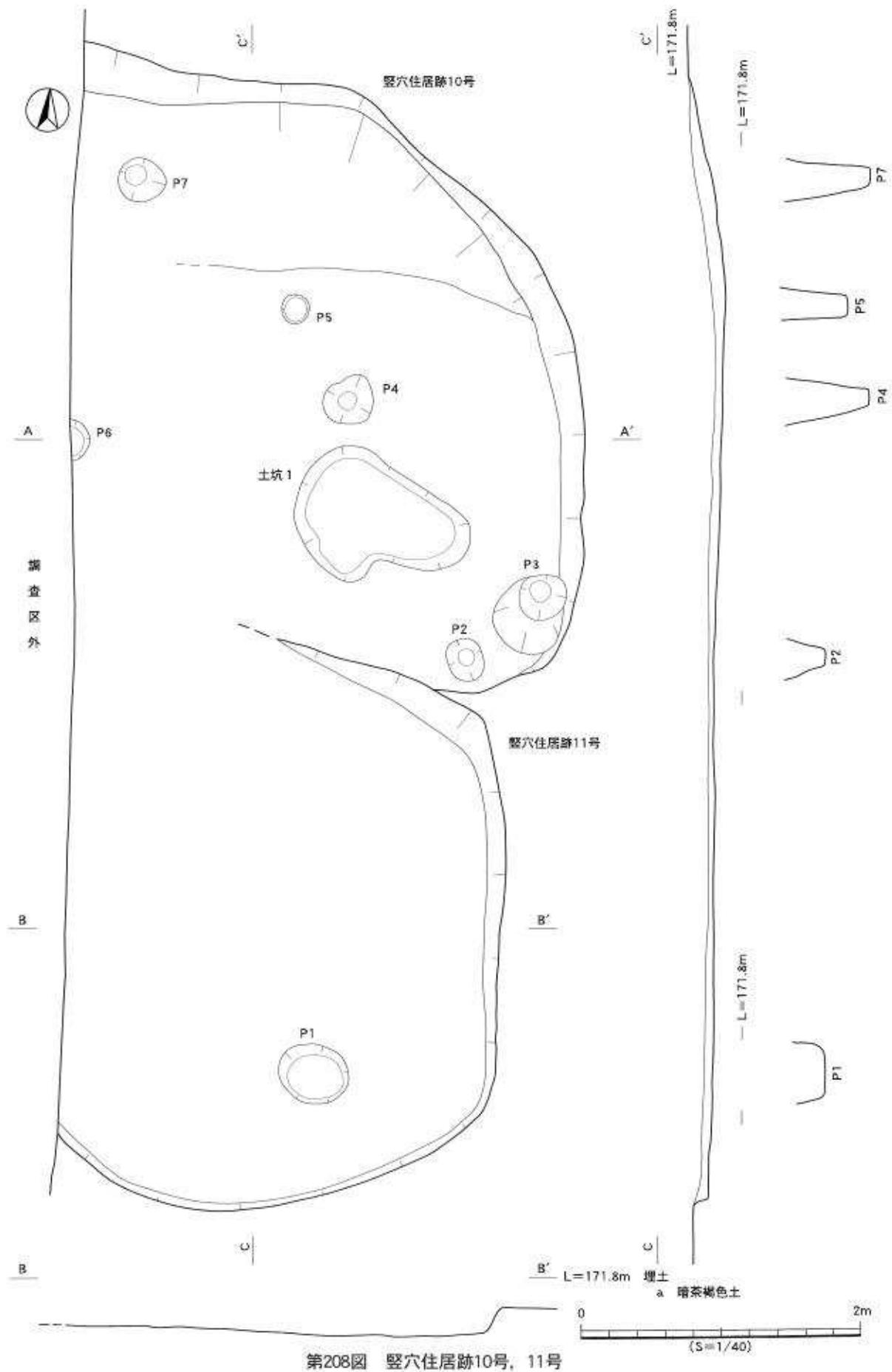
8号は、方形と思われるが芋穴や未調査区があり、はっきりとしない。79は底部を欠くがほぼ全体の器形がわかる甕である。口縁部の外反はやや緩やかで、胴部はあまり張り出さない。口縁部外面には幅広の工具痕が見られる。

9号は、切り合い関係からこれらの中で最も新しいと思われる。95は頸部が短く胴部最大径がやや上方にある。

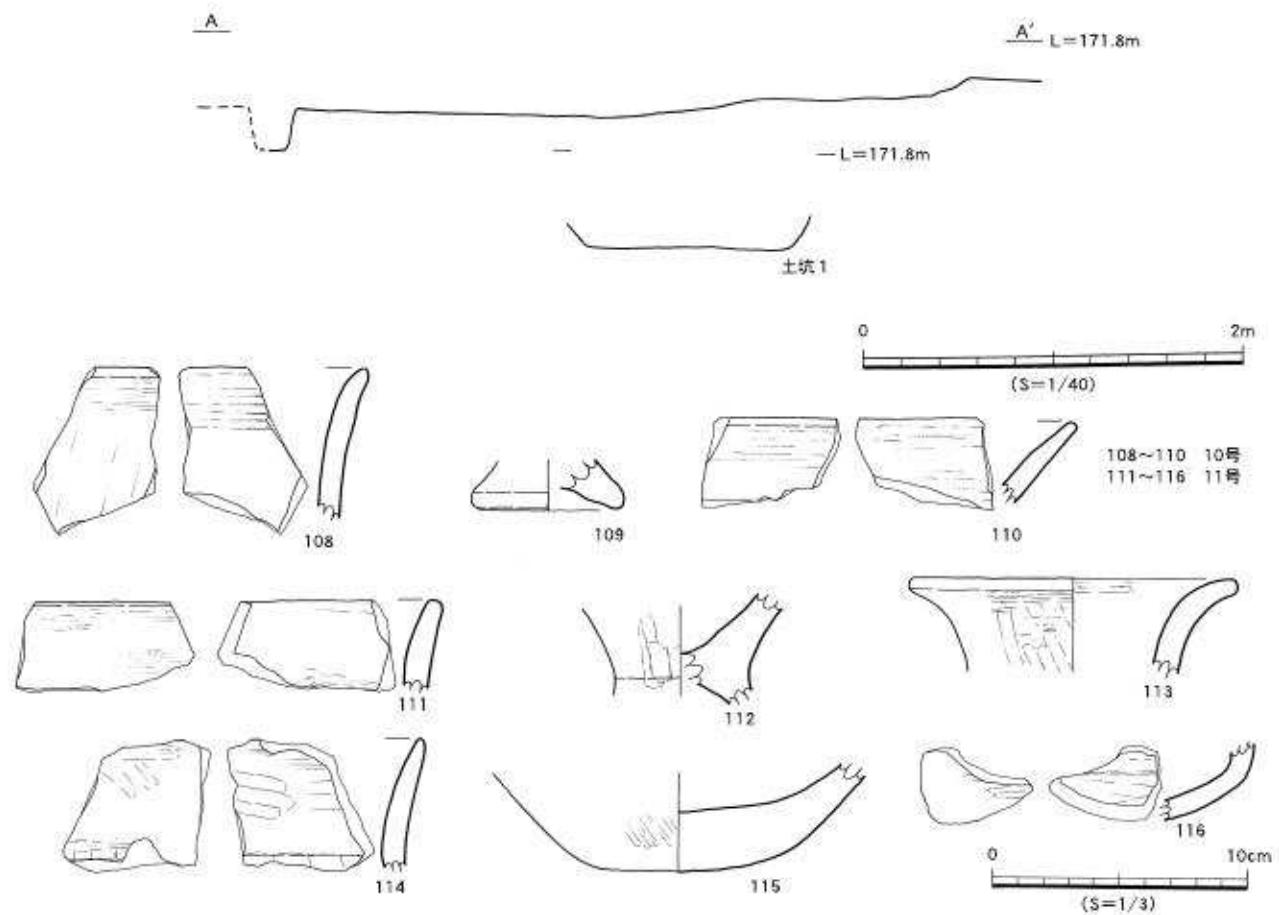
突帯をめぐらせるがキザミ等は施されていない。97は壇で、胴部が強く屈曲する。

#### 竪穴住居跡10・11号（第208・209図）

I・J-6・7区において埴層上面で検出された。検出時のプランは、長辺8m、短辺3.8mの不定形で、平成21年度調査区の最北西壁付近に位置する。このために微地形との区別が困難で、検出されたときには上面プランを一部掘り下げてしまっていた。調査は、長辺の長さから2基の竪穴住居跡の切り合いを想定して長軸ベルトと各々に短軸ベルトを設定した。長軸方向の埋土においては、両者の埋土による切り合いはつかめず、ベルトを外した後に床面の高低差による判断した。不明瞭な部分が多い中、東側の床面が僅かに11号が深く、10号が浅かったため、ここで新旧関係を判断した。なお、床面は一様に平坦ではなく、東西方向に高低差が約10cmある。また、硬化面も明確に捉えることが出来なかった。この



第208図 縫穴住居跡10号, 11号



第209図 竪穴住居跡10号、11号出土遺物

ため、柱穴などの付帯施設の確認は、床面の記録が終了した後に、床面を除去しながら検出作業を行った。この結果、10号では6基の柱穴と1基の土坑が、11号では1基の柱穴とがそれぞれ確認された。なお、炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。遺物は、10号が総点で226点出土し3点を図化、11号が総点で169点出土し6点を図化した。

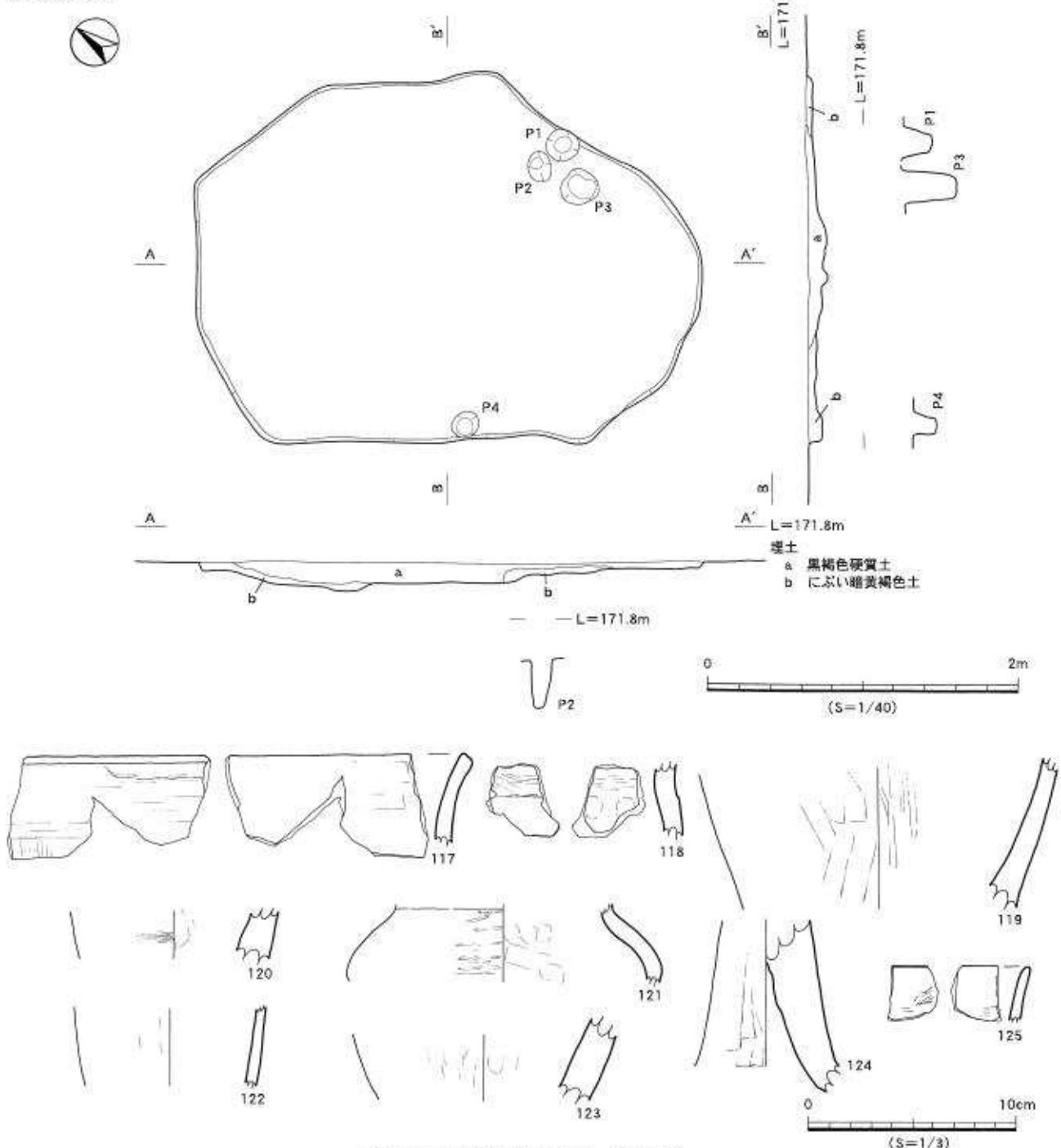
10号は、不定形プランである。北東側のコーナーの状況から略円形であったとも考えられる。北側は緩やかに立ち上がり、なだらかなテラスを形成する。柱穴は50cmから60cmの深さがあるものが3基検出された。P2とP4とに挟まれた土坑1は、やや楕円形で検出面から約20cmの深さがある。焼土や炭化物等は含まれておらず、性格を考察するに耐える遺物も出土していない。

11号は、約4mの隅丸方形ないしは略円形のプランになるものと思われる。柱穴は1基検出され、検出面からの深さは20cmと浅い。108は甕の口縁部片である。全体的な形状は不明だが外反は緩やかである。113は口縁部が外反するタイプの壺である。

#### 竪穴住居跡12号（第210図）

I・J-7・8区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.3m、短辺2.4mの隅丸長方形に近い不定形で、検出時には北と西側の一部以外に既に硬化面が認められた。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定し、硬化面の記録を行った後に掘り下げを開始した。硬化面を除去しながら掘り方の面を検出していったところ、最終的な床面は中央に向かって不安定に落ち込んで検出された。この落ち込みは、方形土坑のような住居付随のプランも想定されたために、立ち上がりに関して留意して掘り下げていったが、明確なプランを捉えることは出来なかった。柱穴などの付帯施設は、この硬化面を除去した段階で4基の柱穴が確認された。P4を除く3基の柱穴は東側に偏って検出された。炉・焼土や炭化物の広がりは、検出面が既に竪穴住居跡の床面であったことなどから検出は困難で、はっきりとしなかった。遺物は、総点134点でこの内9点図化した。いずれも小破片が多い。117・118は甕の破片である。口縁部がわずかに外反し、工具によるかき上げ痕を残した結果、外面には段が残る。124は高壺の脚部片である。脚は比較的長い。

豊穴住居跡12号

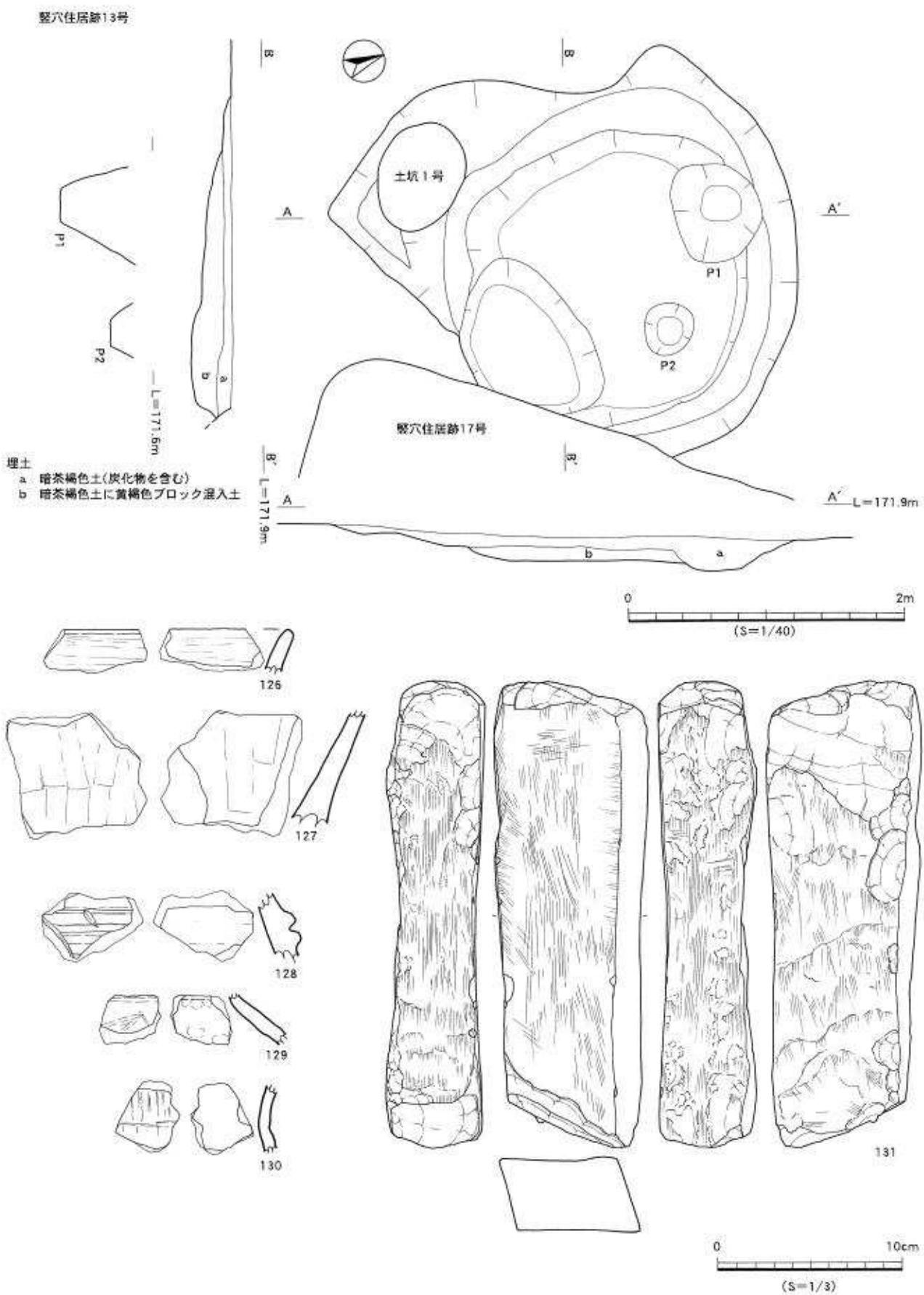


第210図 豊穴住居跡12号・出土遺物

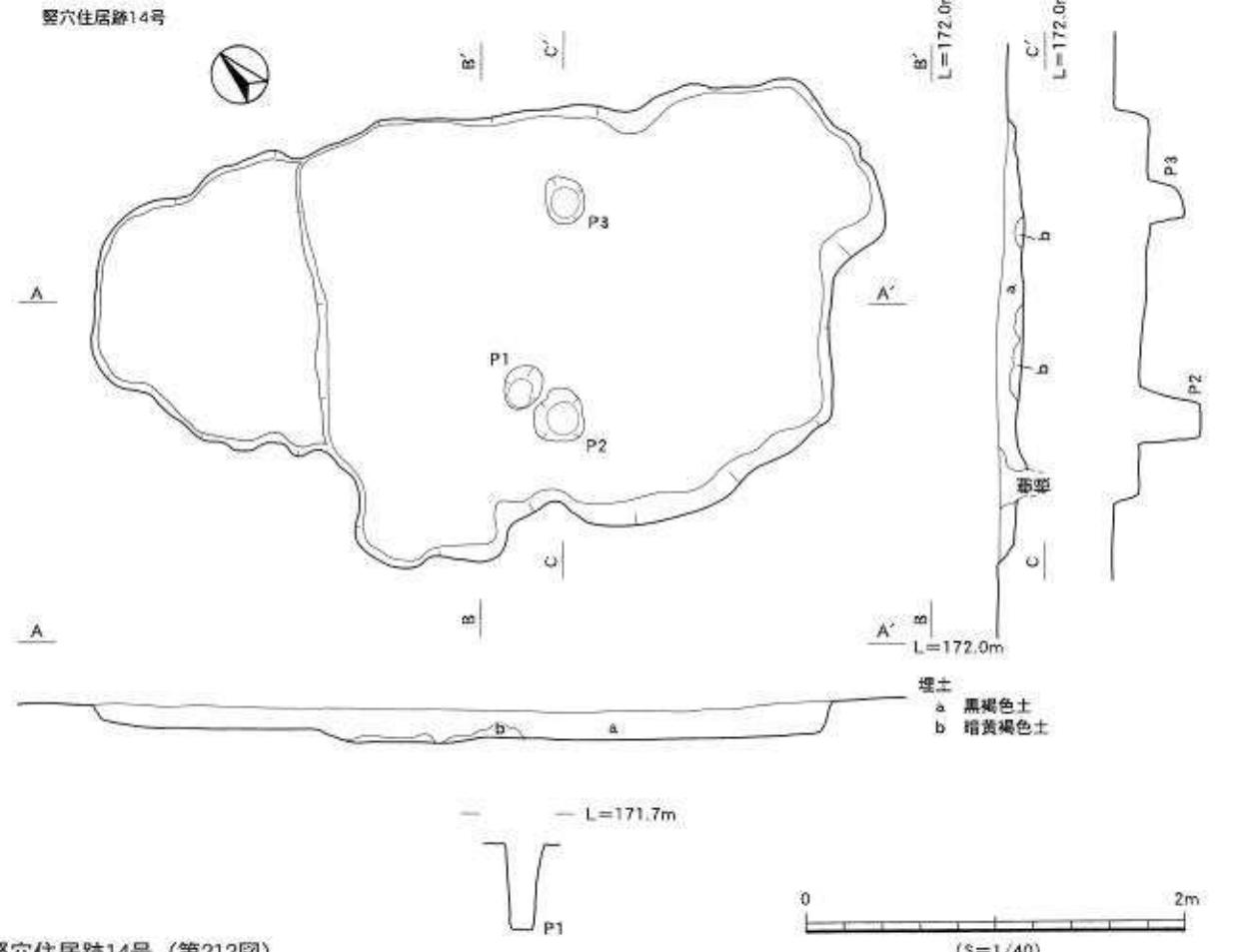
豊穴住居跡13号（第211図）

J-6区において畠層上面で検出された。4号と17号との間に不定型なシミ状痕跡として検出された。検出時のプランは、長辺2.9m、短辺2.8mの楕円形に近く、調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一層で床面には暗茶褐色と黄褐色ブロックとが混在しており、貼床と判断した。この貼床は、中央部分では厚いが壁面周辺には見られない。このため、完掘すると2段掘り状のプランとなる。この

貼床プランの南側には楕円形の土坑が見られ、柱穴などの付帯施設の確認も、この段階で2基の柱穴が確認された。また、南側には楕円形土坑の他に土坑1が13号の床面を掘り込んで検出された。検出面での切り合いは確認されていなかったため、前後関係ははっきりとしない。炉・焼土や炭化物の広がりは埋土a層中に散在して見られたが、特に集中する箇所等は見られなかった。遺物は、総点279でこの内6点図化した。131は砾石である。各面に使用の痕跡が残されている。

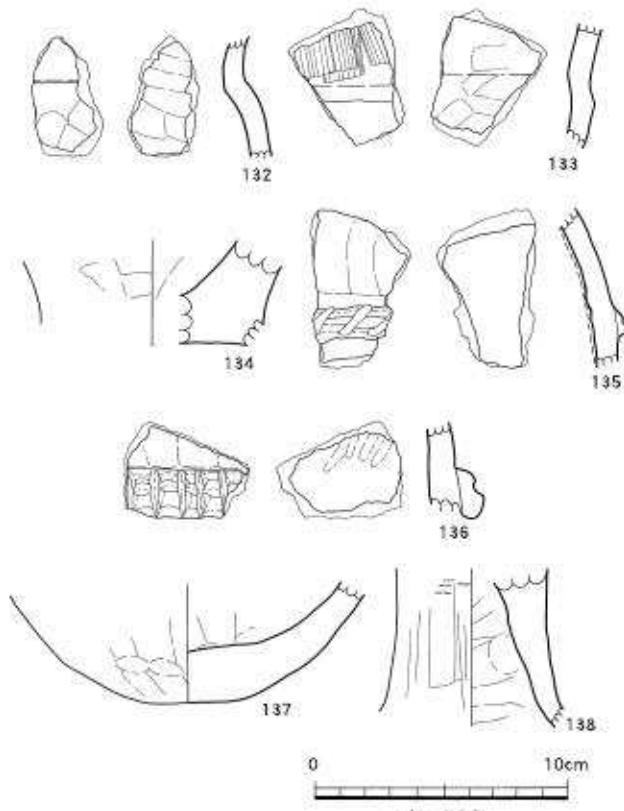


第211図 縦穴住居跡13号・出土遺物



豊穴住居跡14号（第212図）

K-7区において埴層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.9m、短辺2.4mの隅丸長方形に近い不定形プランで、川への落ち際に近いこのような立地のためか、検出時に上面には多くの樹痕等があり、プランの確定の障害になった。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で埋土の記録を行い、ベルトを除去し床面を検出していった。床面には硬化面等は認められなかった。北西側には、浅く張り出し中央がわずかに凹む部分が確認された。柱穴などの付帯施設は床面で3基の柱穴が確認された。P2・3が主柱穴になると思われるが、P3のほうが検出面からの深さは浅い。炉・焼土や炭化物の広がりは確認されなかった。遺物は、総点165点でこの内7点を図化した。132～134は甕の破片である。132・133共に口縁部下の破片である。外面に段を有している特徴が見られる。135～137は壺の破片である。特に136は、胴部突帯中央を凹ませた後にキザミを施す。137は壺の底部である。138は高環の脚部であるが、脚部の径からやや大型である可能性も考えられる。



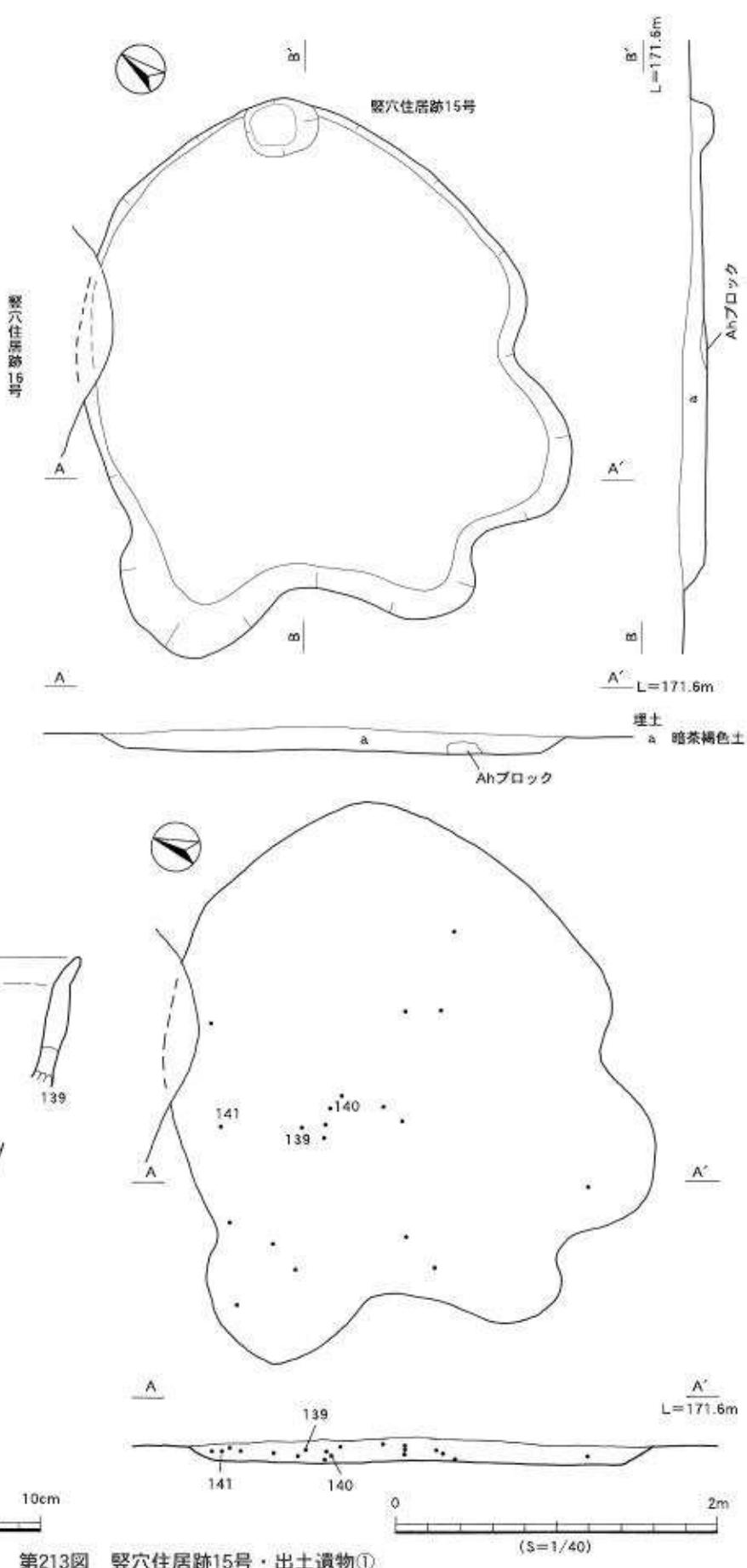
第212図 豊穴住居跡14号・出土遺物

竪穴住居跡15号（第213・214図）

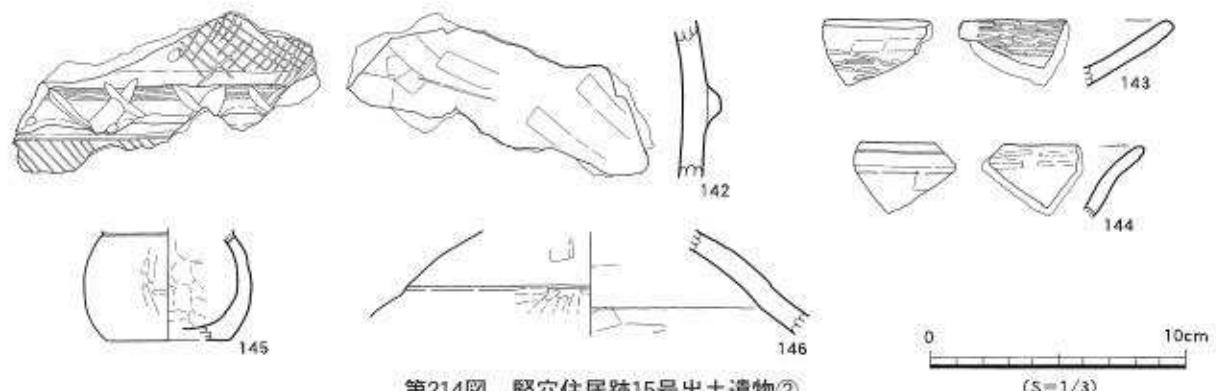
K-7区において畠層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.4m、短辺2.8mの不定形で、一部が16号と切り合い関係にある。

西側にやや張り出し状のプランが認められた。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始したが、床面と思われる埋土の変化は東側では約4cm、西側の深いところでも20cmと全体的に浅い。埋土に変化は認められず、単一層であった。床面には硬化面や焼土炭化物の広がりは認められず、柱穴などの付帯施設の確認は、この床面を掘り下げながら検出に努めた。結果1基の柱穴が確認されたが浅い。

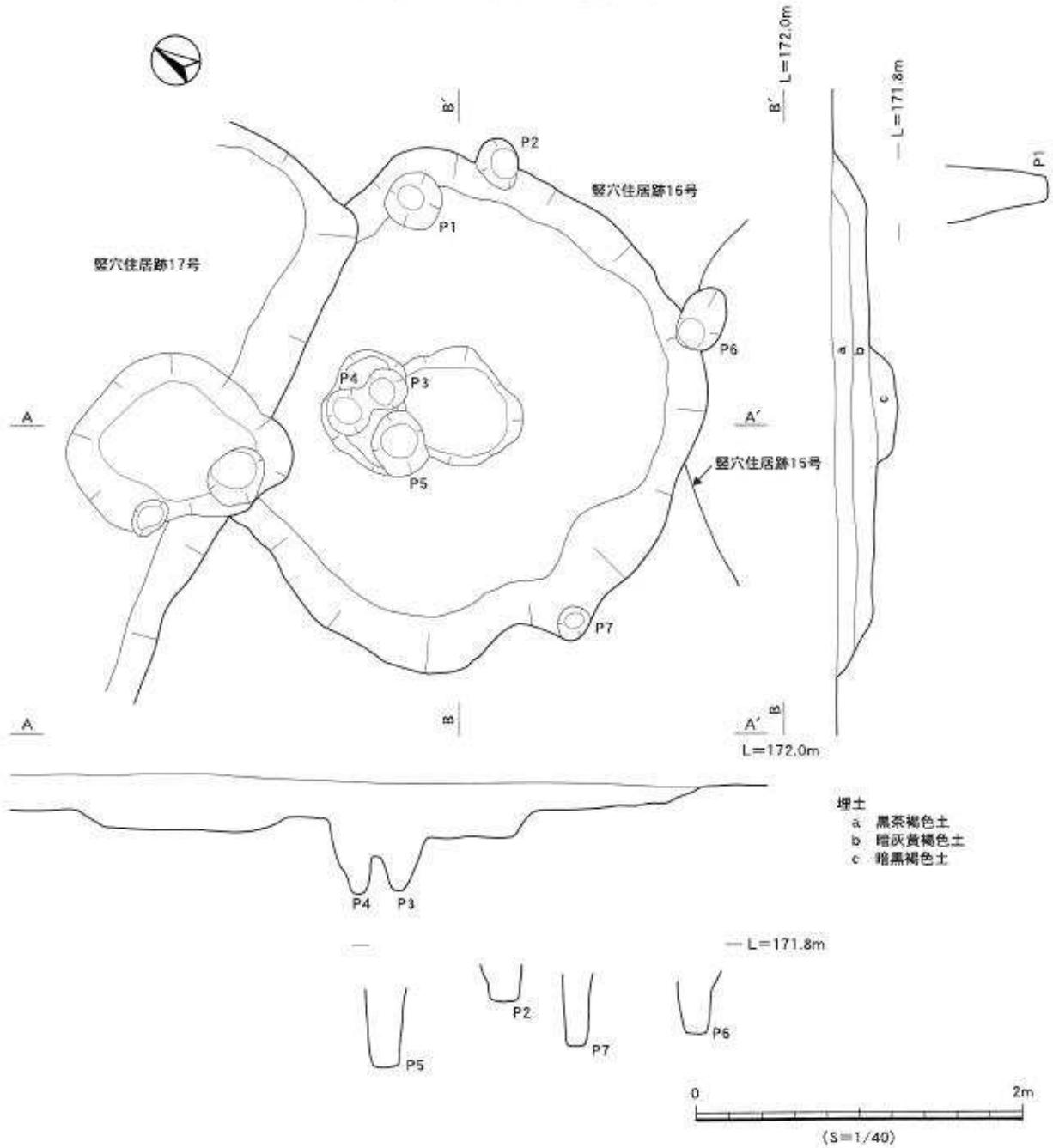
遺物は、総点で474点出土し、この内8点を図化した。140は、甕の底部片であるが、脚部の形成ははっきりとせず、底部外端をつまみ出している。141の脚部は八字状には開かず、直線的である。



第213図 竪穴住居跡15号・出土遺物①



第214図 竪穴住居跡15号出土遺物②



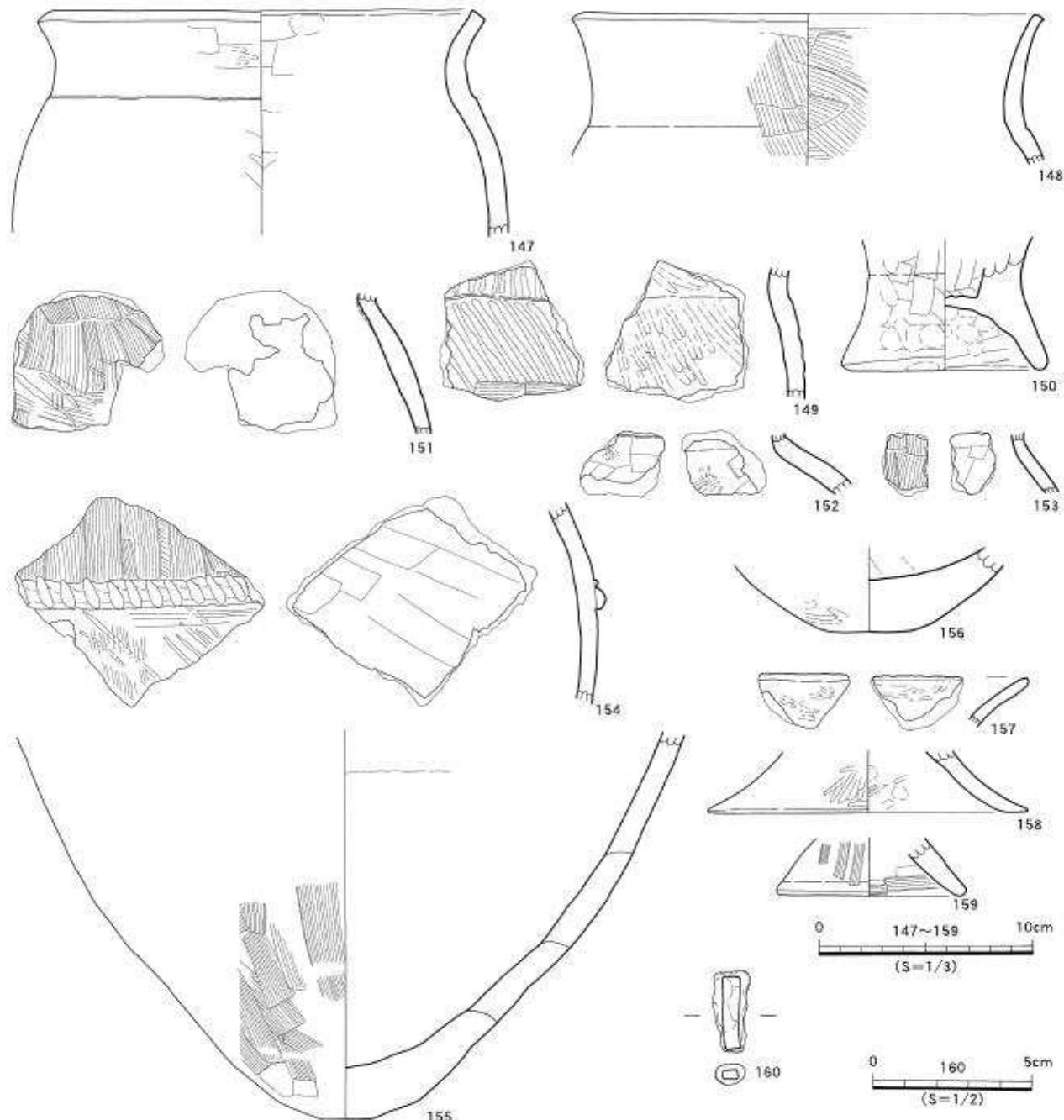
第215図 竪穴住居跡16号

### 竪穴住居跡16号（第215・216図）

K-7区においてⅧ層上面で検出された。北側を17号、南側を15号と重複して検出された。検出時のプランは、長辺3.1m、短辺2.6mの小型の隅丸長方形である。調査は、2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で埋土の記録を行い、ベルトを除去し床面を検出していった。柱穴などの付帯施設の確認は、硬化面を除去した段階で確認され、結果7基の柱穴が確認された。P1は壁際にP2～4は壁面中に見られた。P2・6・7は他の時期の可能性も否定できない。P6は隣接する15号のものである可能性もある。中央には土

坑があり、この中にP3～5がある。炉・焼土や炭化物の広がりは確認できなかった。なお、これら3軒の竪穴住居跡の関係は、切り合いなどから15号が最も古く、16号→17号という新旧関係になる。

遺物は、総点895でこの内14点図化した。147・148は口縁部が強く外反し、胴部との境に段を有する。口唇部は平坦に仕上げられている。150は、甕の底部である。しっかりとした脚部であるが、内面の調整により器壁の厚さにムラが生じている。154は壺の胴部片である。上半にかけて丁寧なハケメが残されている。160は鉄製品である。長方形の形状を呈しているが器種と部位の特定は出来なかった。



第216図 竪穴住居跡16号出土遺物

### 竪穴住居跡17号（第217～226図）

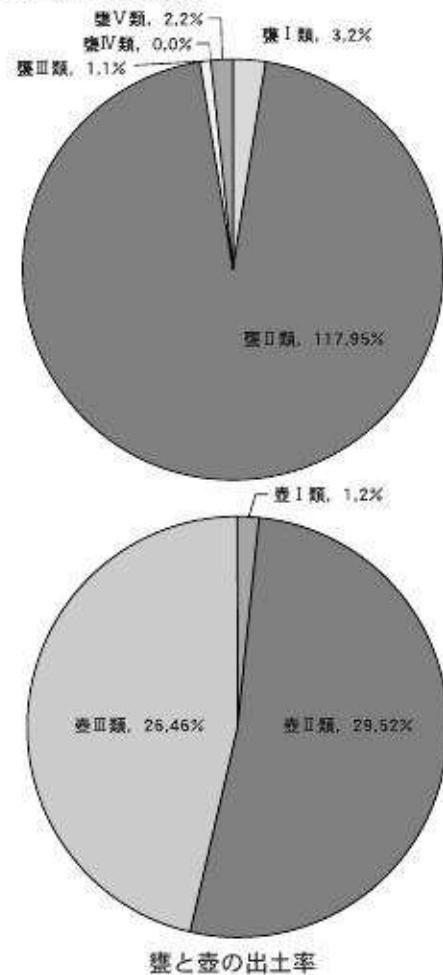
J・K-6・7区においてⅢ層上面で多量の土器が集中していたことで確認された。検出時のプランは、長辺5.5m、短辺4.7mの隅丸方形で、南側で竪穴住居跡16号と切り合う。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。はじめに、多量の土器片を実測して取り上げながら床面検出を行った。これらの土器片は、床面上まで堆積しており、特に住居中央部分に集中している。16号との切り合いは住居内土坑との関係も含めて検討できるベルトを設定した。この結果、16号の廃絶後に当住居が作られていることがわかった。柱穴などの付帯施設は、床面を除去した段階で8基の柱穴と2基の土坑が確認された。柱穴はその位置関係や深さなどからP.1・2・5が主柱穴と思われ、東南にも同様の柱穴を想定して精査していったがわからなかった。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりせず、硬化面についても明確でない。

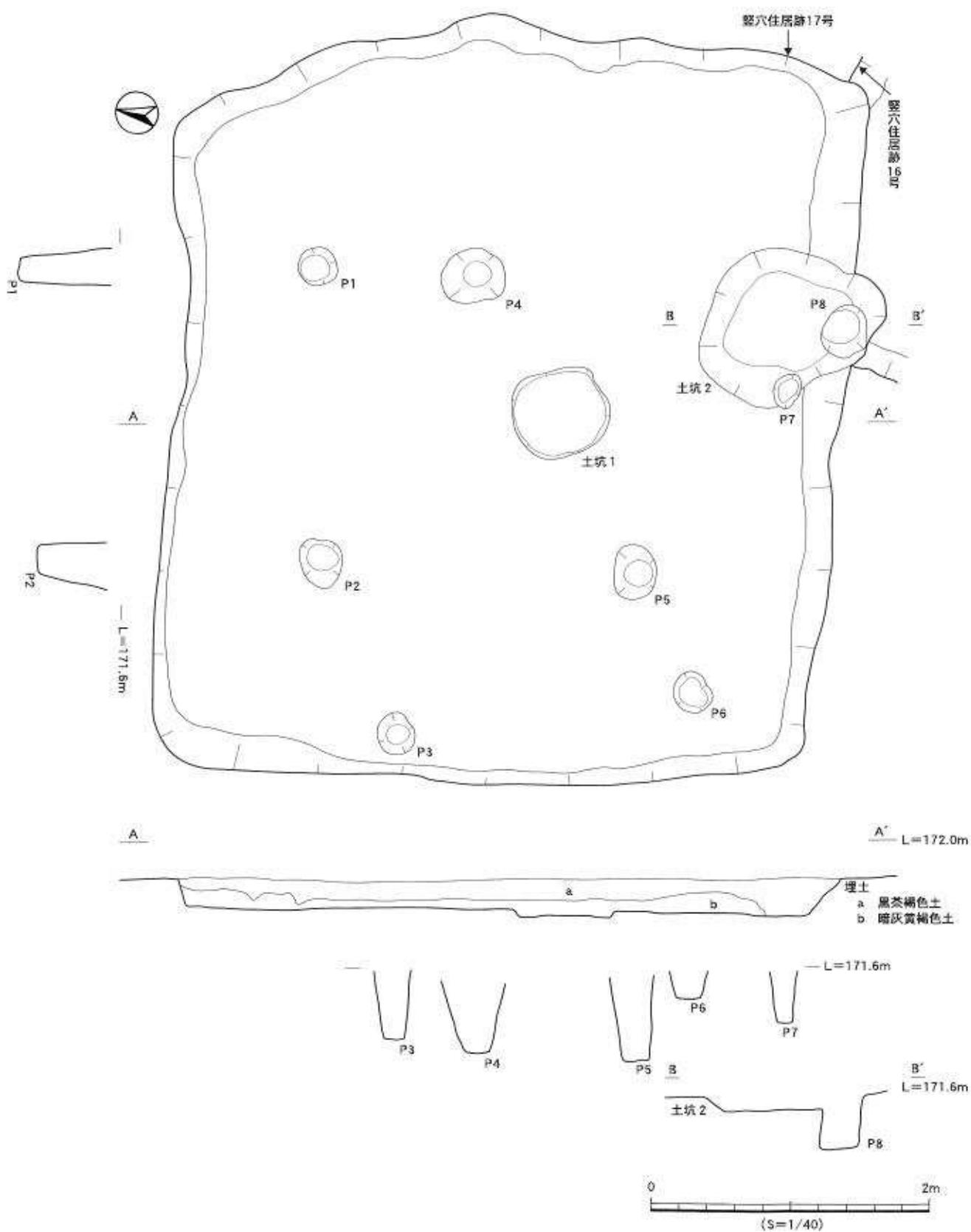
遺物は、総点10,416点が出土しこの内62点を図化した。出土遺物のバリエーションが豊富であったため、甕の口縁部および壺の口縁部に関して、細分類で可能であった資料を基に出土率を右のとおり作成した。

161・162は甕で口縁部から底部の形状に至るまでが明確な資料である。やや胴長な印象がある。口縁部が外反し、胴部はあまり膨らまずに直線的である。底部は、器高に対し比較的低い脚部を有する。また、161は底面中央がやや尖る。164～169は口縁部下に一条の貼付突帯をめぐらせるものである。167は薄く貼り付けた突帯に細いキザミを施す。168は、幅広の貼付突帯で、V字状にキザミを施している。突帯の形状やキザミの手法は、壺形土器によく見られる手法であり、この手法が甕に施されるのは珍しい。169も同様である。169は貼り付け突帯の前に搔き上げ状の調整が施されている。ここでくびれて外反していることから甕と判断した。170は、口縁部がわずかに内湾する。甕を想定したが、器形や器面調整などに違和感も感じる。171はやや小型の土器である。172～177は甕の底部である。177は底部からの立ち上がりが大きく外傾する。甕以外の器形も想定される資料である。178・179は甕の中でも胴部が球状を呈する資料である。外面にはスヌが付着している。178は、口縁部が直線的に外傾し、口縁部内外面に明確な稜を形成する。179は、口縁部が外反し、口唇端部もさらに外反する。口縁部内面には明瞭な稜は形成されず、胴部は球状に膨らむ。底部は、胴部下半の形状から丸底に近いと思われる。180～198は壺である。180・181は包含層分類の壺II類に属する。182も同様であるが、頸部が長い。183～191は壺III類である。いわゆる2重口縁を呈する。183は口縁

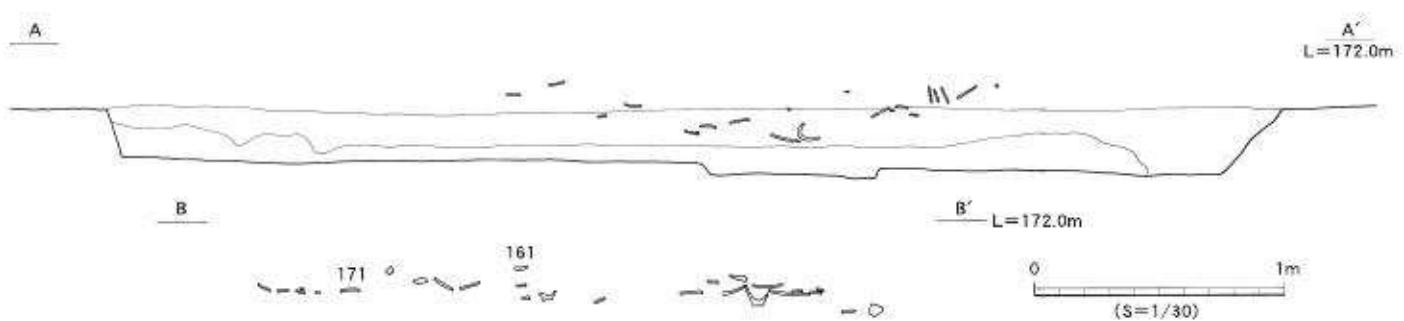
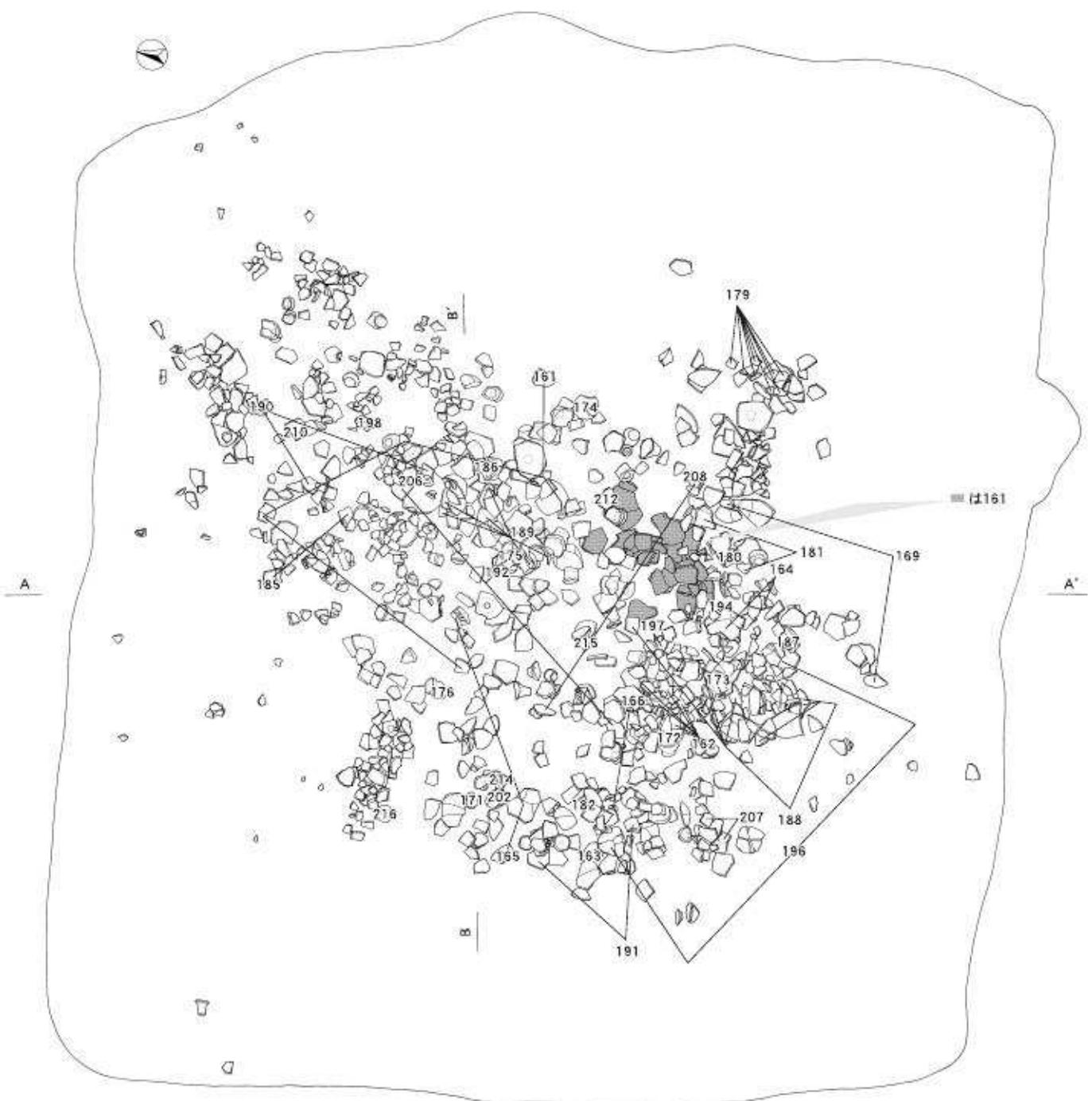
端部が外反する。頸部には貼り付け突帯が施されている。186は口縁部が湾曲する。1881も口縁部が湾曲する。明確な2重口縁にはならない。胴部には幅広の突帯が施され、鋸歯状にキザミが施される。189は口縁部から底部までが残存している。胴部の突帯の貼り付け位置は胴部最大径上にある。190は口縁部から頸部にかけてが直線的で、2重口縁の作出も直線的に肥厚させている。胴部は内面が剥落しているが、189等と比べるとやや薄手の印象を受ける。191は内湾する口縁部を貼り付け2重口縁を呈する。胴部の膨らみは他の資料ほど見られない。193は口縁部を欠く。胴部の膨らみは、肩部に近い位置で強く、胴部最大径が器高の上半に位置する。198は、底部に細沈線が見られる。199から206は壺である。199は胴部がそろばん玉状に屈曲する。素地土が赤褐色を呈しているが赤色顔料は塗布されていない。207～215は高壺である。207・208は口縁部が外反する。209・210は直線的な口縁部で、211は口縁部が内湾する。216は内外面共に赤色顔料が施される鉢である。217は小型の土器である。218・219は須恵器である。218は壺蓋で219は高壺と思われる。220は石庖丁である。右側片を欠損している。刃部には刃こぼれ状の剥離が見られる。221はやや扁平な砥石である。222は鉄製品である。先端部と思われる部分を上にして図化した。



竖穴住居跡17号

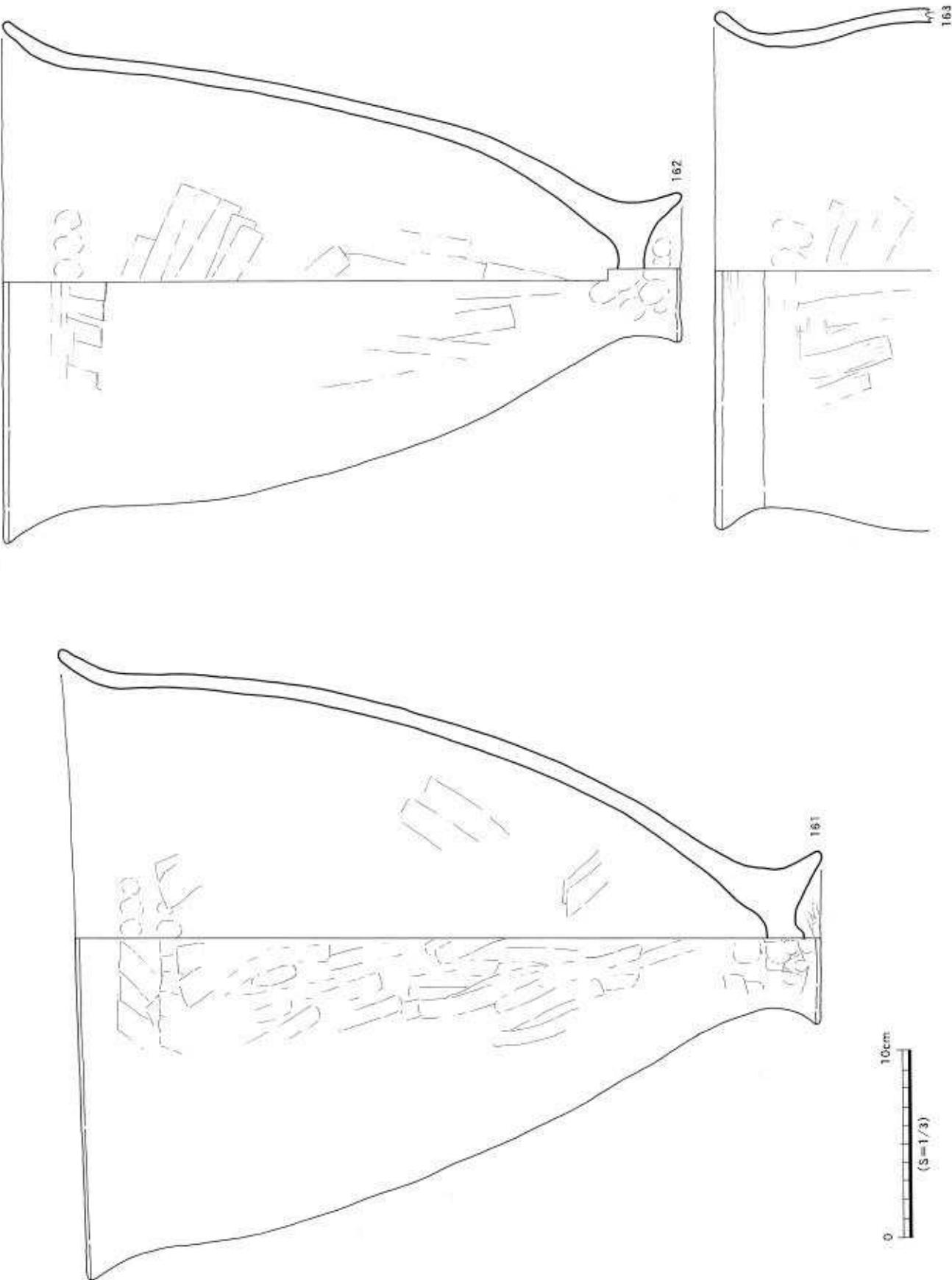


第217図 竖穴住居跡17号

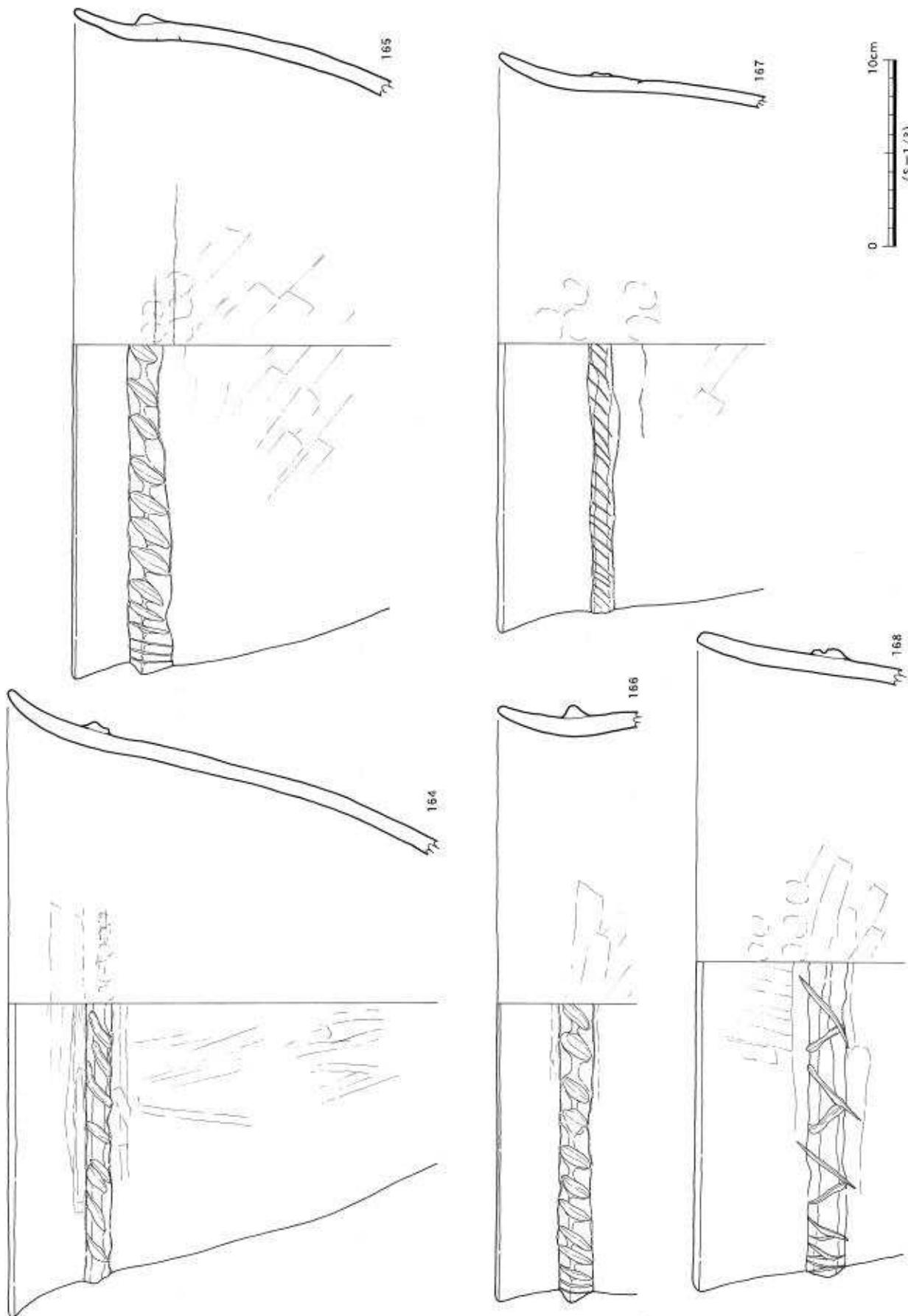


第218図 竪穴住居跡17号遺物出土状況

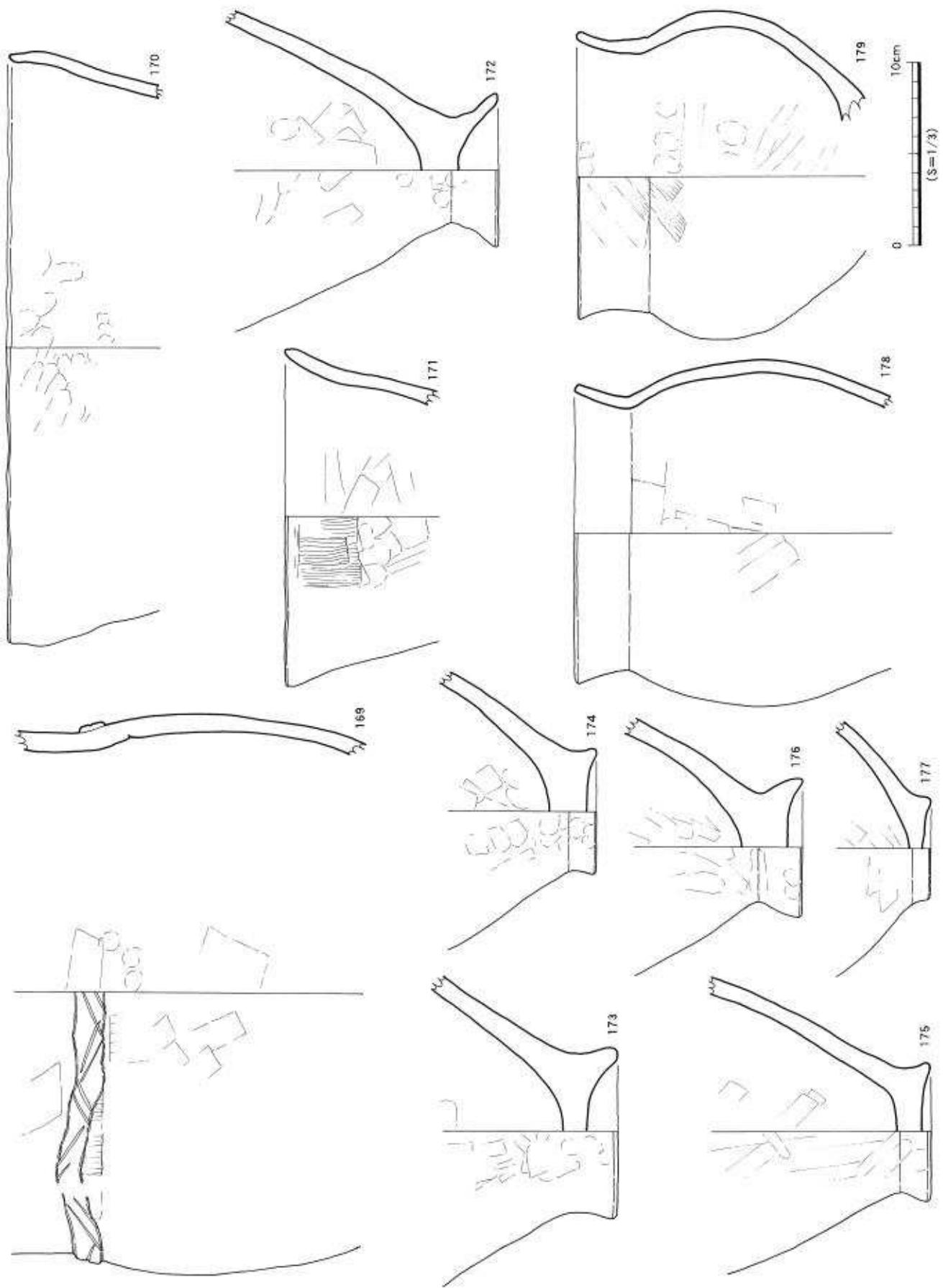
第219図 墓穴住居跡17号出土遺物①



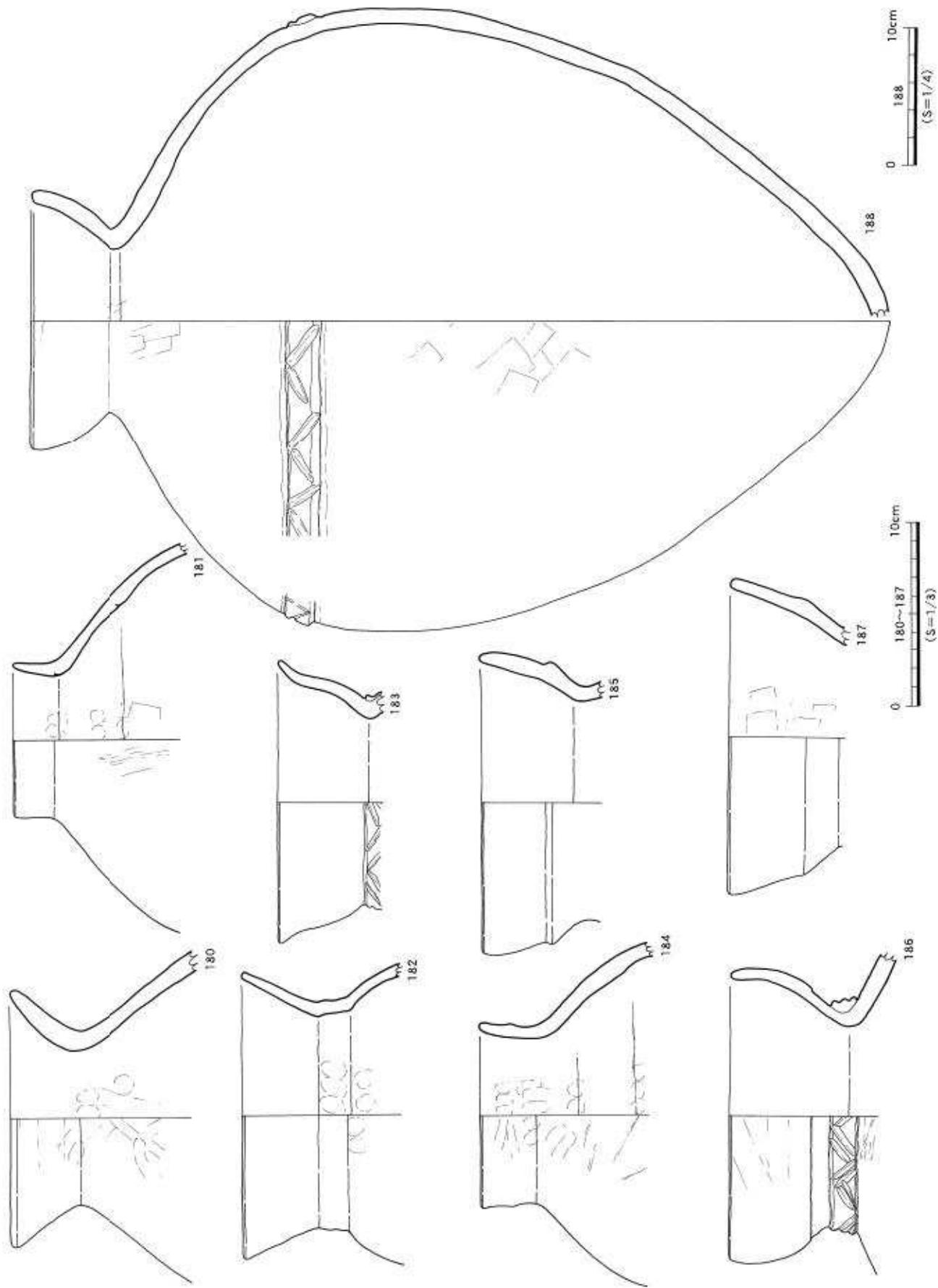
第220図 墓穴住居跡17号出土遺物②



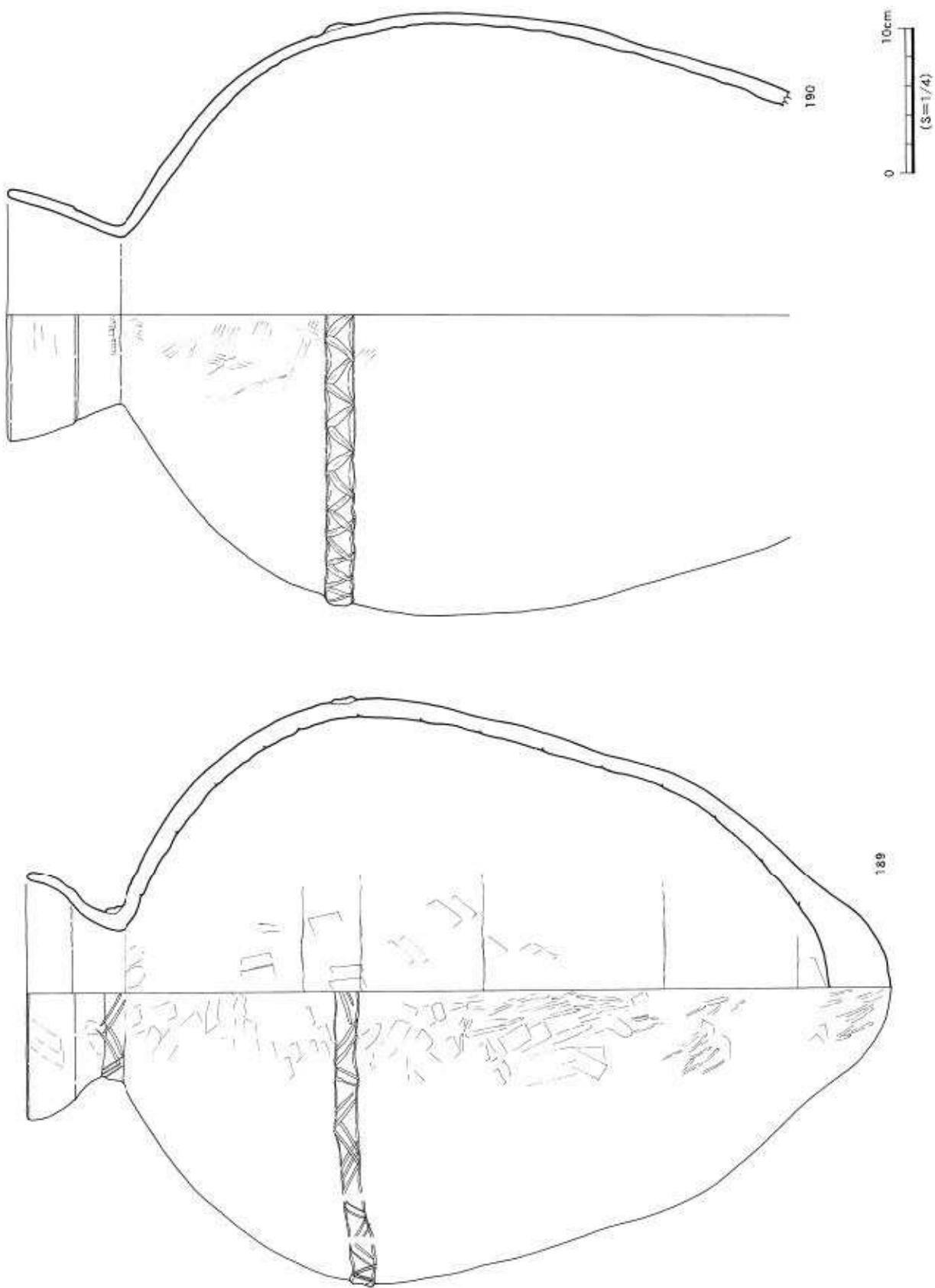
第221図 墓穴住居跡17号出土遺物③

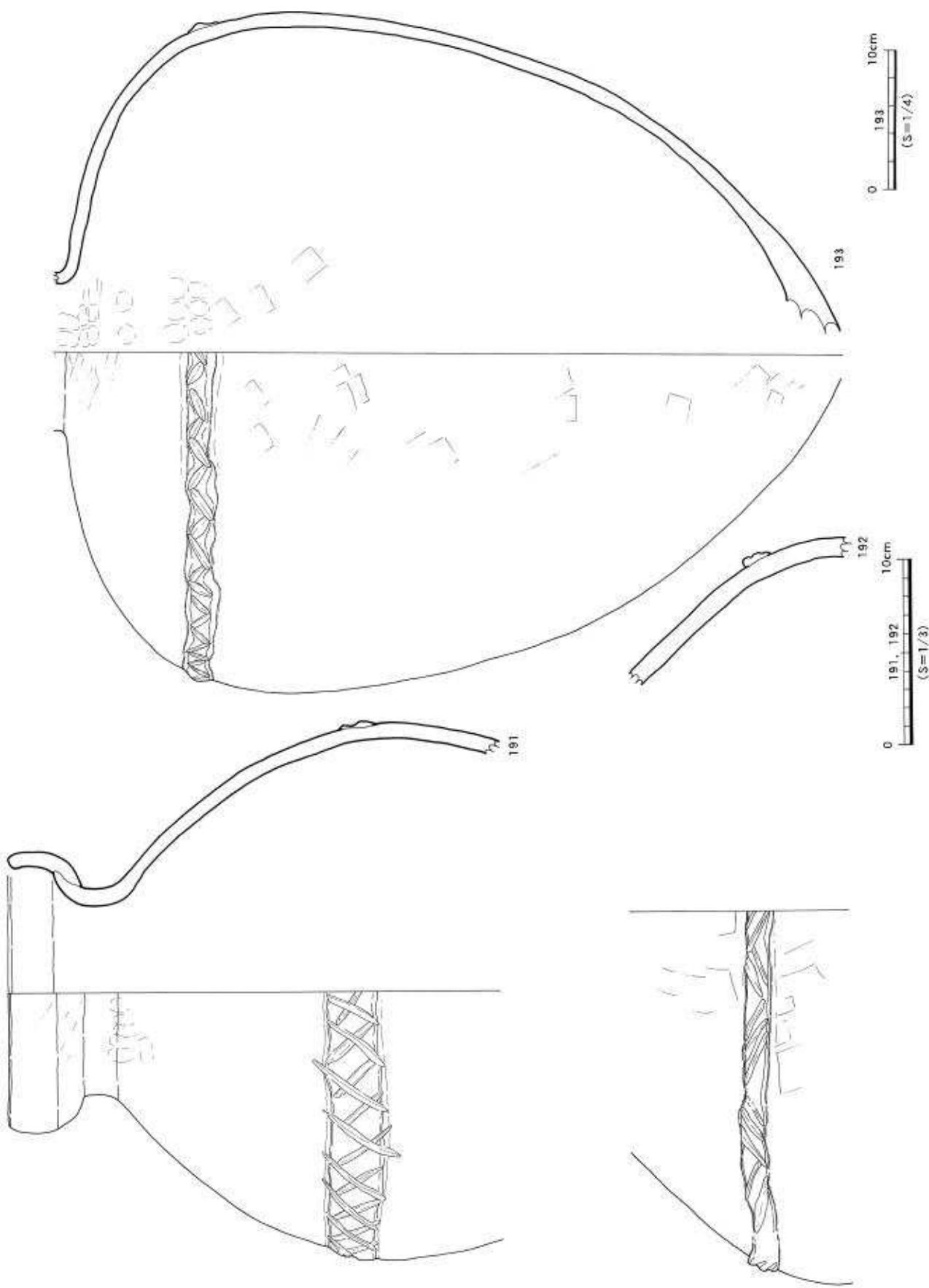


第222図 墓穴住居跡17号出土遺物④

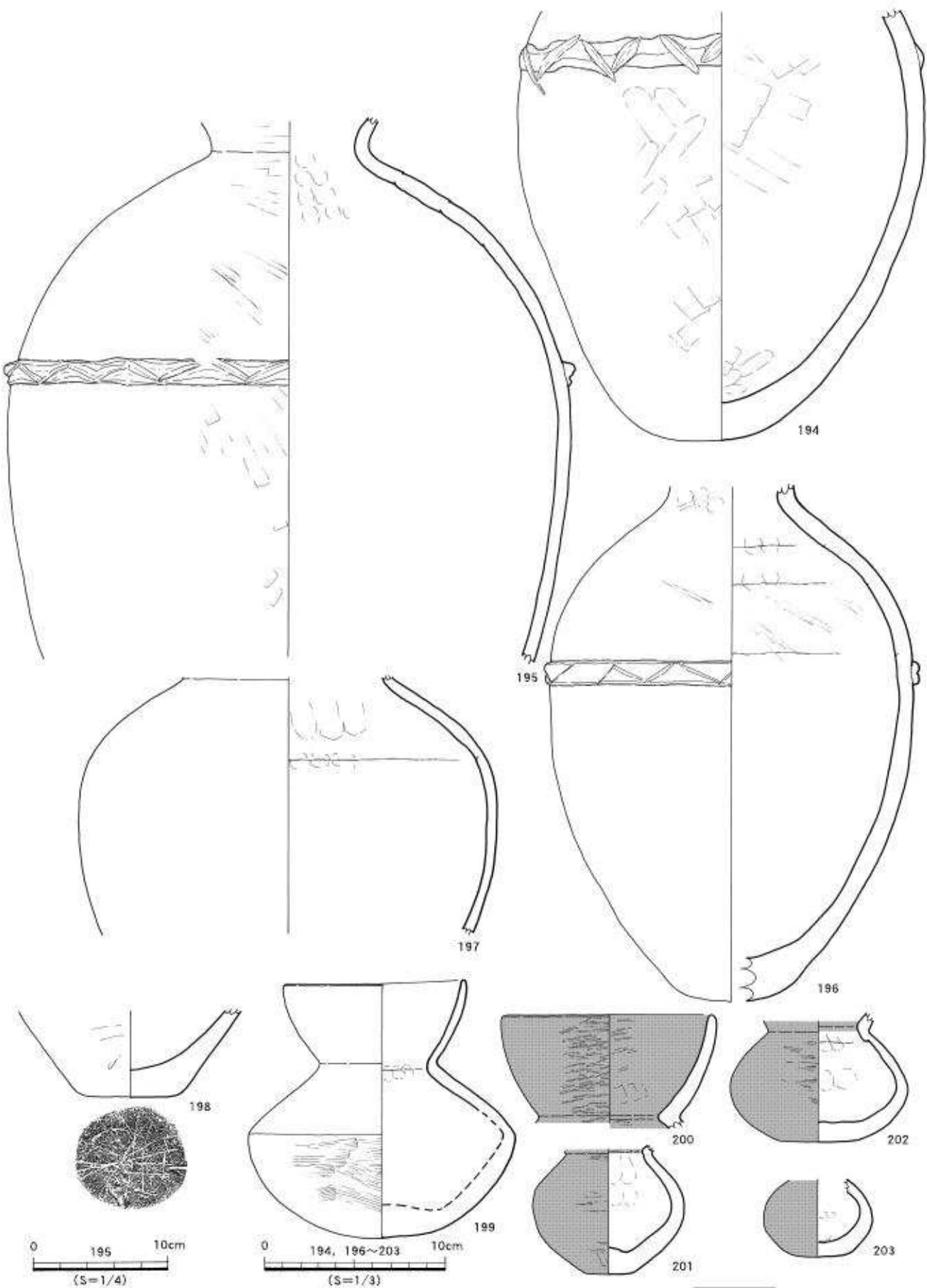


第223図 墓穴住居跡17号出土遺物⑤





第224図 壇穴住居跡17号出土遺物⑥

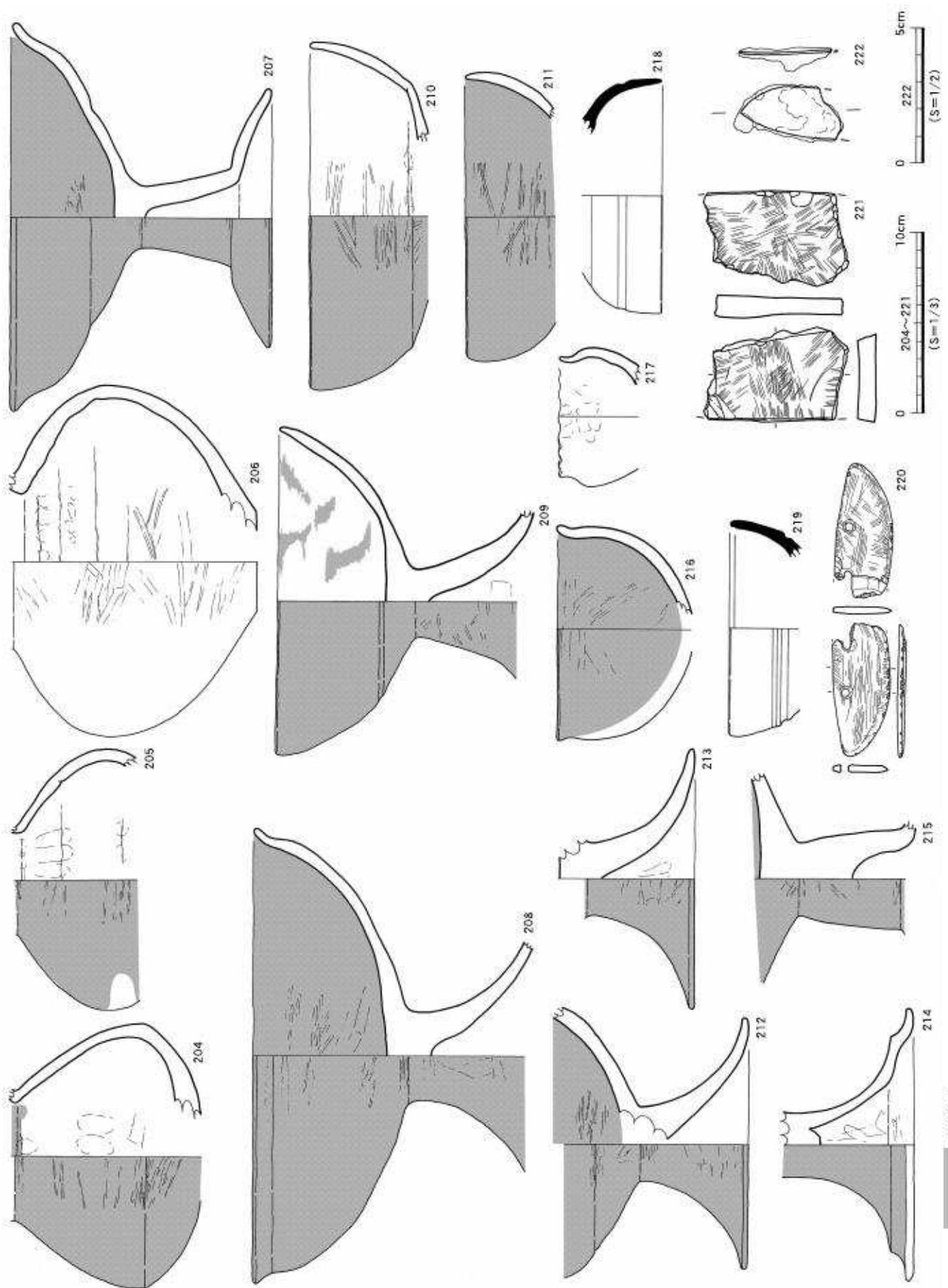


第225図 竪穴住居跡17号出土遺物⑦

赤色顔料

第226図 墓穴住居跡17号出土遺物⑧

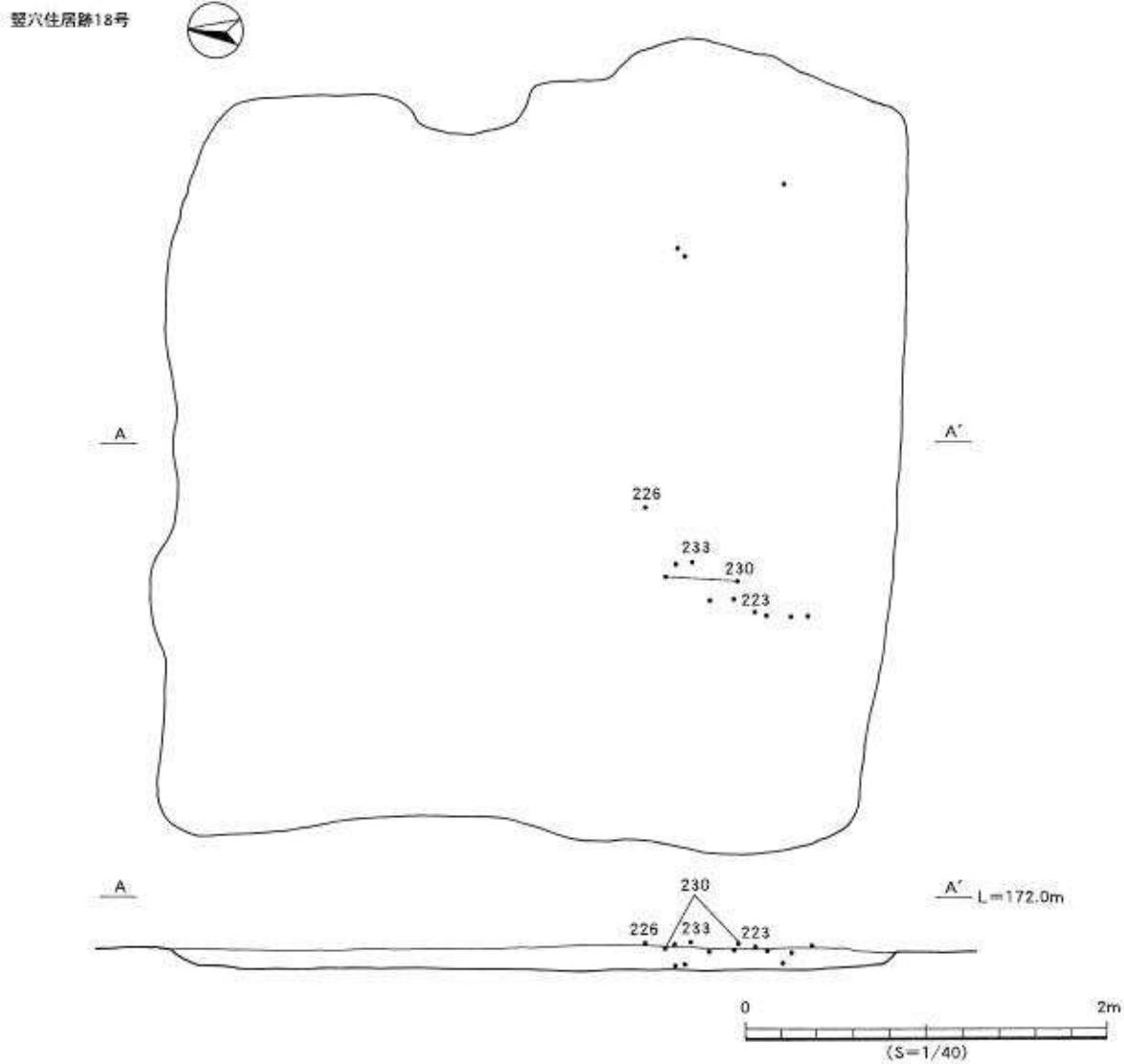
赤色顔料



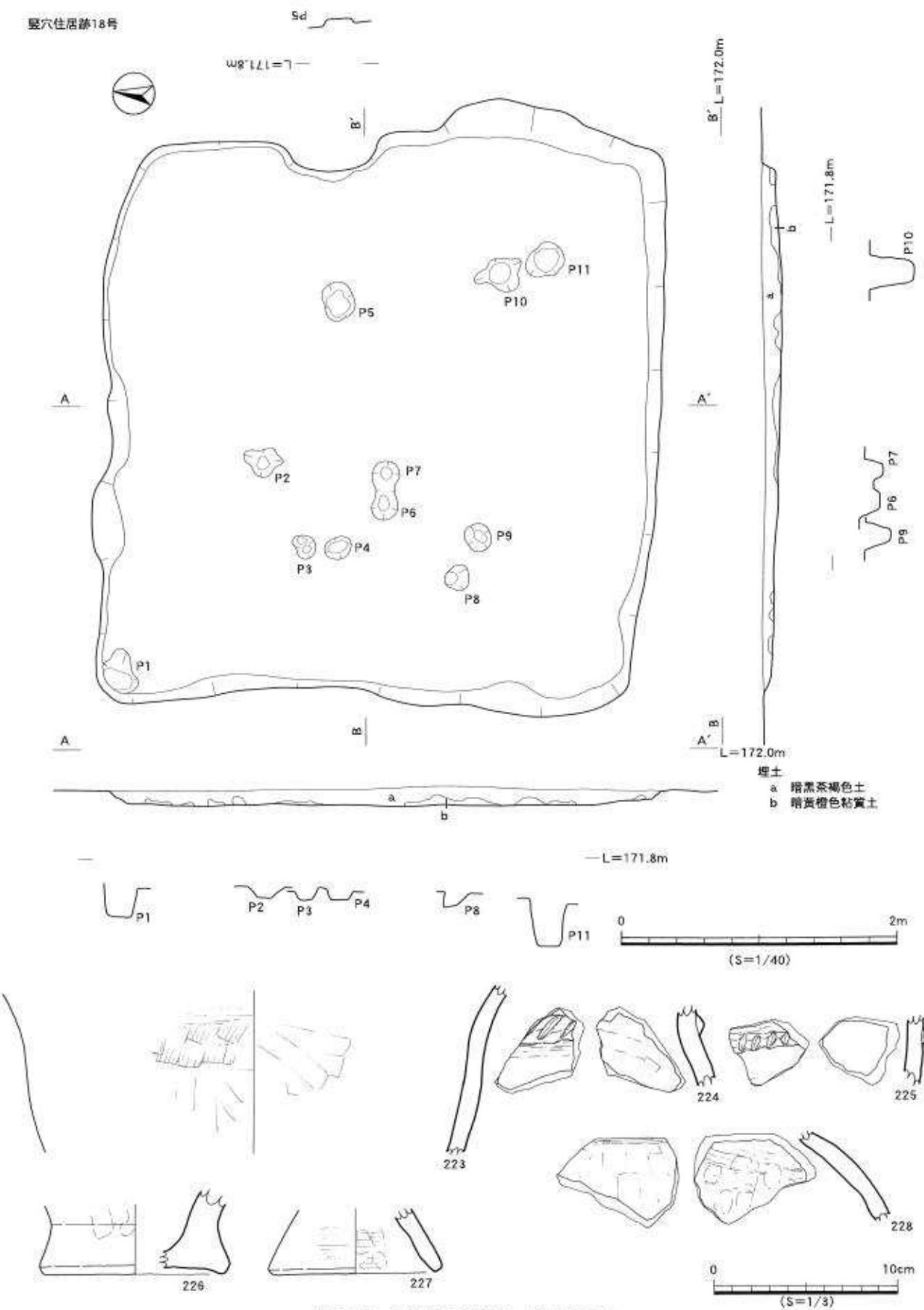
### 竪穴住居跡18号（第227～229図）

K-8区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4.1m、短辺4.1mの隅丸方形で、東側にやや入り込むプランが認められた。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。硬化面等は見られず、埋土bがやや硬質土であったためにこの広がりを追いかけて床面を判断した。柱穴などの付帯施設の確認は、この層を掘り下げながら検出に努め、その結果、11基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりしなかった。遺物は、総点443点でこの内の15点を図化した。223は口縁端部を欠く甕である。口縁部は外反し、内外面には稜は見られない。胴部は僅かに膨らみを帶びている。224・225は甕の胴部突帯付近の破片である。226・227は甕の底部片である。226は平底に近い形状で、わずかに上げ底状を呈する。227

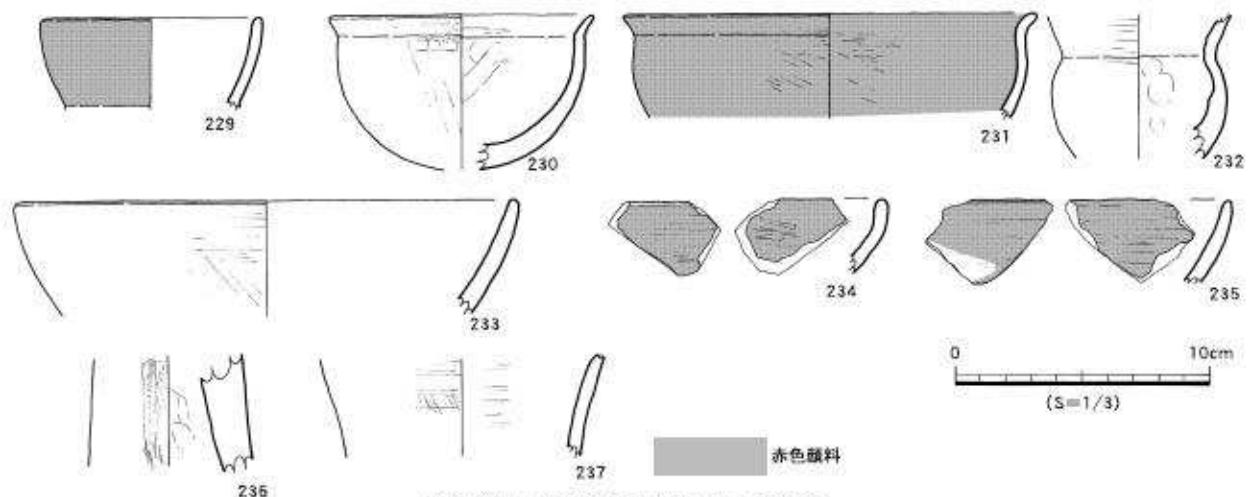
は、断面形状から鉢の底部である可能性が考えられる。228は壺の頸部から胴部上半にかけての破片である。径を復元することは出来なかったが、比較的小型であり壺の可能性も考えられる。229は壺の口縁部片である。口縁部が内湾し、胴部との接合部付近で欠損している。230は小型の鉢である。口縁部が外反し内外面に稜を有する。胴部は丸みを帯びて丸底の底部へと至る。231も230の口縁部形状に類似するが、内面の稜は見られない。233～236は高壺の破片である。これらの遺物は、その大半を一括して取り上げたために図示することは出来なかったが、南側に比較的集中して出土し、北側からはほとんど出土しないという特徴が見られた。



第227図 竪穴住居跡18号遺物出土状況



第228図 竪穴住居跡18号・出土遺物①

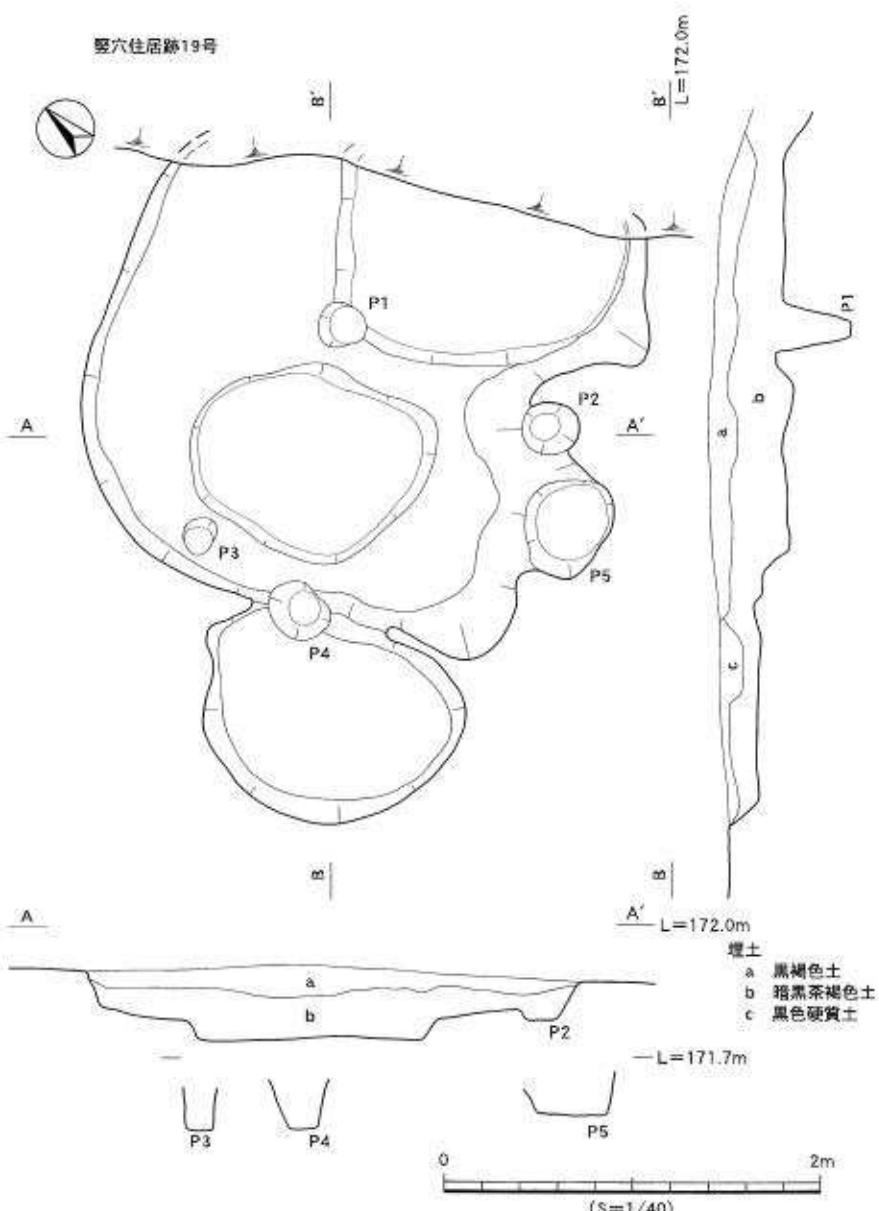


第229図 積穴住居跡18号出土遺物②

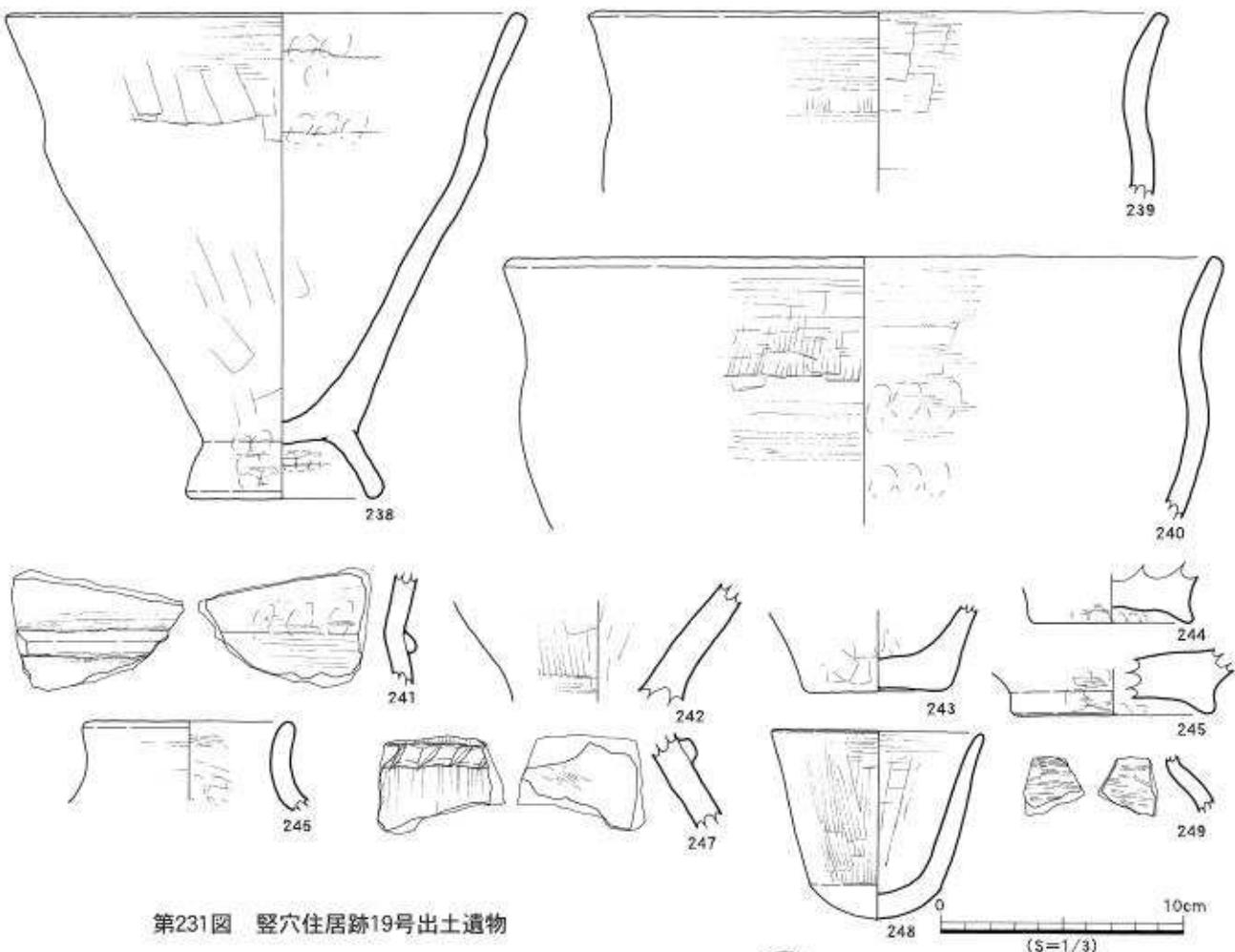
#### 積穴住居跡19号（第230・231図）

K・L-8・9区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.4m、短辺2.8mで、東側が削平されていた。検出当初は、略方形プランを基調として南側で楕円形の土坑と切り合っているように見えたため、土坑と住居との切り合い関係を想定した2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。土坑と住居は検出時の埋土こそわずかな色調の違いが見られたが、掘り下げを進めるにつれ両者は同一のものである可能性が高くなり、一連の遺構として記録を行った。床面には硬化面等は確認されず、住居内には先の土坑の他に2基の土坑状のプランが確認された。柱穴などの付帯施設は、床面を除去した段階で5基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは明確でないが、出土した炭化物は放射性炭素年代測定を実施し、 $1,710 \pm 20$ yrBPという結果が示されている。遺物は、総点451点でこの内の12点を図化した。

238は、小型の甕である。口縁部が外傾し、外面には搔き上げ状の調整によって段を有する。胴部は直線的で、底部はハ字状の脚を有している。239・240は口縁部が外反し胴部が膨らむ器形を有する。内外面には稜が見られない。



第230図 積穴住居跡19号



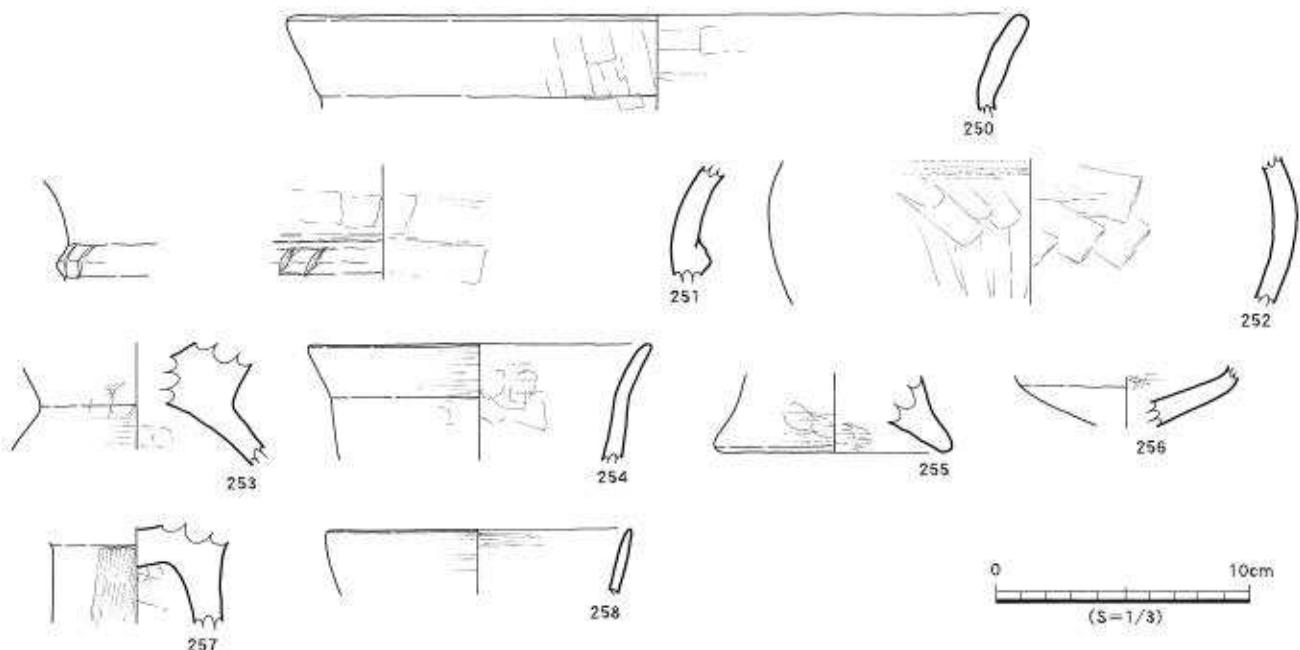
第231図 竪穴住居跡19号出土遺物

#### 竪穴住居跡20号（第232・233図）

K-9区において伽層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.7m、短辺2.1mの楕円形に近い不定形で、検出時既に床面と思われる硬化面が広がっていた。また、北側に偏ってやや黒色の強い円形プランが見られたため、調査は、この強い黒色プランの中心を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、硬化面を除去しながら作業を進めた。北側は円形土坑になったが、硬化面はこの上面に連続している。柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去しながら確認作業を進めていったが、土坑以外に検出されなかった。炉・焼土や炭化物の広がりもはっきりとしない。遺物は、総点177点が出土しこの内の9点を国化した。250は甕の口縁部である。外面に稜が見られる。251は、甕の口縁端部を欠くものである。252は壺の胴部片であるが、胴部の膨らみ具合などから大きめの壺の可能性も考えられる。



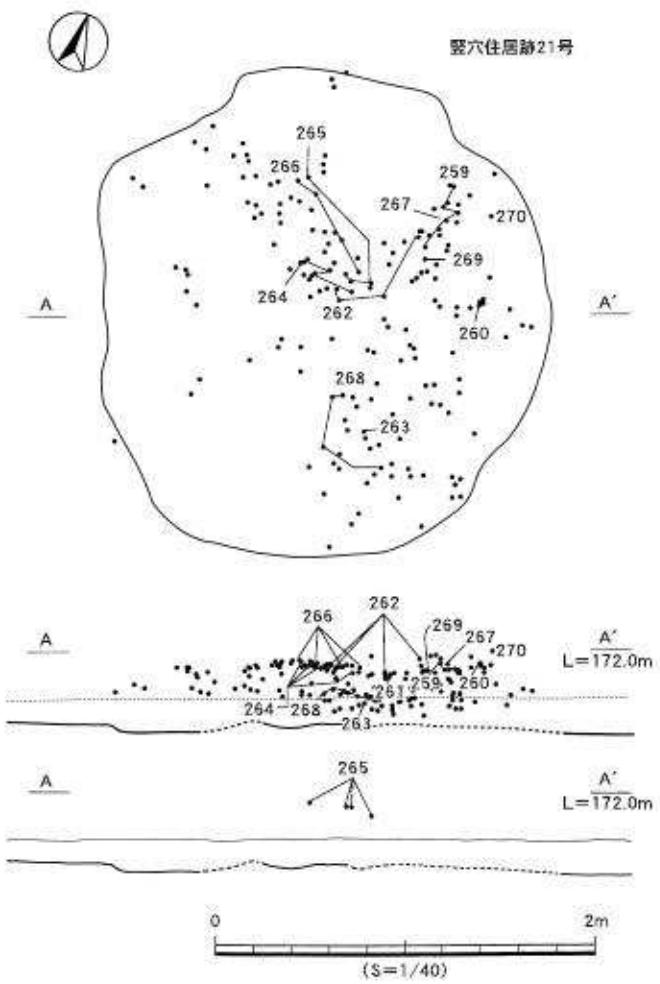
第232図 竪穴住居跡20号



第233図 竪穴住居跡20号出土遺物

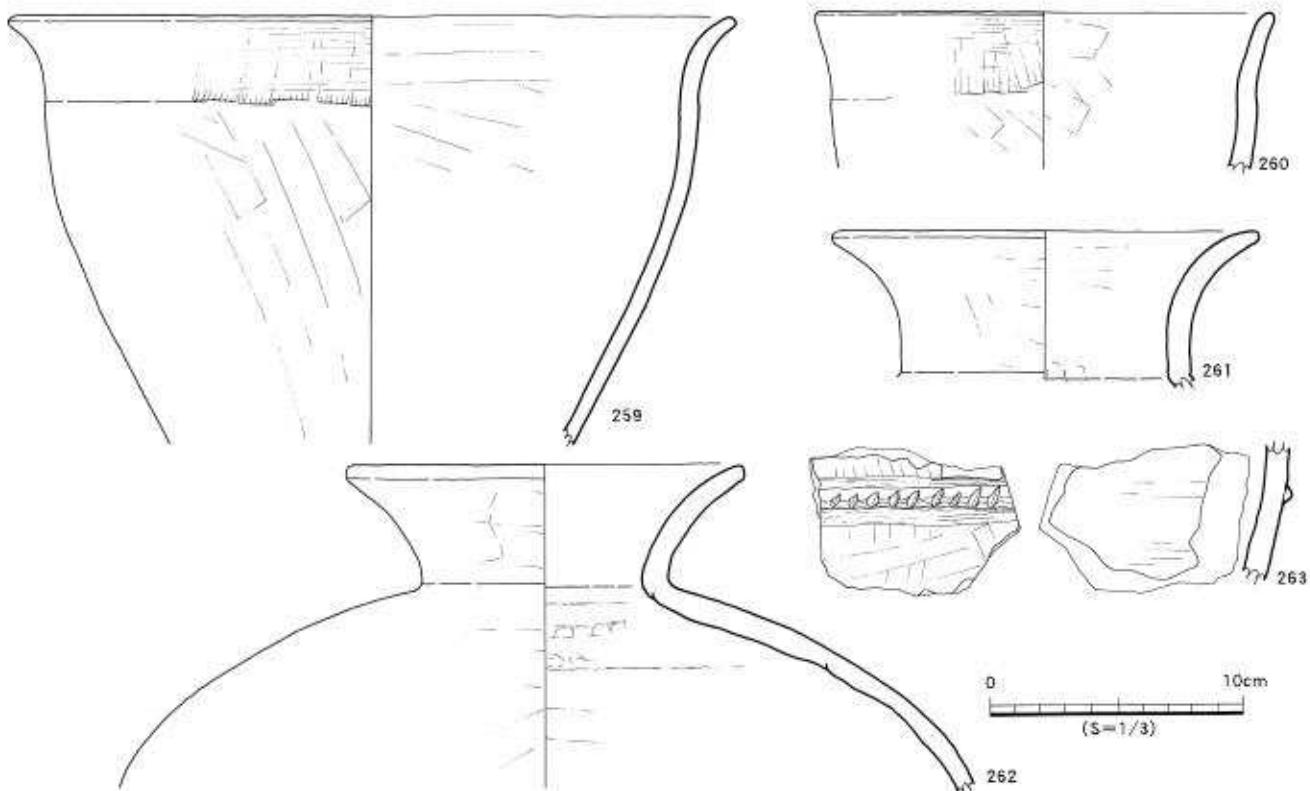
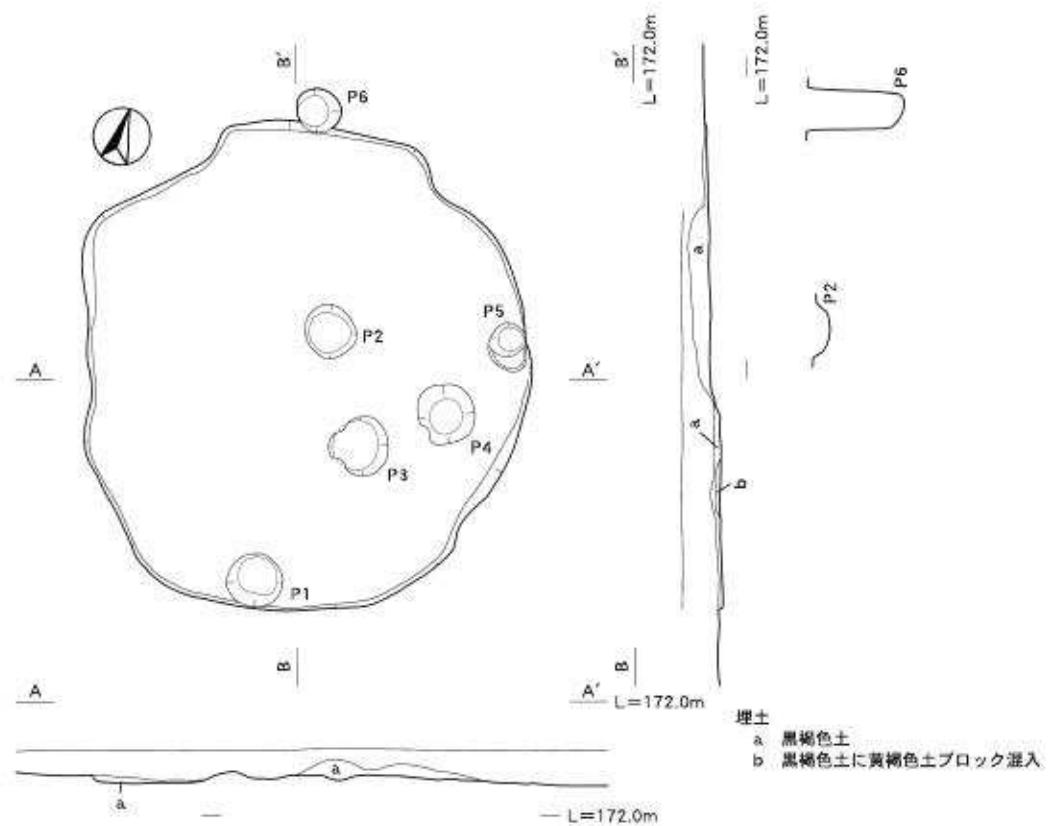
#### 竪穴住居跡21号（第234～236図）

K-9・10区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.6m、短辺2.4mの隅丸長方形で、石皿等の遺物が集中したことでプランをつかむことができた。だが、周辺の掘り下げも同時に進めていたために、埋土の大半は包含層として掘り下げており、遺物周辺に埋土をわずかに残すのみとなってしまった。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始したが、既に遺物の柱断面に硬化面が見えており、この面を床面と判断して記録を行った。炉・焼土や炭化物の広がりは捉えることができなかった。柱穴などの確認は、硬化面を除去して行い、6基を確認することが出来た。ただし、P6に関しては残存する床面立ち上がりより外側で検出されたためにこの竪穴住居跡に伴うのかは不明である。遺物は、総点で376点が出土しこの内の12点を図化した。259は口縁部が外反し、外面には搔き上げ状の調整により稜が形成される。胴部は僅かに膨らんでいる。260は比較的径が小さい。外面には259と同様の稜が形成されるが、口縁部の外反度は小さい。261は口縁部が外反し、頸部に僅かではあるが直線的な部分が見られる壺である。262は頸部が短い。胴部内面には粘土の接合面を残している。265は壺の底部付近と思われる。厚みのある尖り気味の丸底を呈するものと思われる。268は壺である。胴部には屈曲部を持たず、胴部球状の器形を呈している。270は大型の石皿である。最大厚が12cmある。

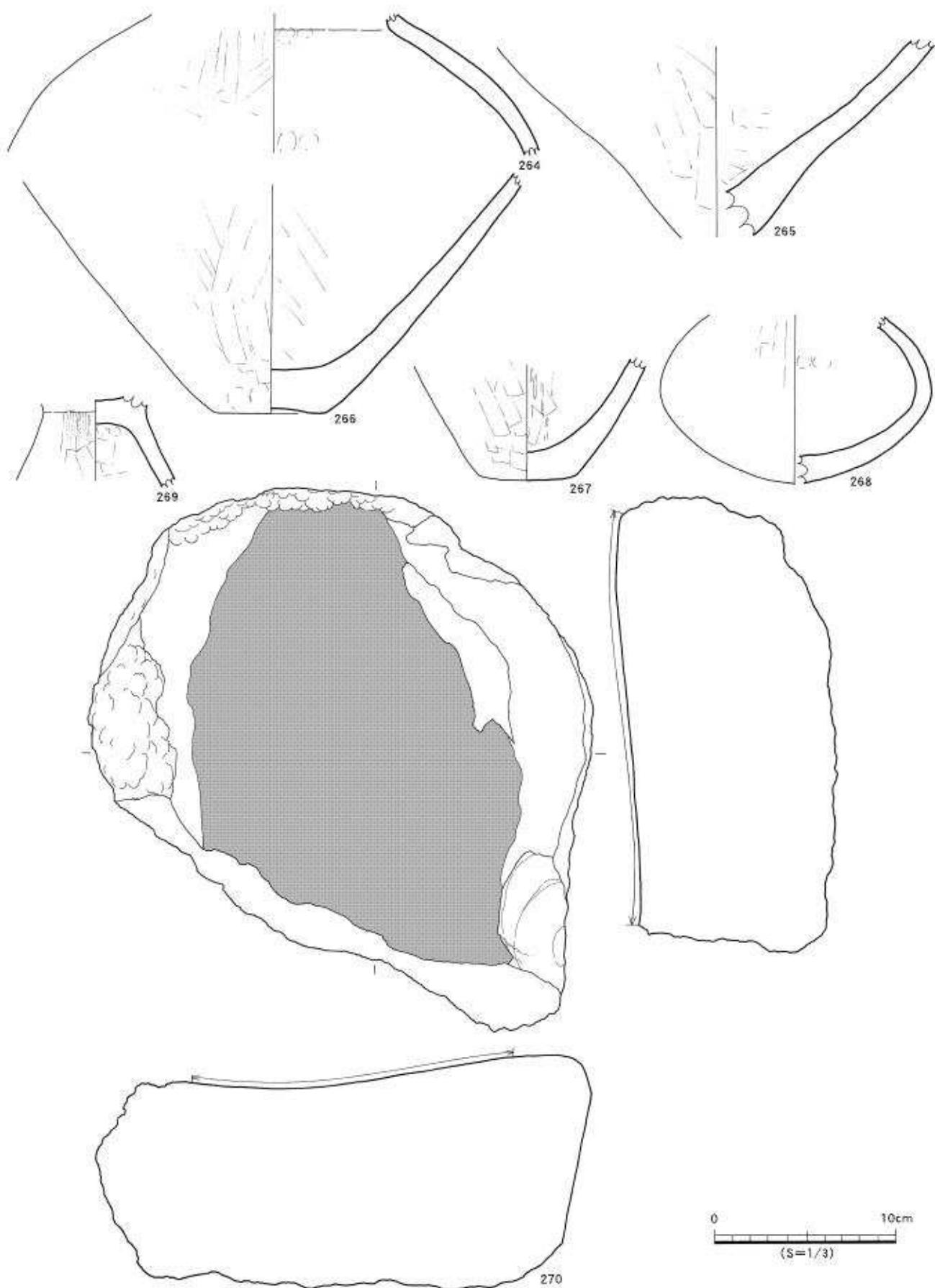


第234図 竪穴住居跡21号遺物出土状況

竪穴住居跡21号



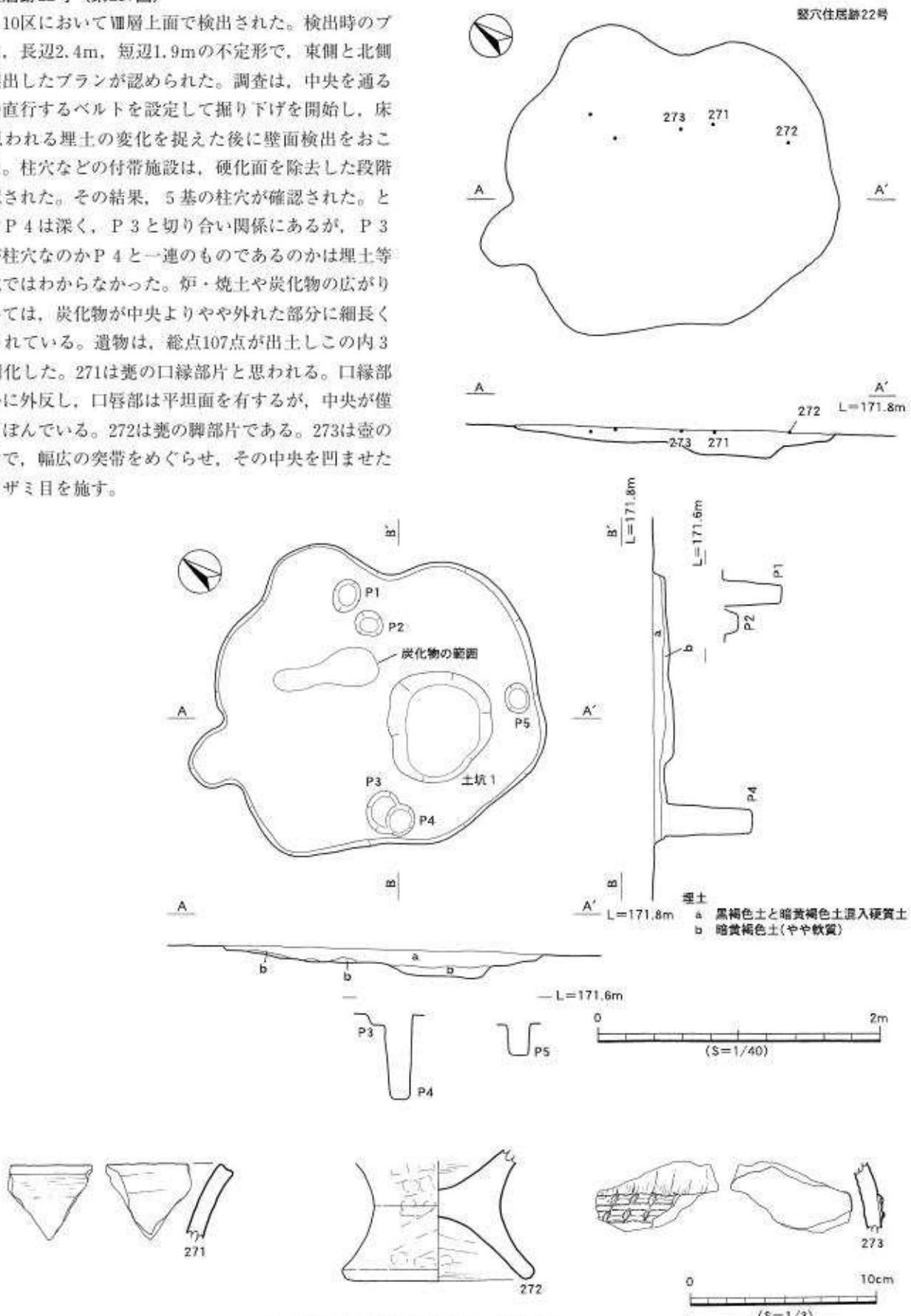
第235図 竪穴住居跡21号・出土遺物①



第236図 竪穴住居跡21号出土遺物②

### 竪穴住居跡22号（第237図）

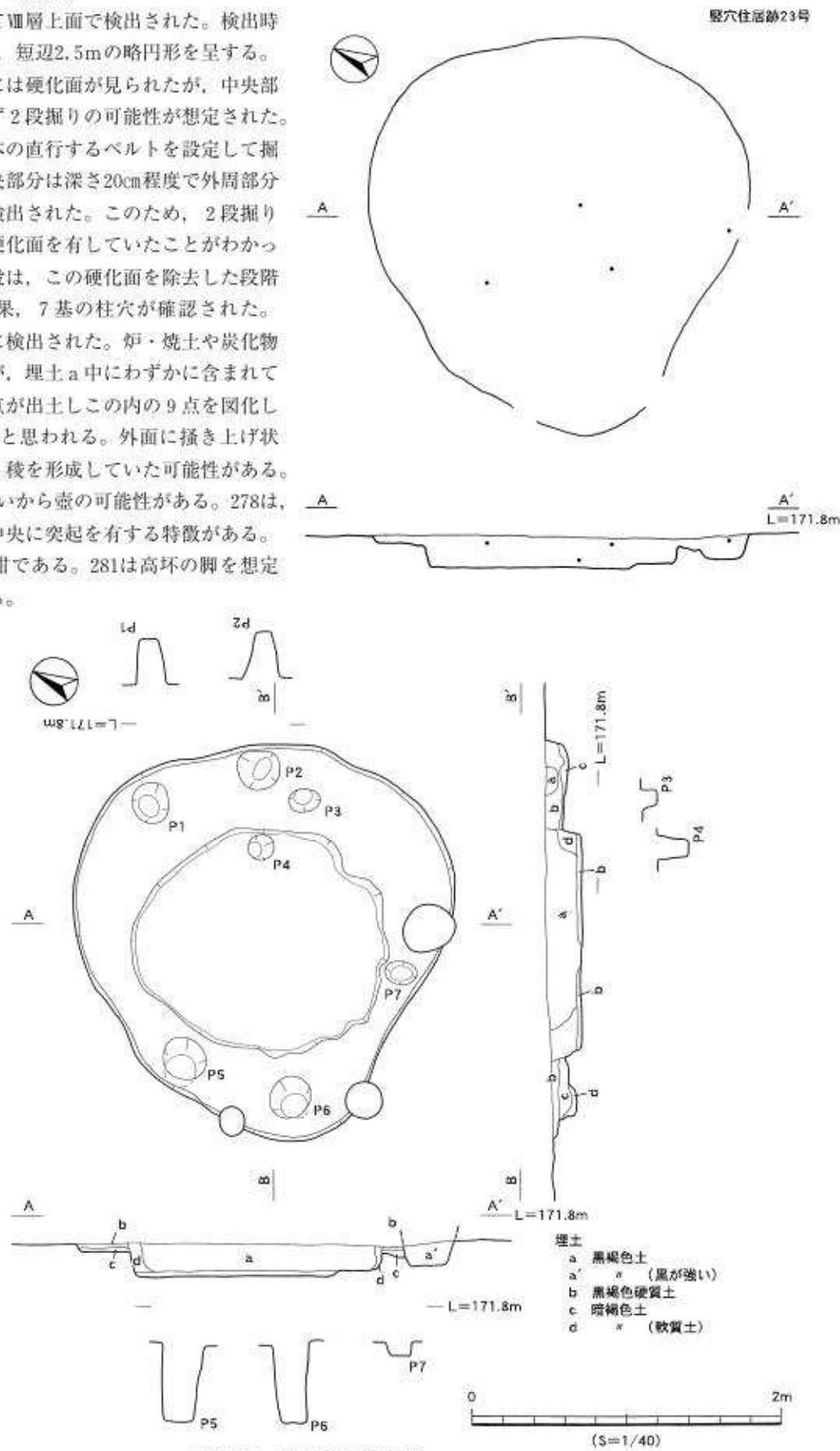
K-10区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.4m、短辺1.9mの不定形で、東側と北側とに突出したプランが認められた。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去した段階で確認された。その結果、5基の柱穴が確認された。とりわけP4は深く、P3と切り合い関係にあるが、P3自体が柱穴なのかP4と一連のものであるのかは埋土等の変化ではわからなかった。炉・焼土や炭化物の広がりについては、炭化物が中央よりやや外れた部分に細長く検出されている。遺物は、総点107点が出土しこの内3点を図化した。271は甕の口縁部片と思われる。口縁部が僅かに外反し、口唇部は平坦面を有するが、中央が僅かにくぼんでいる。272は甕の脚部片である。273は壺の胴部片で、幅広の突帯をめぐらせ、その中央を凹ませた後にキザミ目を施す。



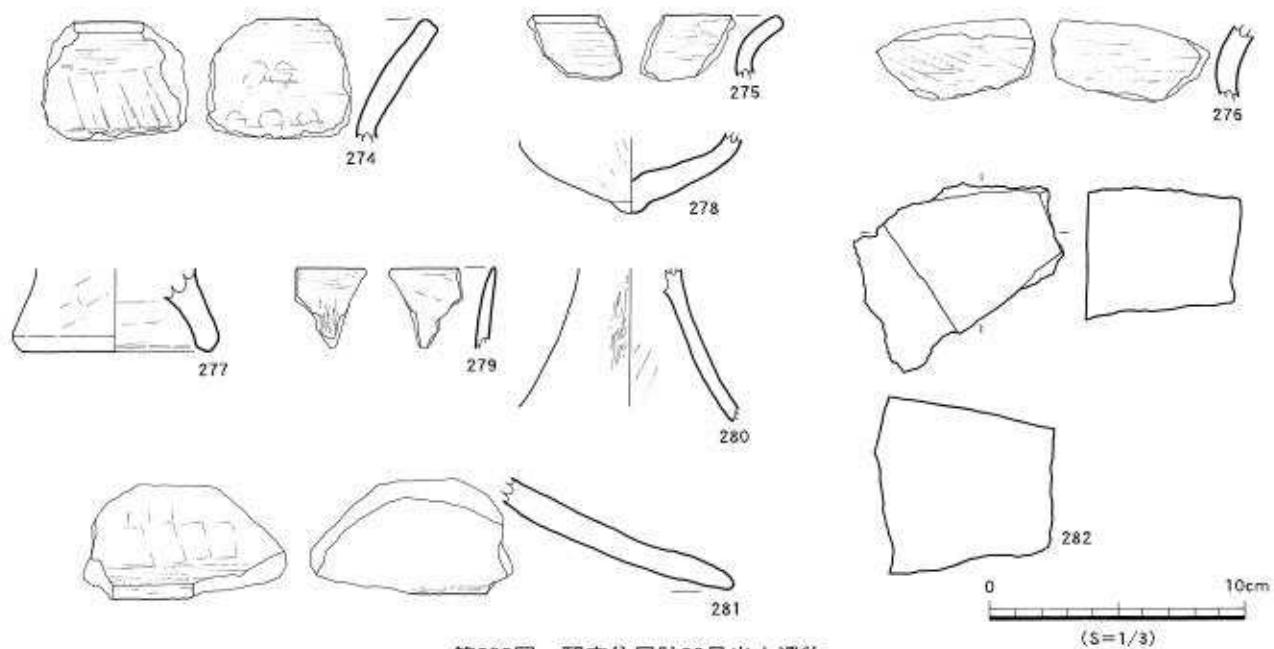
第237図 竪穴住居跡22号・出土遺物

豊穴住居跡23号（第238・239図）

K-9・10区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.6m、短边2.5mの略円形を呈する。検出時、既に外周部分には硬化面が見られたが、中央部分には硬化面は見られず2段掘りの可能性が想定された。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。中央部分は深さ20cm程度で外周部分と同じように硬化面が検出された。このため、2段掘り状のプランで両面共に硬化面を有していたことがわかった。柱穴などの付帯施設は、この硬化面を除去した段階で確認された。その結果、7基の柱穴が確認された。P5・6は深く、斜位に検出された。炉・焼土や炭化物の広がりは明瞭でないが、埋土a中にわずかに含まれている。遺物は、総点89点が出土しこの内の9点を図化した。274は甕の口縁部片と思われる。外面に搔き上げ状の痕跡が残されており、稜を形成していた可能性がある。275は口縁部の外反度合いから壺の可能性がある。278は、壺の底部である。底部中央に突起を有する特徴がある。2は口縁部が直線的な壺である。281は高壺の脚を想定したが蓋の可能性もある。

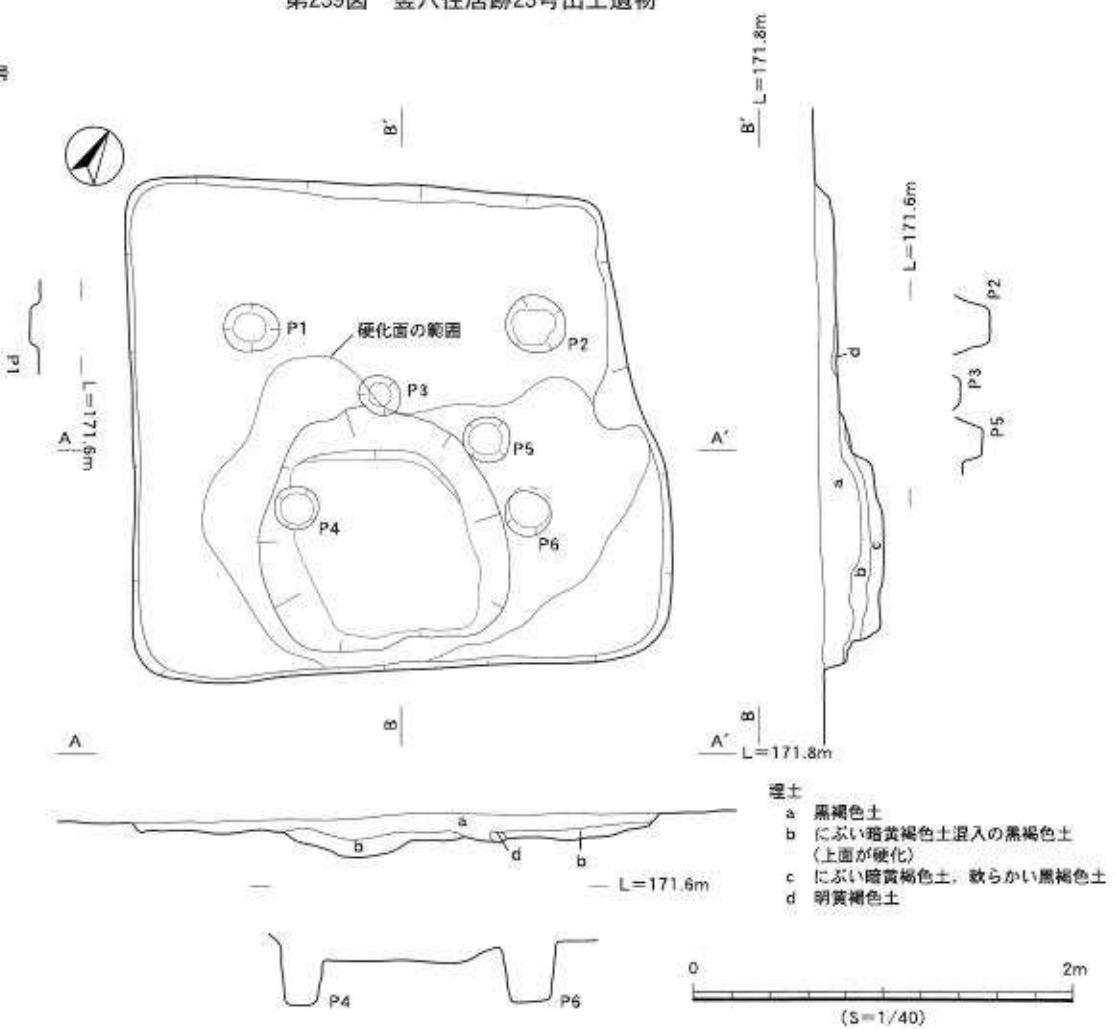


第238図 豊穴住居跡23号

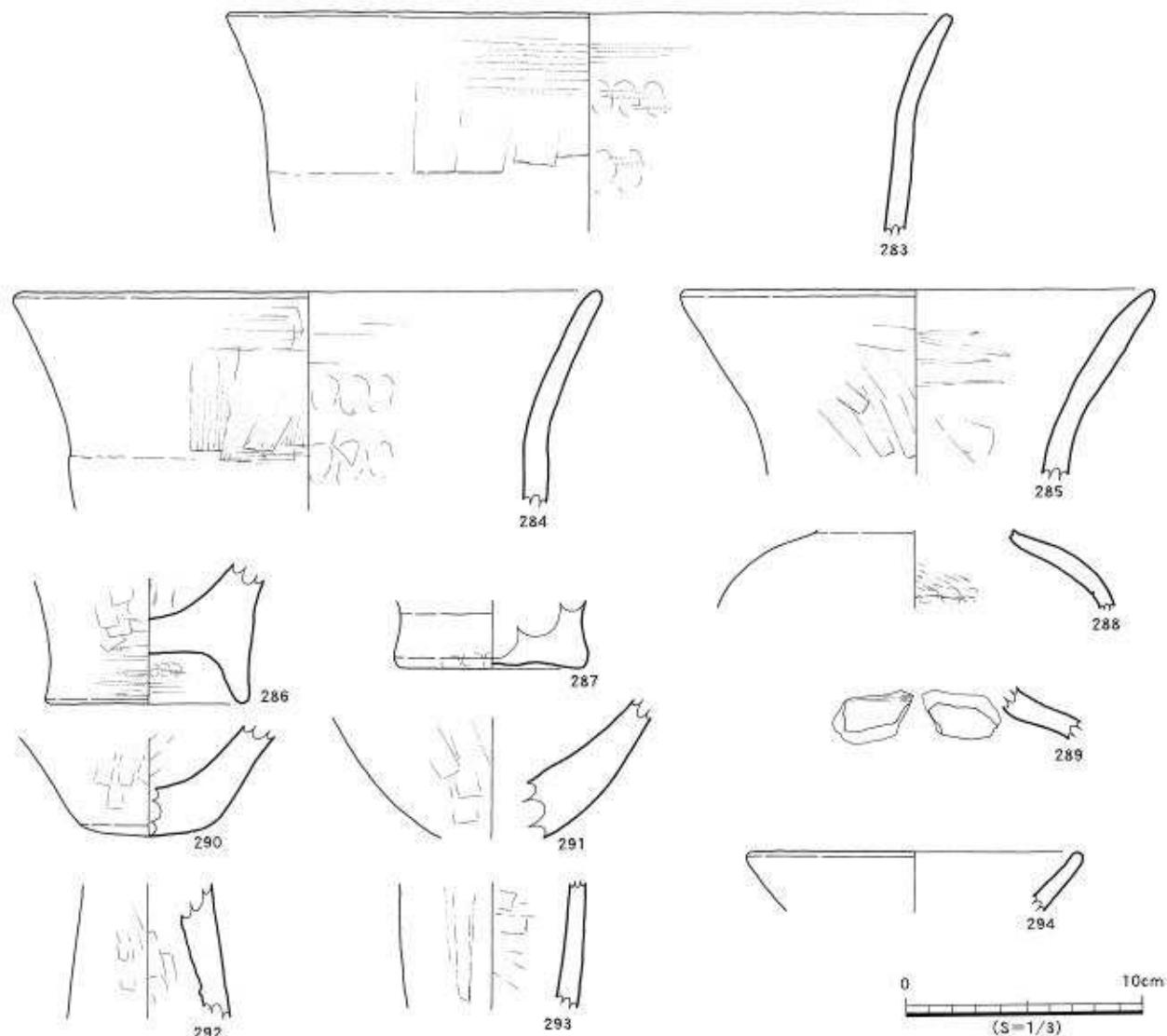


第239図 竪穴住居跡23号出土遺物

竪穴住居跡24号



第240図 竪穴住居跡24号



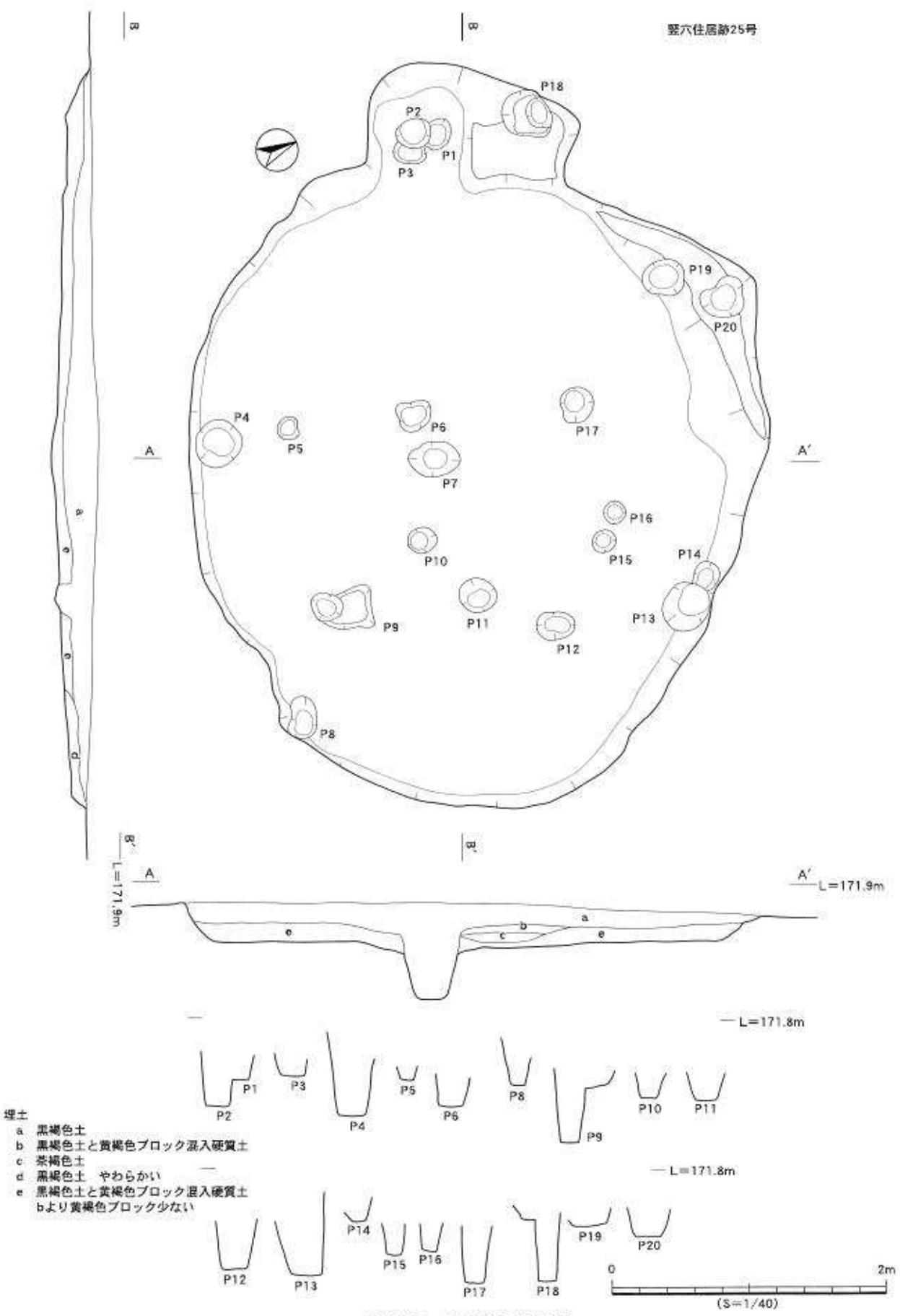
第241図 竪穴住居跡24号出土遺物

#### 竪穴住居跡24号（第240・241図）

J-10区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.8m、短辺2.6mの隅丸長方形で、東側がやや膨らんでいた。周辺の竪穴住居跡より埋土の色調が濃く、プランもしっかりとしている印象を受けた。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。硬化面は、住居南側に集中して検出され、これを記録した後に床面を全面的に除去して下部構造の把握に努めた。この結果、南側に方形土坑が検出された。柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去した段階で6基の柱穴が確認された。P1・3は浅く、柱穴であるとは必ずしも断定できないがP2・4・5・6は前者と比べると深くしっかりとしている。炉・焼土や炭化物の広がりは明瞭なまとまりを見せないが、硬化

面下で検出された土坑の埋土中には他と比べると比較的多くの炭化物が出土していた。遺物は、総点で468点が出土しこの内の12点を図化した。283は甕の口縁部片である。口縁部はやや外反し、胴部はあまり膨らまない。口縁部外面には搔き上げ状の調整が施され、外面には僅かに稜が形成される。284も283と同様であるが、口縁部がやや長い印象を受ける。285は甕として図化したが、口縁部断面が一定せず、口縁部中位で厚みを増す。胴部への移行に違和感があり、甕以外の器形である可能性もある。286は脚部が反らずに直線的である。287は平底である。288は小型の壺である。290と291は壺の底部と思われる。290は底面が胴部よりも厚く、僅かに平坦面もある。



第242図 竪穴住居跡25号

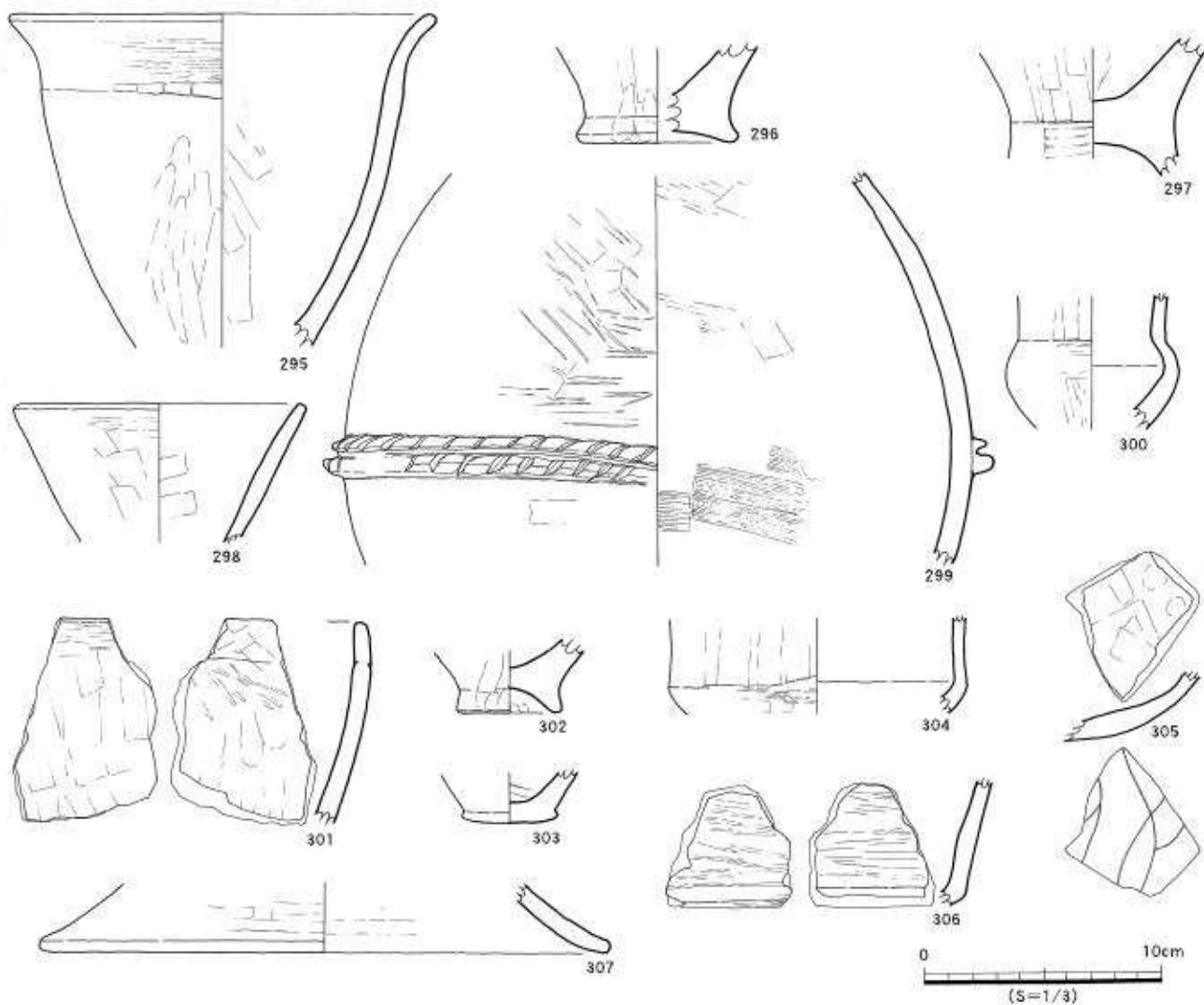
### 竪穴住居跡25号（第242・243図）

J-10区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺5.1m、短辺4.2mの円形で、北西側にやや張り出し状の突出部が認められた。

調査は、張り出し部を通るベルトとこれに直交するベルトの2本を設定して掘り下げを開始した。床面と思われる埋土の変化は硬化面によって捉えることが出来た。この時点ではP7が南北ベルトに接して検出されている。北側にはステップ状のプランが検出され、同時にP19・20が見られた。この部分は円形プランと思われたが、やや強い隅丸状になり他とはやや異なる。

なお、柱穴などの付帯施設の確認は、硬化面を除去しながら確認作業を進めた。その結果、20基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしないがやや中央付近に炭の小片が僅かながらブロック状を呈していた。遺物は、総点で633点が出土しこの内の13点を図化した。295は比較的小型の壺である。口縁部が外

反し、外面には搔き上げによる段を有する。胴部は僅かに膨らみ底部へ至る。296は壺の底部片である。脚は見られず、底部外端部を外へ張り出している。297は八字状の脚を有する。299は壺の胴部片である。突帯に特徴があり、突帯貼り付け後に中央を大きく凹ませることであたかも2条突帯状を呈している。調整の方向などから図の通りの天地を想定したが、あるいは天地逆の可能性もある。300は壺である。301は、口縁部が内湾する器形を呈している。302・303は鉢の底部を想定した。303は平底に近く、外面端部が張り出す。304は壺の胴部片と思われるが、径が大きい感じがする。306・307は高壺である。306は直線的な胴部で、下半で強く屈曲する。307は高壺の脚部を想定した。305は壺ないしは壺の底部付近と思われる。外面に細沈線による螺旋状の施文が見られる。何らかの意匠であるのか、偶然のものなのかははっきりとしない。

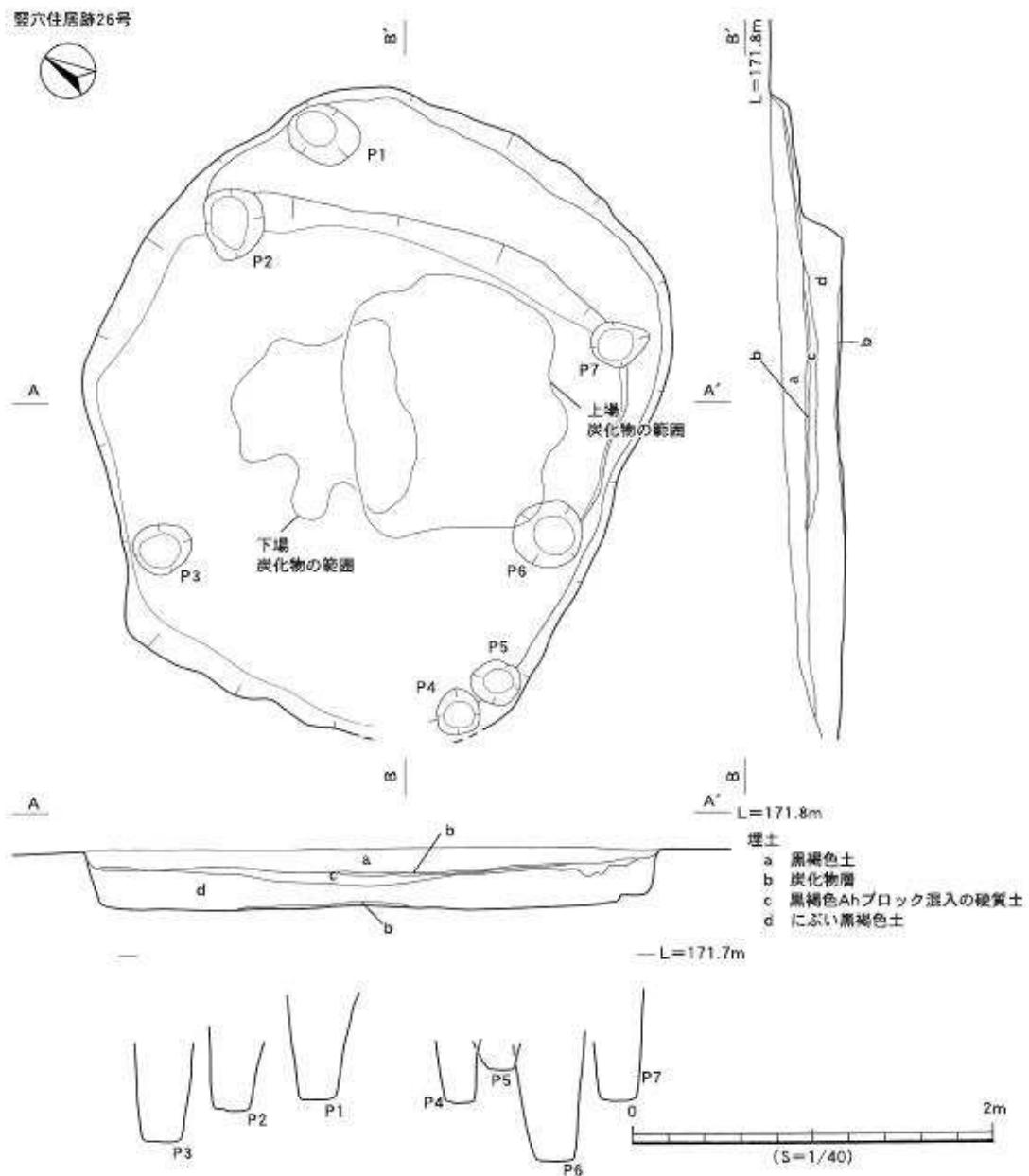


第243図 竪穴住居跡25号出土遺物

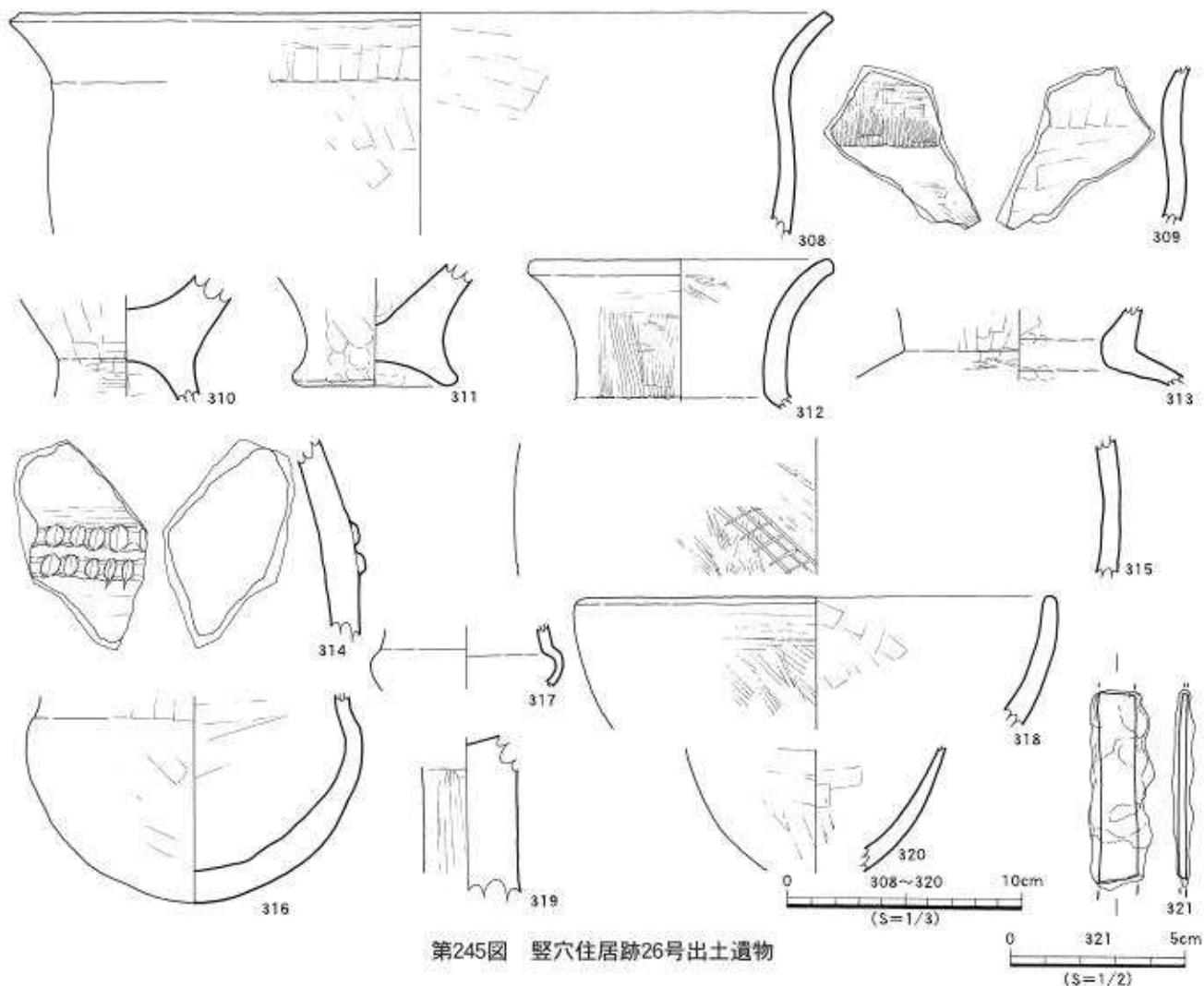
### 豊穴住居跡26号（第244・245図）

I-10区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.5m、短辺3.1mのやや楕円形に近い隅丸方形であった。調査は、2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。床面と思われる埋土の変化は硬化面により捉えることが出来た。炭化物の集中も同時に住居のやや南側で検出できた。この時点では埋土等の記録を行い、硬化面を掘り下げたところ、北東部では黄褐色砂礫層が検出されたのに対して、他は埋土dが段落ちするように堆積していた。のことから、再度ベルトを設定して掘り下げたところ、下層から再度硬化面を検出することが出来た。さらに、P2～5・7がこの時点を確認され、先に検出されていたP1と併せて7基の柱穴を確認することが出来た。また、2段目のほぼ中央には炭

化物の集中も見られた。この結果、段掘りや張り出し状のプランと言うより、内側の3m×3mの隅丸方形プランが埋没し埋め戻された後に3.5m×3.1mの隅丸長方形プランが形成されたものと判断した。だが、P1を除く6基のピットがどちらの段階のものであるか明確に捉えることが出来なかった。遺物は、総点で1,278点が出土しこの内の14点を図化した。308は口縁部が外反し外面には搔き上げ状の調整により段が形成される。胴部は、僅かに膨らんでいる。口唇部には平坦面を有する。315は壺の可能性があるが、胴部が膨らまない。細沈線により施文が施されている。あるいはこれが貼付突帯を意味するもので、これを水平に図化すべきであったかもしれない。321は薄い長方形の鉄製品である。刃部を特定することが出来なかった。



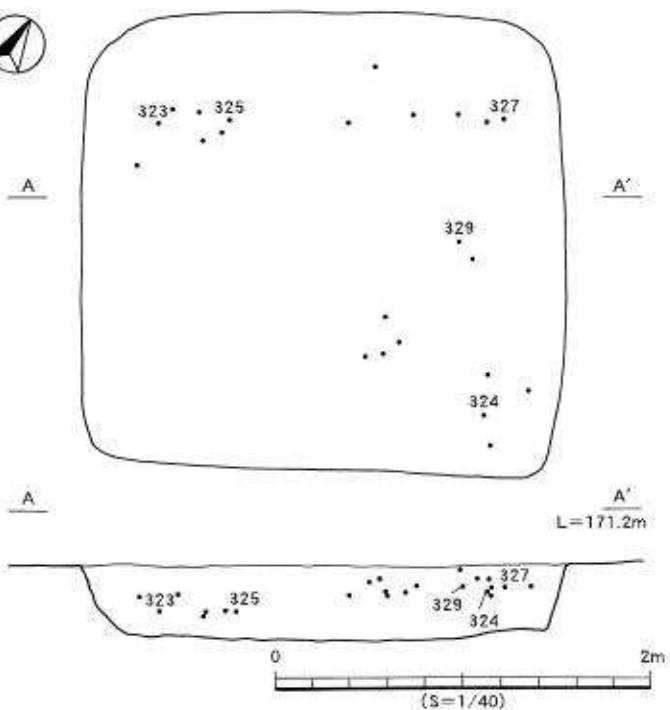
第244図 豊穴住居跡26号



第245図 竪穴住居跡26号出土遺物

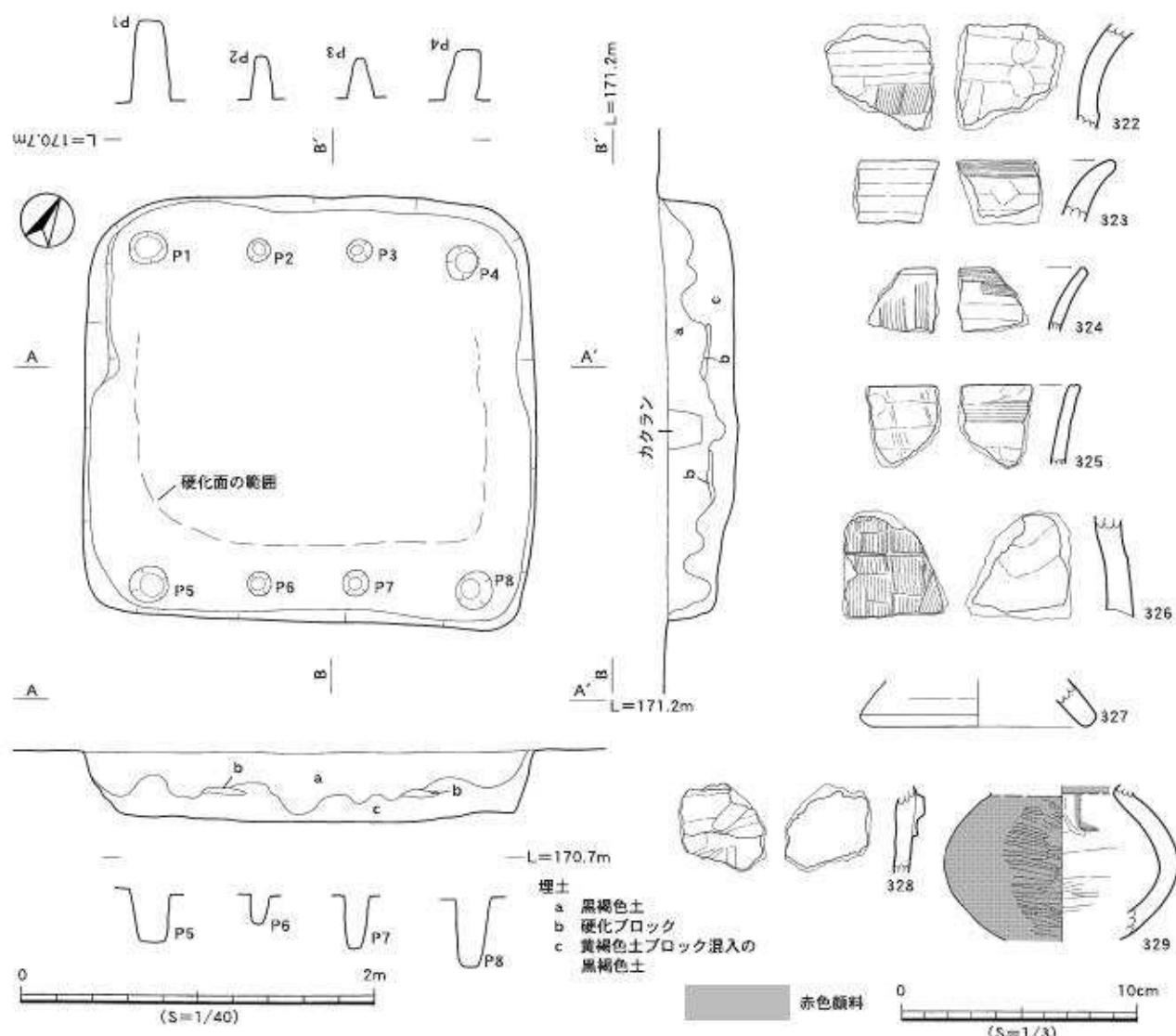
#### 竪穴住居跡27号（第246・247図）

H-10・11区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.6m、短辺2.4mの隅丸長方形であるが上面において部分的な攪乱を受けていた。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土aとした黒褐色土はやや砂質が強く炭化物を含んでいた。この層の下に部分的に硬化した土のブロックが見られたためにここを床面と判断したが、一部にはこの範囲を掘むことができずに埋土cまで掘り下げた部分もある。埋土cを掘り下げると平坦になり、北・南側に4本ずつ柱穴が8基の柱穴が確認された。中心に近いP2・3・6・7が比較的径が小さく四隅に近いP1・4・5・8は径が大きくしっかりとしていた。遺物は、総点で190点が出土しこの内の8点を図化した。なお、埋土中の炭化物により年代測定を実施している。詳細は第4章に譲るが、 $395 \pm 15$ yrBPという遺物の時期よりも新しい分析結果が示されている。



第246図 竪穴住居跡27号遺物出土状況

竪穴住居跡27号

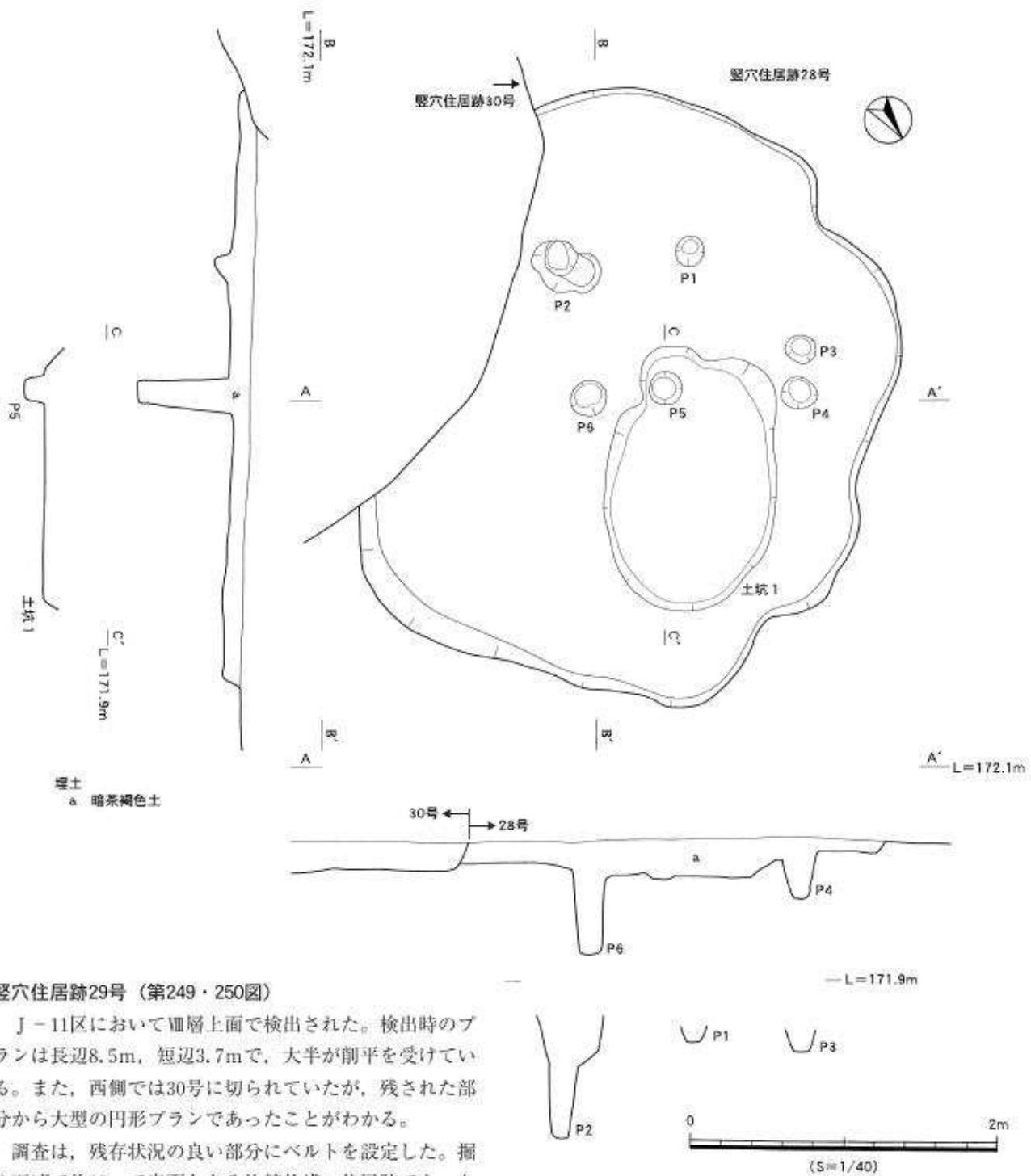


第247図 竪穴住居跡27号・出土遺物

竪穴住居跡28号（第248・250図）

J-10・11区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.8m、短辺2.7mの隅丸長方形で、南側は30号に切られている。28号から30号の3軒は、搅乱部分に隣接していることもありプランの検出は難しかった。当初は28号と29号の2軒を想定したベルト設定であった。検出の段階で平面的に前後関係を捉えることが出来ず、3軒の新旧関係は床面の判断によるところが大きい。埋土は単一層で、貼床や硬化面ははっきりとしない。北側よりに深さ10cmの浅い土坑が検出された。柱穴などの付帯施設は、床面を除去しながら6基の柱穴が確認された。特にP6は中央に位置して深いP2は2段掘り状を呈する。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしないが北側床面検出の土坑底面にやや多く堆積していた。遺物は、総点で633点が出土し、この内の13点を図化した。330は甕の口縁部片である。口縁部が外反し、

外面には搔き上げ状の調整によって段を有する。332は甕の底部片である。厚みのある底部で、上げ底状を呈する。333は甕の脚部片と思われる。指押さえの痕跡が明瞭に見られる。334は口縁部が外反して屈曲するいわゆる2重口縁の器形を呈する。この屈曲部にはキザミが施されている。335は壺の底部片である。336は小破片であるが、壙の可能性がある。337・338は高壙である。いずれも小型である。338は粘土接合面で欠損している。339は脚部片であるが、先端部が大きく外反する。341・342はミニチュア土器である。



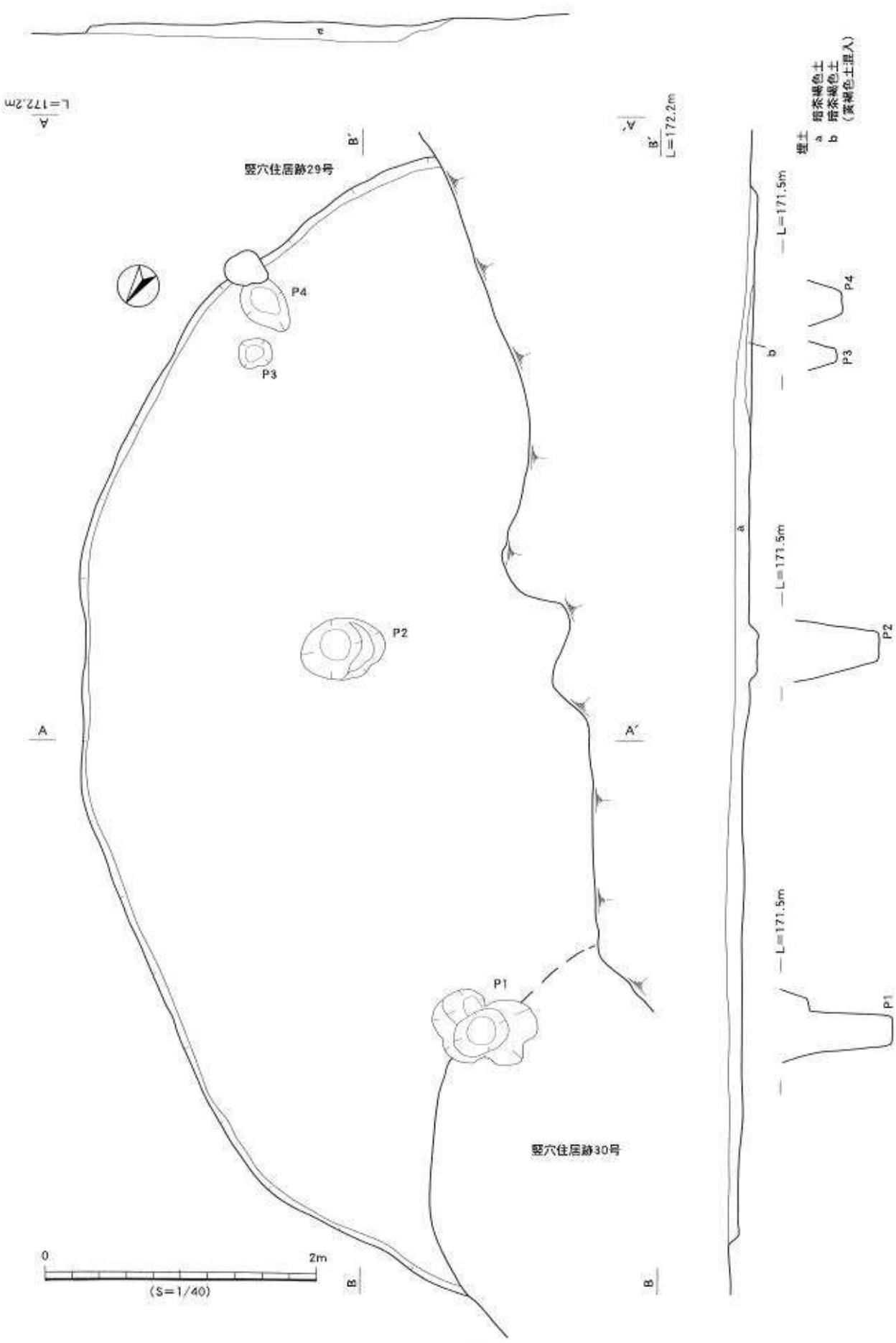
縫穴住居跡28号（第249・250図）

J-11区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは長辺8.5m、短辺3.7mで、大半が削平を受けている。また、西側では30号に切られていたが、残された部分から大型の円形プランであったことがわかる。

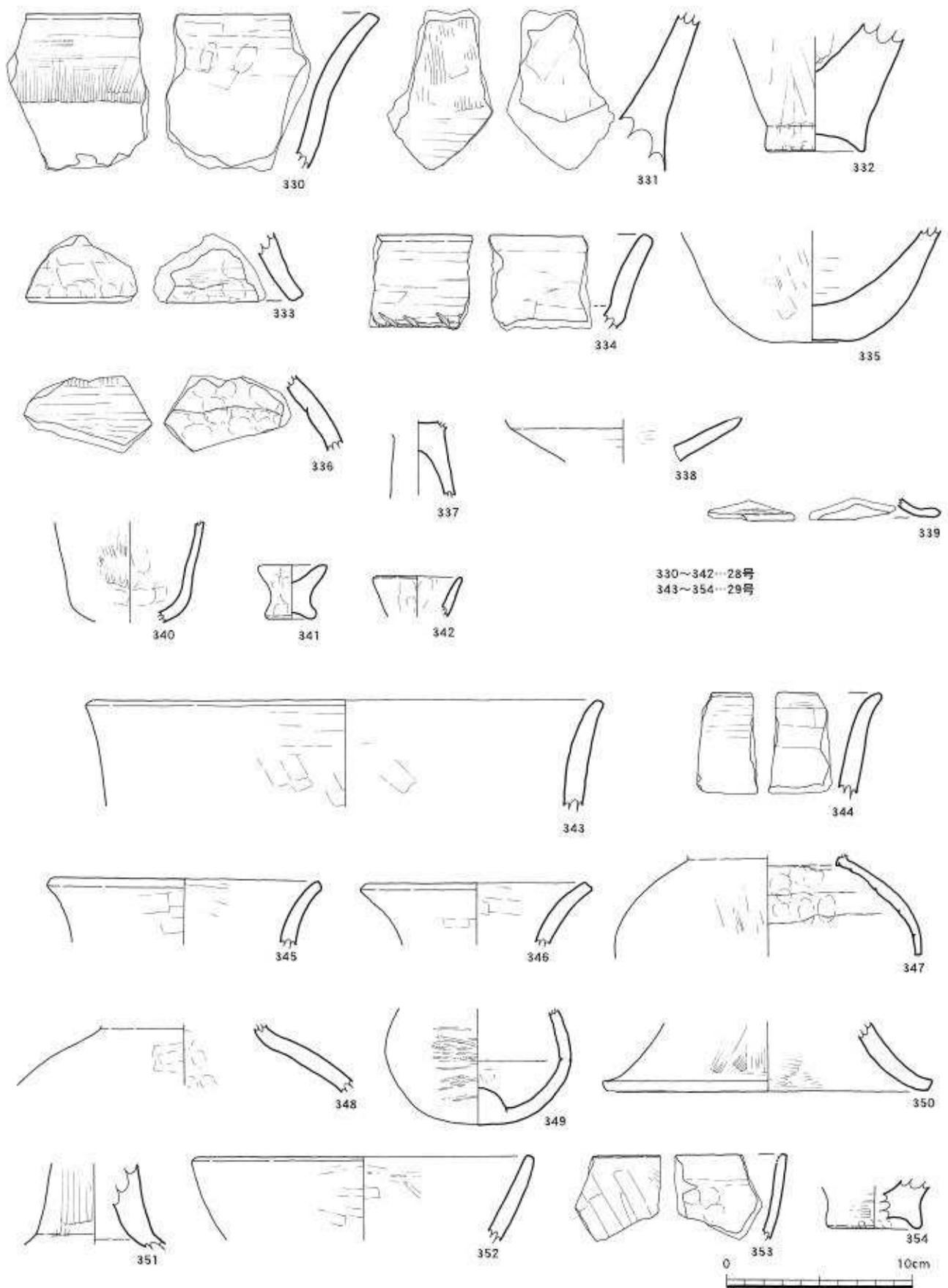
調査は、残存状況の良い部分にベルトを設定した。掘り下げて約10cmで床面となる比較的浅い住居跡であった。これも上面が深く削平を受けた結果であろう。柱穴などの付帯施設の確認は、床面を除去した段階で4基の柱穴が確認された。P1は30号に接しており、厳密には29号に伴うとは言い難い。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしないが、埋土中の炭化物について放射性炭素年代測定を実施し、 $1,740 \pm 20$  yr BPという結果が示されている。遺物は、総点で611点が出土しこの内12点を図化した。343は甕の口縁部である。口縁部が僅かに外反する。胴部に膨らみは見られない。344は口唇端部が強く

第248図 縫穴住居跡28号

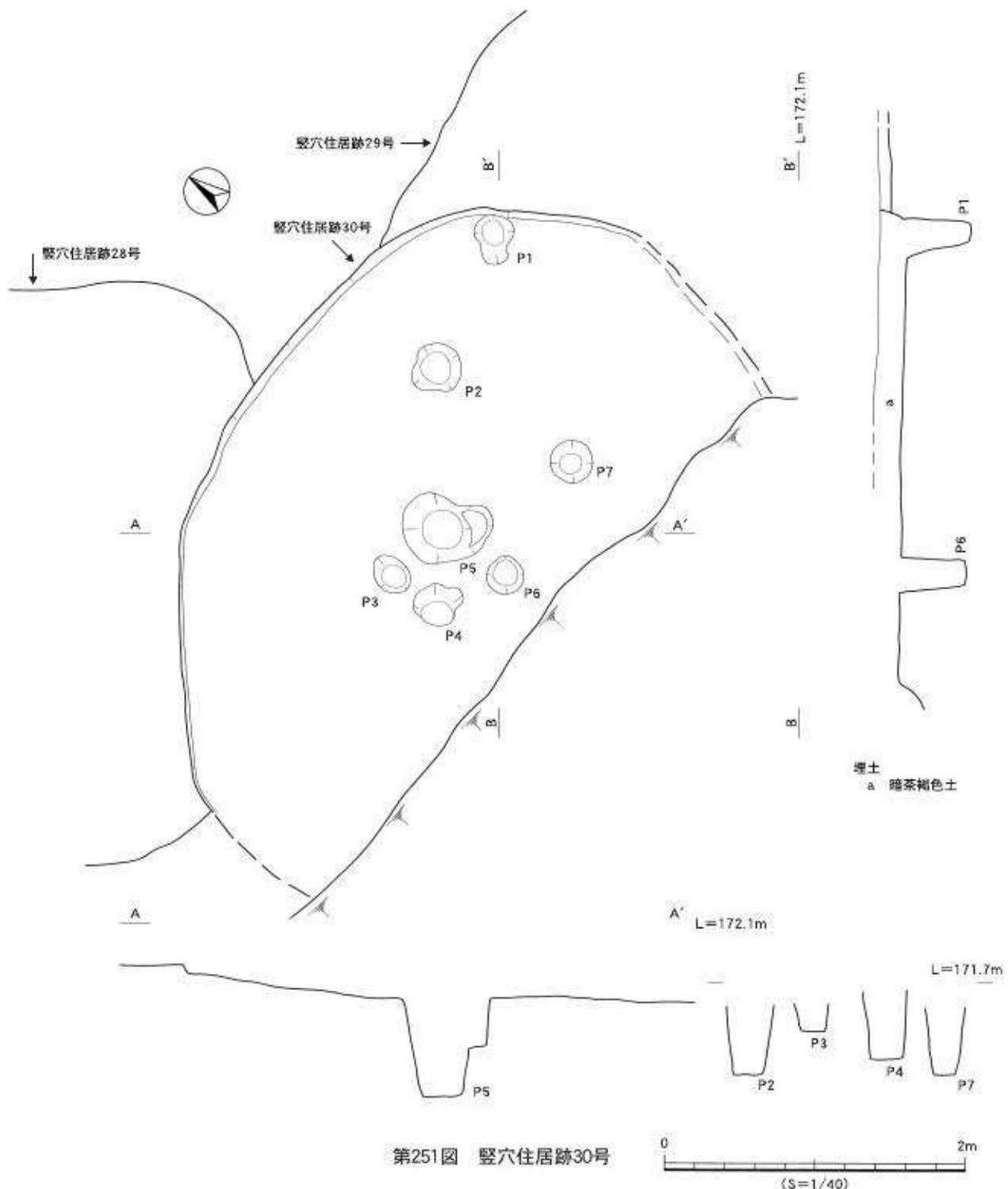
外傾する。345・346は壺の口縁部片である。347～349は壺である。347は胴部内面に粘土接合痕を明瞭に残す。これで見ると幅1.6cmから2cm程度の粘土紐を積み上げている様子が窺える。349は底部内面に円形の瘤状突起が見られる。



第249図 積穴住居跡29号



第250図 積穴住居跡28号、29号出土遺物



第251図 墓穴住居跡30号

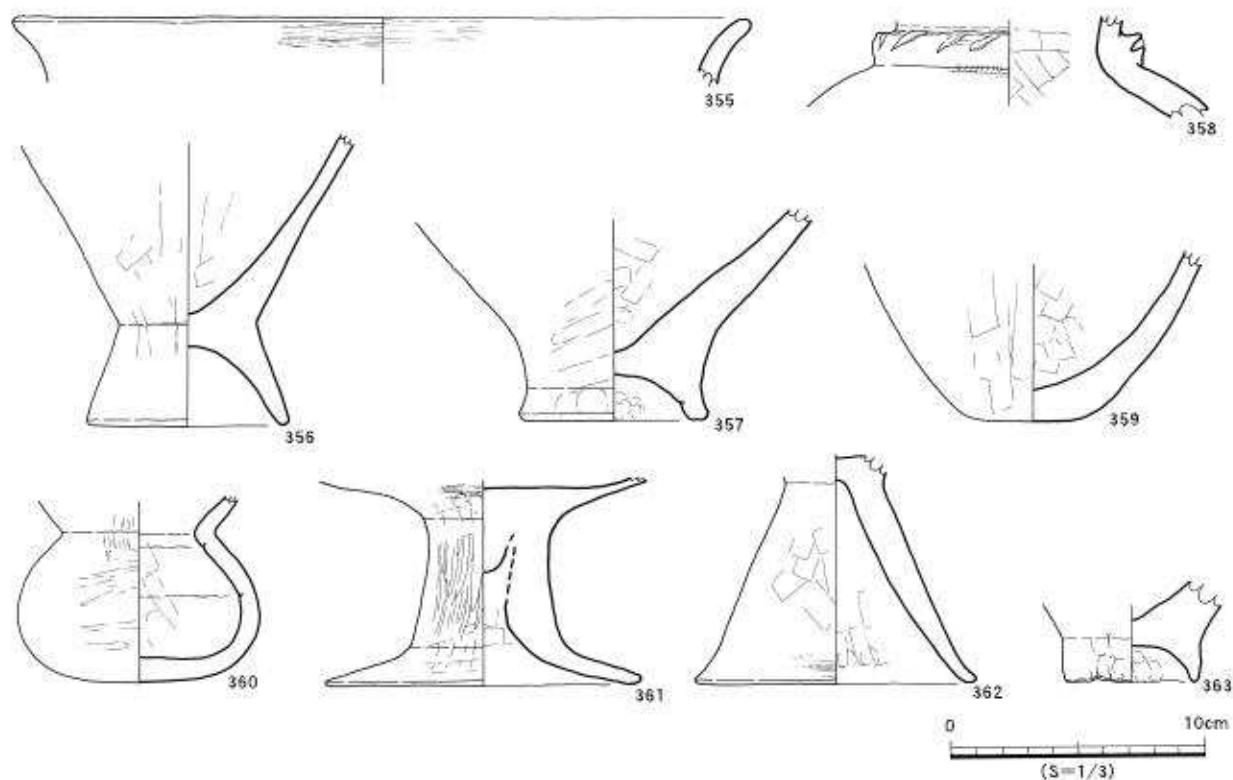
0 2m  
(S=1/40)

#### 墓穴住居跡30号（第251・252図）

J-10・11区においてⅢ層上面で検出された。北側が28号、東側が29号と切り合って検出された。南側半分は後世の擾乱により消失している。また、一部29号との境が不明瞭であった。検出時のプランは長辺4.7m、短辺2.5mの略円形であった。

調査は、当初2軒の住居の切り合いを想定していたために一部を掘り下げる後に急遽切り合いがわかるように、2本のベルトを設定し直して調査を行った。埋土や床面等から、3軒の住居跡の中では当住居が一番新しい。貼

床や硬化面等は見られず、柱穴などの付帯施設は、床面で7基の柱穴が確認された。P3は深さ20cmと浅めであるが、他の柱穴は比較的深い。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしなかった。遺物は、総点で187点が出土しこの内の9点を図化した。355は壺の口縁部片である。口縁部が外反している。356・357は壺の底部である。356はハ字状の脚部を有し、357は低い脚を有する。358は壺の頸部片かと思われる。360は壺である。胴部は球状を呈し、最大径がやや胴部下方にある。361は高壺である。壺部と脚部との間には円塊を落とし込んでいる。

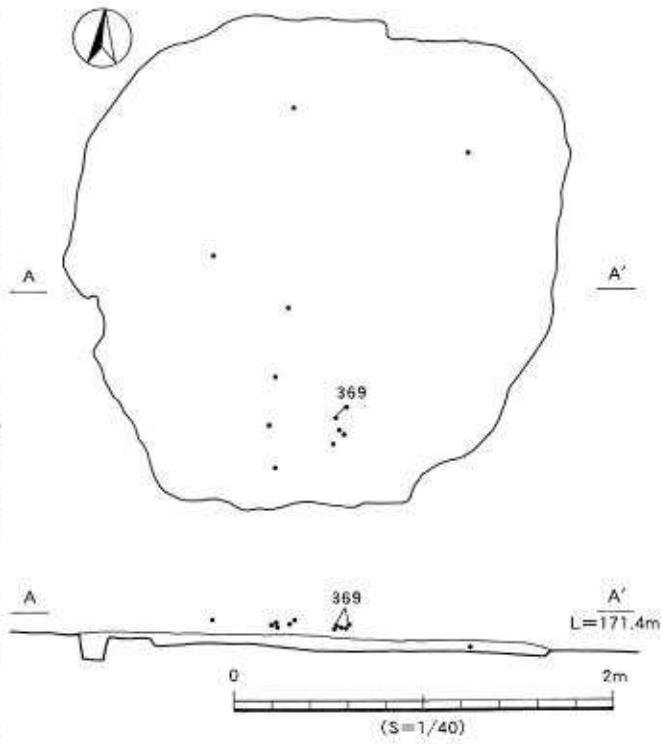


第252図 竪穴住居跡30号出土遺物

竪穴住居跡31号（第253・254図）

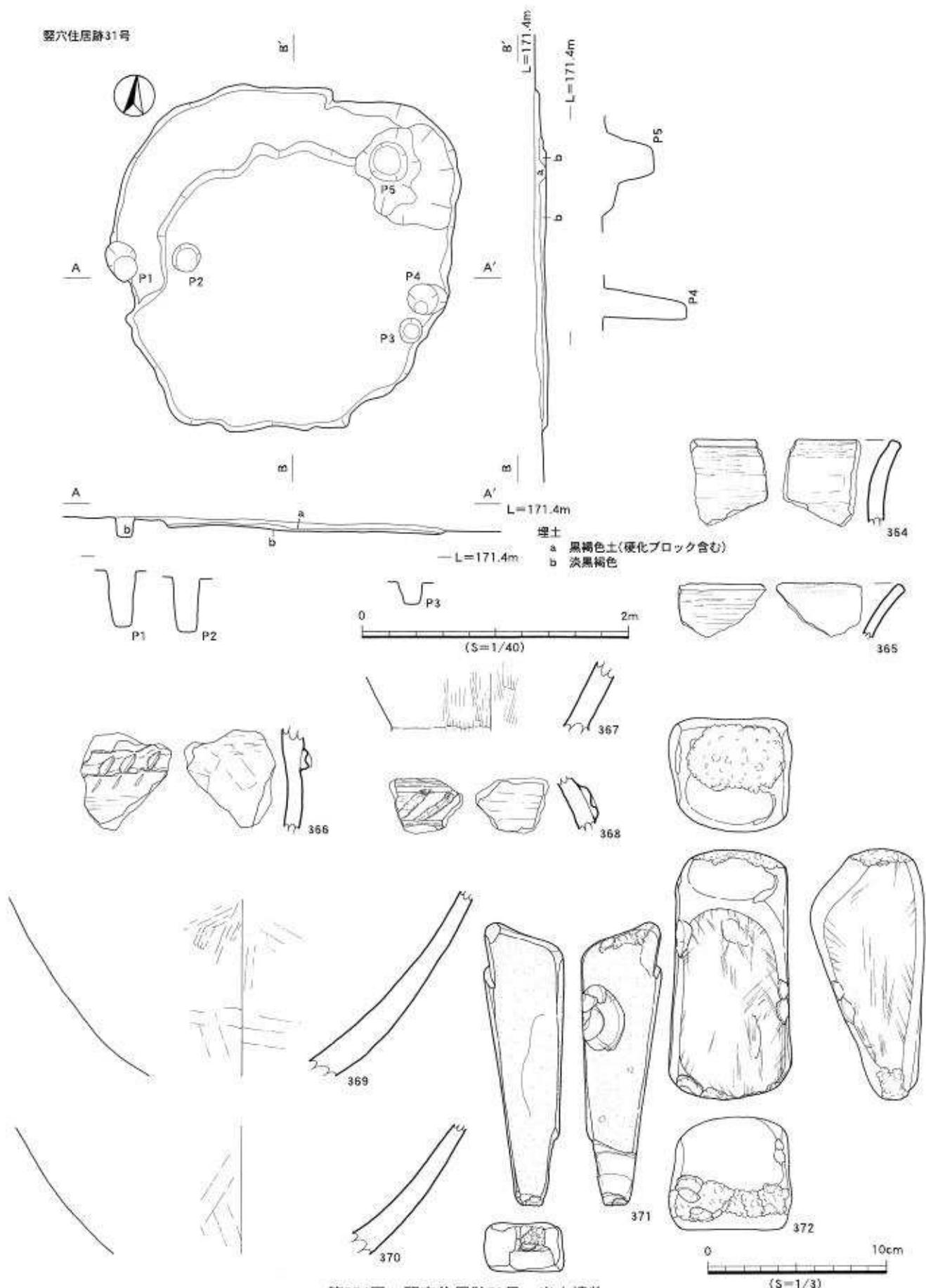
K-11区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.6m、短辺2.5mの略円形に近い。検出時、既に硬化面が広がっている状況であった。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。北側に図化したベット状のプランは硬化面を除去した後に検出されたものである。柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去した段階で5基の柱穴が確認された。検出プランの東西端に確認されたP1・4はやや斜位に入り込んでいる。また、P5周辺には数段に掘り込みが確認されているが、これは、柱の抜き取り等が行われている可能性を想定したが、これを捉えることはできなかった。炉・焼土や炭化物の広がりは明瞭でない。遺物は、総点で135点出土しこの内の9点を図化した。364～367は甕の破片である。364・365は口縁部が外反する。365は口縁部に平坦面を有する。366は胴部突帯の破片である。残存している部分から、口縁部は外反していたものと思われる。突帯頂部にはキザミが施されるが、工具痕は突帯下の胴部にも残される。368～370は壺の破片である。368は胴部片で、幅広突帯が貼付されている。369・370は底部付近の破片である。371・372は敲石である。371は棒状の礫を素材とし、372は厚手の礫を素材とする。372は短軸両端に敲打痕が残る。

竪穴住居跡31号



第253図 竪穴住居跡31号遺物出土状況

豊穴住居跡31号

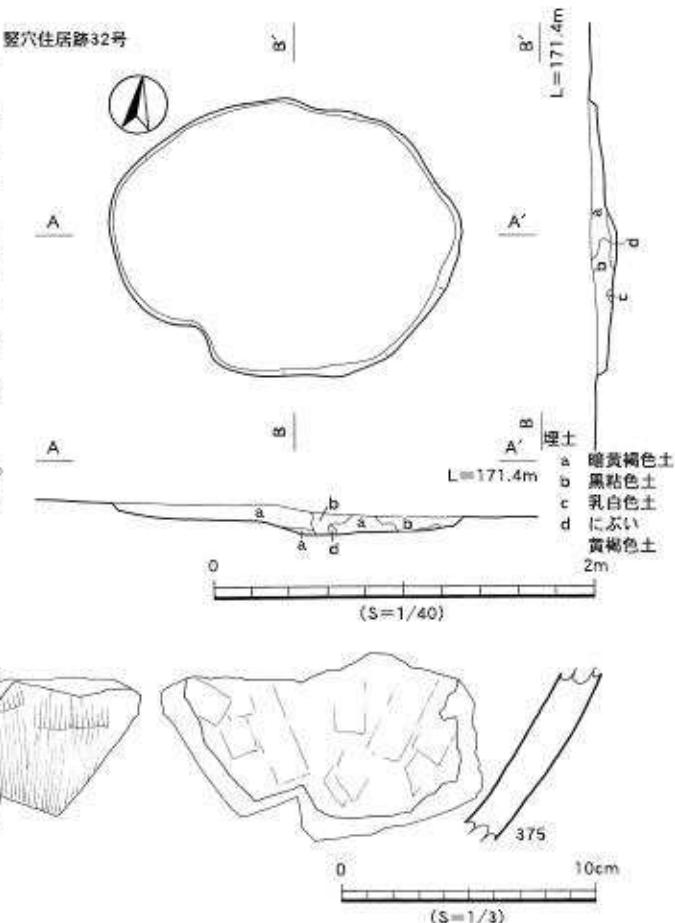


第254図 豊穴住居跡31号・出土遺物

### 豊穴住居跡32号（第255図）

K-12区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺1.9m、短辺1.5mの梢円形で、調査は土坑を想定して開始した。ただ、土坑とするには大型であったために、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。当初は土坑を想定していたが、周辺の土坑の状況などから最終的には豊穴住居跡と判断した。柱穴などの付帯施設は、床面を除去しながら調査を進めたが、検出できなかった。炉・焼土や炭化物の広がりも確認できなかった。

遺物は、総点で59点が出土しこの内の3点を図化した。373は甕の口縁部片である。375は壺の胴部下半の破片である。374は罐の口縁部と思われる。



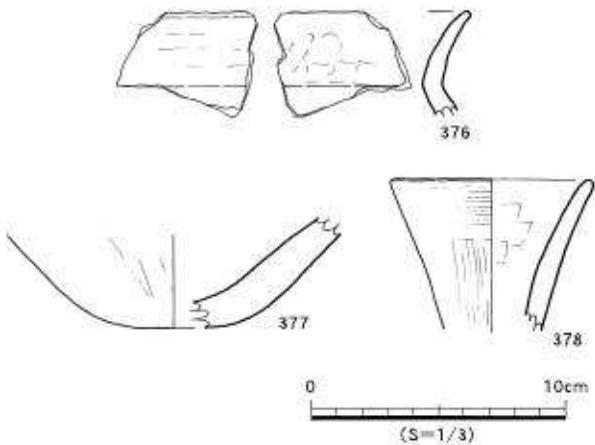
第255図 豊穴住居跡32号・出土遺物

### 豊穴住居跡33号（第256・257図）

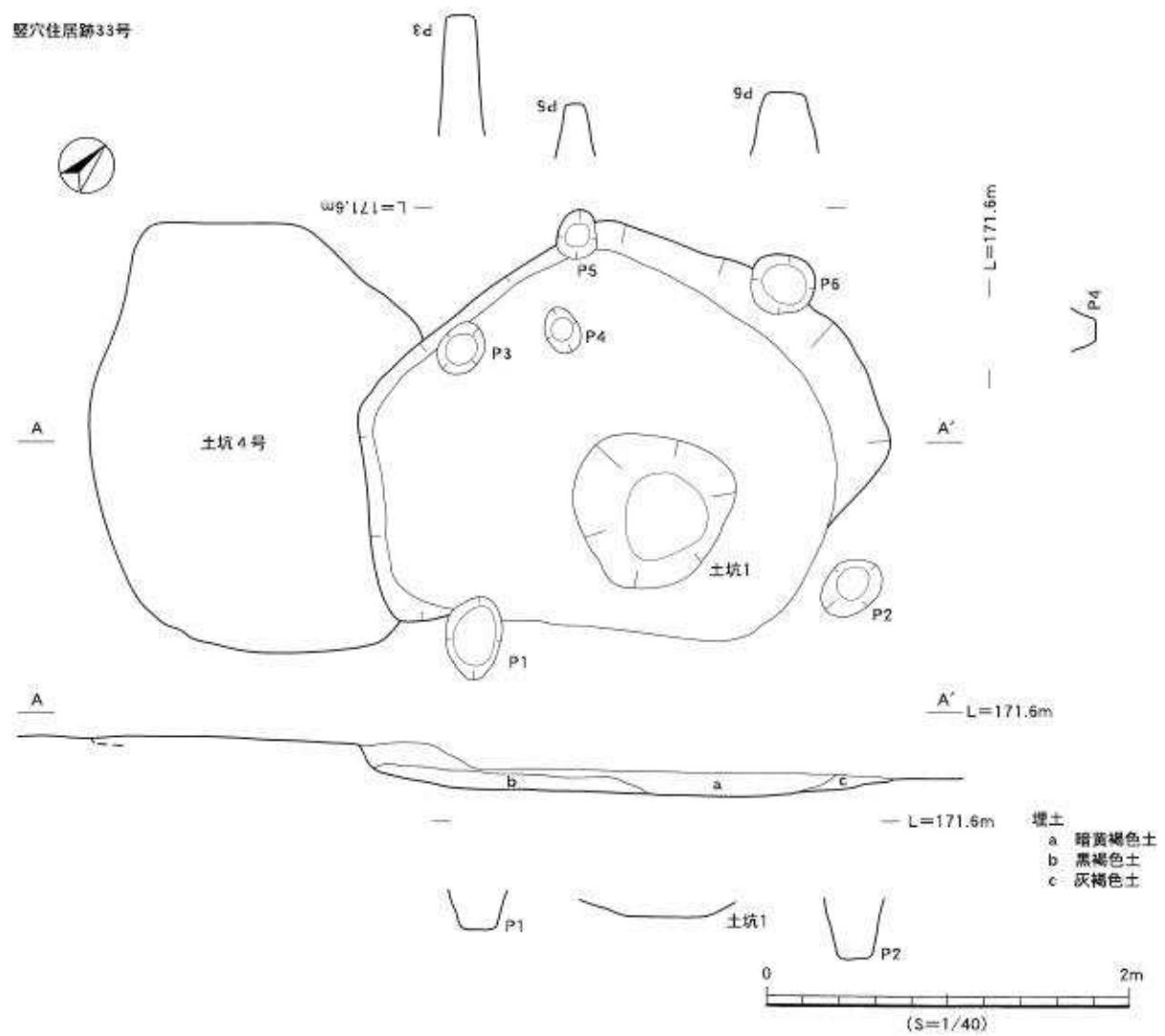
K-12区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4.5m、短辺2.2mの梢円形に近い。調査の結果、豊穴住居跡と土坑との切り合い関係があったことから、33号は3m×2.2mの梢円形プランとなっている。切り合い関係を見てみると、西側は土坑4となり、当住居が土坑4を切る。床面で見ると、土坑4より33号の方が10cm程度深い。

調査は、当初1軒の豊穴住居跡を想定したベルトを設定して掘り下げを開始した。比較的容易に検出された東側の壁面からプランを検出していったところ、貼床や硬化面等は見られず、黄褐色砂礫層に達したためにこれを床面と判断した。東南部分については立ち上がりは見られず、検出段階で床面が露出していたことがわかった。柱穴などの付帯施設の確認は、床面で行った。その結果、33号のプラン中に2基、立ち上がり及びその周辺に4基の柱穴が確認された。東南側のプランが検出時に消失していたことを考えると、P1・2は当住居に伴う可能性があったためにここに掲載している。中央付近には円形プランの土坑が1基検出されている。炉・焼土や炭化物の広がりは集中か所こそ見られないが、埋土b中に比較的多く堆積していた。

遺物は、総点で112点が出土しこの内の3点を図化した。376は口縁部がくの字状に強く屈曲する。内外面には稜線が明瞭に見られ、胴部は膨らむ。377は壺の底部片である。378は罐の口縁部片である。

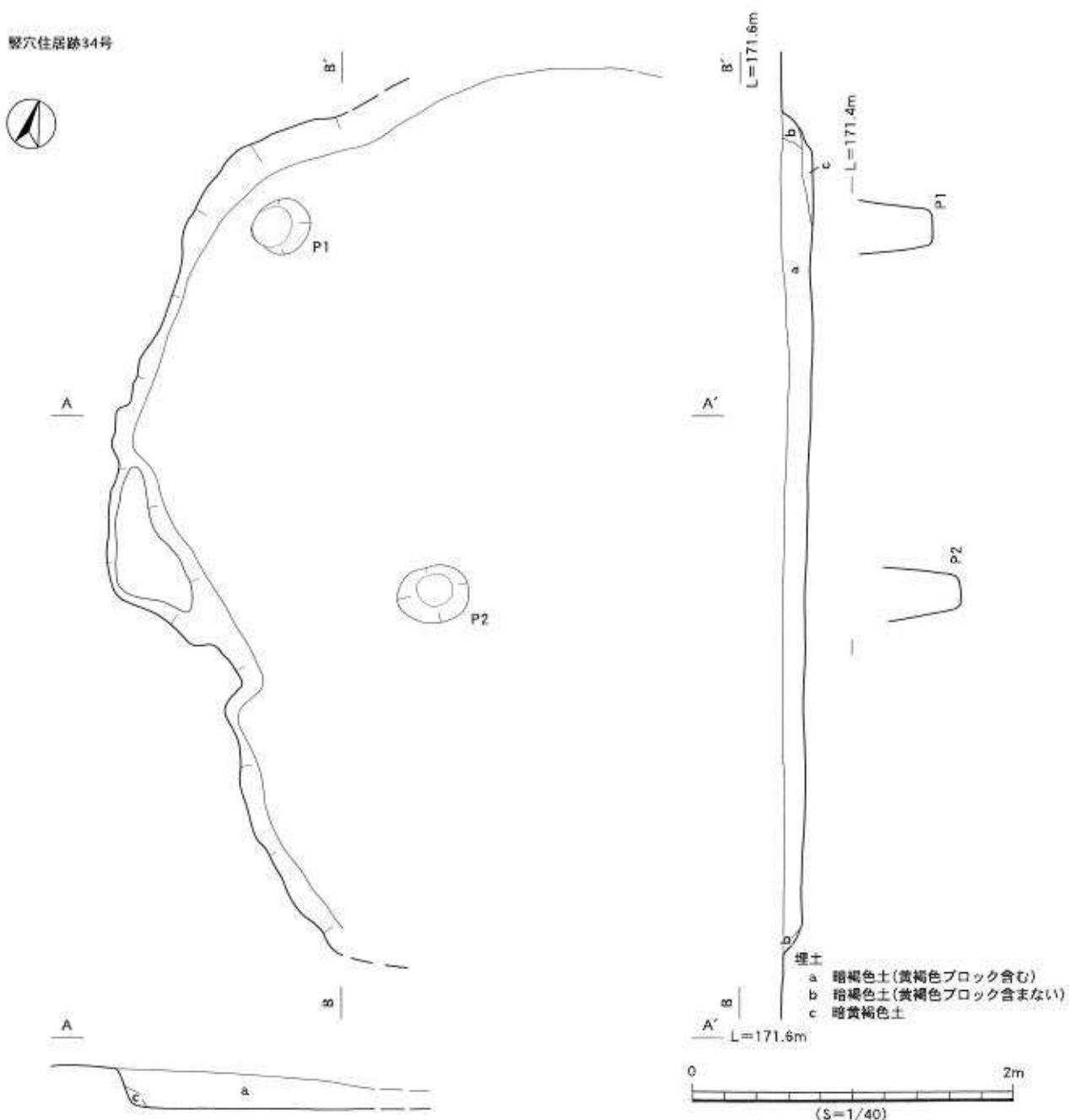


第256図 豊穴住居跡33号出土遺物



第257図 堅穴住居跡33号

竪穴住居跡34号

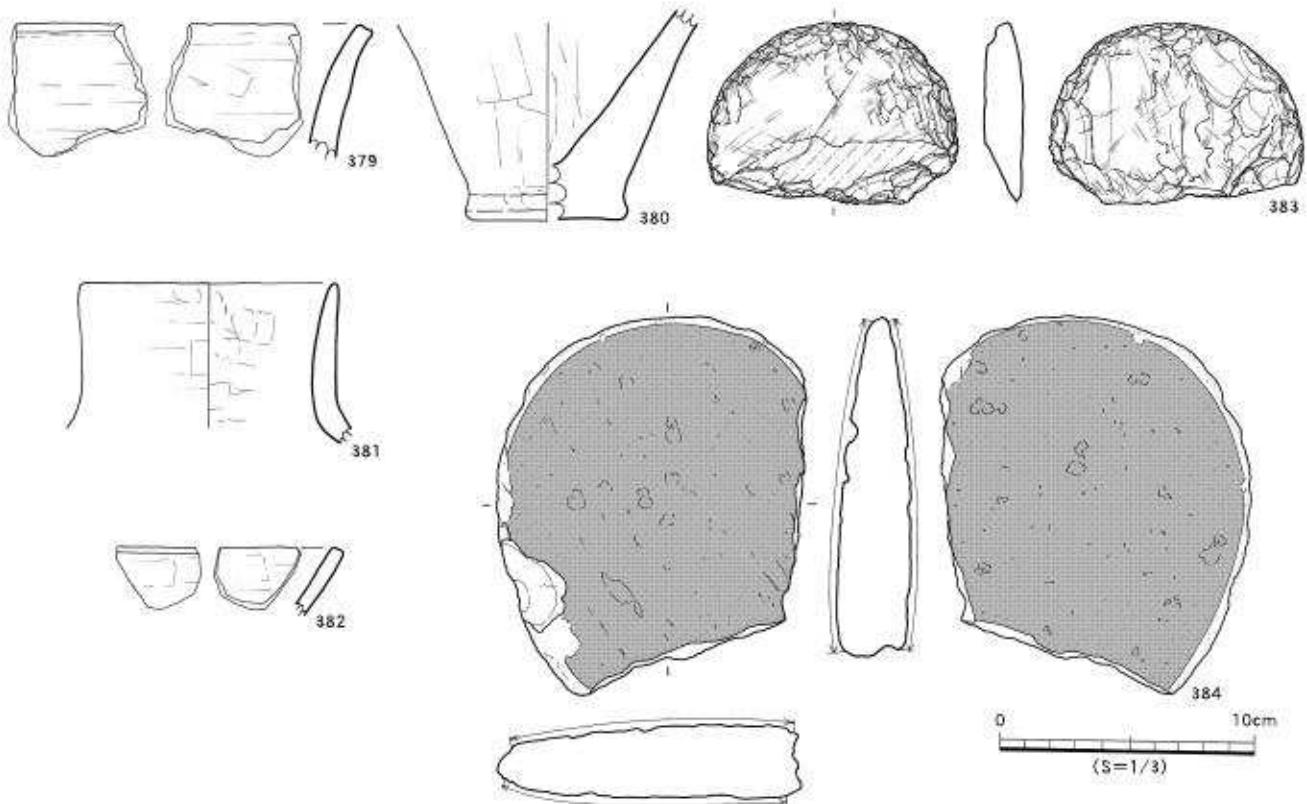


第258図 竪穴住居跡34号

## 竪穴住居跡34号（第258・259図）

K-12区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは長辺5.2m、短辺3mの不定形で、東側はプランを捉えられなかった。調査は、残存している最大長とこれに直行する2本のベルトを設定して掘り下げを開始した。西側にはわずかなテラス状の張り出しがある。床面には貼床や硬化面は見られなかった。柱穴などの付帯施設は、床面で2基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られない。遺物は、総点で395点が出土し、この内の6点を図化した。379・380は甕である。379は口縁部が外反し、口唇部には平坦面を有する。380

は平底の底部で縁部が外へ張り出す。4は壺の口縁部で、口縁部が直線的で頭部はあまり屈曲せずに稜線は見られない。383は頁岩製で、扁平な碟を素材に半月状に周辺を加工する。384は安山岩製である。扁平であるが明瞭な磨り等は観察されない。

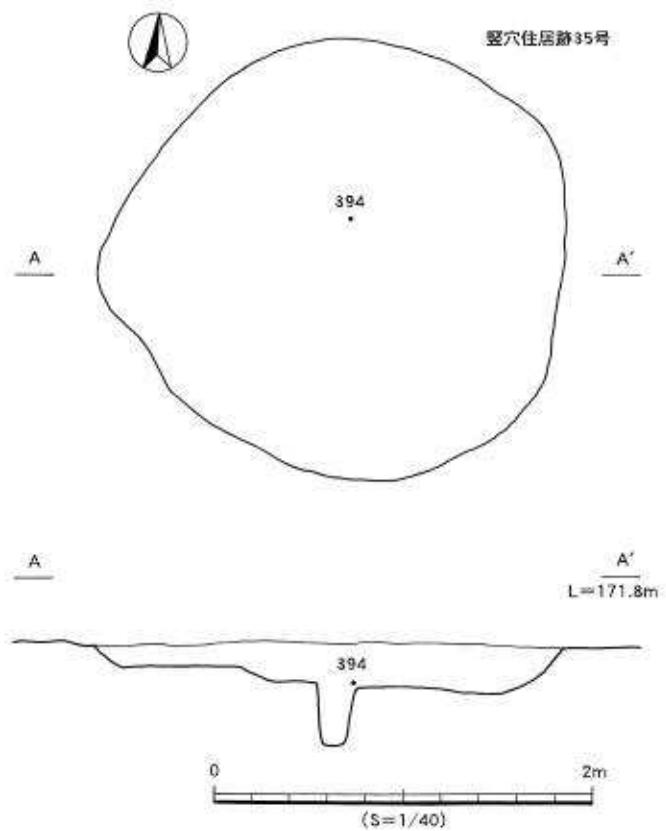


第259図 竪穴住居跡34号出土遺物

#### 竪穴住居跡35号（第260・261図）

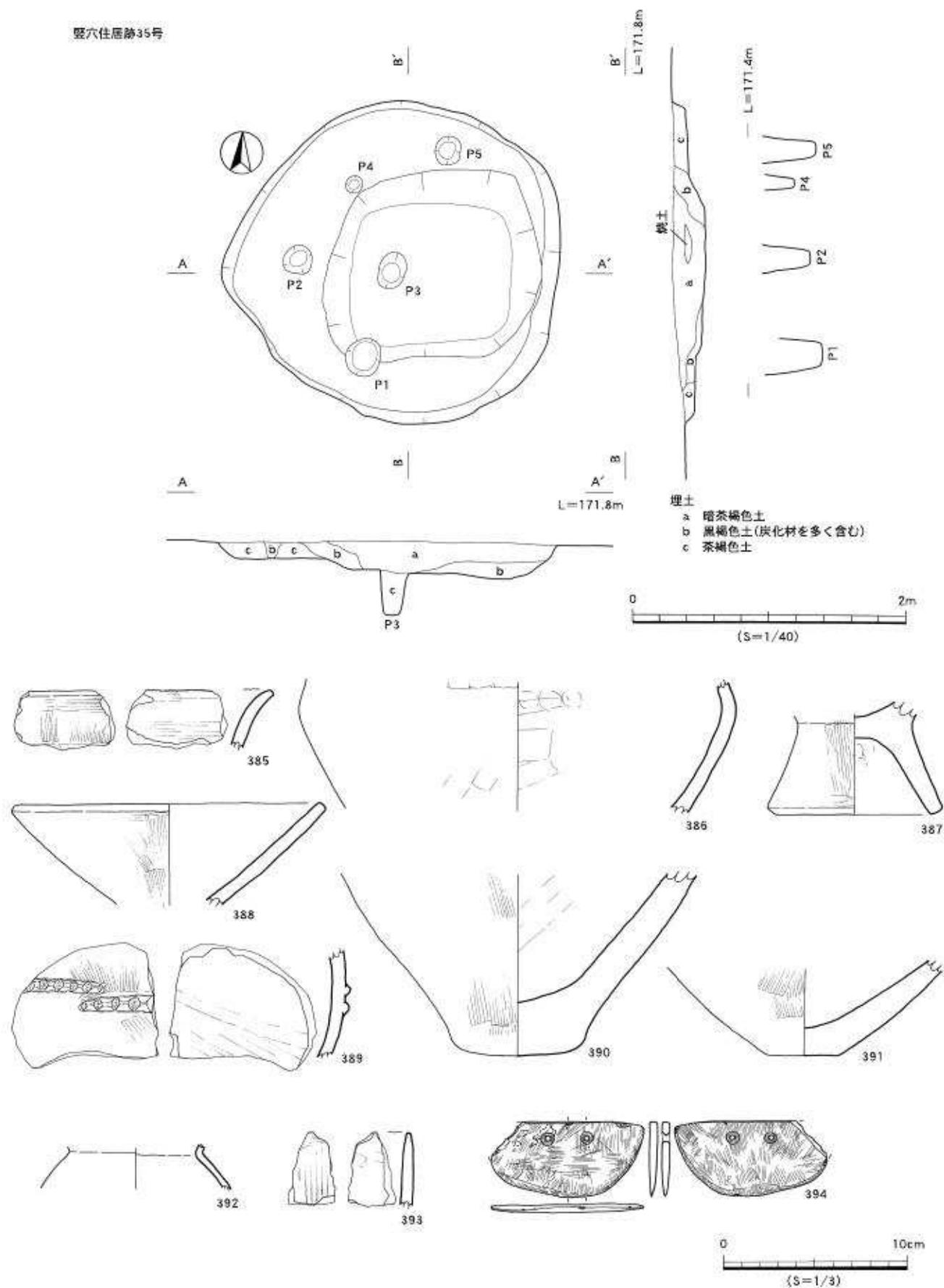
J-12区において埴層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.5m、短辺2.4mの円形を呈する。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。検出時に大きめの炭化物を多く含む層が部分的に見られたが、東側床面に厚く堆積しており、これを掘り下げていったところ1.6m×1.4mの隅丸長方形プランの土坑になった。埋土中には面上には見られなかったが焼土が散在している。柱穴などの付帯施設の確認は、床面を除去しながら確認し、結果5基の柱穴が確認された。中央にはP3があり主柱穴かと思われる。

遺物は、縦点で80点出土し、この内の10点を図化した。385～387は甕である。385は口縁部が外反し、外面には縦方向の工具痕が見られる。386は、甕の胴部上半の破片と思われ、外面にはわずかに縦方向の工具痕が見られる。387は甕の脚部でハの字状に開く。388は、壺の口縁部片として図化したが、天地逆で脚部の可能性も考えられる。389は壺の胴部片で、貼付突帯は上下にズレて貼付されている。390・391は壺の底部片である。394は石庖丁である。竪穴住居跡中央の床面で出土した。左側面を欠損している。



第260図 竪穴住居跡35号遺物出土状況

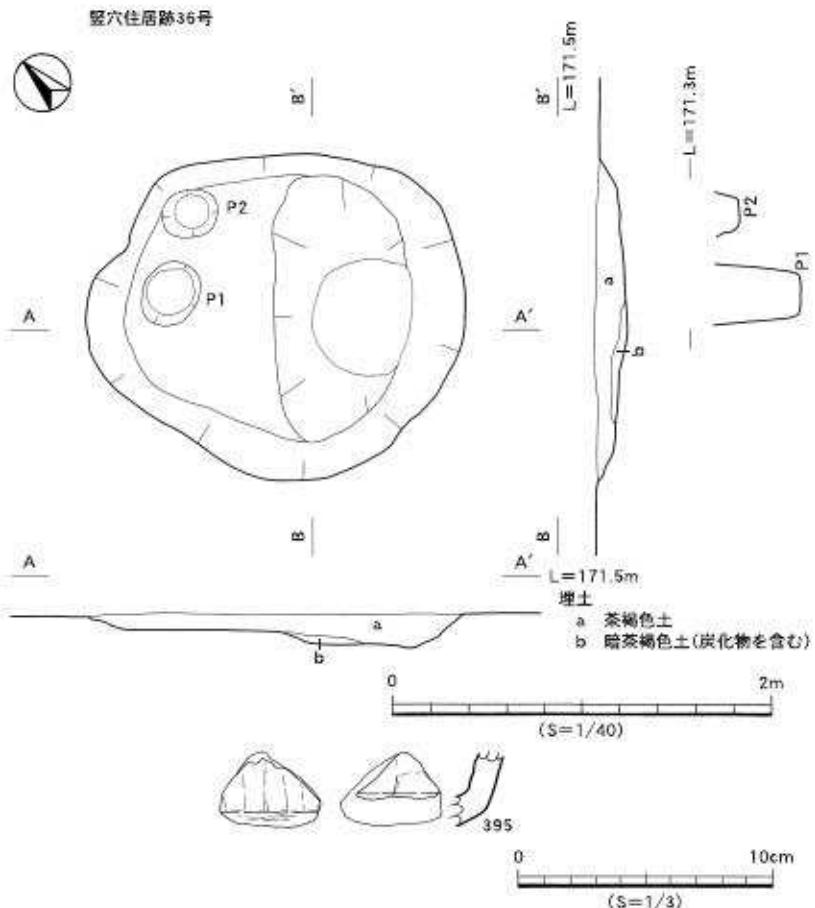
竪穴住居跡35号



第261図 竪穴住居跡35号・出土遺物

### 豊穴住居跡36号（第262図）

J-12・13区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2m、短辺1.7mの卵形に近い楕円形を呈する。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。床面は北側では検出面から約10cm程度の深さで検出できたが、南側は緩やかに傾斜し、住居短軸方向に長い楕円形プランの土坑となった。この土坑の床面には、面的な広がりは少ないながらも炭化物を含む層の堆積が見られる。柱穴などの付帯施設は、床面で2基確認された。遺物は、総点で32点が出土し、この内の1点を図化した。



第262図 豊穴住居跡36号・出土遺物

### 豊穴住居跡37号（第263図）

J-13区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.3m、短辺1.9mの略円形で、土坑5を切っている。また、土坑6とも隣接する。

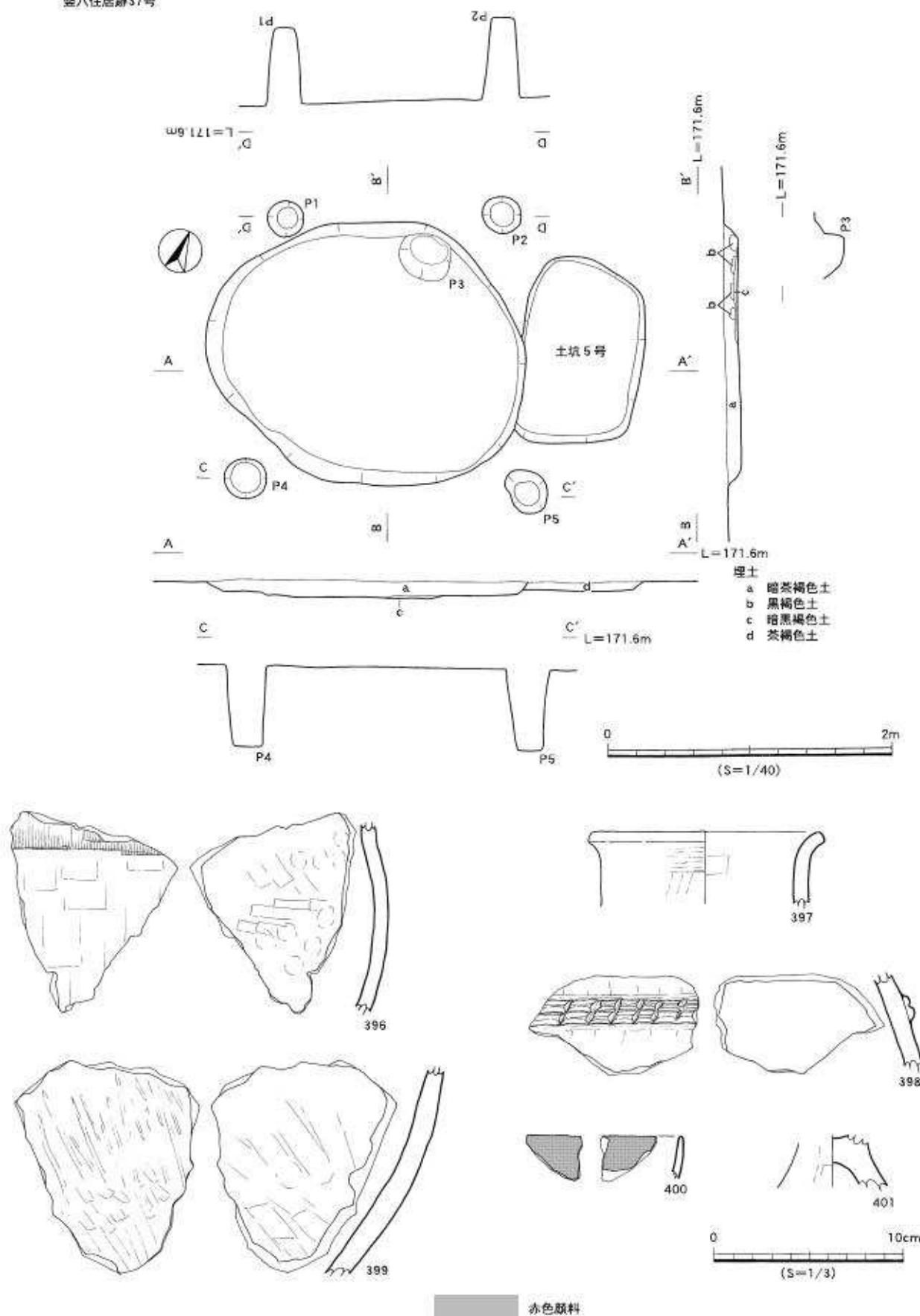
調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。柱穴などの付帯施設は、床面で1基確認されが、豊穴部に近接して4基の形状の類似した柱穴が検出された。4基の柱穴の埋土は、豊穴住居跡の埋土aに該当し、住居プラン検出時に柱穴も同時に検出されていた。周辺には、他の時期も含めて柱穴が見られるため、厳密に共伴するかは不明だが、1つの可能性として豊穴住居跡に伴うと判断してここに掲載した。

遺物は、総点で207点出土し、この内の6点を図化した。396は甕の胴部片である。残存部から、口縁部は外反すると思われる外面には縦方向の工具痕が見られる。胴部はわずかに膨らむ。397~399は壺の破片である。398はやや幅広の突帶で中央部分を凹ませてキザミを施している。

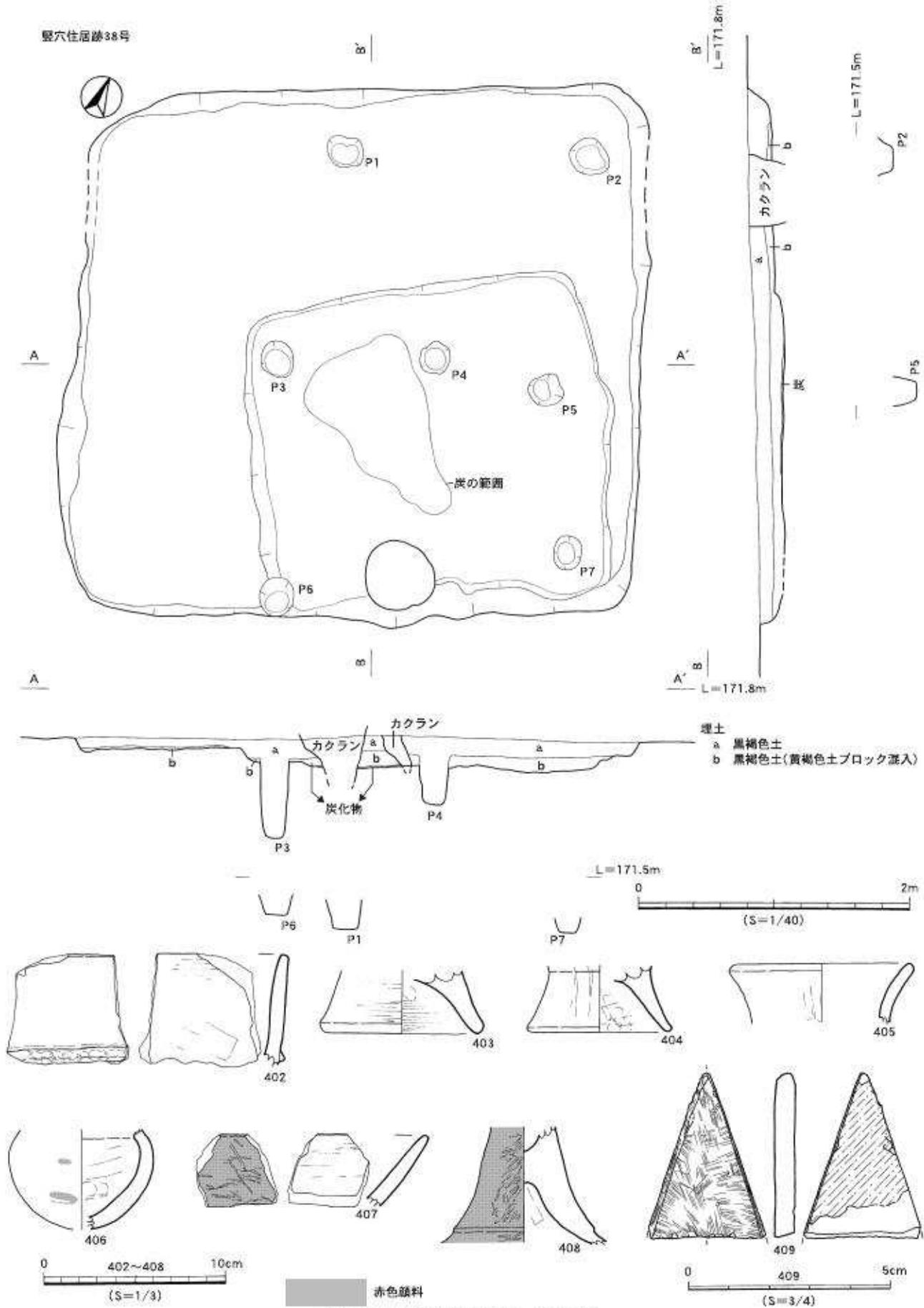
### 豊穴住居跡38号（第264図）

J-K-13・14区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4.2m、短辺4mの隅丸方形で、北側の上面プランの一部が配管により削平を受けていた。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出を行った。床面検出時に南東側に一回り小さな、埋土bを主体とする方形の豊穴部が検出された。これを切り込んでP3・4は検出されている。このプランも中央ベルトにそって掘り下げたところ床面に炭化物が集中する範囲が確認された。柱穴などの付帯施設は、床面を除去しながら7基の柱穴が確認された。遺物は、総点で560点が出土し、この内の8点を図化した。402~404は甕の破片である。402は口縁部がほぼ直行する。口縁部下には貼付突帶を施すが、上下につまみ上げる特徴が見られる。403・404は甕の脚部である。405は壺の口縁部である。406は甕の胴部片で底部は丸底状を呈すると思われる。408は高壺の脚部で、外面に段を有している。409は砾石である。

竖穴住居跡37号



第263図 竖穴住居跡37号・出土遺物



第264図 竪穴住居跡38号・出土遺物

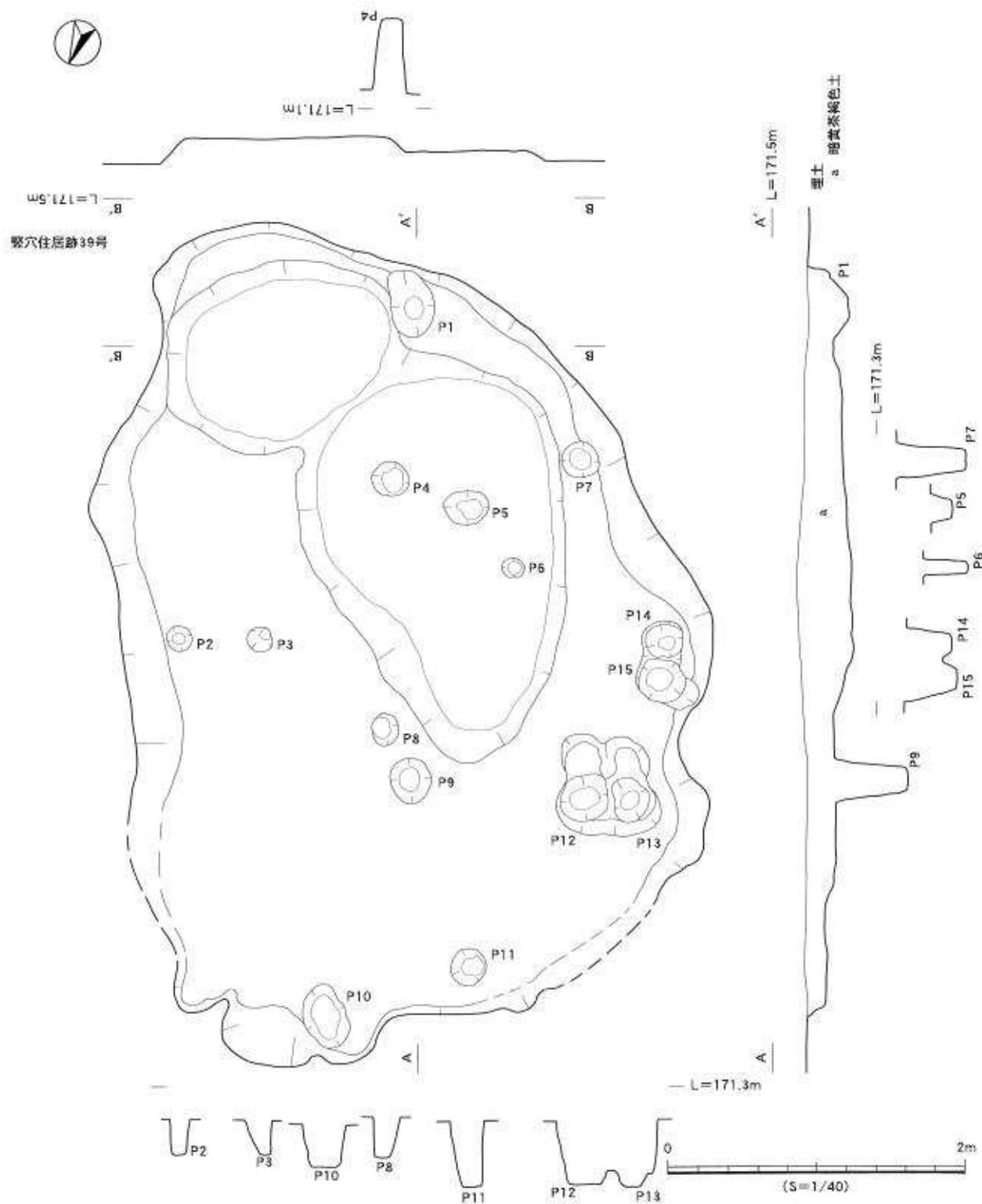
豊穴住居跡39号（第265～267図）

K・L-14・15区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺5.1m、短辺4mの不定形である。

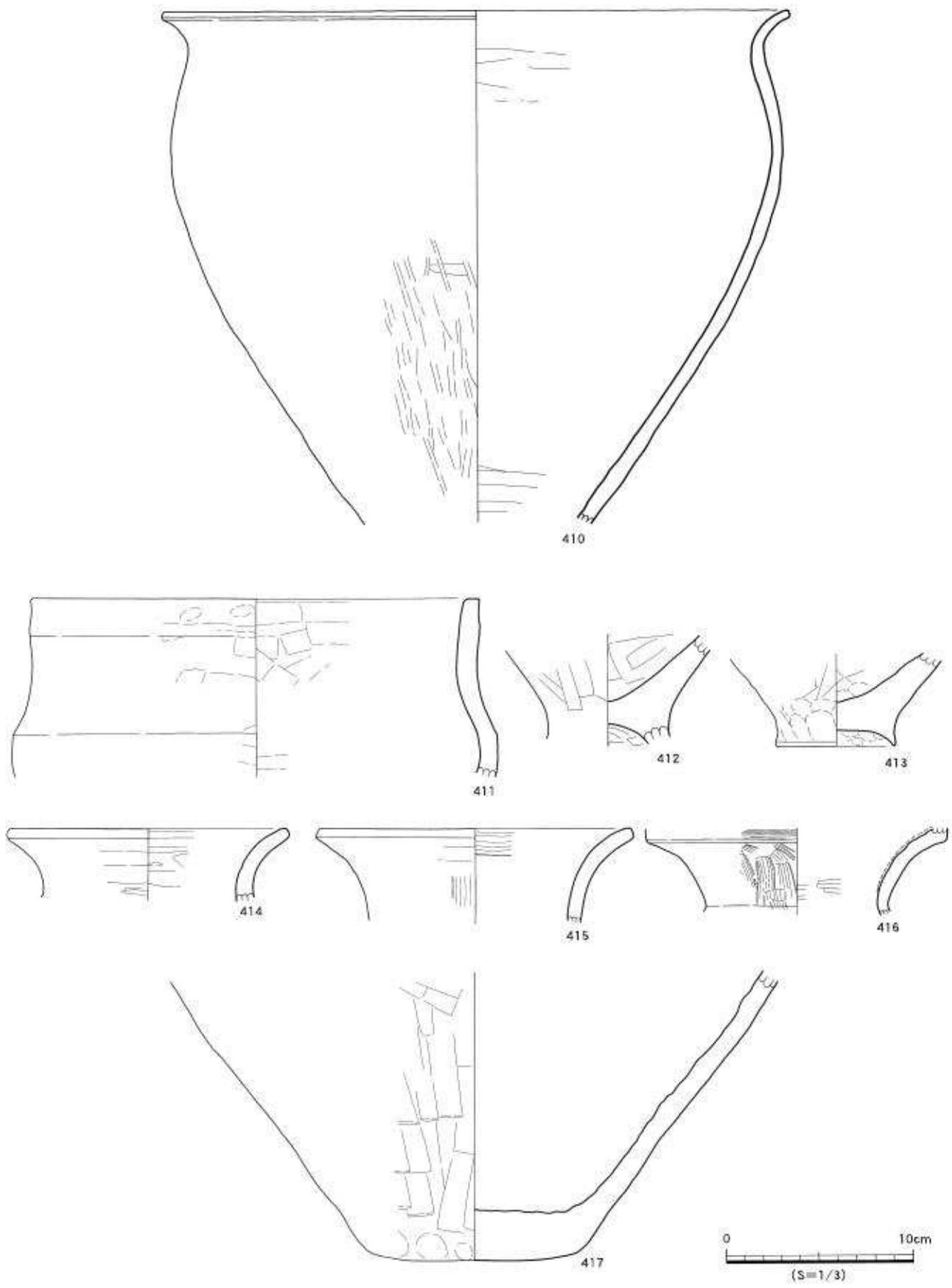
調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土の変化はほとんど見られず、

黄褐色砂礫層が検出された。これを床面として捉え、南側に2ヵ所の土坑状に埋土aが残るプランを掘り下げた。これらの中からはわずかに炭化物が出土したが、焼土や炭化物の集中などは検出されなかった。

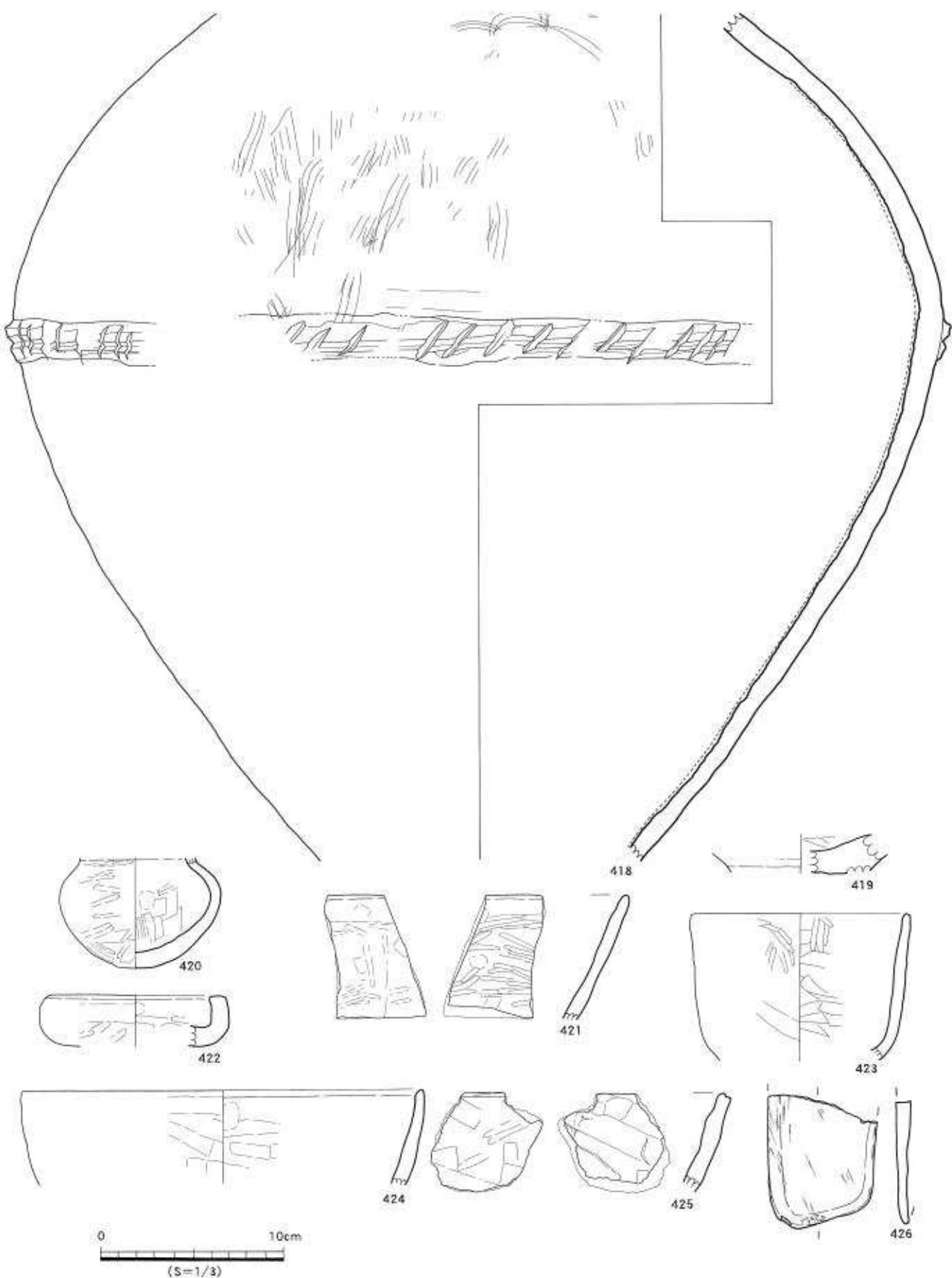
柱穴などの付帯施設は、中央ベルトを除去した段階で



第265図 豊穴住居跡39号



第266図 竪穴住居跡39号出土遺物①



第267図 積穴住居跡39号出土遺物②

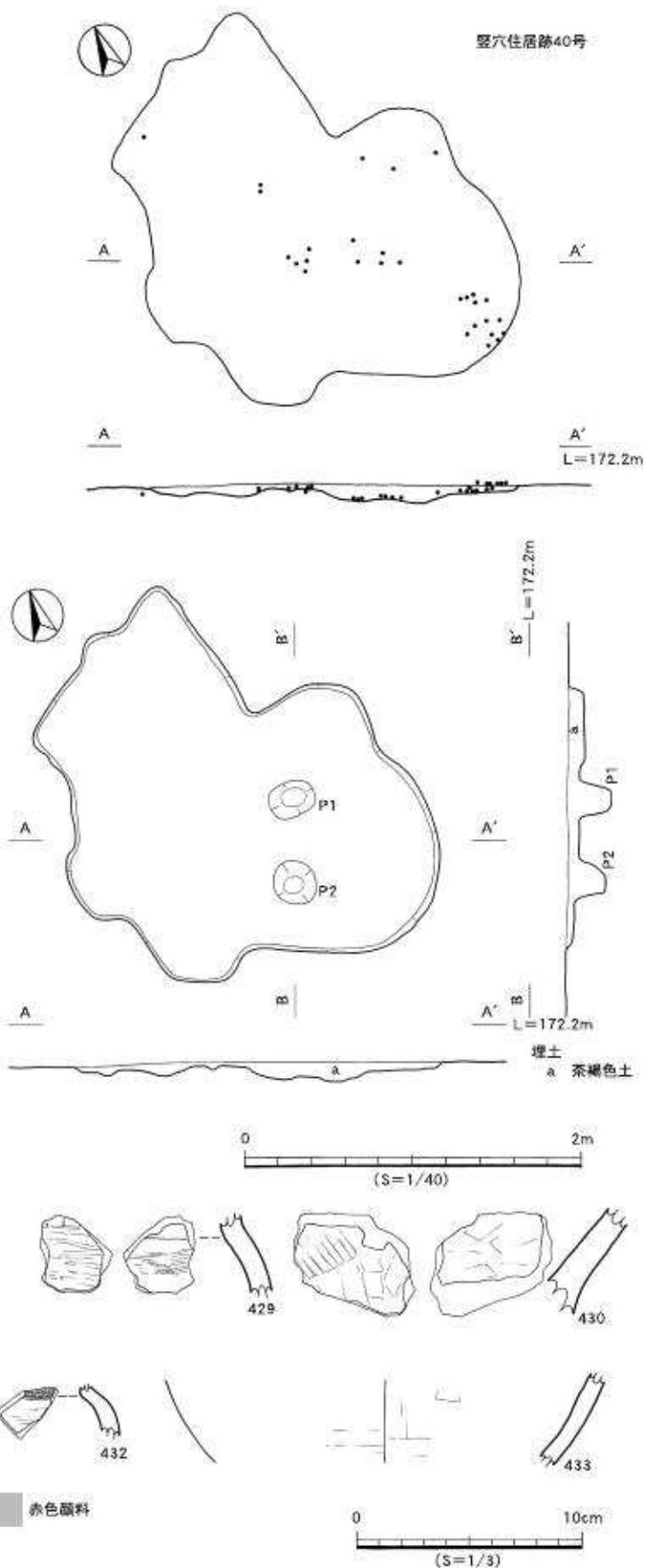
13基の柱穴が確認された。住居とするには形状や内部構造など不明な点もあるが、規模から住跡あるいはこれに類する遺構としてここに分類した。

遺物は、総点で653点が出土し、この内の17点を図化した。410～413は甕である。410は底部を欠く。口縁部は強く外反し胴部で膨らむ。411は口縁部より胴部に最大径がくる。413はわずかに上げ底状を呈する。414～418は壺である。416は内面の剥落が激しい。口縁部に屈曲が見られることから2重口縁の可能性もある。418は胴部片である。幅広の貼付突帯は中央を凹ませてキザミを施す。突帯上から頸部にかけて細い沈線が短く不規則に見られ、工具調整痕とは異なっており、何らかの意図があったことも考えられる。

#### 竪穴住跡40号（第268図）

I-13区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.5m、短辺1.9mの不定形を呈する。調査は、ほぼ中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。

埋土は単一で、浅く不安定である。ベルトを除去し床面を検出していったが、硬化面等は見られなかった。柱穴などの付帯施設は2基が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりもはっきりとしない。遺物は、総点で102点が出土し、この内の7点を図化した。



第268図 竪穴住跡40号・出土遺物

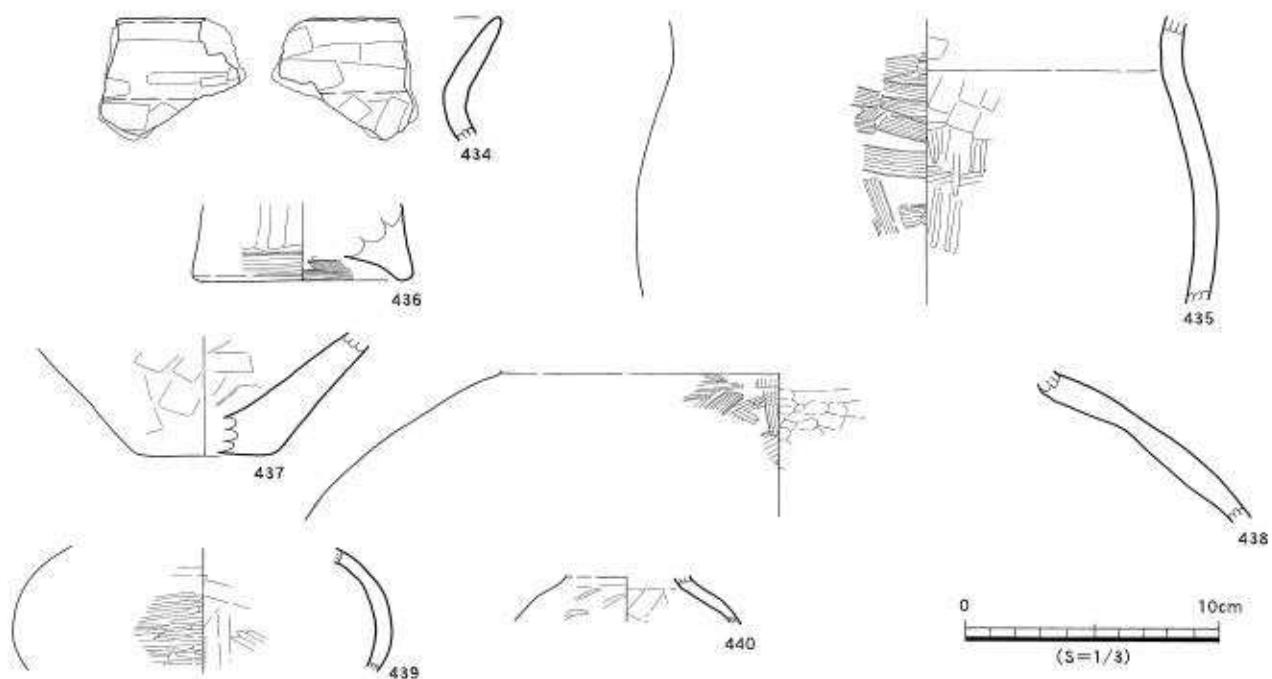
### 豊穴住居跡41号（第269・270図）

F・G-14区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺6.3m、短辺5mの不定形を呈する。この時点では既に硬化面が検出されており、上面が大きく削平されていた。また、周辺には方形や楕円形状の土坑が見られ、豊穴部と近接していることから、豊穴に伴う一連の花弁形プランを想定した。そこで、花弁状部分を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。掘り下げは、花弁状のプランでは既に硬化面を幾らか掘り下げており、豊穴の中央付近では比較的良好に検出できた。なお、住居プランの一部は用地外に延びている。柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去した段階で確認していく。P 1・6・12・18と中央の深いプランに近い柱穴4基はいずれも深く、これらが主柱穴であったと思われる。遺物は、総点で1031点が出土したが、いずれも小破片が多く図化できたものはこの内の7点に留まった。434は口縁部が外反する甕である。435は口縁部下半から胴部にかけての破片である。436は甕の底部で、弱い脚部を形成する。438は壺の頸部から胴部にかけての破片である。439・440は埴である。

### 豊穴住居跡42号（第271・272図）

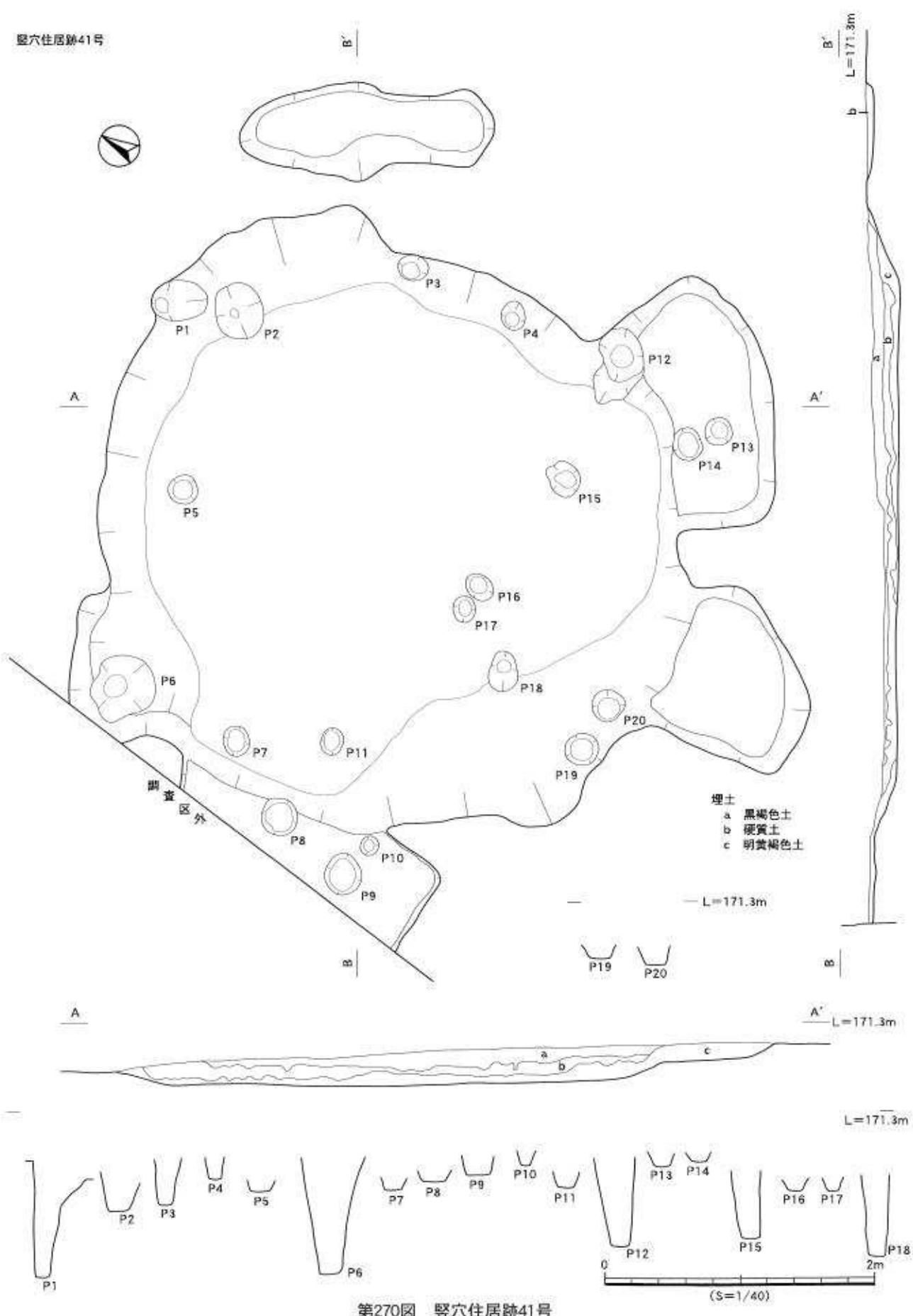
H・I-15区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4.6m、短辺4.4mの隅丸長方形を呈する。上面は削平を受け、耕作土を除去すると遺構検出面となった。この42号は、畑境上に位置しており上面が硬質であった。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で埋土の記録を行い、ベルトを除去し床面を検出していった。柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去した段階で6基の柱穴が確認された。P 4・5は深さが検出面から60cmあるが他の柱穴は浅い。また、P 1・3・6はその深さや、住居壁面から垂直に掘り込まれているといった共通する特徴が見られる。また、全体的に柱穴の径は小振りな印象を受ける。炉・焼土や炭化物の広がりは、硬化面（埋土d）を除去した後に中央付近で検出された。土坑状にはならずに厚さ4cm弱の集中であった。他の豊穴住居跡の事例などから、この炭化物集中下に硬化面等が想定されたために、再度確認作業を行ったが、検出できなかった。焼土面で1時期、硬化面で1時期の2時期に渡る使用の結果を想定したがはっきりしない。遺物は、総点で3,056点が出土したが、いずれも小破片であり、図化できたものはこの内の13点に留まった。

441～443は甕である。441・442は口縁部が外反し、口唇部はわずかに平坦面を有する。444～447は壺である。445は頸部に幅広突帯をめぐらせ、キザミが施されている。



第269図 豊穴住居跡41号出土遺物

堅穴住居跡41号



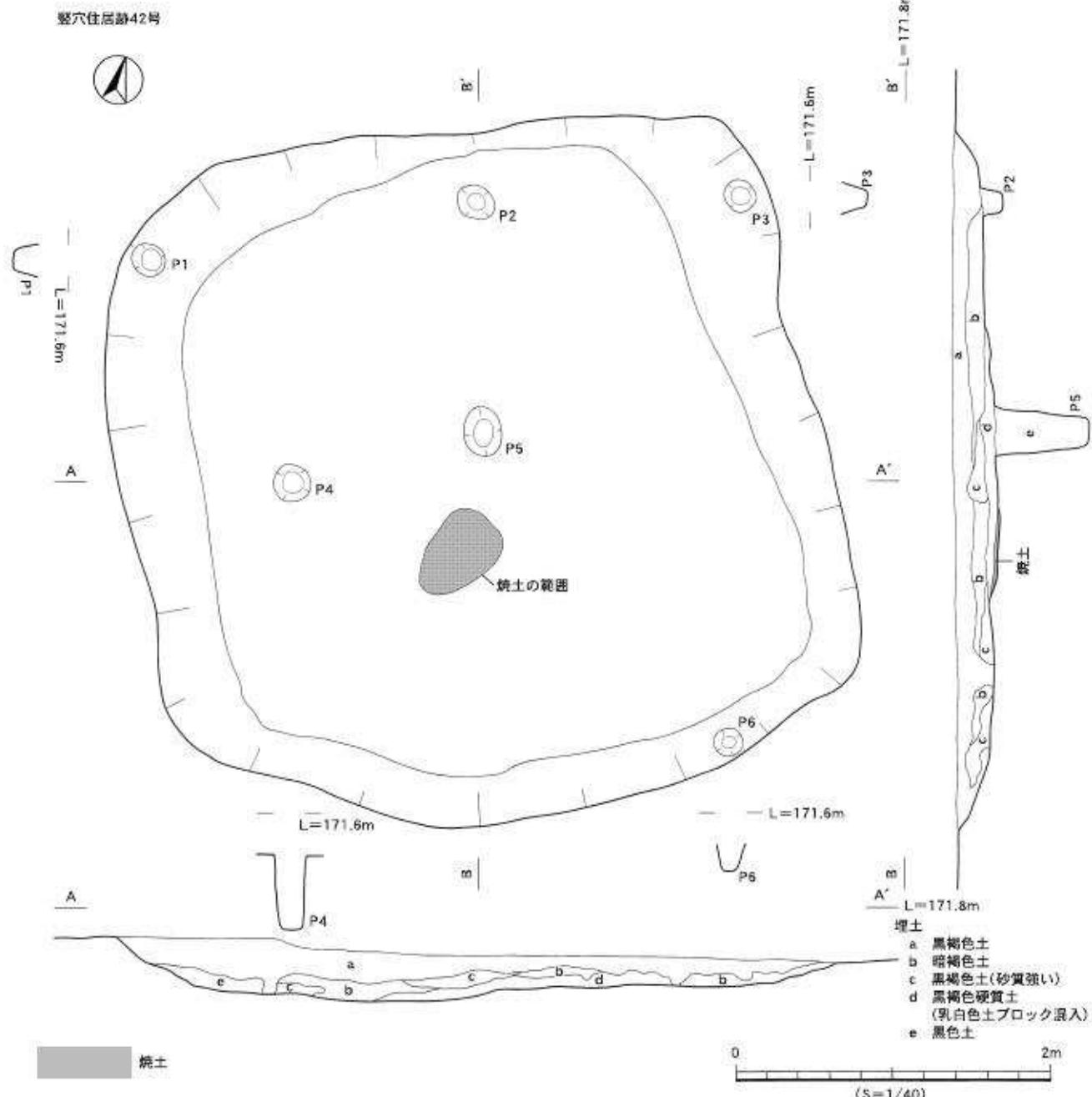
第270図 堅穴住居跡41号

る。448は高坏である。口縁部がわずかに外反し、直線的な胴部で脚部からの立ち上がりは水平に移行する。449は高坏もしくは脚付きの鉢である可能性が考えられ、胴部と脚部との接合面には貼付突帯がめぐりキザミが施されている。453は石庖丁の破片である。

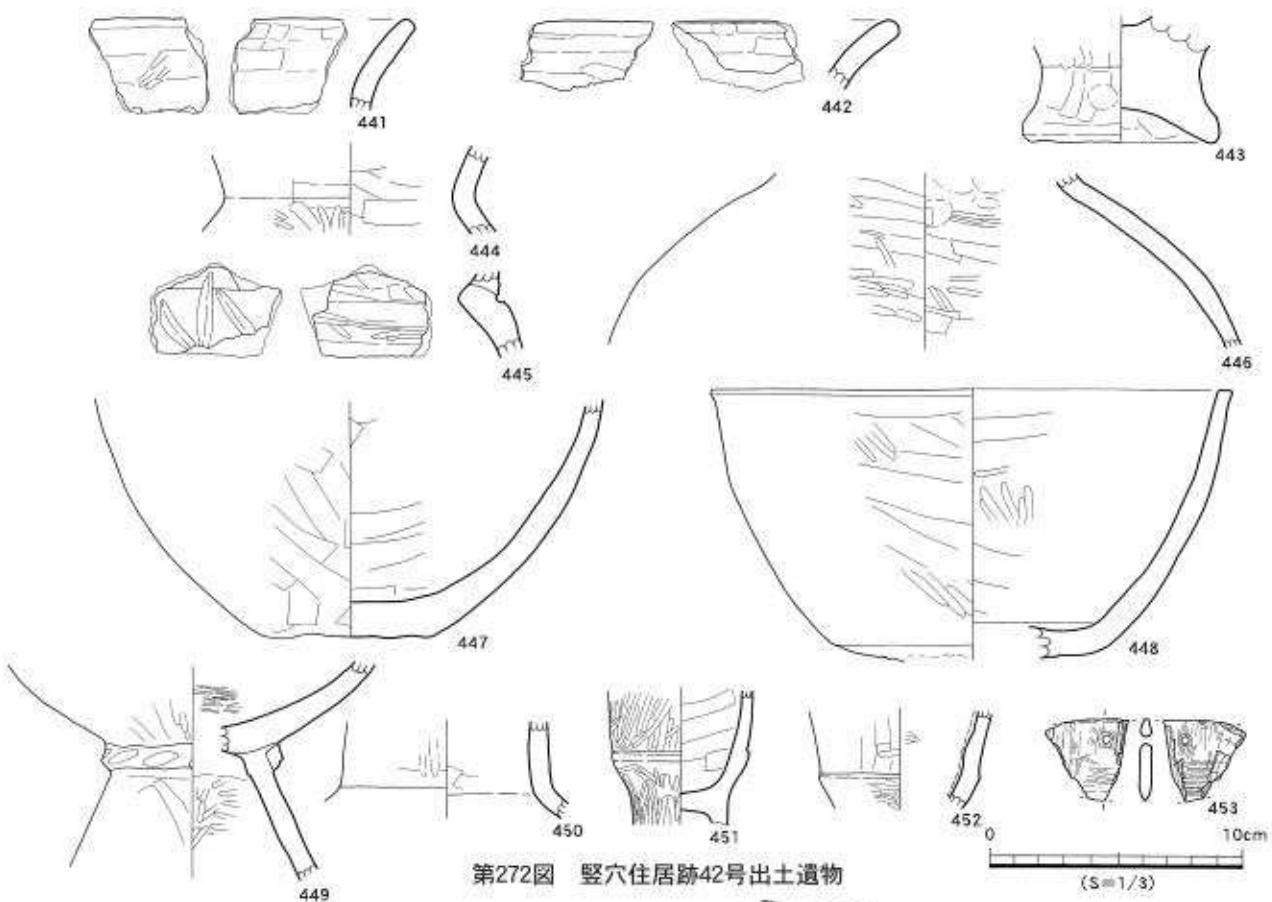
#### 竪穴住居跡43号（第273・274図）

I-16区において畠層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.4m、短辺3.1mの略円形で、イモ穴等による搅乱を随所に受けている。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。硬化面がほぼ全面に認められ、これを除去したところ中央にかけて掘り方は緩やかに傾斜していた。柱穴などの付帯施設の確認はこの時点で行い、2基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られない。遺物は、総点で227点が出土しこの内の5点を図化した。454・455は薄手の甕である。口縁部が強く外反し頸部には内外面共

竪穴住居跡42号

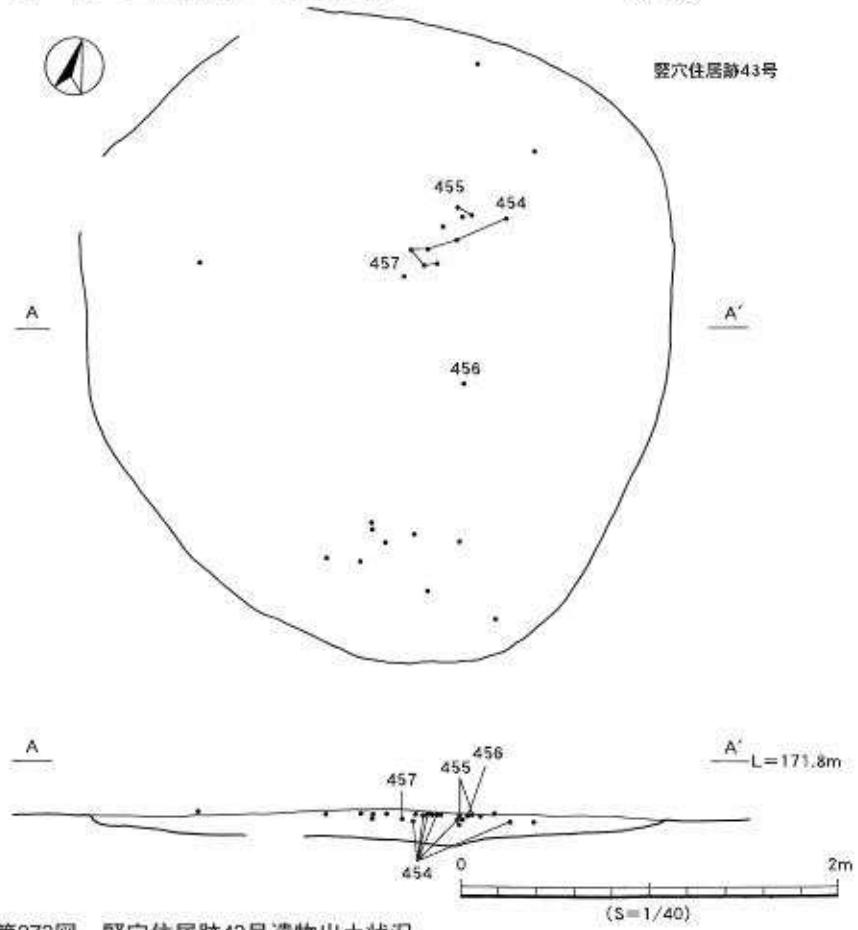


第271図 竪穴住居跡42号

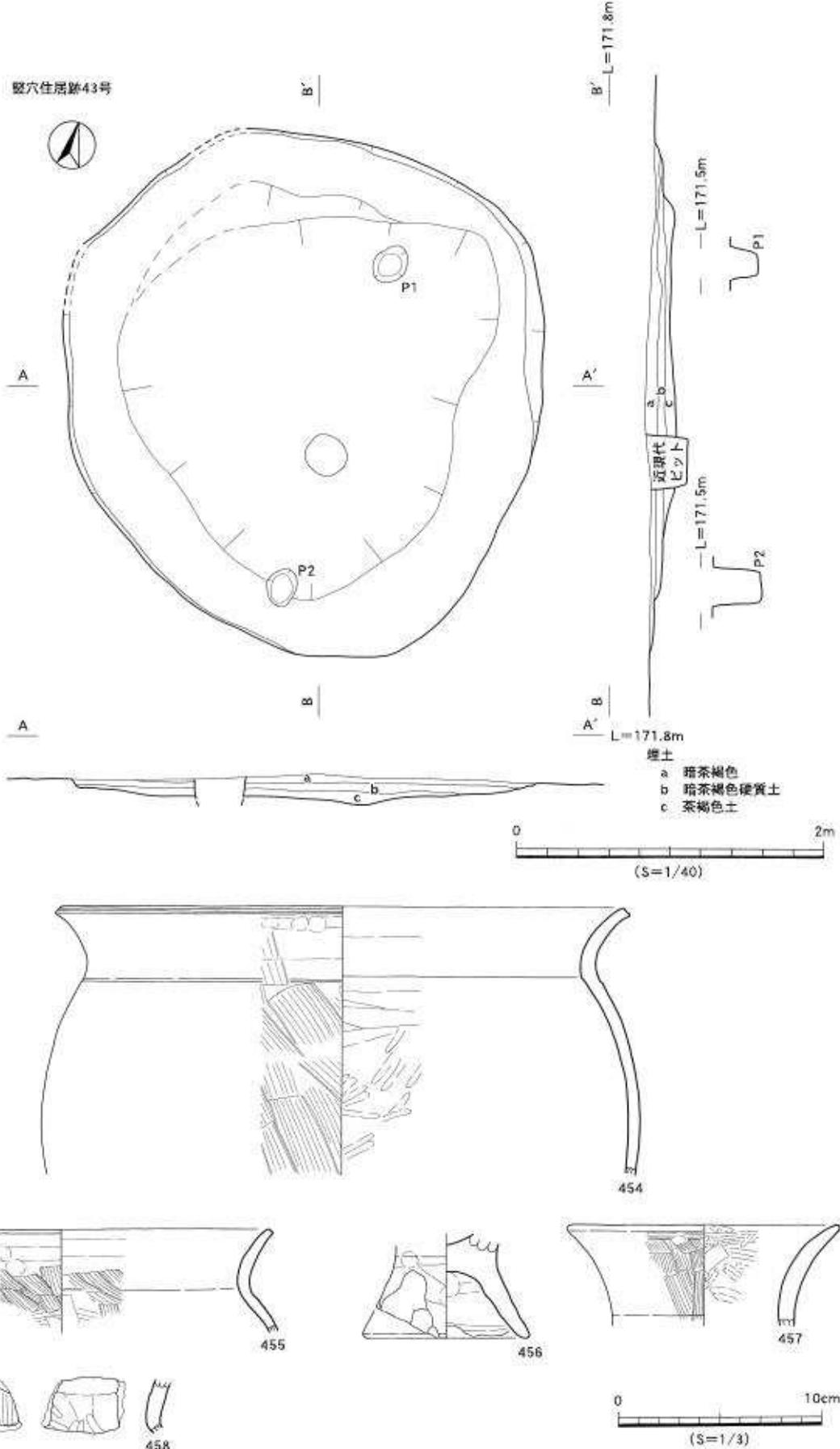


第272図 竪穴住居跡42号出土遺物

に縁が伴う。胴部は球状に膨らんでいる。456は甕の脚部である。端部に欠損が見られるが、意図的な打ち欠きの可能性も考えられるためにこれを図示した。457・458は壺の破片である。



第273図 竪穴住居跡43号遺物出土状況



第274図 竖穴住居跡43号・出土遺物

### 竪穴住居跡44号（第275図）

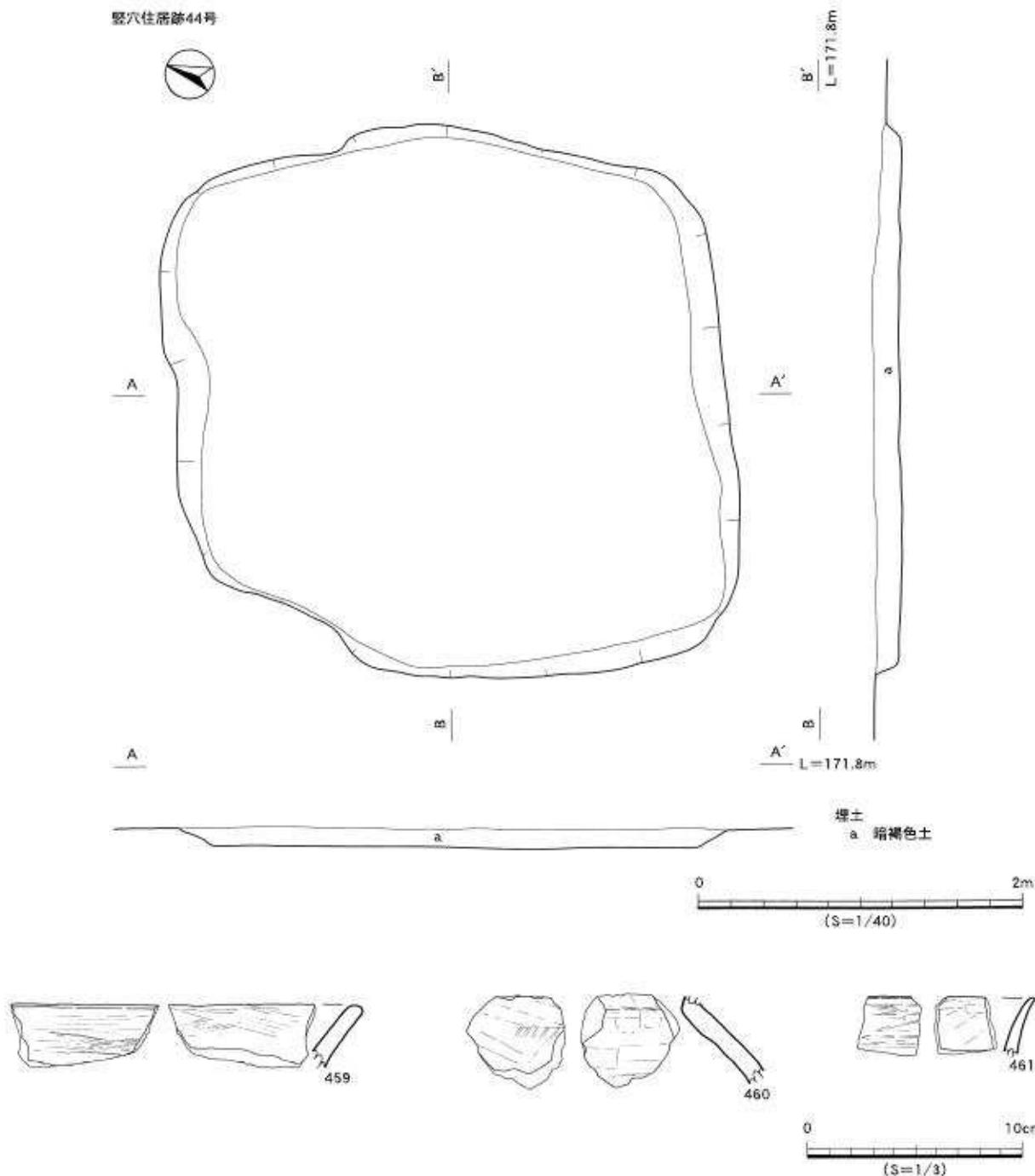
J-16区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.4m、短辺3.4mの隅丸方形プランを呈する。北側がわずかにすぼまる。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一で、硬化面や貼床等は確認されなかった。柱穴などの付帯施設は、床面を除去しながら調査を行ったが確認できなかった。炉・焼土や炭化物の広がりも見られない。遺物は、総点で232点が出土し、この内3点を図化した。459は口縁部片である。

### 竪穴住居跡45号（第276～278図）

J-16区においてⅢ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4.2m、短辺3.3mの隅丸長方形で、東と北側にやや張り出し状のプランが認められた。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一であったが、南側に甕が底部を欠いた状態で伏せられて検出され、周辺のわずかな軟質土を掘り下げていくと土坑状のプランになり、その床面に甕の口縁部は接していた。埋土a層下はわずかに硬化しており、これを除去すると中央に土坑が検出

竪穴住居跡44号

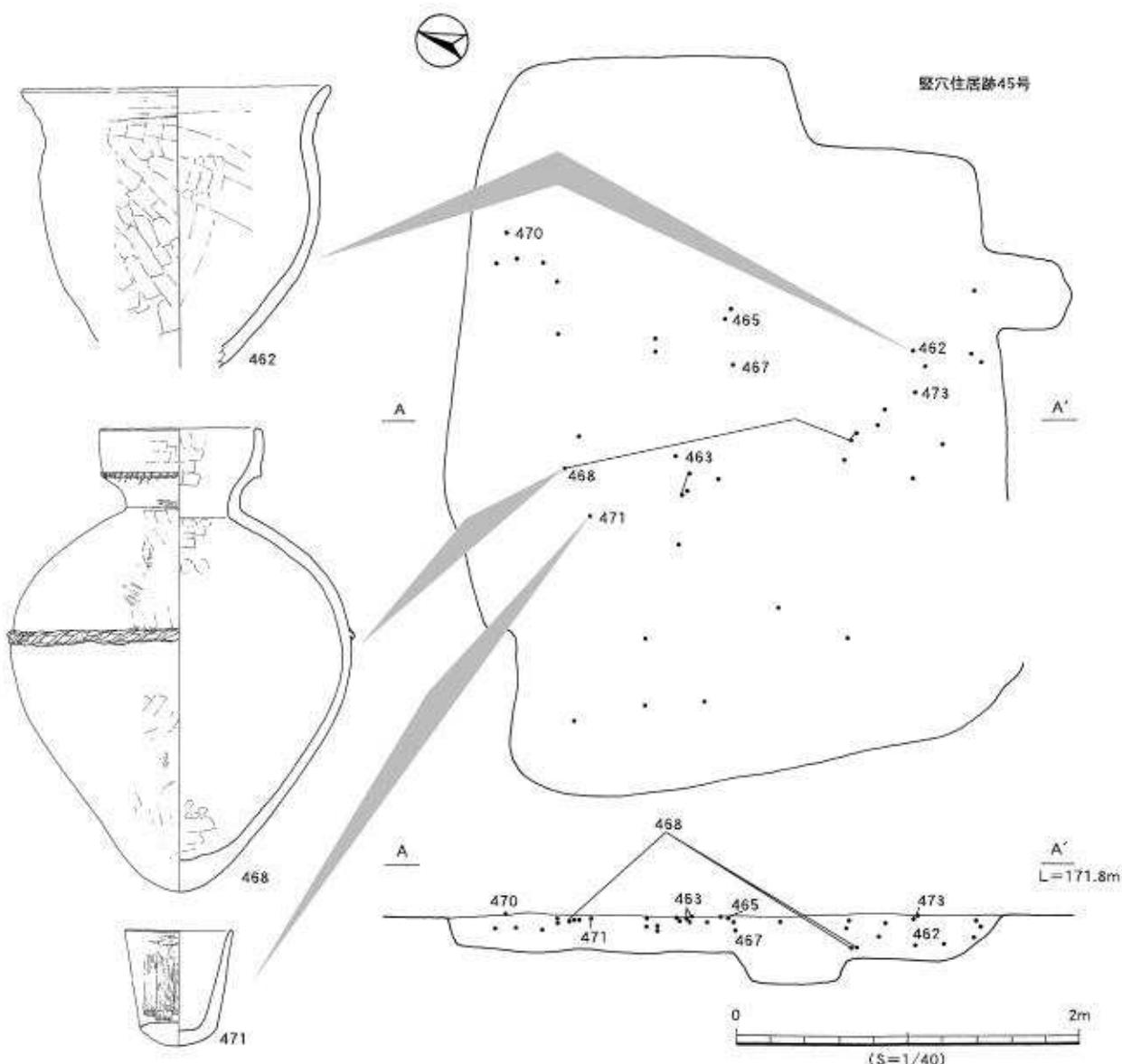


第275図 竪穴住居跡44号・出土遺物

された。その結果、遺構内に2基の土坑が検出され、一部のプランが重複している。両者の新旧関係については中央部分検出のものが古く、南側検出のものが新しいと思われる。西側に見られる細長いテラス状のプランは硬化面を除去した後に見られたもので、その1段下は浅く凹んでいる。柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去した段階で5基の柱穴が確認された。P 2・5は約50cmと深い。炉・焼土や炭化物の広がりは、南側土坑の一角にまとまっていたが、床面での広がりは掘めなかった。

遺物は、総点で305点が出土し、この内の12点を図化した。462は土坑内に口縁部を下にして出土した土器である。口縁部は外反し、頸部でくびれる。胴部は膨らむが、底部は欠損しているために不明である。外面には短いケズリが多く残されており器面は均一でない。464は甕の

胴部片である。465、466は底部片である。465はしっかりと脚部を作出している。466は底径が広く、外端が張り出している。467は、頸部のやや短い小型の壺である。470は幅広突帯が貼付されキザミが施される。468は完形に復元できた2重口縁の壺である。口縁部は直行するが端部でわずかに内湾している。屈曲する口縁部にはキザミが施され、頸部はややしまっている。胴部は膨らみ最大径付近に貼付突帯をめぐらせてキザミが施される。底部は、胴部と比べて厚みがあり丸底状を呈する。471は竪穴住居跡のプランが検出されると同時に出土した堆である。口縁部から底部に至るまで直線的であり、胴部下間に段を設けて強く屈曲する。底部は丸底である。外面の段は、内面の胴部への立ち上がりと連動する。外面には縦方向の調整痕が顕著に残る。



第276図 竪穴住居跡45号遺物出土状況

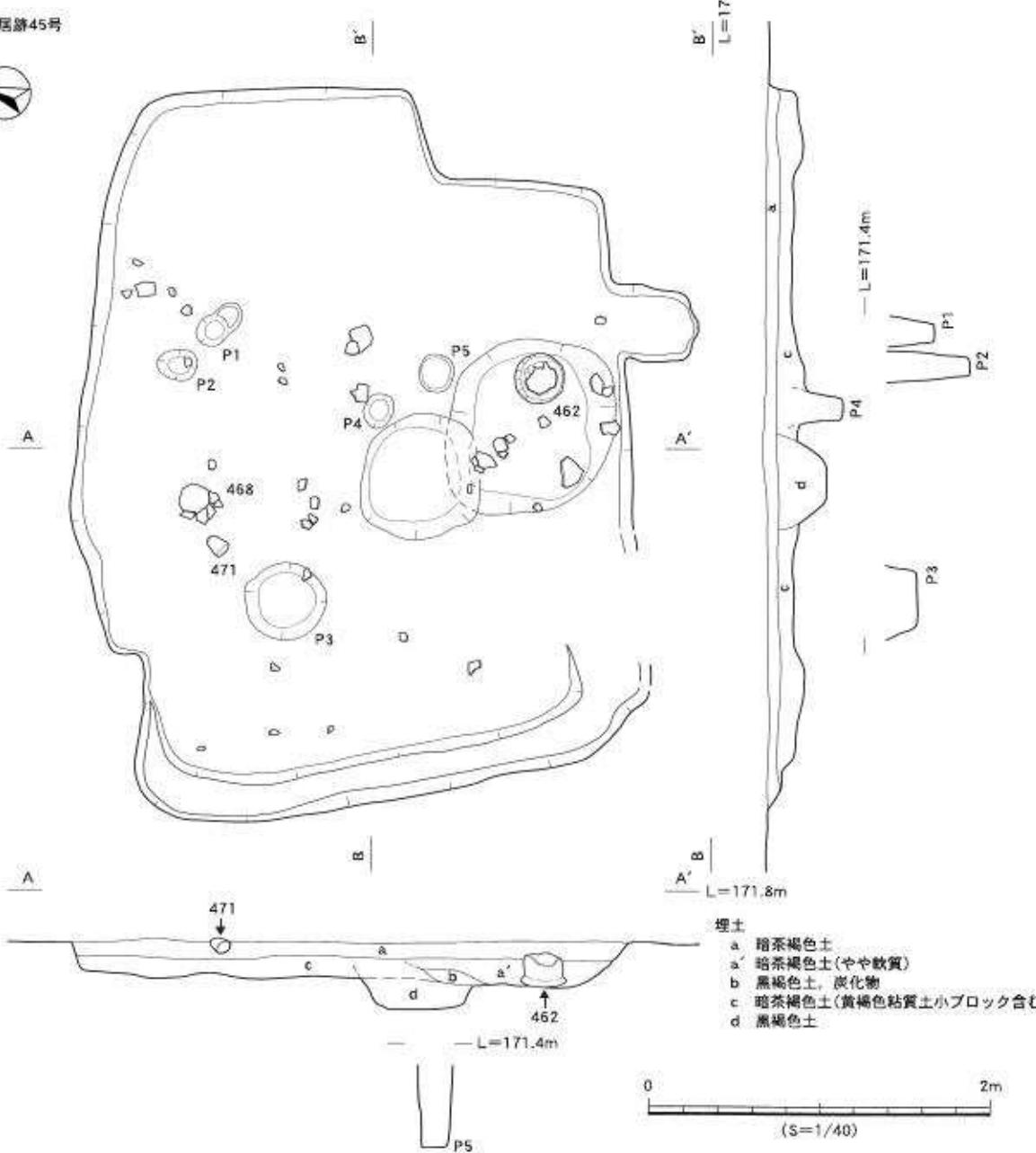


遺物出土状況①

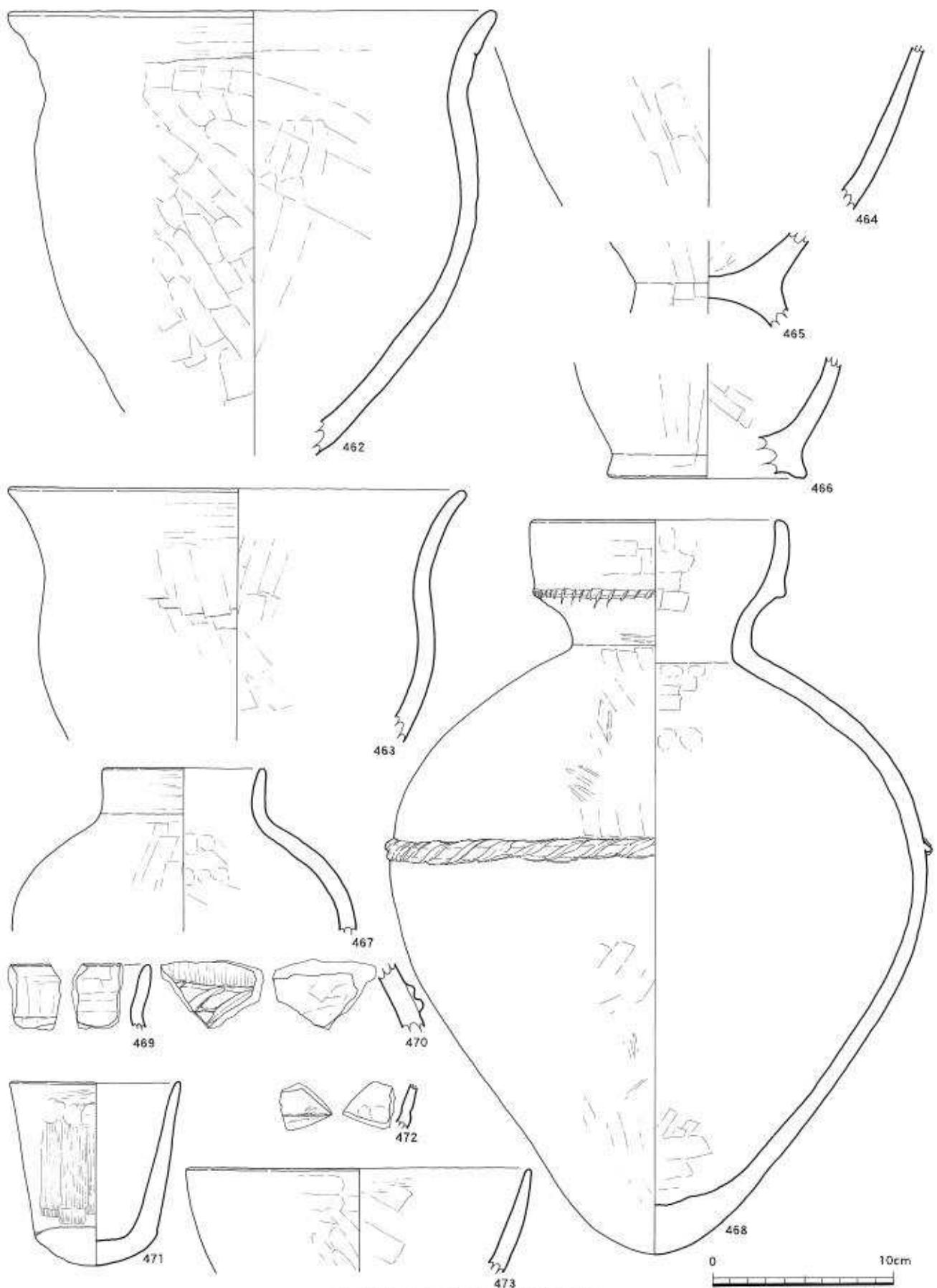


遺物出土状況②

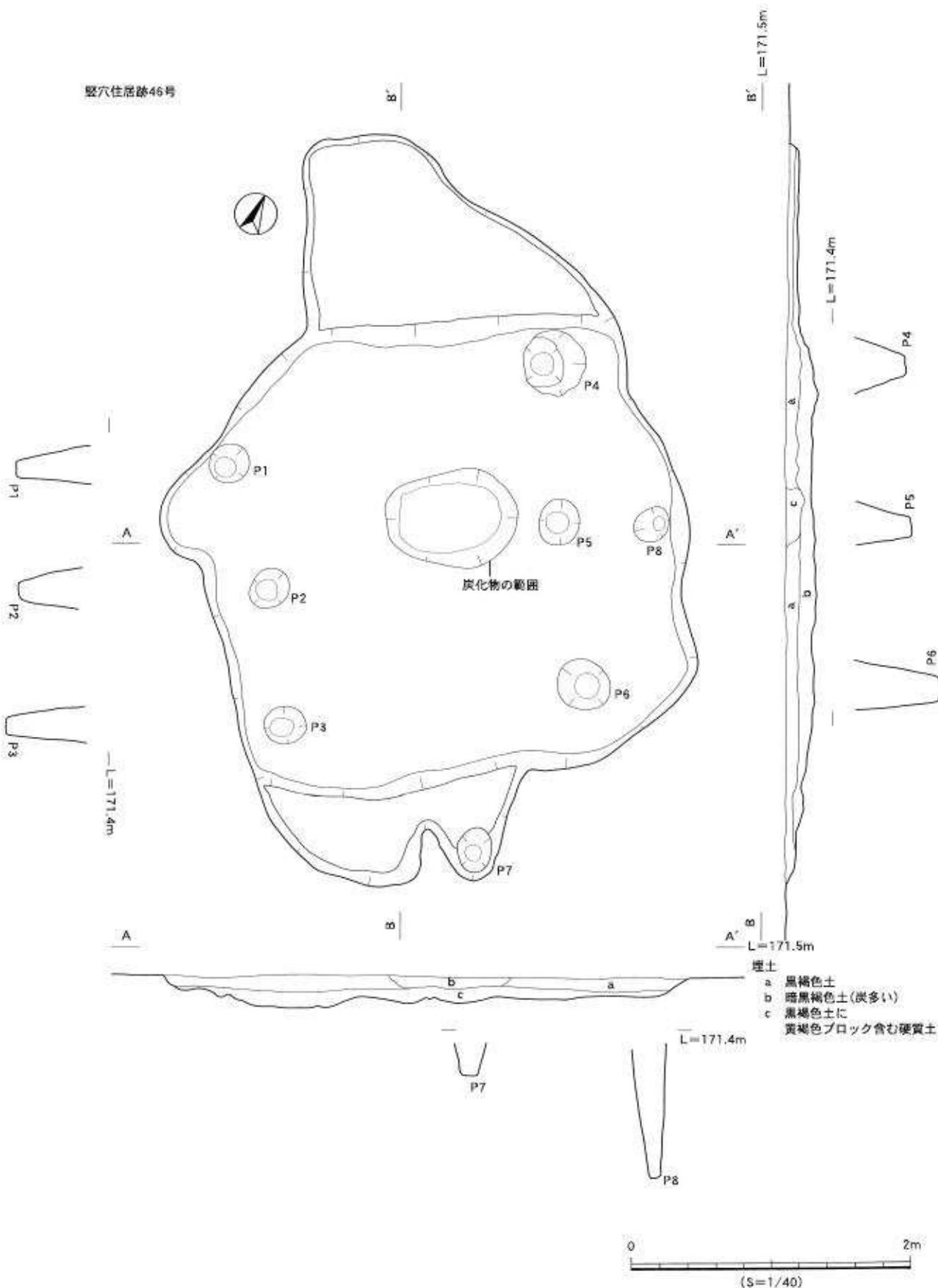
堅穴住居跡45号



第277図 堅穴住居跡45号



第278図 積穴住居跡45号出土遺物



第279図 堅穴住居跡46号

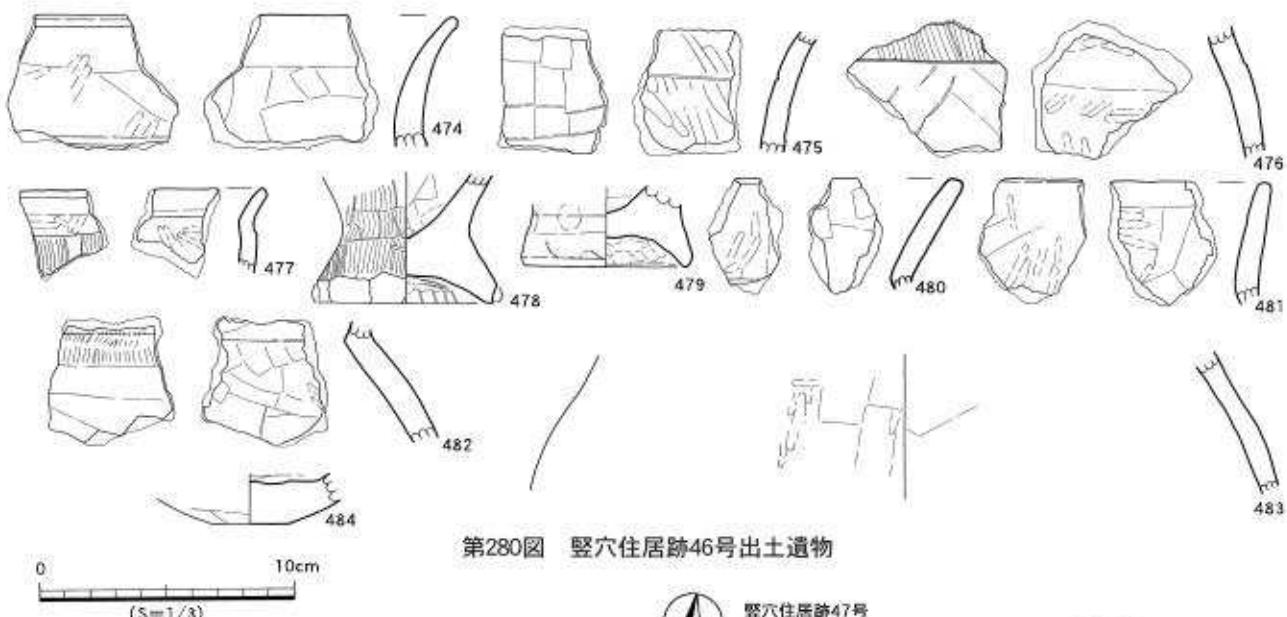
### 豊穴住居跡46号（第279・280図）

K-16・17区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.5m、短辺3.5mの方形を基本に、北・南側に不定形の張り出しを有し、最長で5.4mであった。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。検出時には既に中央に炭化物の集中が見られ、埋土aに切り込むように略方形の土坑が設けられる。埋土aの下部で硬化面を確認したため、これを床面と判断した。北側の張り出しは、貼床も連続

して段を有するが、南側の段は、埋土cを掘り下げた状態で確認された。

柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去した段階で8基の柱穴が確認された。特に、中央の方形プラン内では東西に各3基ずつがほぼ一直線上に列をなす。深さも同じであるが、その東側にあるP8は、検出面から深さ90cm以上ある。

遺物は、総点で183点が出土しこの内の11点を図化した。474～479は甕、480～484は壺である。

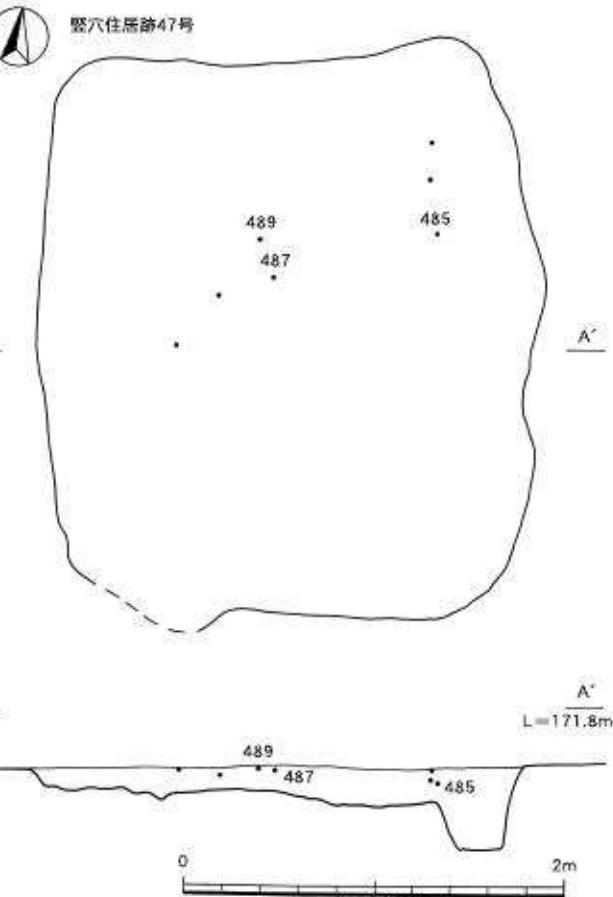


第280図 豊穴住居跡46号出土遺物

### 豊穴住居跡47号（第281・282図）

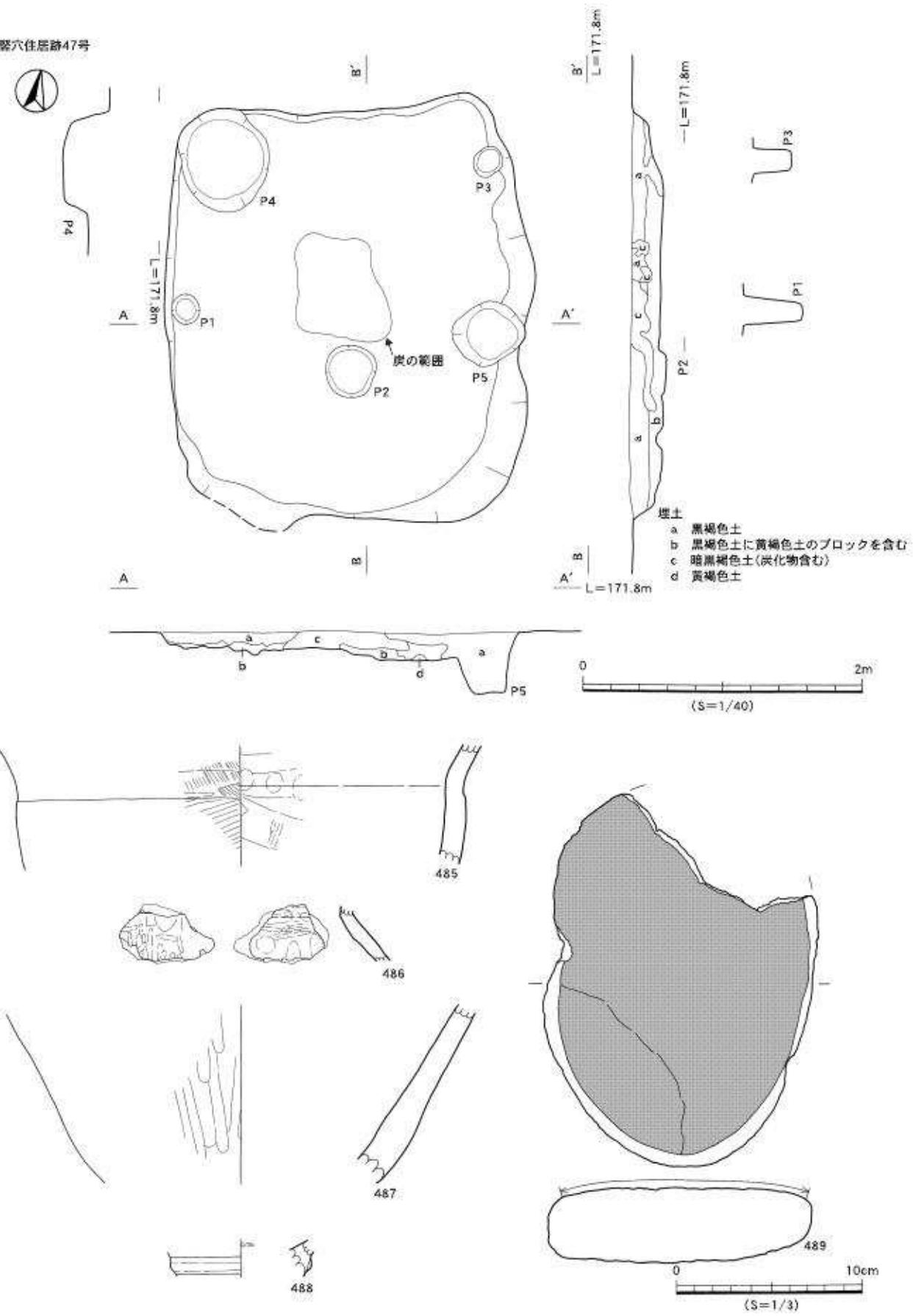
K-17・18区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.9m、短辺2.6mの隅丸長方形を呈する。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時、上面で検出当初から見られていた中央部分の炭化物集中は、床面に達するまで連続していることを確認した。なお、炭化物集中を断面観察すると、検出面よりも下層に行くに従って広がっている。

柱穴などの付帯施設の確認は、埋土b層を除去しながら進めて行き、5基の柱穴あるいは土坑を確認した。中央よりやや南側検出のP2は浅いが、P1・3・5は安定しているようにも思える。P4に関しては住居北西の壁面にあり、長軸は60cmある。柱穴以外の機能も考えられる形状である。遺物は、総点で194点が出土し、この内5点を図化した。485は甕の口縁部下の破片である。口縁部は外反し、内外面に稜を有する。胴部はわずかに膨らんでいる。486・487は壺の破片である。486は頸部付近、487は底部付近である。488は器種を特定することが出来なかった。489は石皿片である。楕円形で外面に磨り面が形成されている。なお、出土状況は、検出時に炭化物の広がりと接して出土している。



第281図 豊穴住居跡47号遺物出土状況

縦穴住居跡47号



第282図 縦穴住居跡47号・出土遺物

### 竪穴住居跡48号（第283図）

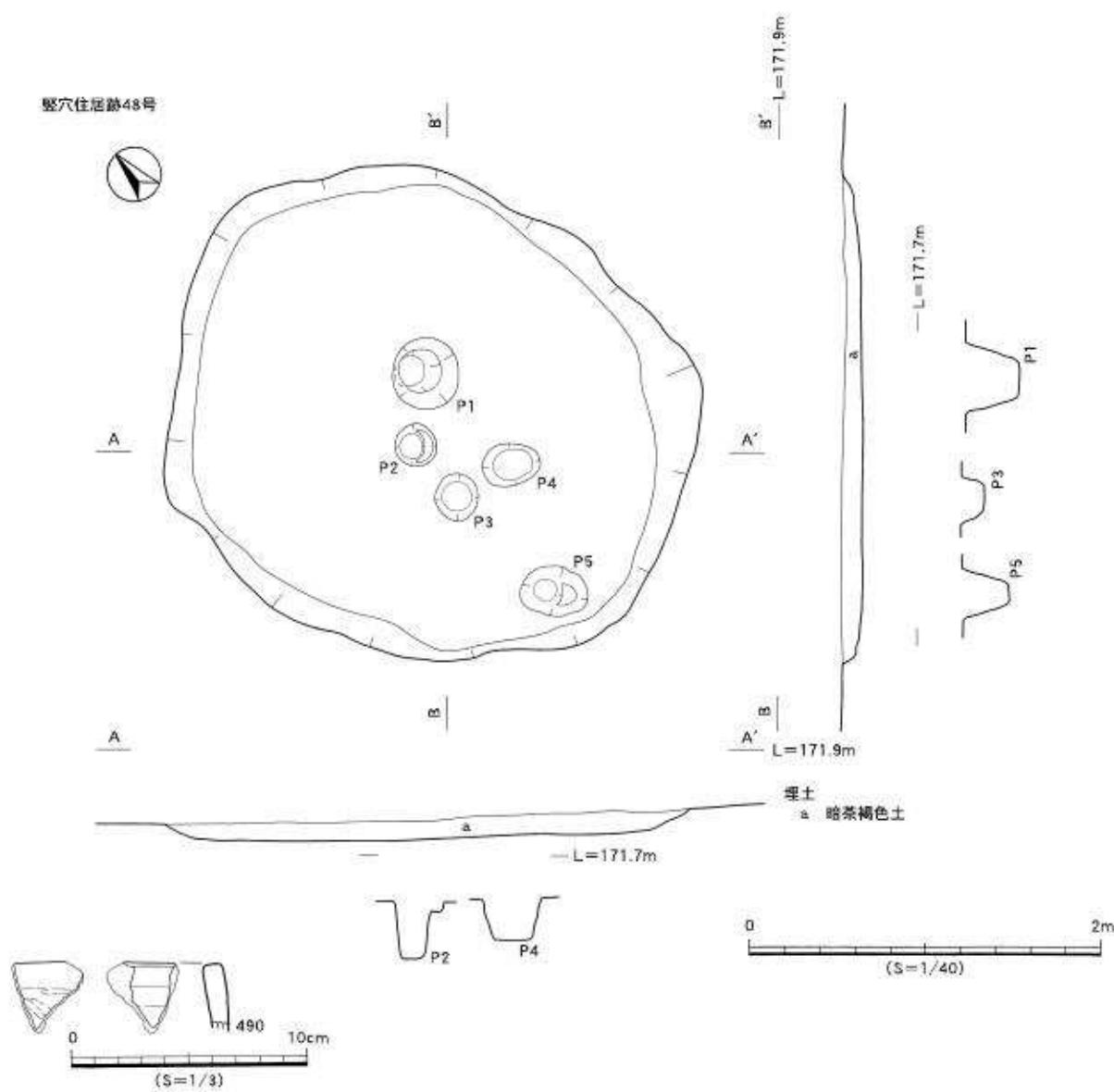
J・17区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.1m、短辺2.8mの楕円形を呈する。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は單一層で、アカホヤ火山灰や黄褐色土のブロックを含まないことから、貼床はなかったものと思われる。この埋土の記録を行い、ベルトを除去して床面を検出していったところ、中央に4基、南側に1基の柱穴が検出された。P3は浅いが、P1・2・4・5は約40cmと深い。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしたプランでは確認されなかったが、中央部分がわずかに炭化物が多かった。

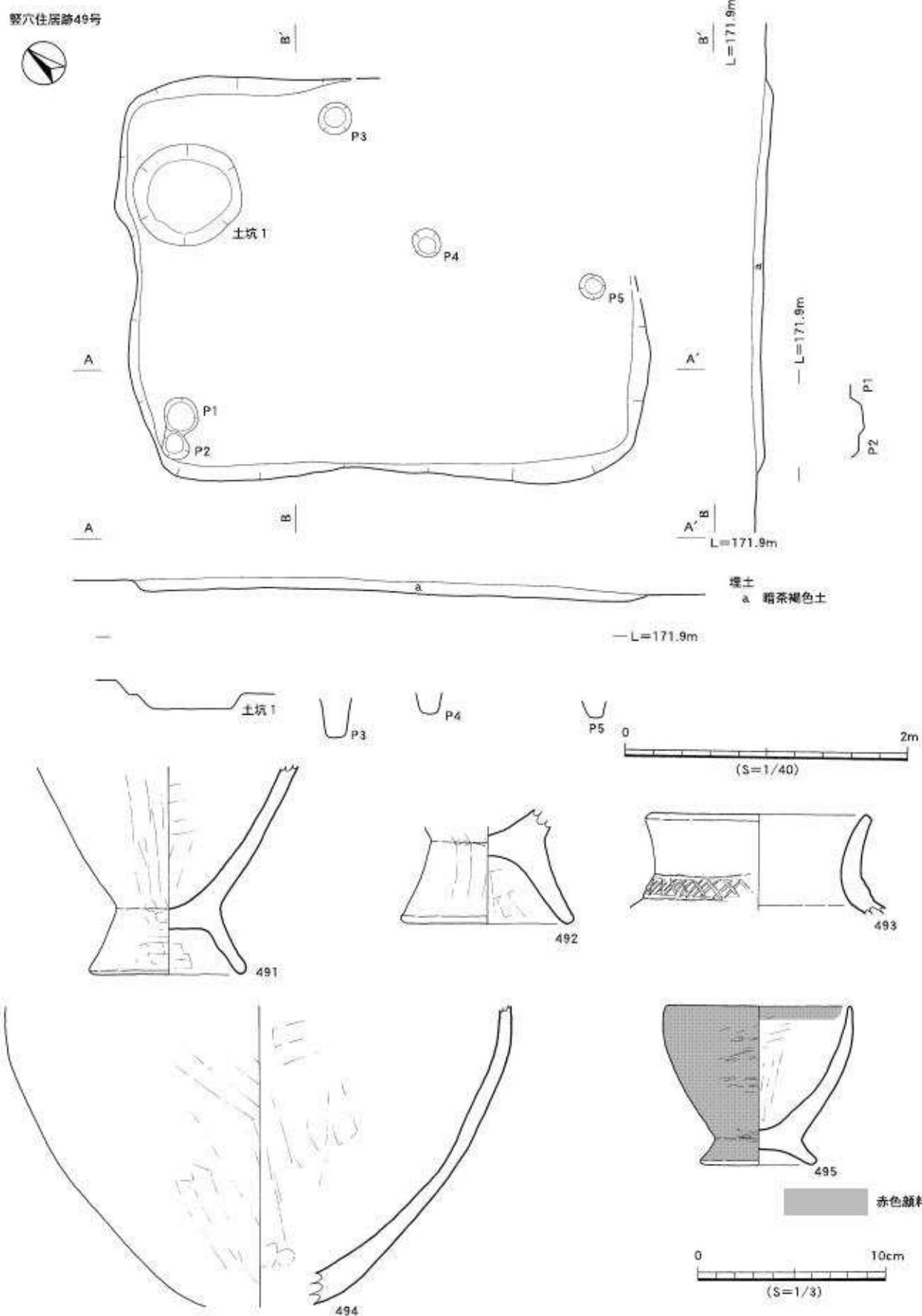
遺物は、総点で27点が出土し、この内の1点を図化した。490は口縁部がやや内傾し、口唇部がわずかに厚い。

### 竪穴住居跡49号（第284図）

J・K・18区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.6m、短辺2.8mの隅丸長方形で、東側の一部が削平を受ける。調査は、残存状況の良い部分で2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。検出面から浅く、床面には硬化面等の変化は見られない。柱穴などの付帯施設は、床面で5基の柱穴と1基の土坑が確認された。土坑は約70cmで深さは約10cmであった。炉・焼土や炭化物の広がりは、これらの土坑や柱穴も含めて見られなかった。遺物は、小破片が多く総点で98点が出土し、この内図化できたものは5点である。491・492は甌の脚部で、いずれも比較的しっかりと作りで、491は脚部内面が平坦に推移する。493は口縁部が外反し、頸部に突帯を貼り付け、格子状のキザミを施している。495は、小型の鉢である。



第283図 竪穴住居跡48号・出土遺物

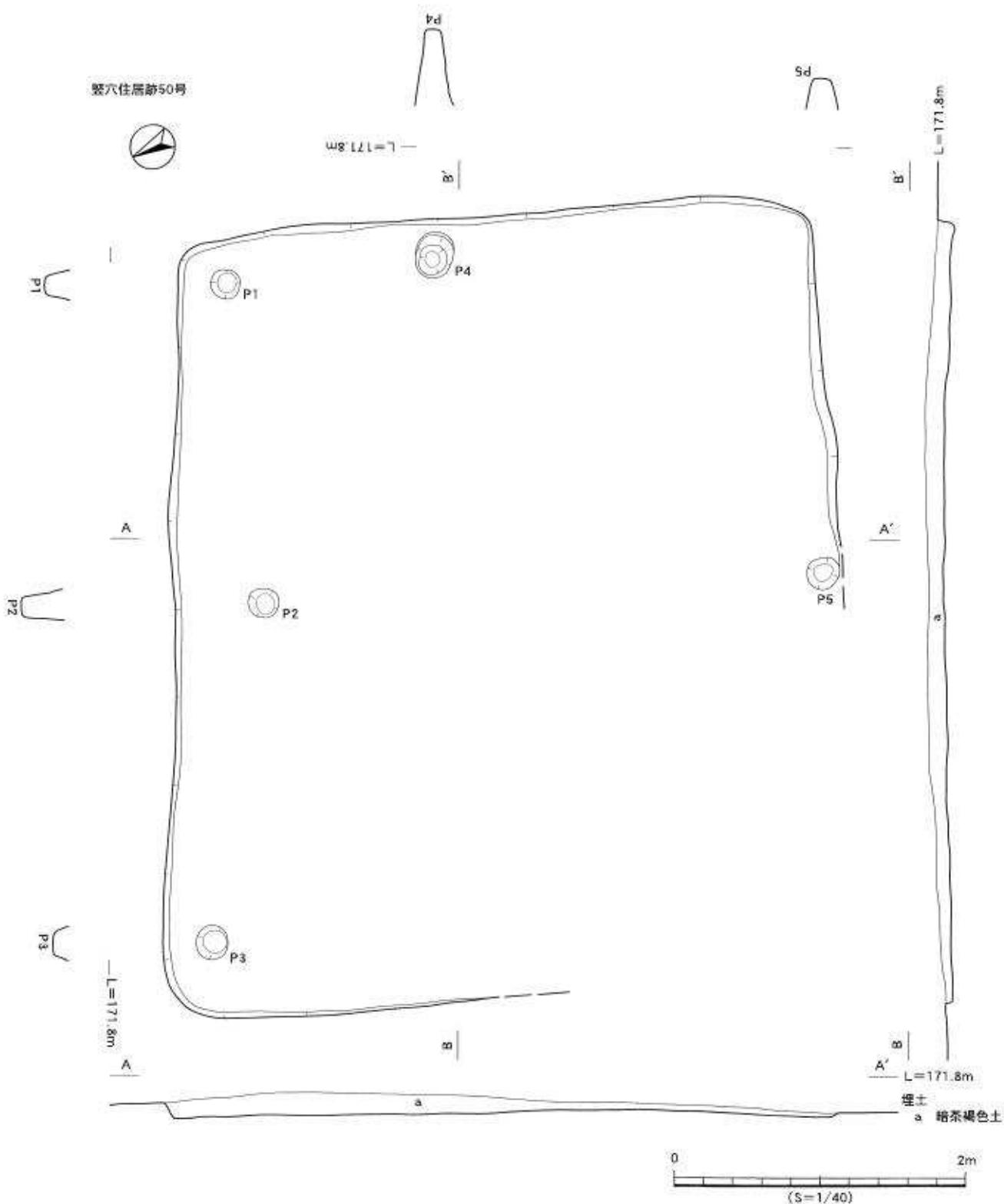


第284図 竪穴住居跡49号・出土遺物

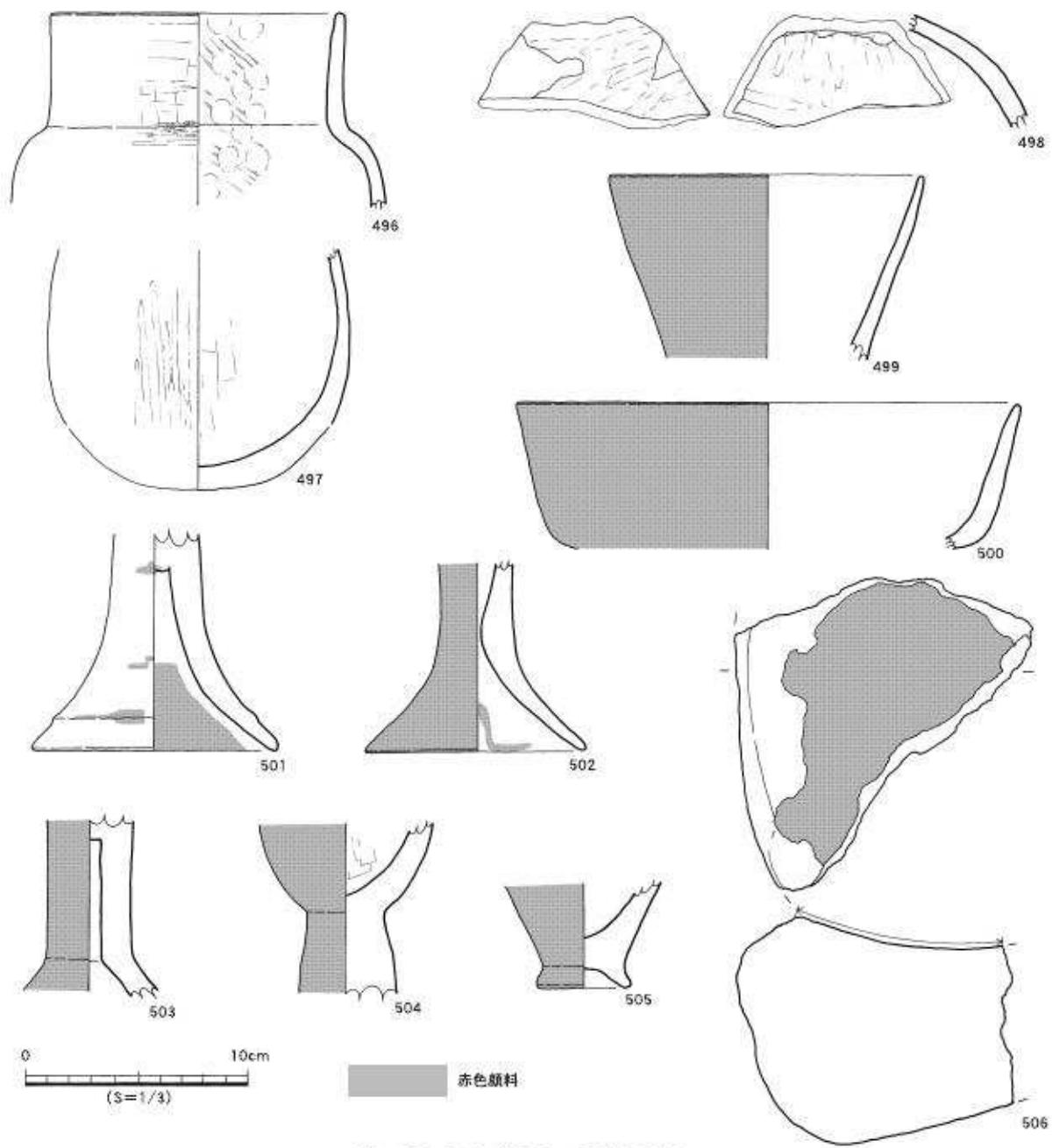
豊穴住居跡50号（第285・286図）

J-18・19区においてVI層上面で検出された。  
検出時のプランは、長辺5.5m、短辺4.6mの隅丸長方形で、西側のコーナーは精査を繰り返し行っていたがわからなかった。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定したが、約10cm掘り下げたところでアカホヤ火山灰層の下位のVII層が見られた。このVII層は埋土aと類似しており、VII層が粘性が強く、この粘質の差を頼りに床面を精査して床面検出に努めていった。



第285図 豊穴住居跡50号



第286図 積穴住居跡50号出土遺物

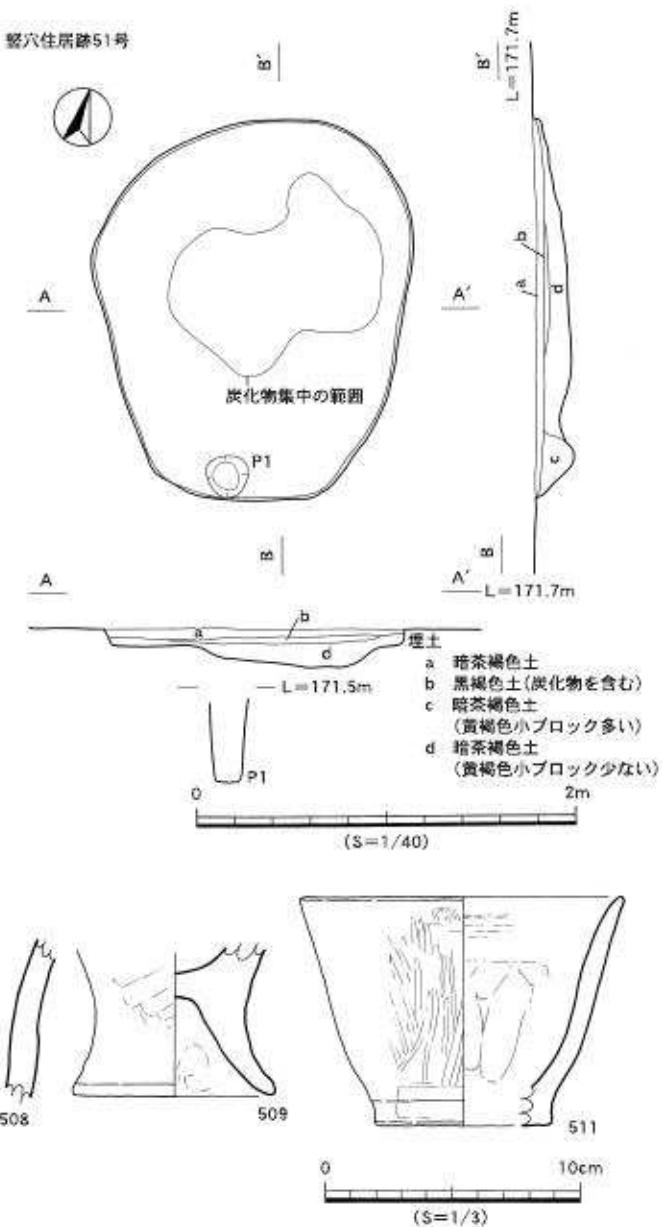
この時点での埋土の記録を行い、ベルトを除去し再度床面を検出していったが、貼床や硬化面等は確認できなかった。柱穴などの付帯施設は、床面を除去した段階で5基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしない。遺物は、総点で205点が出土し、この内の11点を図化した。496・497は同一個体の可能性もある。496は、口縁部が直立し、胴部で球状に膨らむ。底部外面は剥落が激しいが、内面の状況などから丸底を呈していることがわかる。500は高壺である。口縁部は直線的に外傾し、胴部で丸みを帯びながら屈曲する。501は高壺の脚部で、外面に段を有するタイプである。503は直線的な中空の脚で、稜を有して屈曲する。504は

高壺状の充実した脚部を有する。506は石皿で、中央の作業面は明瞭に凹んでいる。

### 豊穴住居跡51号（第287図）

J-18区においてⅦ層下面で検出された。検出時のプランは、長辺2m、短辺1.7mの楕円形で、当初は土坑の可能性も想定していた。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。掘り下げてすぐ、中央に炭化物の集中が認められ、この面が床面と認定した。床面を構成する埋土dは、周辺の住居などで貼床に用いられているものであり、再度ベルトを設定して掘り下げていった。その結果、東南方向に貼床は傾斜し、深いところで最大10cm程敷き詰められていることが判明し、豊穴住居跡と判断した。

柱穴などの付帯施設は、この面を除去しながら作業を進め、1基の柱穴が確認された。遺物は、総点で136点が出土し、この内の5点を図化した。507は甕の口縁部片で、口縁部は外反している。508は口縁部外面に継ぎ後に斜位の工具痕が見られる。509は甕の脚部であるが、胴部から脚部へは緩やかに移行している。510は外面に丁寧なミガキを施す。口縁部は外反し、胴部下半でやや膨らんで平底の底部へと至る。



第287図 豊穴住居跡51号・出土遺物

### 豊穴住居跡52号（第288図）

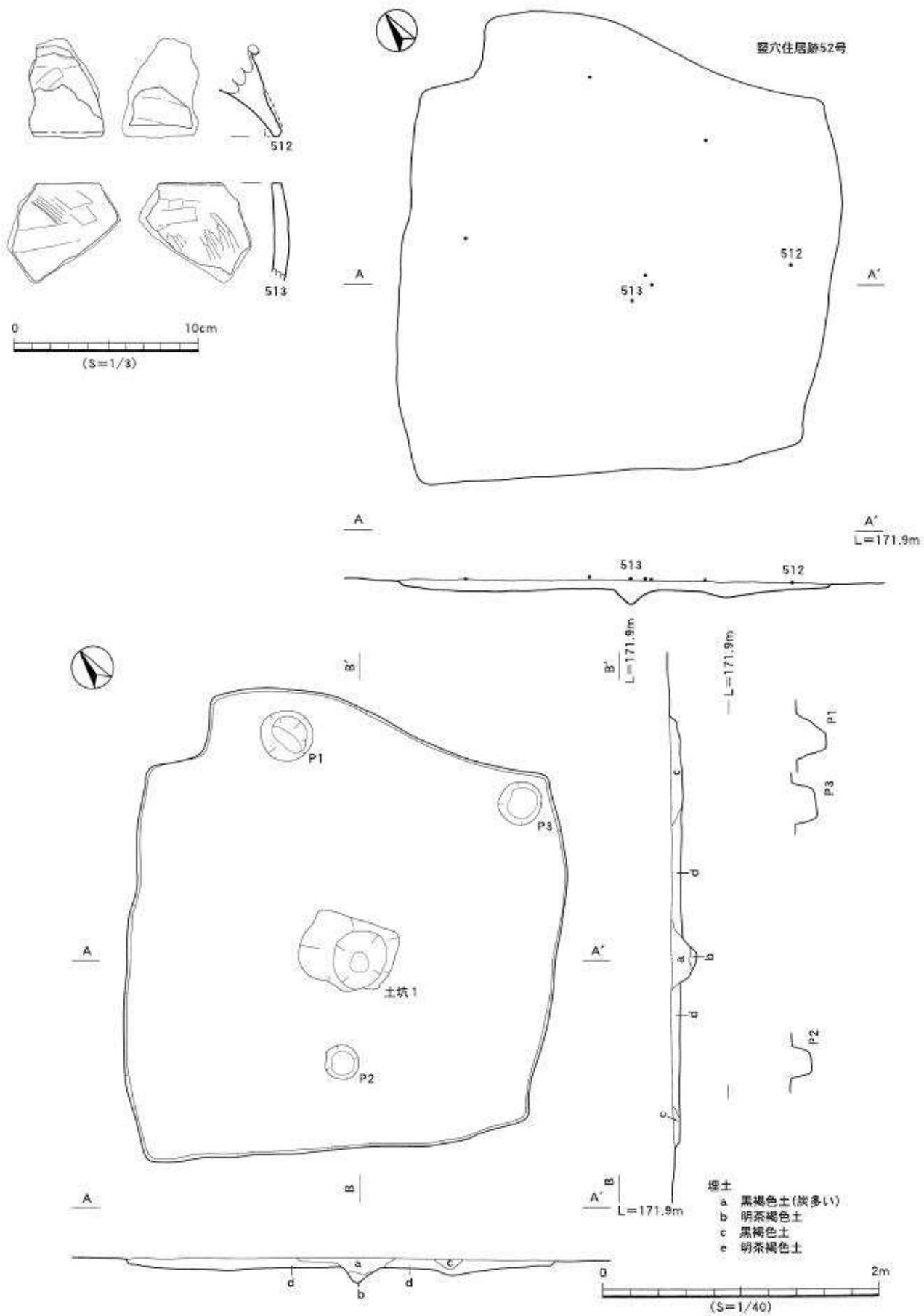
I-17・18区においてⅦ層下面で検出された。検出時のプランは、長辺3.2m、短辺3.2mの隅丸方形で、北東側にやや張り出し状のプランが認められた。検出時に既に中央に炭化物の集中が見られ、床面のみが残存しているものと思われた。この炭化物は放射性炭素年代測定を実施し、 $1,610 \pm 20$ yrBPと結果が示されている。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。中央の炭化物集中は、埋土dを断ち切るように設けられた土坑内で確認されている。柱穴などの付帯施設は、3基が確認された。検出面から約20cm程度といずれも浅い。遺物は、総点で51点が出土し、この内の2点を図化した。全ての遺物が検出面での出土である。

### 豊穴住居跡53号（第289図）

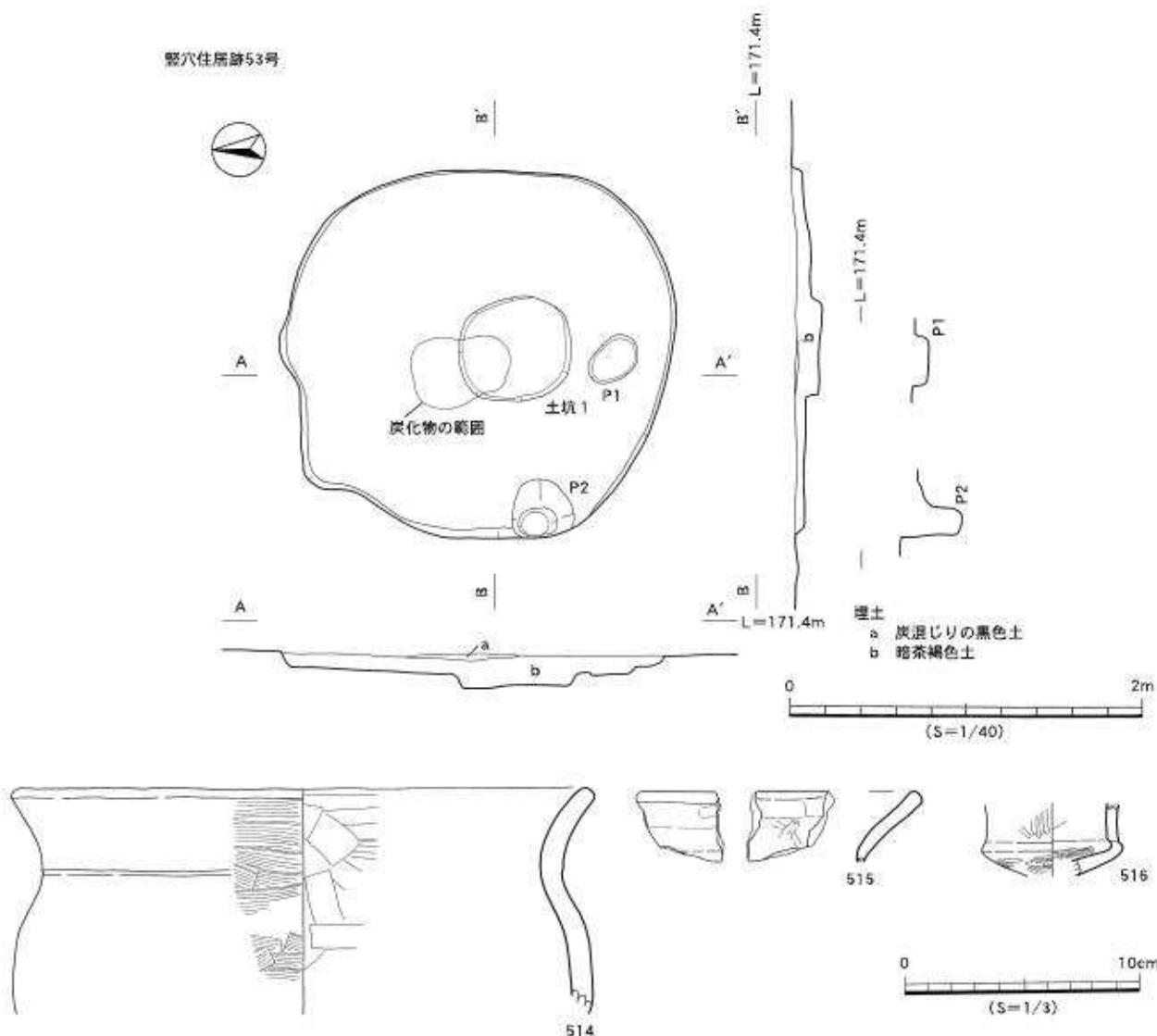
I-18区においてⅦ層下面で検出された。検出時のプランは、長辺2.2m、短辺2.1mの円形に近い。検出時既に炭化物集中が中央に見られ、床面のみ残存しているものと思われた。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して貼床と思われるb層を掘り下げていった。柱穴などの付帯施設は、柱穴が2基、中央に土坑状の浅い掘り込みが確認された。遺物は、総点で33点が出土し、この内の3点を図化した。

514は口縁部が外反し胴部が膨らむ。外面には稜が見られるが、内面ははっきりとしない。515は鉢である。516は壺である。口縁部上端を欠損するが、豊穴住居跡2号出土の14に器形は類似する。



第288図 竪穴住居跡52号・出土遺物

竪穴住居跡53号



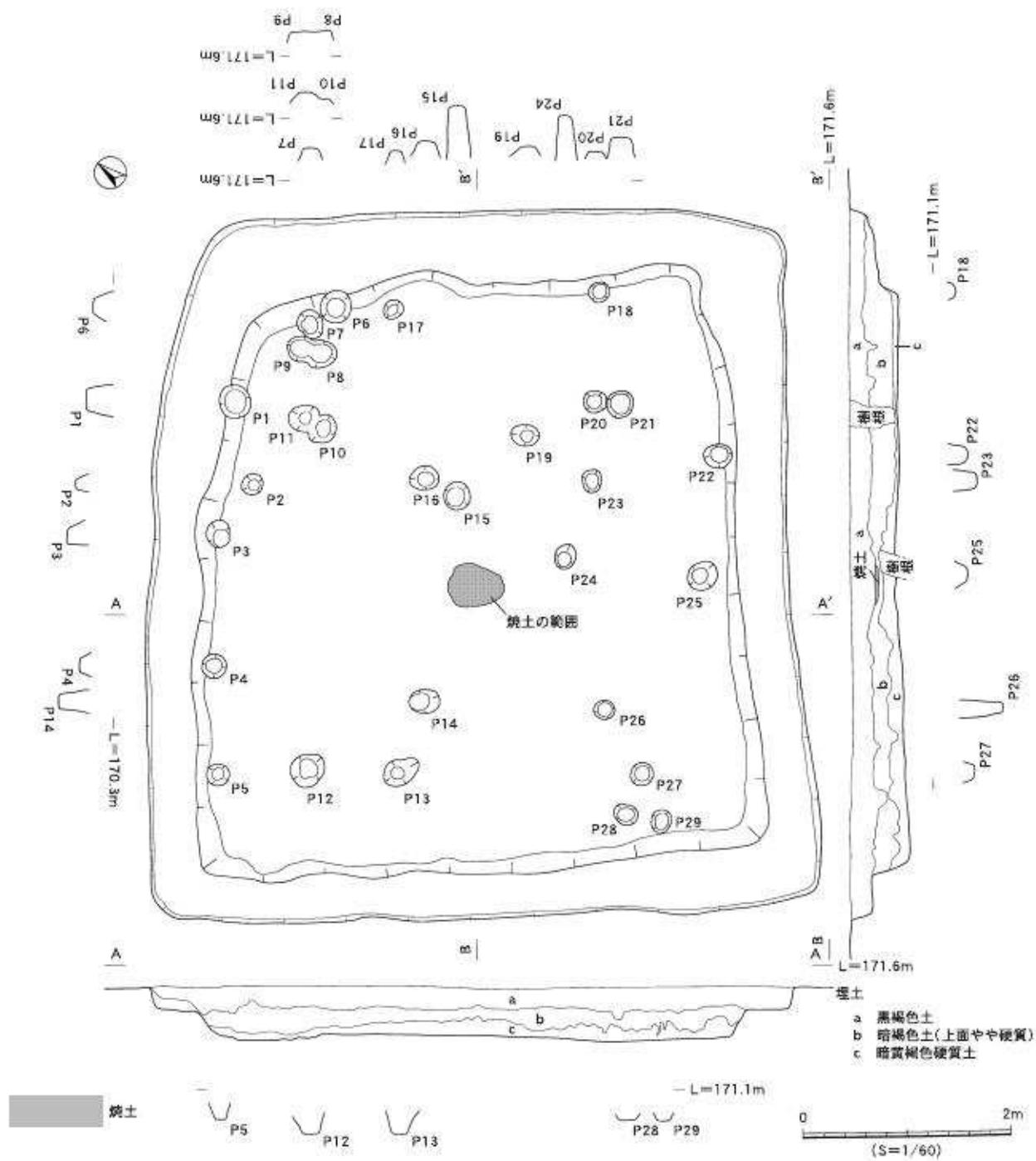
第289図 竪穴住居跡53号・出土遺物

竪穴住居跡54号（第290～292図）

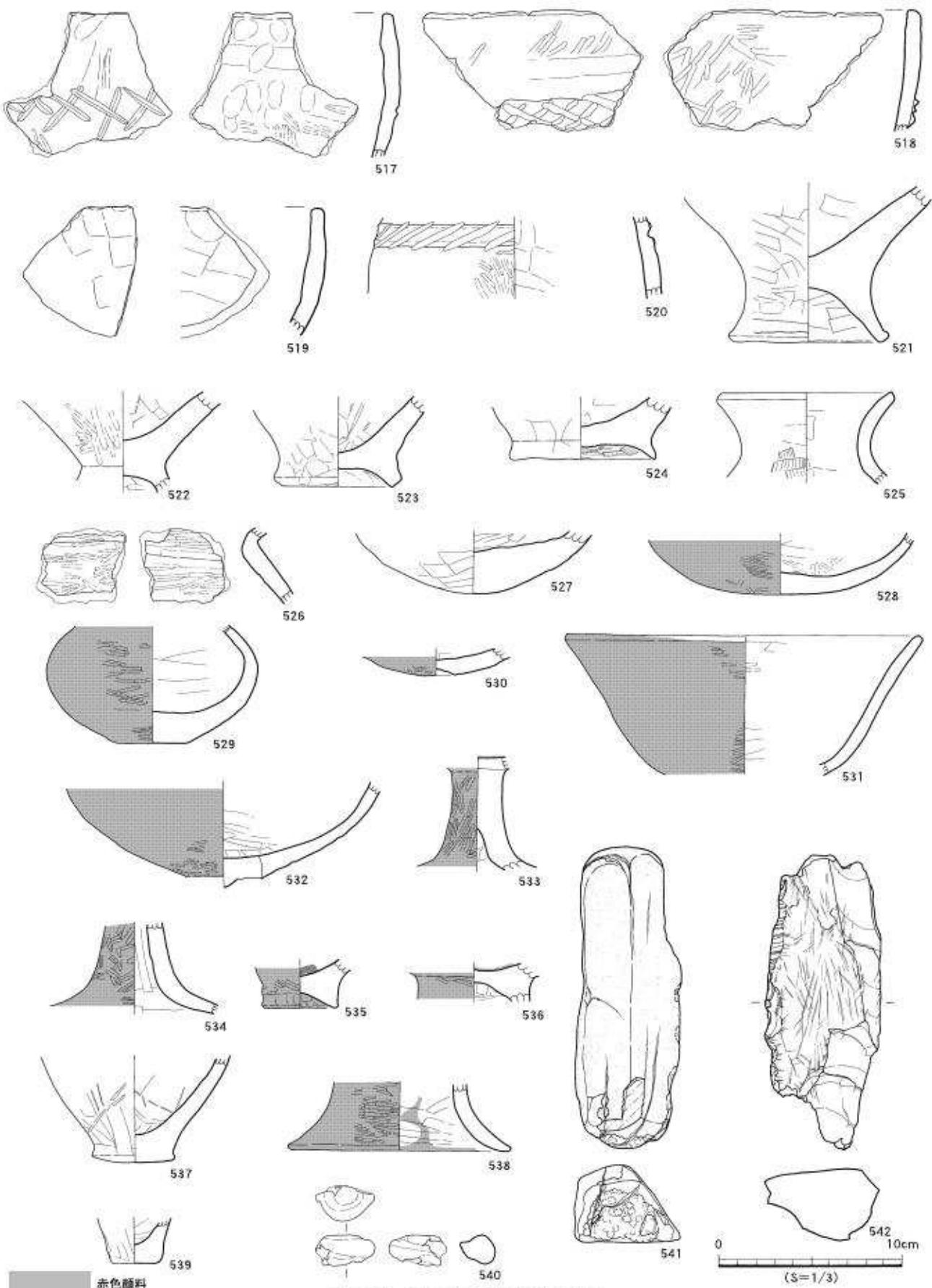
G-17・18区においてⅦ層下面で検出された。

検出時のプランは、長辺6.9m、短辺5.6mの隅丸長方形を呈する大型の竪穴住居跡である。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。20cm程度掘り下げたところで、やや硬質の埋土の変化や中央に焼土・炭化物等が広がっていたことから、これを床面と想定して硬化面の検出に努めた。しかし、部分的に不安定であった点や、遺物の出土が連続して認められたため、中央ベルトに沿ってミニトレーニチを設定して下層の確認を行った。その結果、さらに下層から硬化面が検出されたために、2枚の床面が想定された。このため、上面の記録を行った後にさらに下層の硬化面検出を行った。この結果、上面プランの内側に段掘り状の方形プランが検出され、29基の柱穴が確認された。これらのことから、床面レベルの異なる複数時期の使用が想定される。遺物は、総点で6,612点が出土したが、これらの多くは小破片であった。この内図化できた資料は32点である。

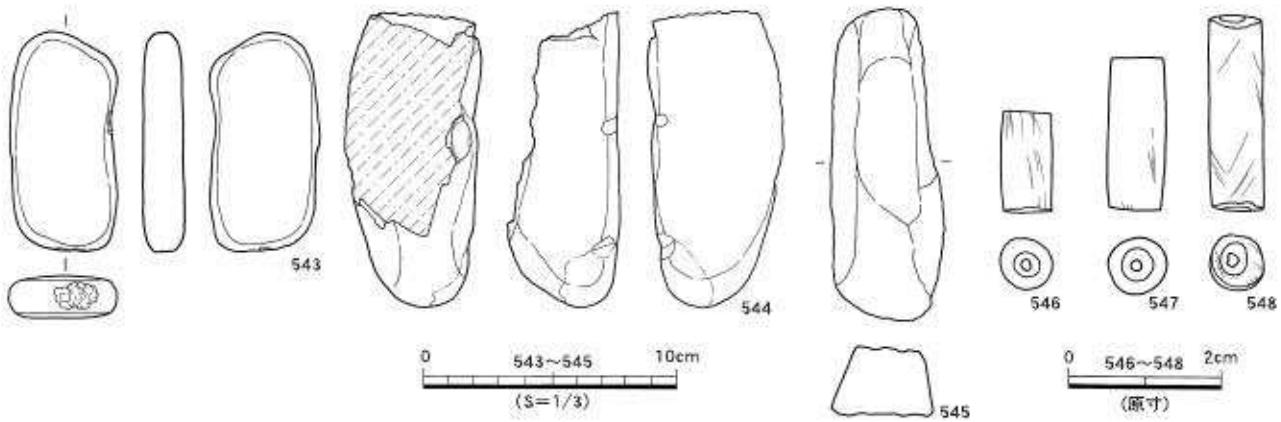
517は口縁部が内湾する。口縁部下には格子状にキザミ目が施される。518も類似するが、キザミは貼付突带上に施文されている。525～527は壺である。531は高壺の壺部である。口縁部が外反し、胴部下半は丸みを帯びて脚部へ至る。540は粘土塊である。541は棒状礫の端部に敲打痕が見られる。542は粗い打ち欠きが見られるが、光沢を持つ磨り面が見られる。546～548は緑色の石材を用いた管玉である。埋土中からの出土である。



第290図 穂穴住居跡54号



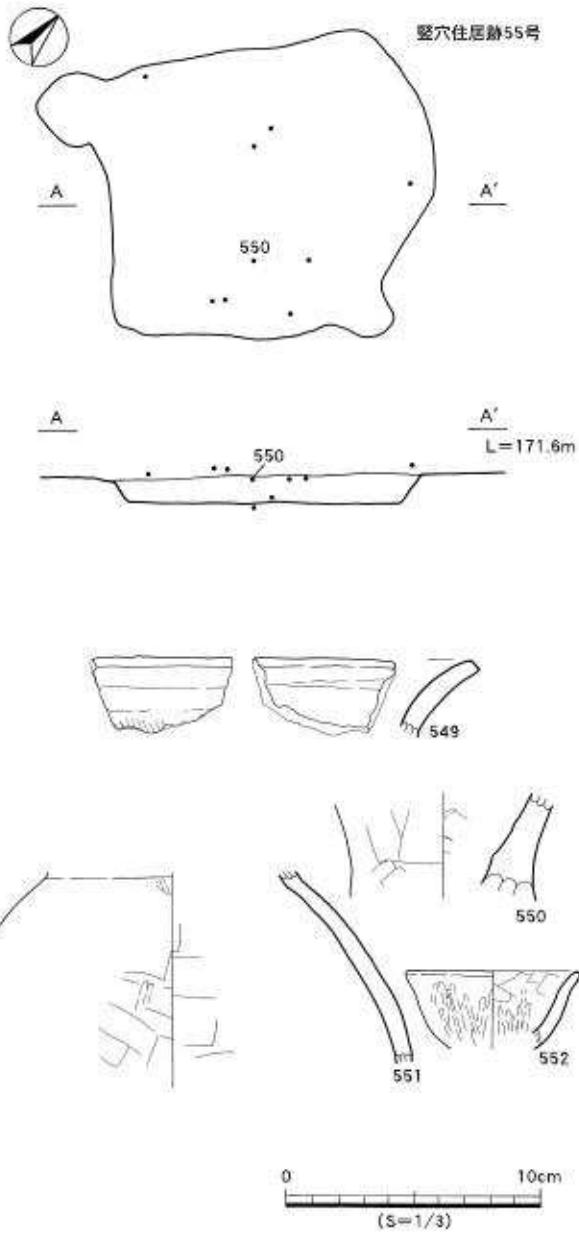
第291図 竪穴住居跡54号出土遺物



第292図 竪穴住居跡54号出土遺物

竪穴住居跡55号（第293図）

H-19・20区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺1.7m、短辺1.6mの隅丸長方形で、北西側に土坑状の張り出しが認められた。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。残存状況は悪く、検出面から約10cmで床面が検出された。この時点で埋土の記録を行い、埋土bを掘り下げて、柱穴などの付帯施設の確認を行った。しかし、柱穴等は確認されなかった。また、炉・焼土や炭化物の広がりも認められない。遺物は、総点で243点が出土し、この内4点を図化した。552は小型の壺あるいは鉢と思われる。



第293図 竪穴住居跡55号・出土遺物

### 豊穴住居跡56号（第294～296図）

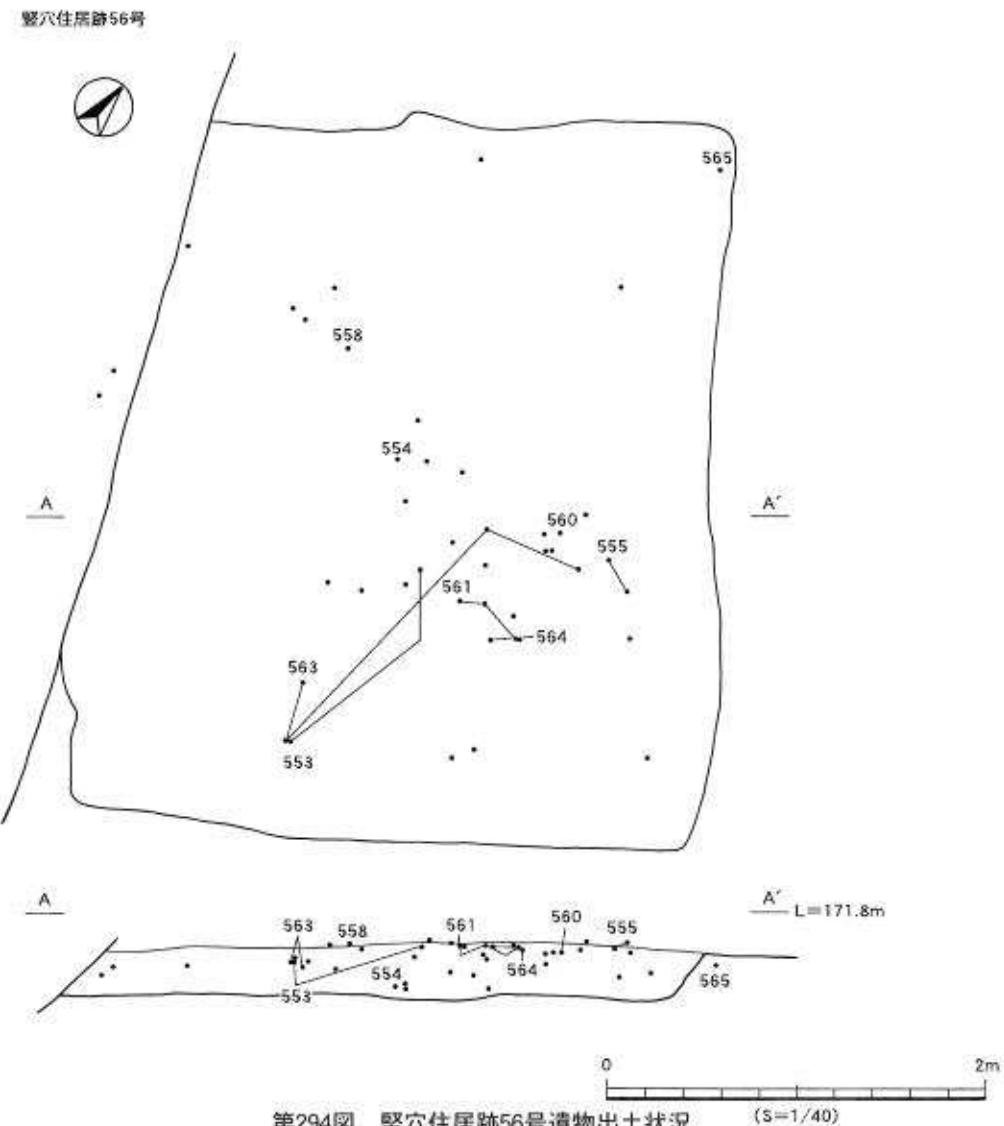
H・I-20区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.8m、短辺3.5mの隅丸長方形で、北西側が調査の工程上分断されてしまい、プランを掴むに至らなかった。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で埋土の記録を行い、ベルトを除去し床面を検出していった。硬化面の広がりなどははっきりとせず、中央や南側には炭化物の集中が見られた。

柱穴などの付帯施設は、床面及びこれを除去した段階で6基の柱穴が確認された。P3・4はやや大きめであるが10～20cmと浅い。P1・2は約40cmと共に深いがP5は約80cmとさらに深い。

なお、貼床と思われる埋土は住居床面のはば全域に認められ、10cm以上の厚さで貼られていた。

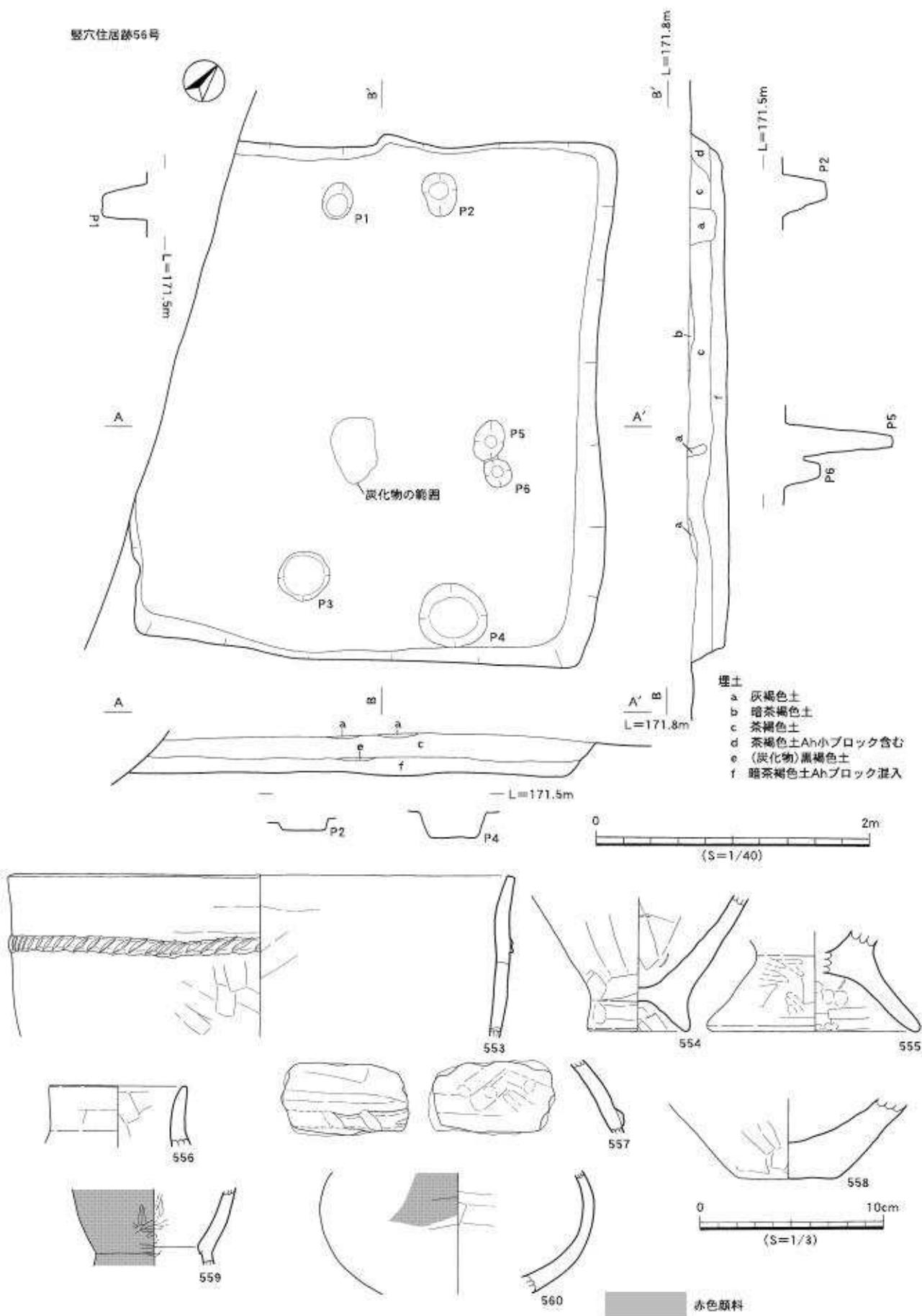
遺物は、総点で546点が出土し、この内の15点を図化



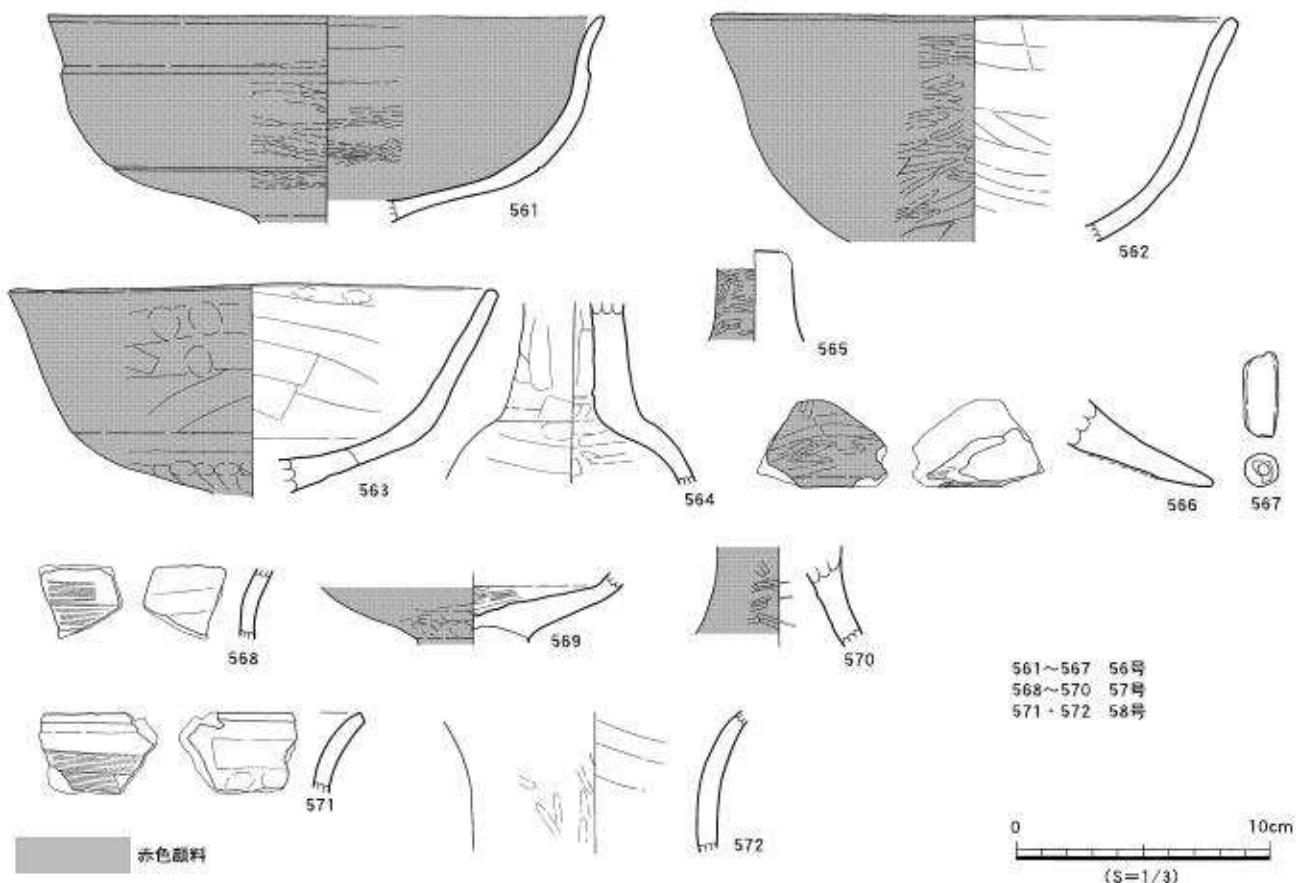
第294図 豊穴住居跡56号遺物出土状況

した。553～555は壺の破片である。553は、口縁部がほぼ直行するが端部でわずかに外反する。口縁部から胴部に至るまでは直線的で、貼付突帯は薄く貼付され、斜位のキザミが施されている。554は脚の器高が低い。556～558は壺である。556は口縁部がほぼ直行して比較的径が小さく、頸部が短い。557は、胴部貼付突帯付近の破片である。突帯は部分的に剥落している。559は壺で口縁端部を欠き、口縁部と胴部との境に接合痕を残す。561～563は高壺の壺部である。いずれも特徴的な器形を有している。561は、口縁部が外反し、口縁部下に段を有する。胴部中位にも段を有して脚部へと至る。内外面共に赤色顔料が施されている。562は口縁部が外反し、胴部でやや膨らんで脚部へと至る。赤色顔料は外面にのみ施されている。563は口縁部ほぼ直行し、胴部下半で弱く屈曲して脚部へ至る。564は筒状の脚部から湾曲した先端部に至る。565は脚部片であるが壺部との接合面を面取りしている。567は土錐である。

堅穴住居跡56号



第295図 堅穴住居跡56号・出土遺物①



第296図 穫穴住居跡56号出土遺物②、57号・58号出土遺物

#### 竪穴住居跡57・58号（第297図）

I-22区においてVI層上面で検出された。検出時に異なる2方向の軸が見られたために、2軸の切り合いで想定できた。この2軸の切り合いで関係を掘むために、2軸を通る長軸を東西方向に設定し、各住居跡の中央を通るベルトをそれぞれに設定した。埋土は単一層で、埋土による切り合いで関係はつかめなかった。床面におけるレベル差に関しては58号がわずかに深く、57号を断ち切る58号の壁面が確認できることなどから、57号が先行すると判断した。両住居跡共に中央には硬化面が広がり、これがそのまま床面を形成していた。床面は、アカホヤと黒褐色土の混在する土で貼床である。この面を切るように両住居共に土坑が南側に検出されているが、明確ではない。これまでの事例から、住居跡に伴うと判断した。

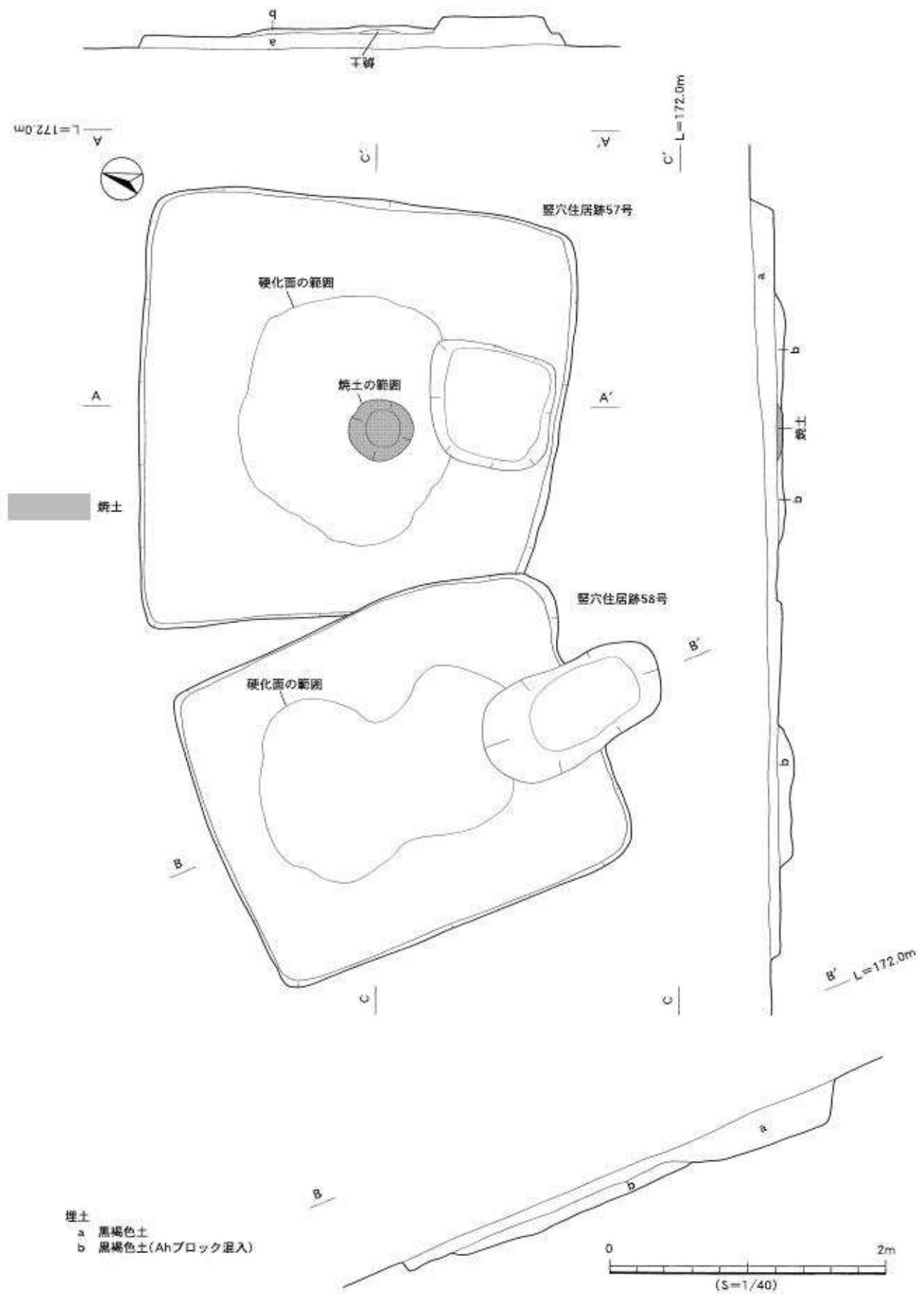
なお、検出当初は57号の北側に突出する細長いプランが見られ、竪穴住居内の炉を想定して周辺部の調査を慎重に進めていったが、シミ状の痕跡であった。柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去しながら確認していくが見られなかった。炉・焼土や炭化物の広がりは、57号のほぼ中央に深さ4cm程度の焼土が広がるにとどまった。土坑内の埋土に関してはふるいかけを行い、微細遺物の検出に努めた。その結果、炭化物がわずかに採取できた。

なお、ふるいかけが終了した埋土は磁石により小鉄片

の検出作業も実施したが、成果は出なかった。

遺物は、57号が総点で26点出土し、この内の3点を図化し、58号が総点で35点出土し、この内の2点を図化した。564-566が57号出土遺物で、571・572が58号出土遺物である。568は甕の口縁部下の破片である。これで見ると、口縁部はわずかに外反しているものと思われる。

569は高環の坏部下で、脚部との接合面で欠損している。570は高環の脚部片である。571は甕の口縁部片である。小破片ではあるが、甕だけで見ると両住居共に型式変化はほとんど見られない。時期的には近いことが予想される。572は壺である。口縁端部をわずかに欠く。頸部はやや長い。



第297図 豊穴住居跡57号・58号

### 豊穴住居跡59号（第298～300図）

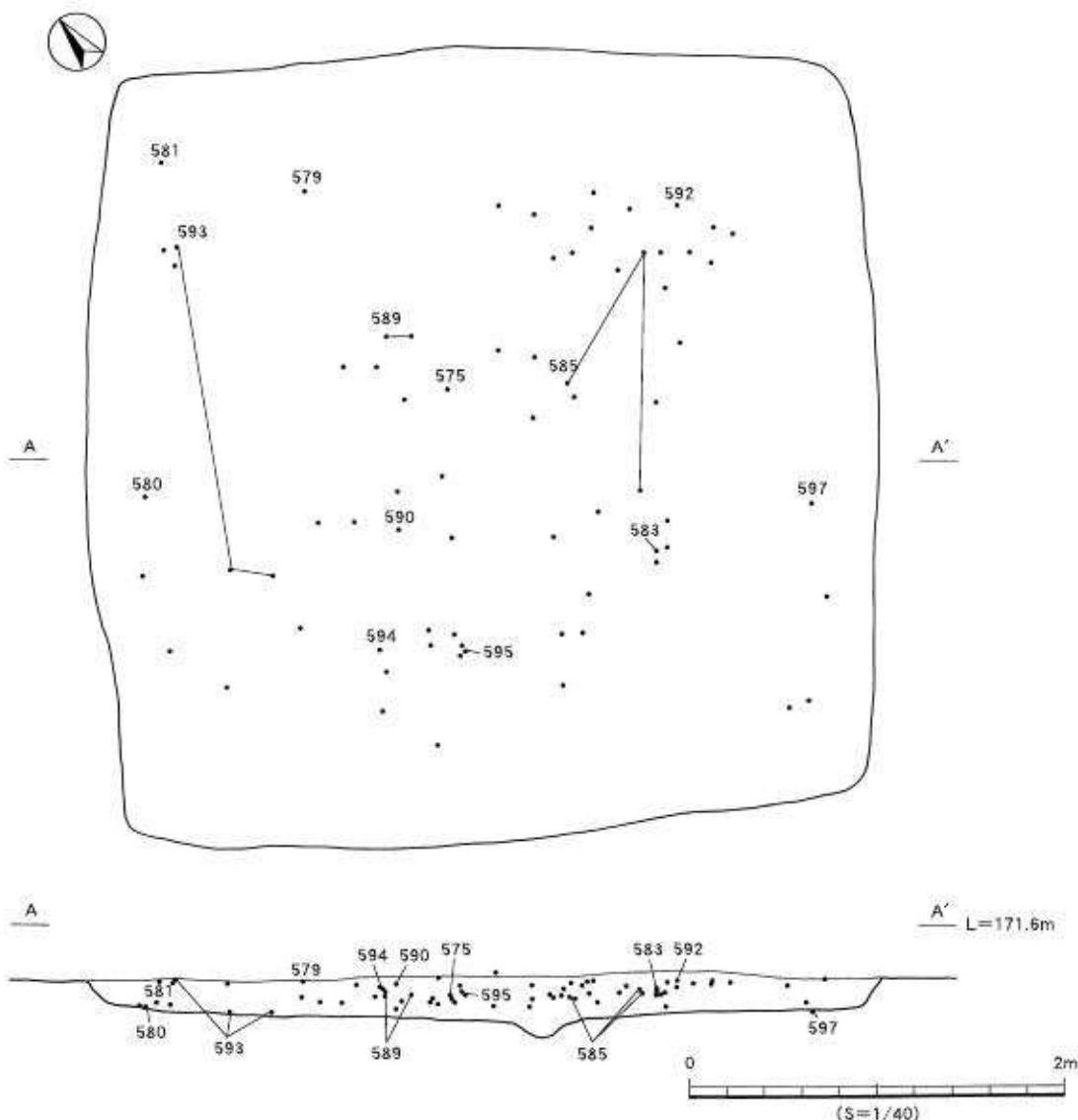
J-24区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4.3m、短辺4.3mの隅丸方形を呈する。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。a層を掘り下げる過程で、中央よりやや西側において炭化物層の広がりと、わずかな硬化ブロックが確認できた。当初は、これを床面と考えたが、面としてとらえることが出来ず、このため、中央部分を先行して掘り下げ、下層を確認していく。その結果、下層の中央部分で炭化物集中が確認され、これを床面と判断した。

なお、この周辺にはわずかに硬化面を有しているが、住居床面に広範囲には広がらない。中央には、炭化物集中があり円形に近い土坑を想定して掘り下げていったが、掘り込み等は確認できていない。その中央部分には、焼

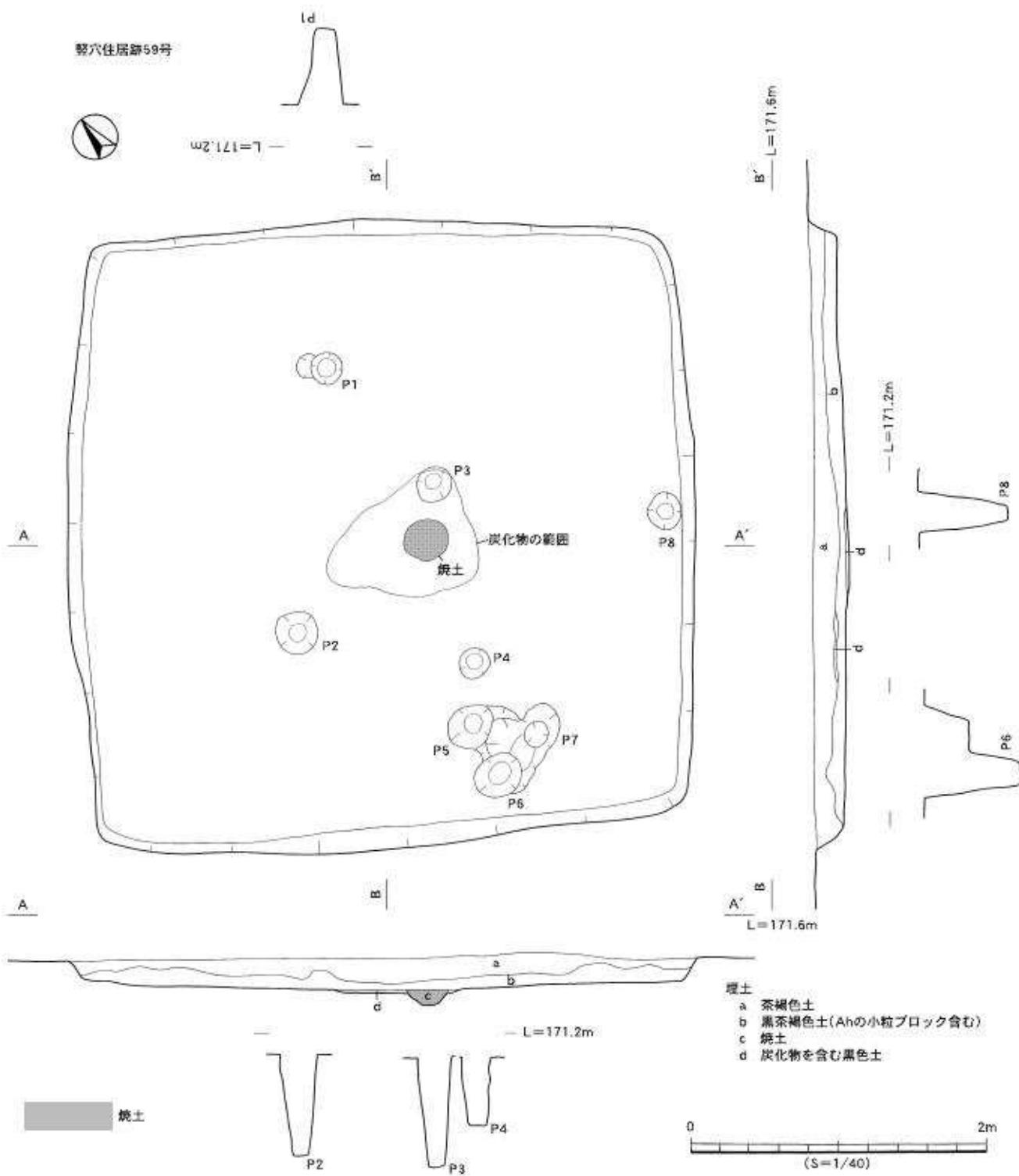
土が小さな柱穴状に見られた。柱穴などの付帯施設は、床面を除去した段階で8基の柱穴が確認された。P1・2・3・4・8はほぼ単独で検出され、床面より40～60cmと深い。P7～9は当初土坑状に検出されたが、掘り下げていったところ、3基の柱穴の切り合いであった。

遺物は、総点で613点が出土し、この内の25点を図化した。573は甕の口縁部であるが、注ぎ口状の形状が見られる。あるいは波状口縁を呈するものかとも思われたが、前者を想定して図化した。このため、格子状のキザミが斜位になってしまっている。574は甕の頸部から胴部にかけての破片である。やや薄手の印象を受ける。585は高壊の壊部である。口縁部が外傾し胴部で屈曲する。内面には黒色している部分が見られ、二次焼成を受けた可能性が考えられる。593は赤色顔料が施された脚を有する小型の鉢である。594は脚が低い。

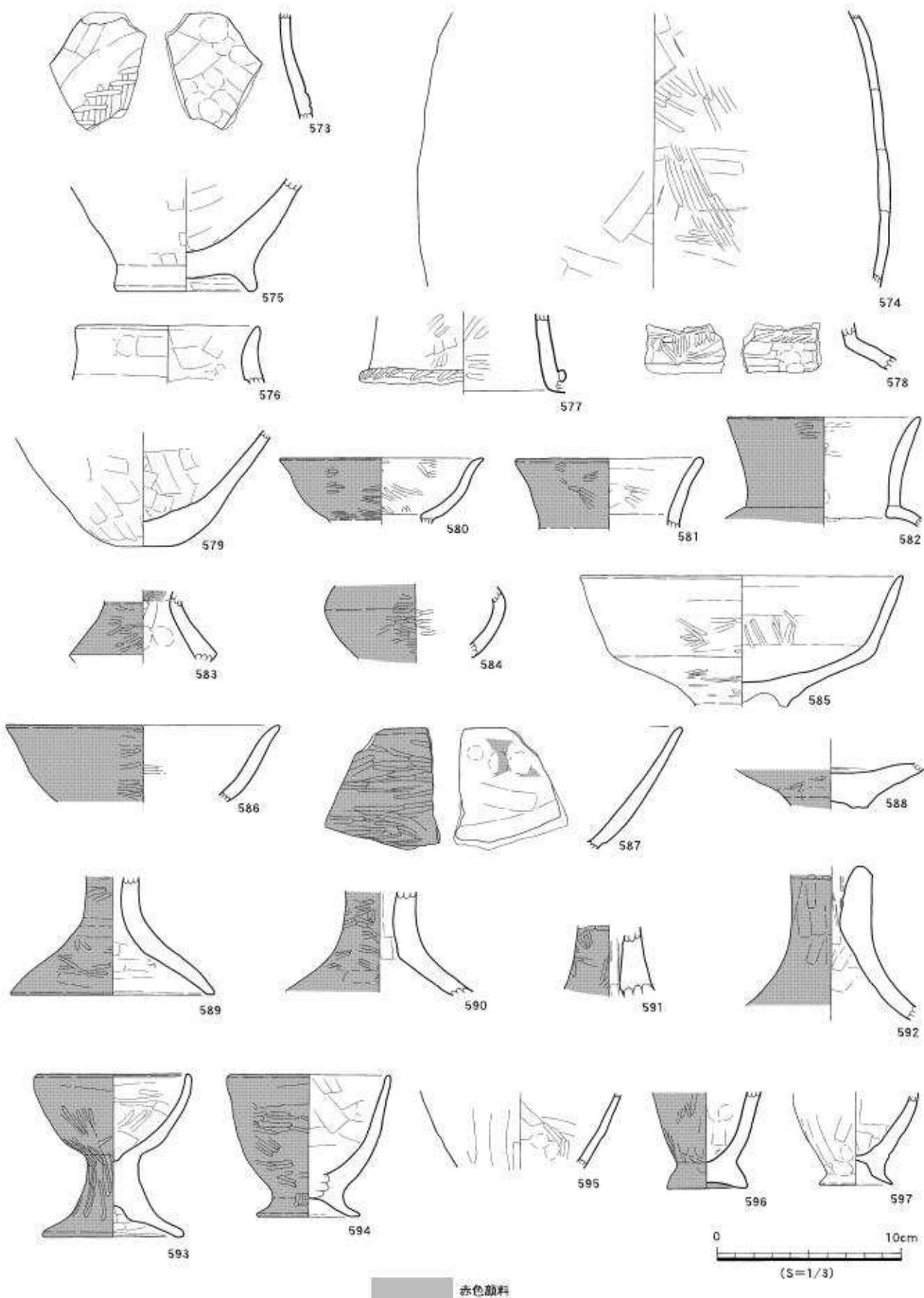
豊穴住居跡59号



第298図 豊穴住居跡59号遺物出土状況



第299図 縫穴住居跡59号

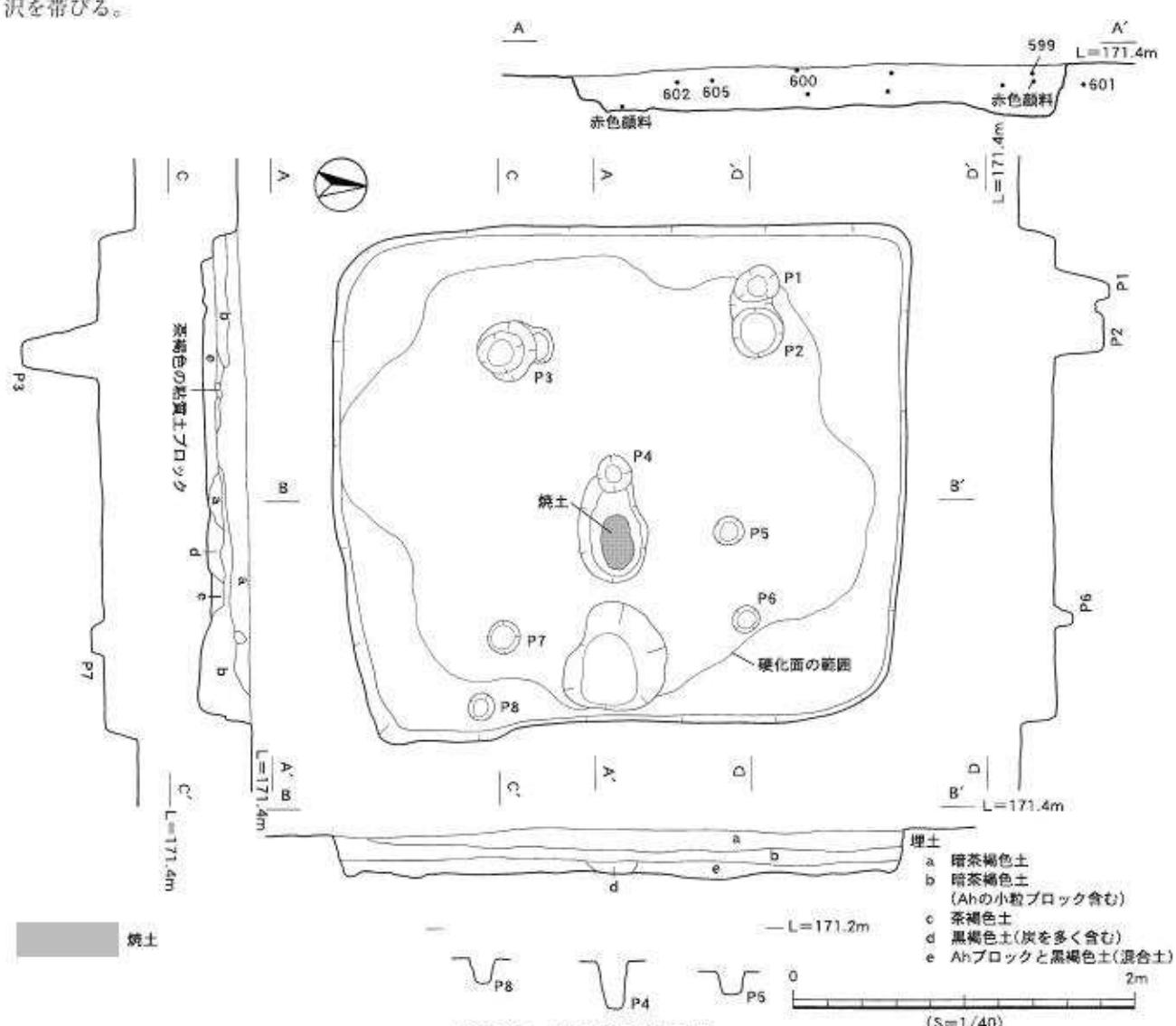
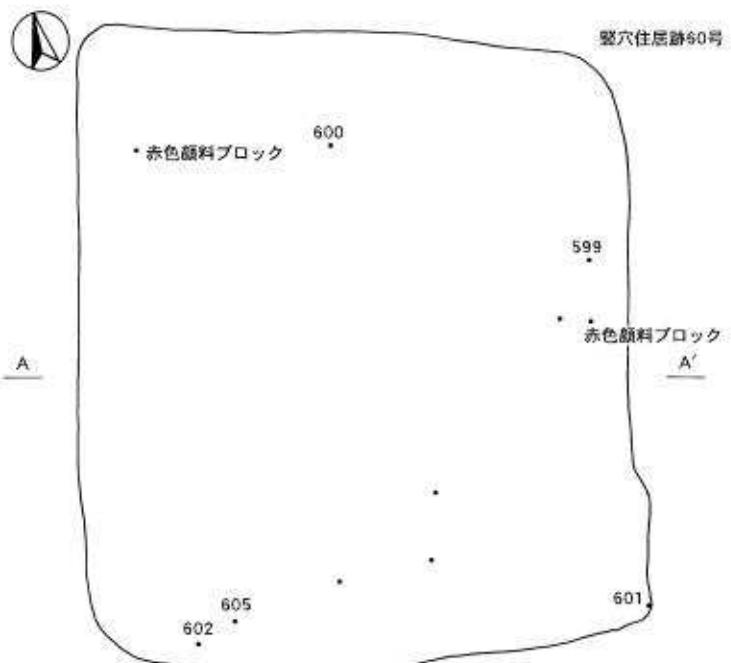


第300図 竪穴住居跡59号出土遺物

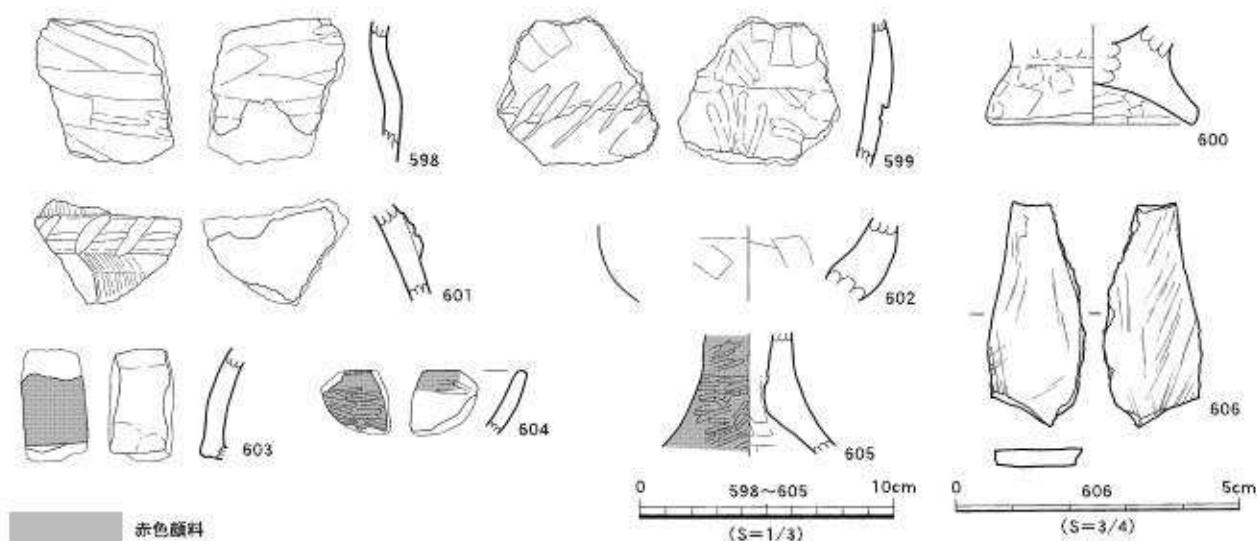
### 竪穴住居跡60号（第301・302図）

I-24・25区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.4m、短辺2.9mの隅丸長方形を呈する。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で東側に土坑状のプラン、中央に炭化物を多く含む層の堆積が確認された。埋土の記録を行い、ベルトを除去し床面を検出し、e層上面の硬化面を床面と判断した。柱穴などの付帯施設の確認は、硬化面を除去した段階で8基の柱穴が確認された。この内中央のP4は、炭化物集中を切るようにして検出されている。柱穴は、P1・2・3は深く、P5～8は浅い。

遺物は、総点で63点が出土しこの内9点を図化した。606は扁平で両平坦面が磨りにより光沢を帯びる。



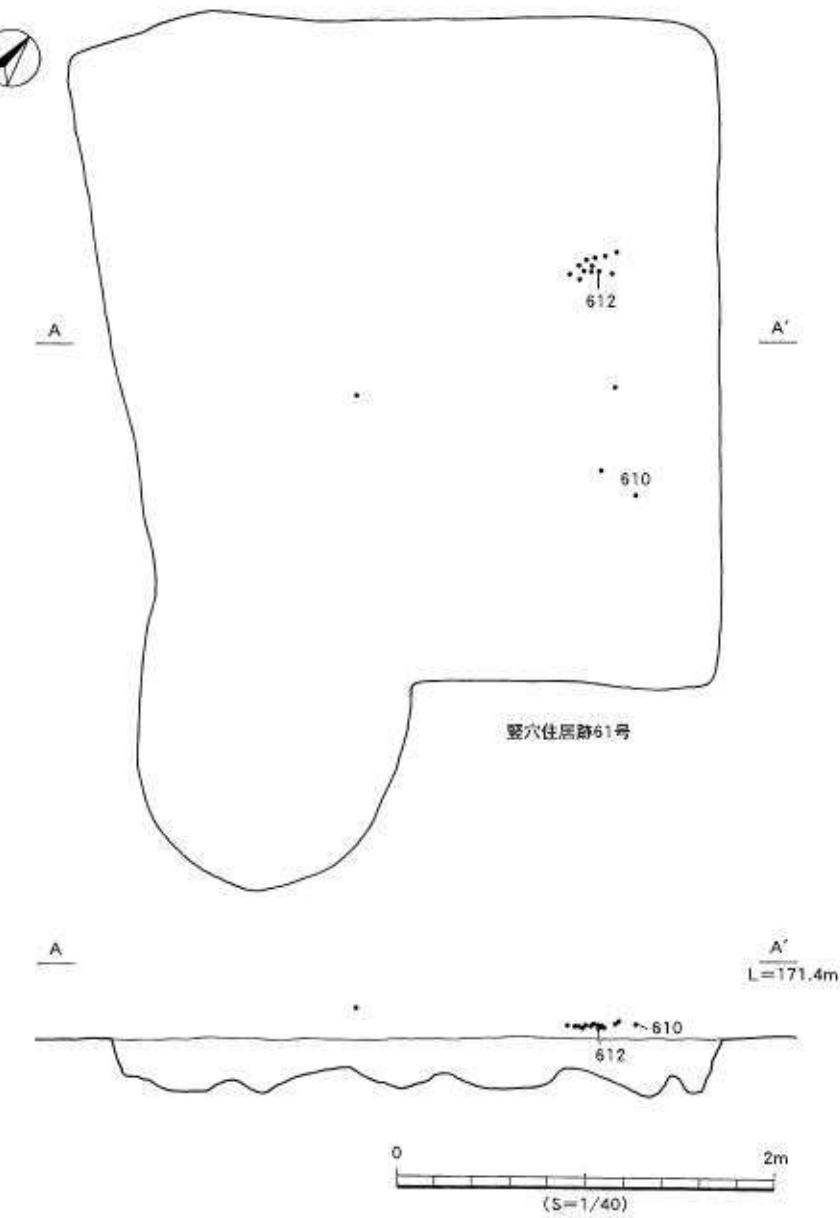
第301図 竪穴住居跡60号



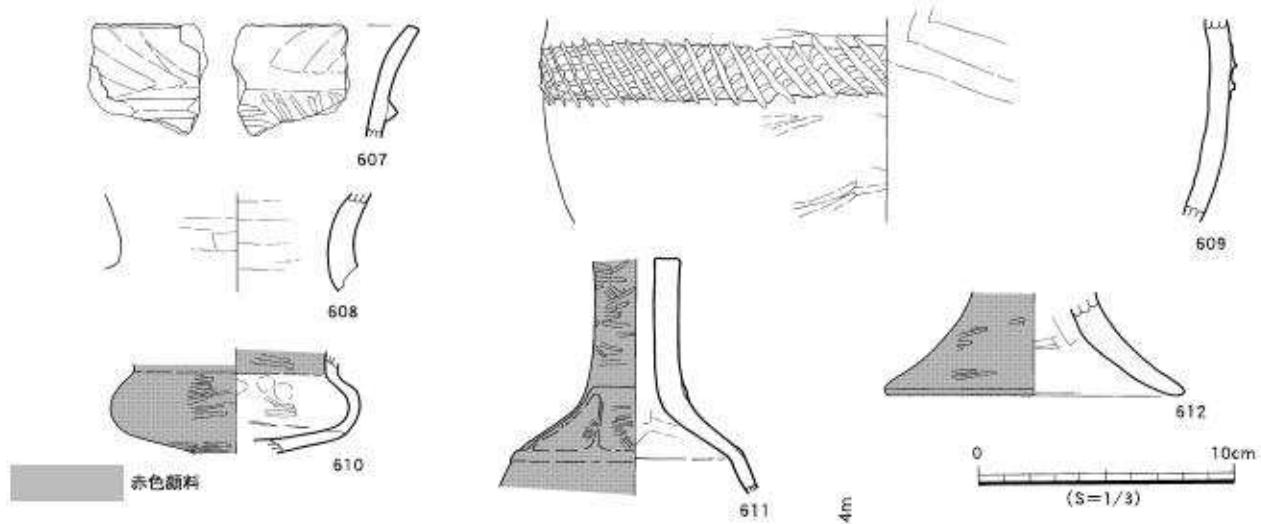
第302図 竪穴住居跡60号・遺物出土状況

#### 竪穴住居跡61号（第303・304図）

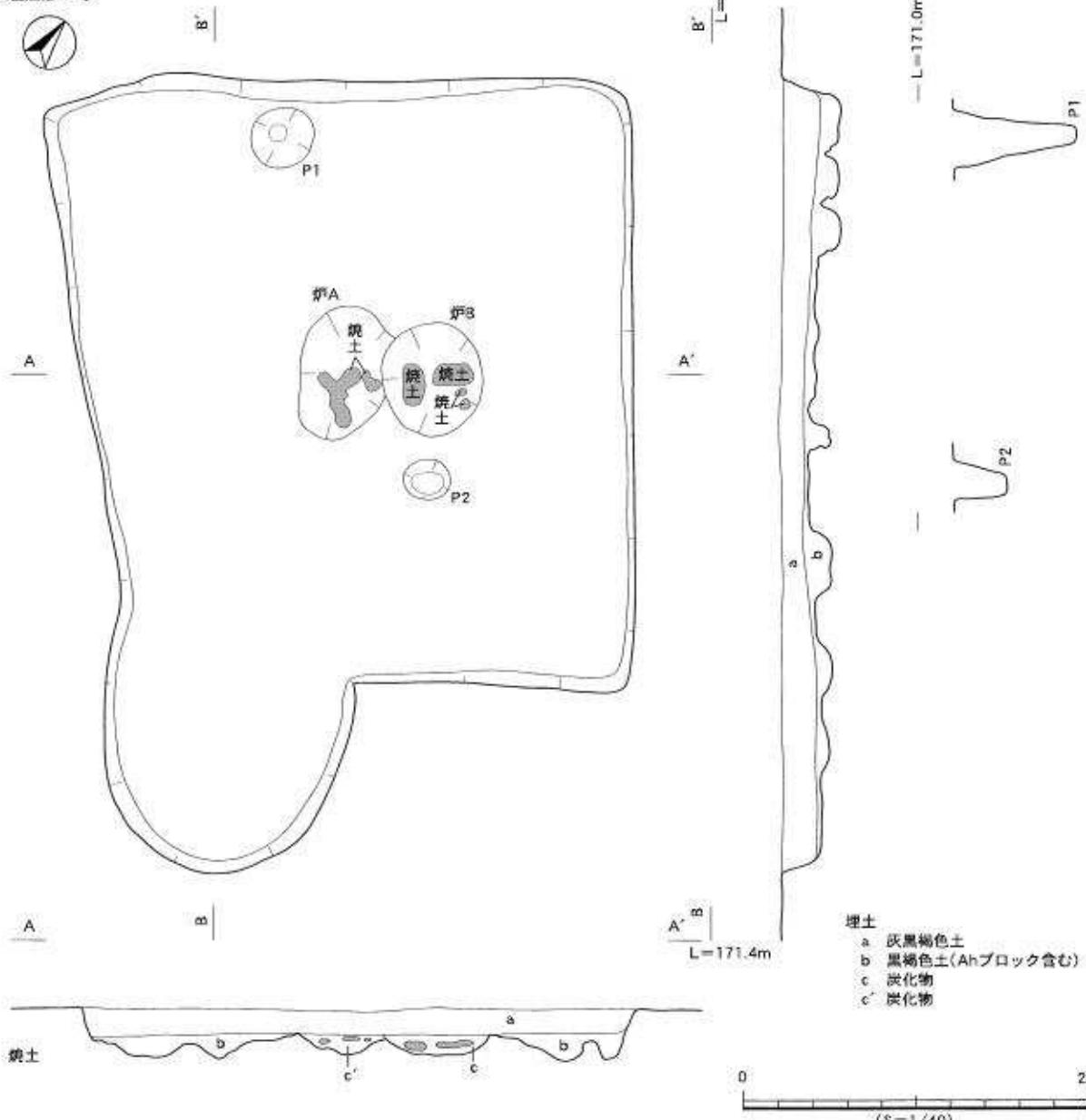
G-25区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.5m、短辺3.3mの隅丸長方形で、南側に円形の土坑状のプランが認められた。当初、この2基の切り合い関係を想定したベルトを設定し、住居単独のベルトをこれに直行する形で設定した。埋土は、やや灰色がかかった黒褐色土の単一層であったが、黒褐色土とアカホヤブロックの上面が硬化していたためにこれを床面と判断した。土坑と住居との関係は、埋土の変化や床面のレベル差等の検証を行ったが明確に出来なかった。埋土の記録を行い、ベルトを除去し床面を検出していったところ、中央に切り合う2基の焼土集中箇所が見られ、図上左をA、右をBとし、AがBに先行することを確認した。A・Bいずれも、焼土炭化物を多量に含んでいる。埋土aを除去するとb層が検出されるが、全体的に不安定であり、隣接する63号等と比べて雑然としている。遺物は、総点で116点が出土し、この内6点を図化した。



第303図 竪穴住居跡61号遺物出土状況



竪穴住居跡61号

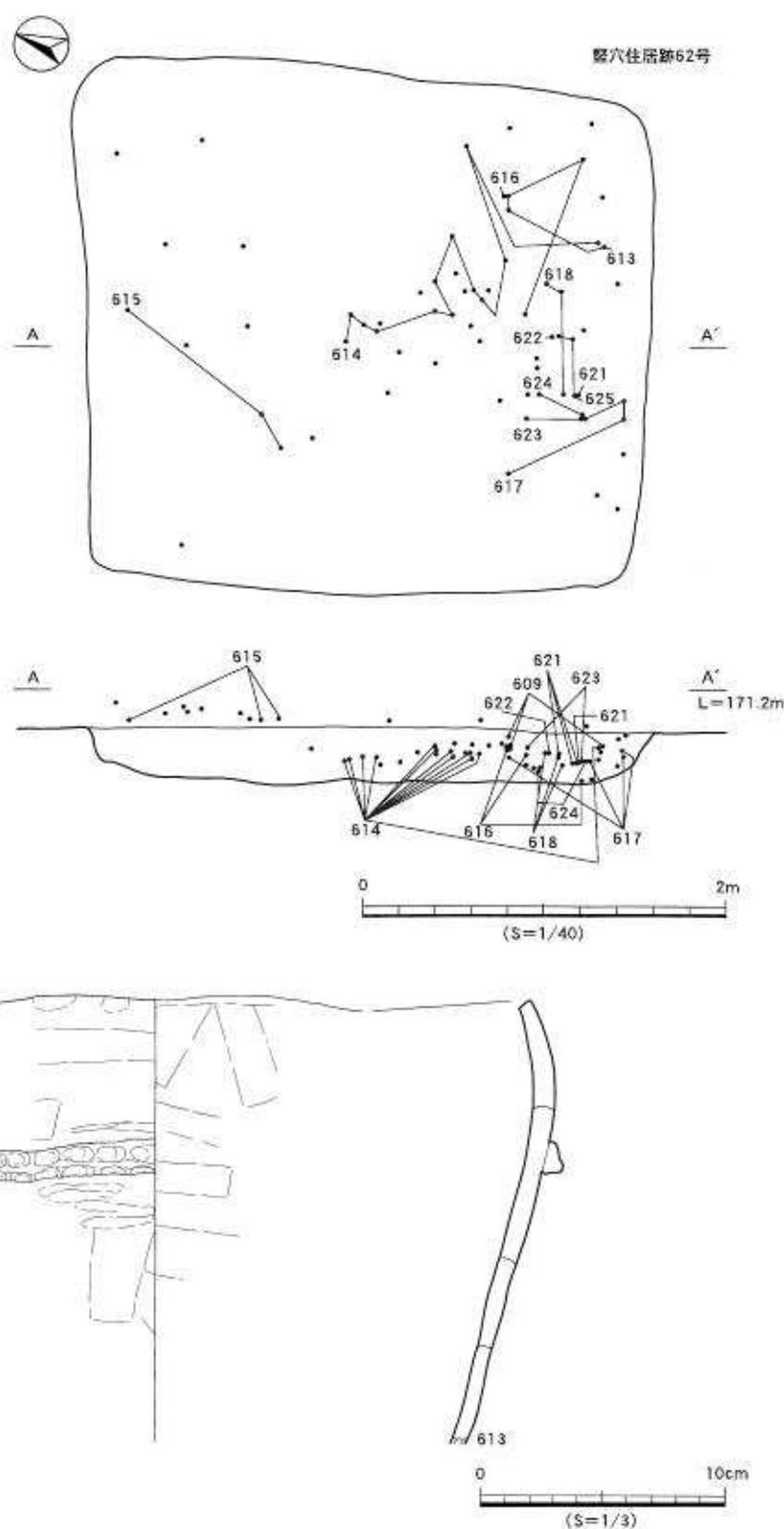


第304図 竪穴住居跡61号・出土遺物

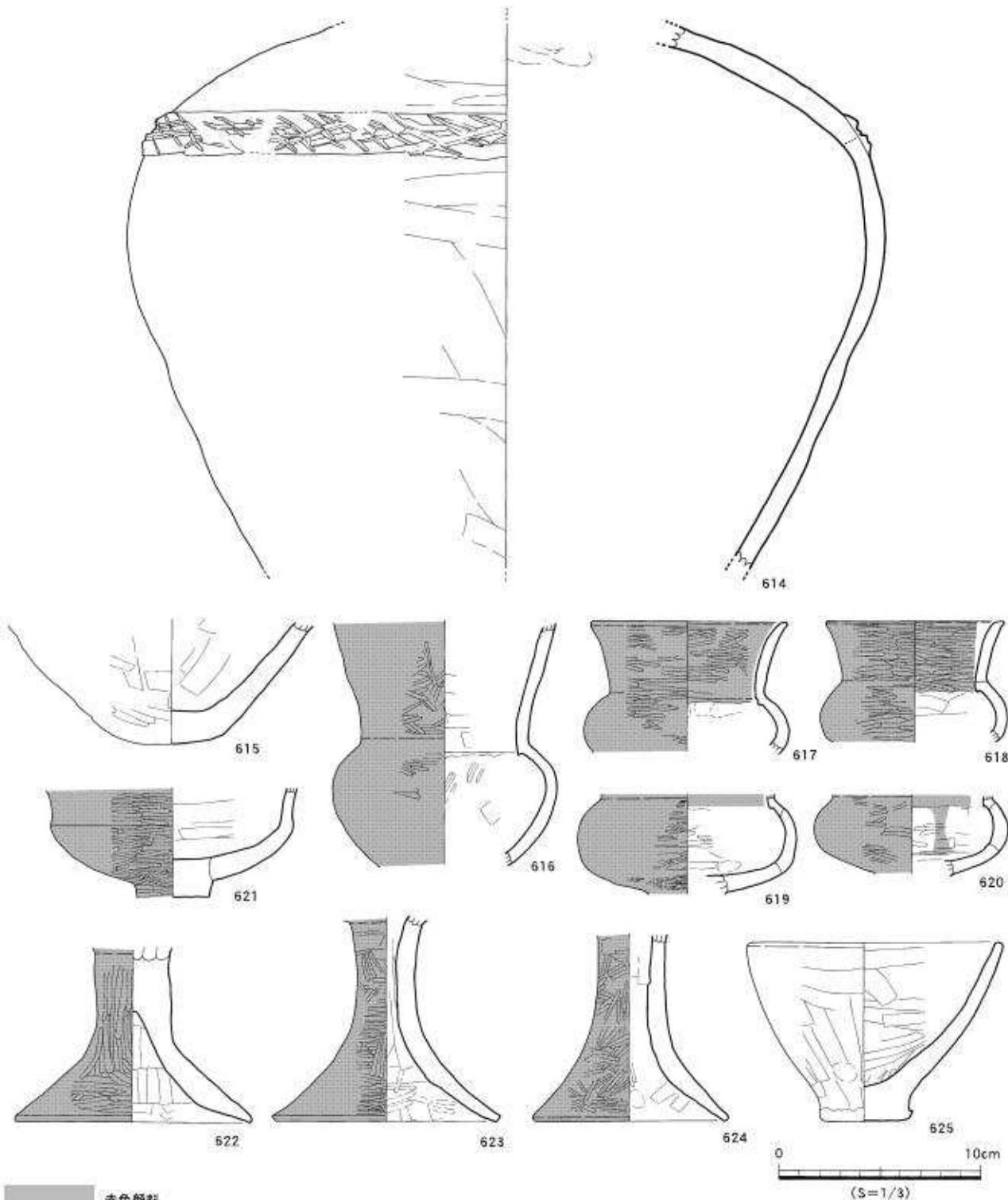
### 竪穴住居跡62号（第305～307図）

G-25・26区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.1m、短辺3mの隅丸長方形を呈する。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は黒色土の單一層で、黒褐色土と茶褐色土のブロックにアカホヤブロックが混在する層の上面が硬化しており、これを床面と判断した。この時点では埋土の記録を行い、ベルトを除去し床面を検出していったところ、中央に炭化物や焼土を多く含む土坑状のプランが検出された。床面の掘り下げは、当初のベルトを再度床面に設定して埋土cを掘り下げ、図上で合成した後に全面的に埋土cを除去していく。その結果、東壁に偏って4基の柱穴が確認された。

遺物は、総点で174点が出土しこの内13点を図化した。613は口縁部が内湾する。胴部の貼付突帯は指頭により上下方向に押さえられ貼付されている。614・615は壺である。614は頸部から胴部下半にかけての破片である。胴部の最大径よりやや



第305図 竪穴住居跡62号・出土遺物

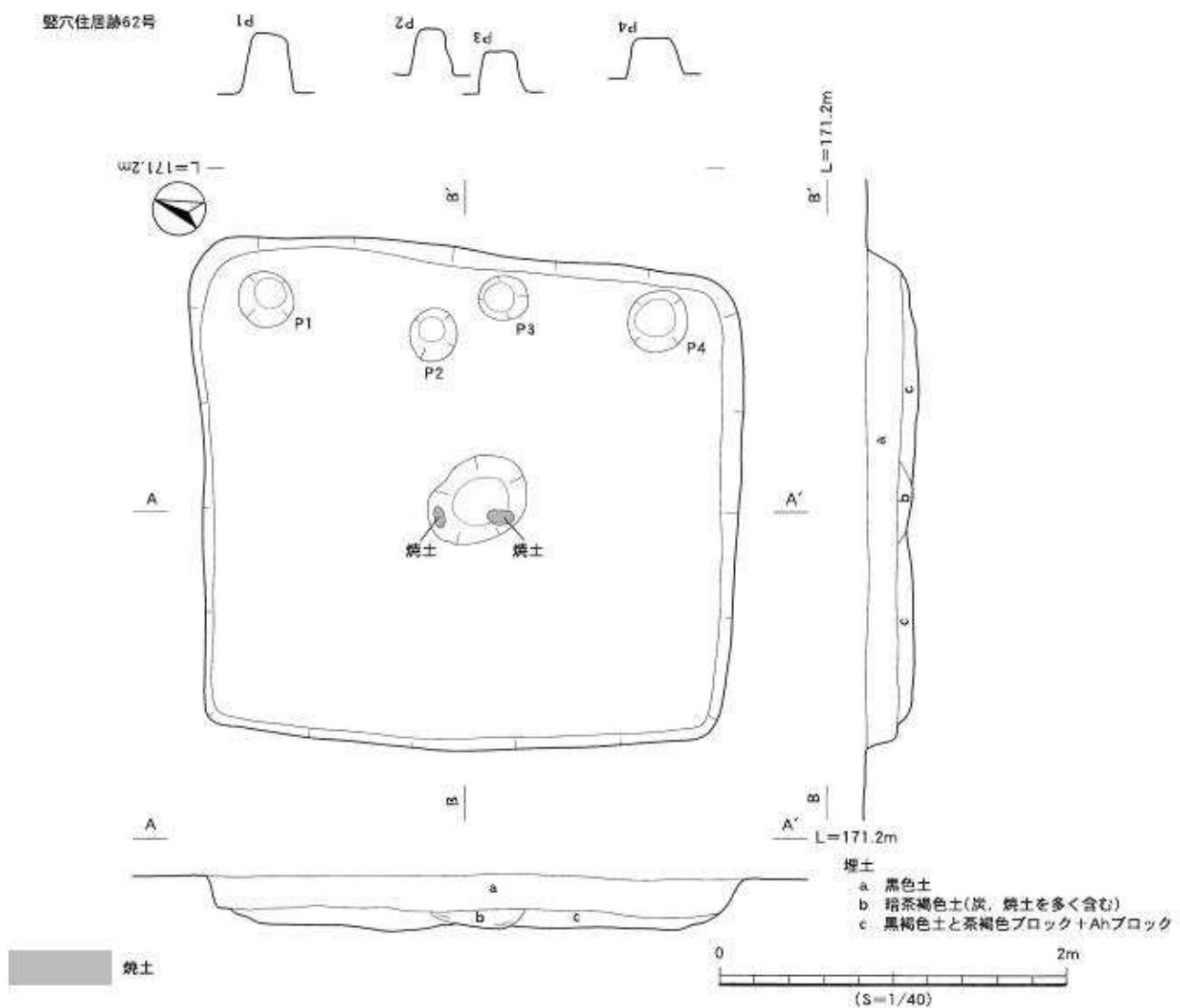


赤色顔料

第306図 竪穴住居跡62号出土遺物

上位に突帯をめぐらせ、格子状にキザミを施している。616は壇であるが口縁部が長い。621は、脚部欠損部分に面取りが施され、平坦に再加工されている。617～620・622～624は高壇である。口縁部から胴部にかけては617や618のような壇形を呈するが、619のように脚部の痕跡を残しているものが見られることから、623や624のよう

な脚部が想定された。これらの中には、胎土や色調など同一個体の可能性のあるものが含まれているが、接合面の磨滅などから接点を見いだせなかった。これらの遺物は、竪穴住居跡の南側に比較的集中して出土しており、祭祀的な様相もうかがえる。



第307図 穫穴住居跡62号

#### 竪穴住居跡63号（第309～310図）

F・G-26区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4.2m、短辺3.7mの隅丸長方形で、部分的に灰褐色埋土（中世から近世該当）の柱穴に切られている。

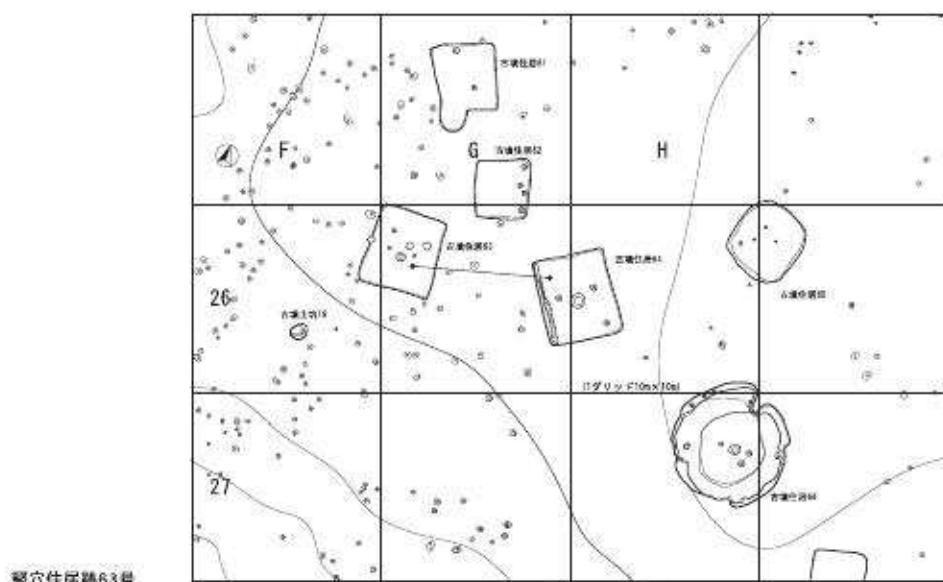
調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土はほぼ單一層で、アカホヤブロックと黒褐色土の混入土上面で硬質土を面的に検出でき、これを床面と判断してその広がりを検出していった。埋土の記録を行い、ベルトを除去し再度床面を検出したのちに、柱穴などの付帯施設を確認した。硬化面を切り込んでいる柱穴は中央のP1とP2の2基が確認され、主柱穴と判断できる。その中央部からは土坑が1基検出された。土坑内の炭化物を掘り下げていくと、土坑床面は火を受けて激しく赤化していた。この厚みを計測するために立ち割り、記録を行った。この3基以外にもいく

つか柱穴の可能性が考えられる箇所が見られたが、これらの確認は硬化面を除去した後に実施することとした。

硬化している混入土の掘り下げは、中央のベルトを再度設定して埋土cの堆積状況及び面的な広がりを図化していく、先に記録した断面図に合成した。この埋土cを除去すると、西壁から時計回りに南壁の半分まで溝状の不安定な掘り方が確認された。この部分以外に関しては、硬化面とほぼ水平に貼り床が施されており、何らかの目的が想定されよう。

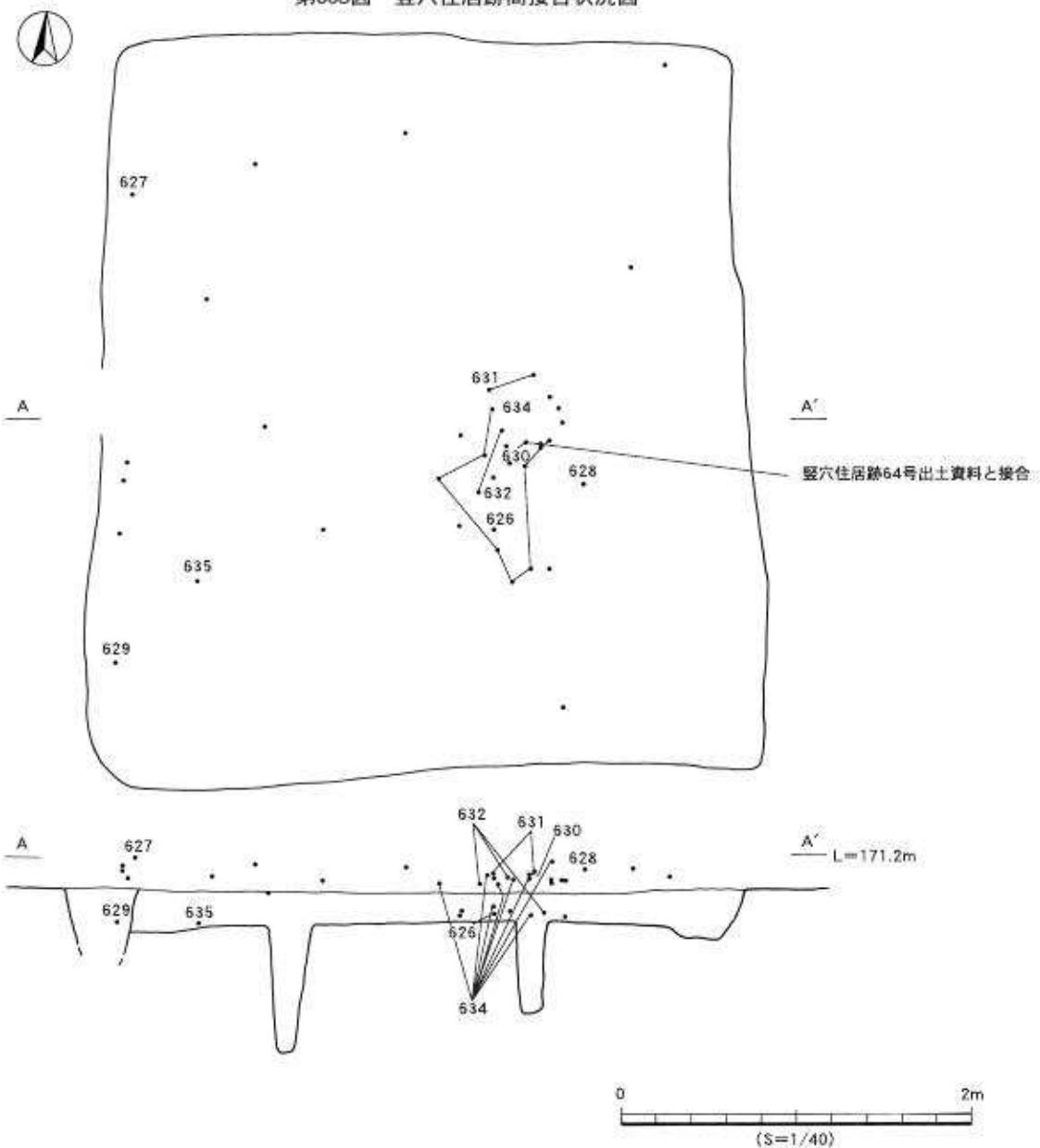
なお、柱穴などの付帯施設は、先述した2基の柱穴と中央に炭化物の集中する土坑が確認された。P1・2は非常に深く住居内の位置関係から主柱穴の可能性が高い。この他に、硬化面を除去した後に認定できた柱穴はP3の1基のみであった。

遺物は、総点で139点が出土し、この内の10点を図化した。636は甕の脚部である。ハの字状を呈するが器高



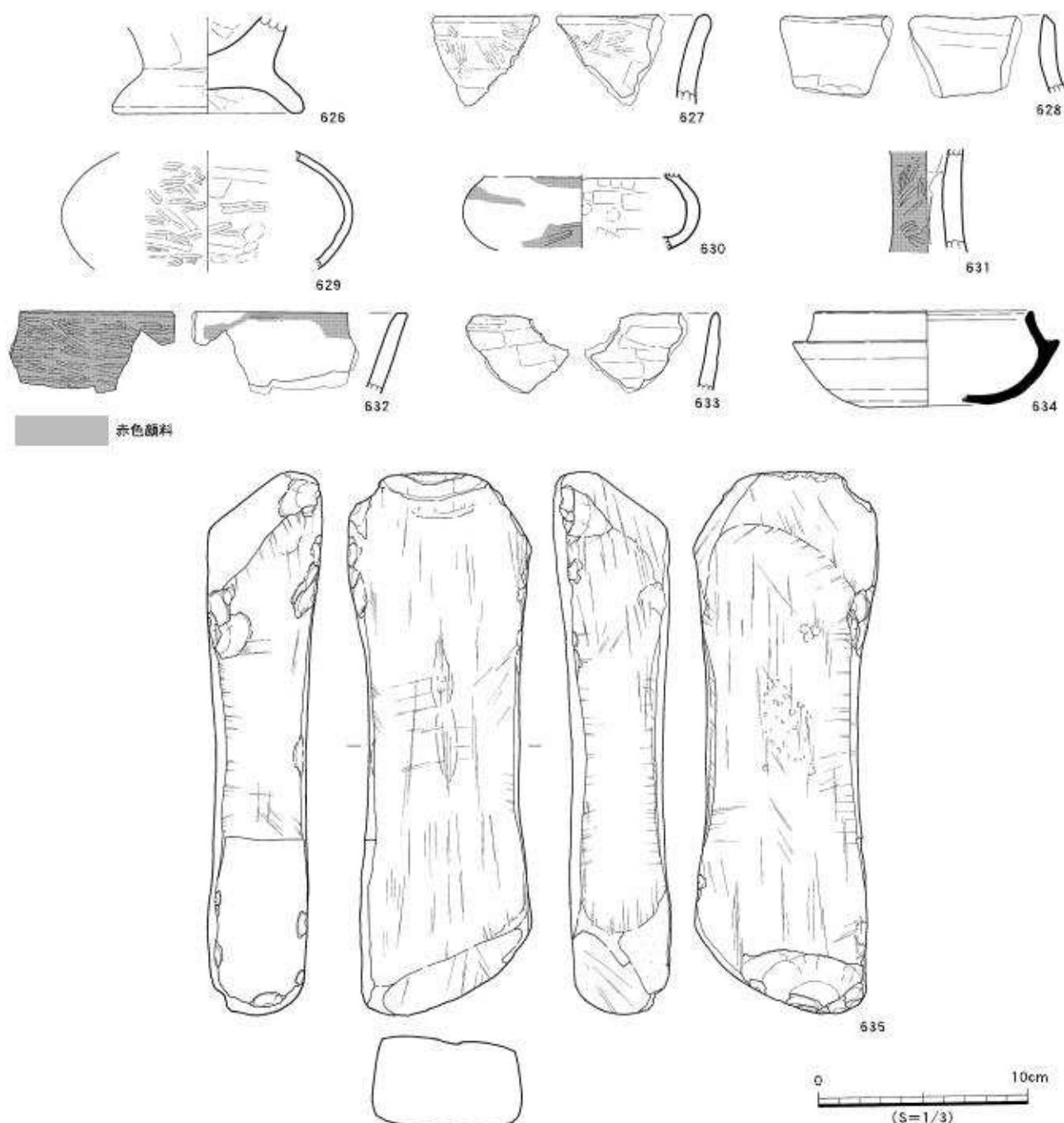
竪穴住居跡63号

第308図 竪穴住居跡間接合状況図

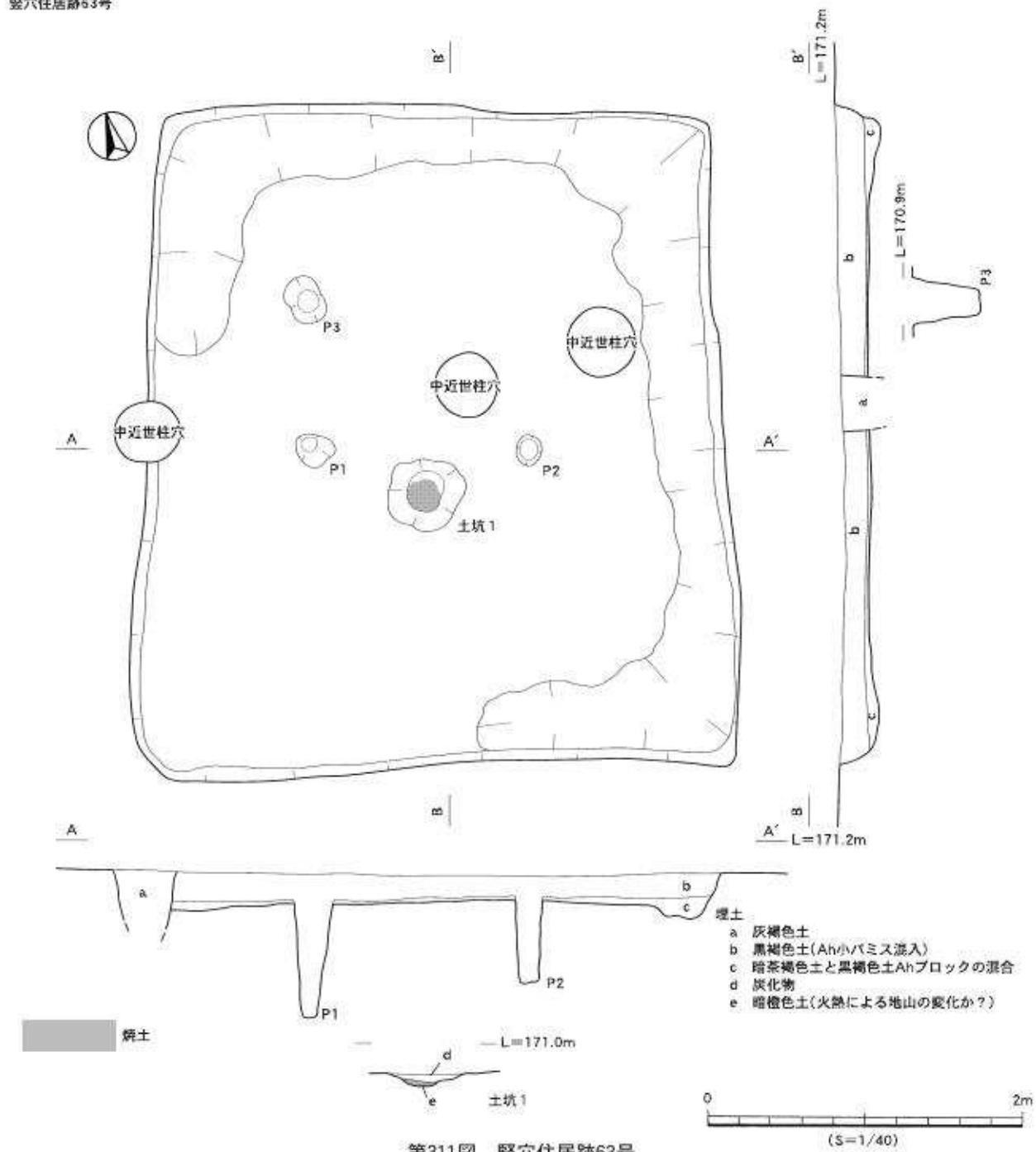


第309図 竪穴住居跡63号遺物出土状況

は低い。627・628は壺の口縁部片である。628は口唇部が平坦でやや尖りぎみである。629は壺の胴部片であるが、非常に薄手である。634は竪穴住居跡のプランが検出された時点で既に出土していた須恵器の坏身である。第308図に示したように6m離れて隣接する64号内出土遺物と接合関係にある。635は竪穴住居跡の南西付近の床面から出土した砥石である。各面共にU字状に凹んでおり使用頻度の高さがうかがえる。



第310図 竪穴住居跡63号出土遺物



第311図 竪穴住居跡63号



土坑1検出の焼土半裁状況

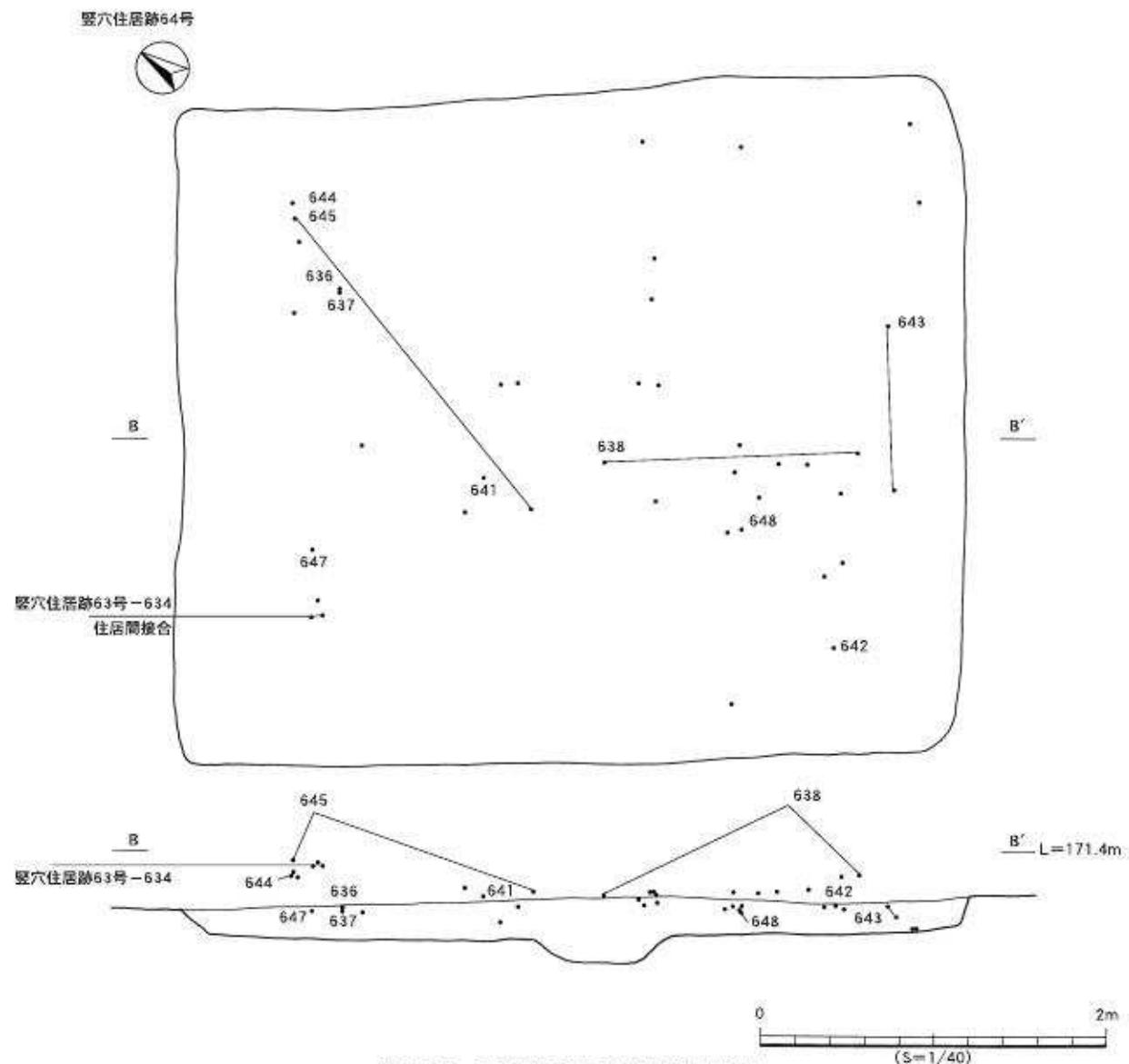


土坑1検出の焼土完掘状況

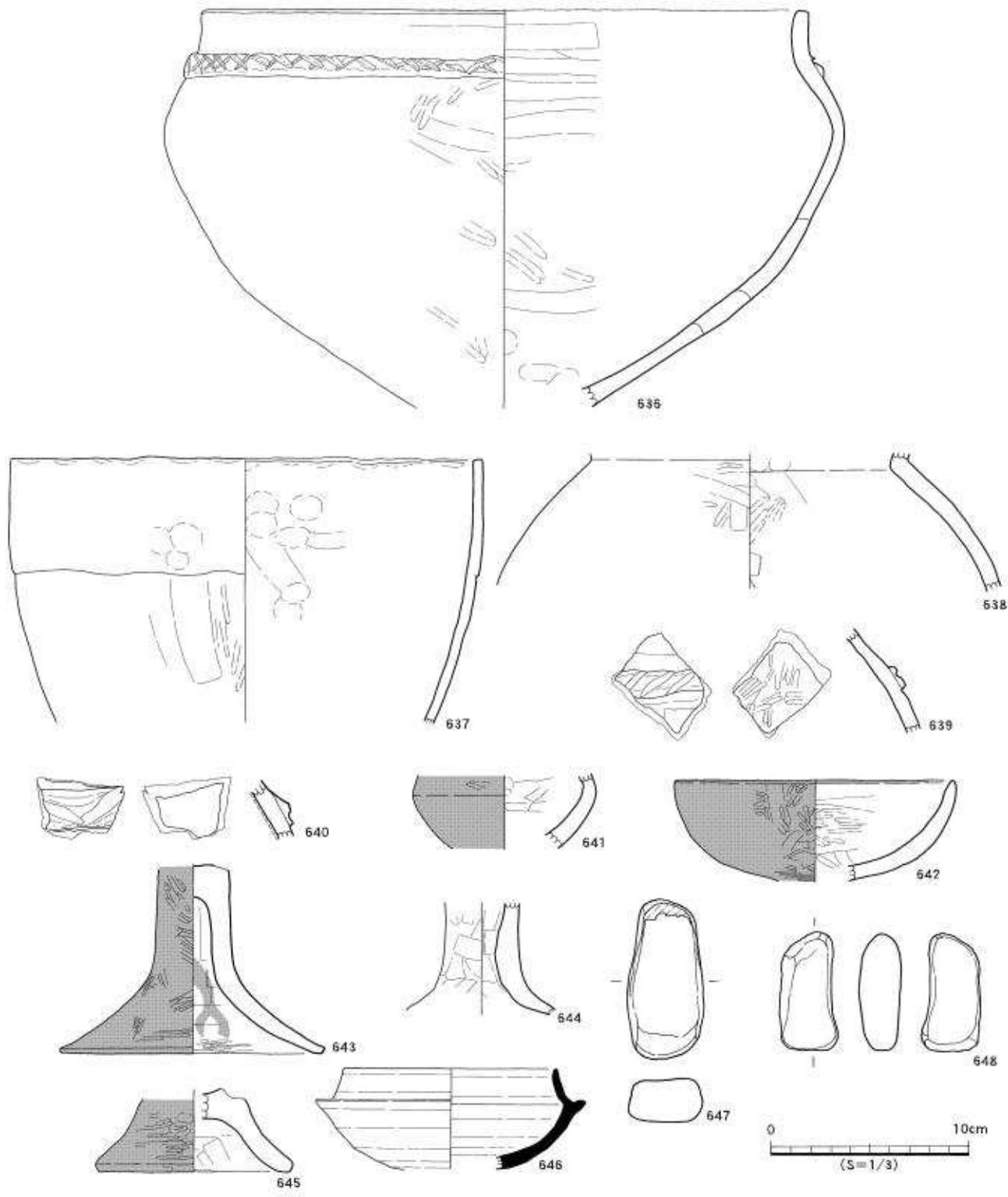
### 竪穴住居跡64号（第312～314図）

G・H-26区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4.6m、短辺4mの隅丸長方形を呈する。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点では床面に硬化面等は認められず、埋土の記録を行い、ベルトを除去した後に再度床面を検出していった。硬化面の確認は出来なかつたが、西壁付近では埋土eが溝状に確認された。この埋土eは、他の住居跡では貼床に用いられるが、当住居跡では溝状に検出された。加えて、柱穴などの付帯施設も確認され、中央には炭化物を含んだ黒色土が土坑状に、その両側に2基の柱穴が存在する。溝状の掘り込みは、一辺にのみ認められ、幅は10～30cmで深さは均一ではなく不安定であった。この中からは遺物は出土していない。遺物は、総点で199点が出土し、この内の13点を図化し

た。636は、口縁部が直行し頸部に1条の貼付突帯をめぐらせる。突帯には格子状のキザミが施され、胴部は膨らむ。胴部から底部には急激にすぼまるため、口径の割に器高が低い。焼成は非常に良い。637は口縁部が内湾する器形を呈する。胴部との境には粘土接合面があり、外面にこれを残すことで段を有している。638～640は壺の破片である。640は幅広の貼付突帯で、キザミが鋸歯状を呈している。642は高壺の壺部である。口縁部が内湾気味に立ち上がり器壁がやや厚手の印象を受ける。645は赤色顔料が施される脚部である。鉢の可能性がある。646は、須恵器の壺身である。やや紫がかった色調を呈する。類似した資料が出土しており、これは先述した竪穴住居跡63号と接合している。647・648は寸詰まりの棒状砾である。

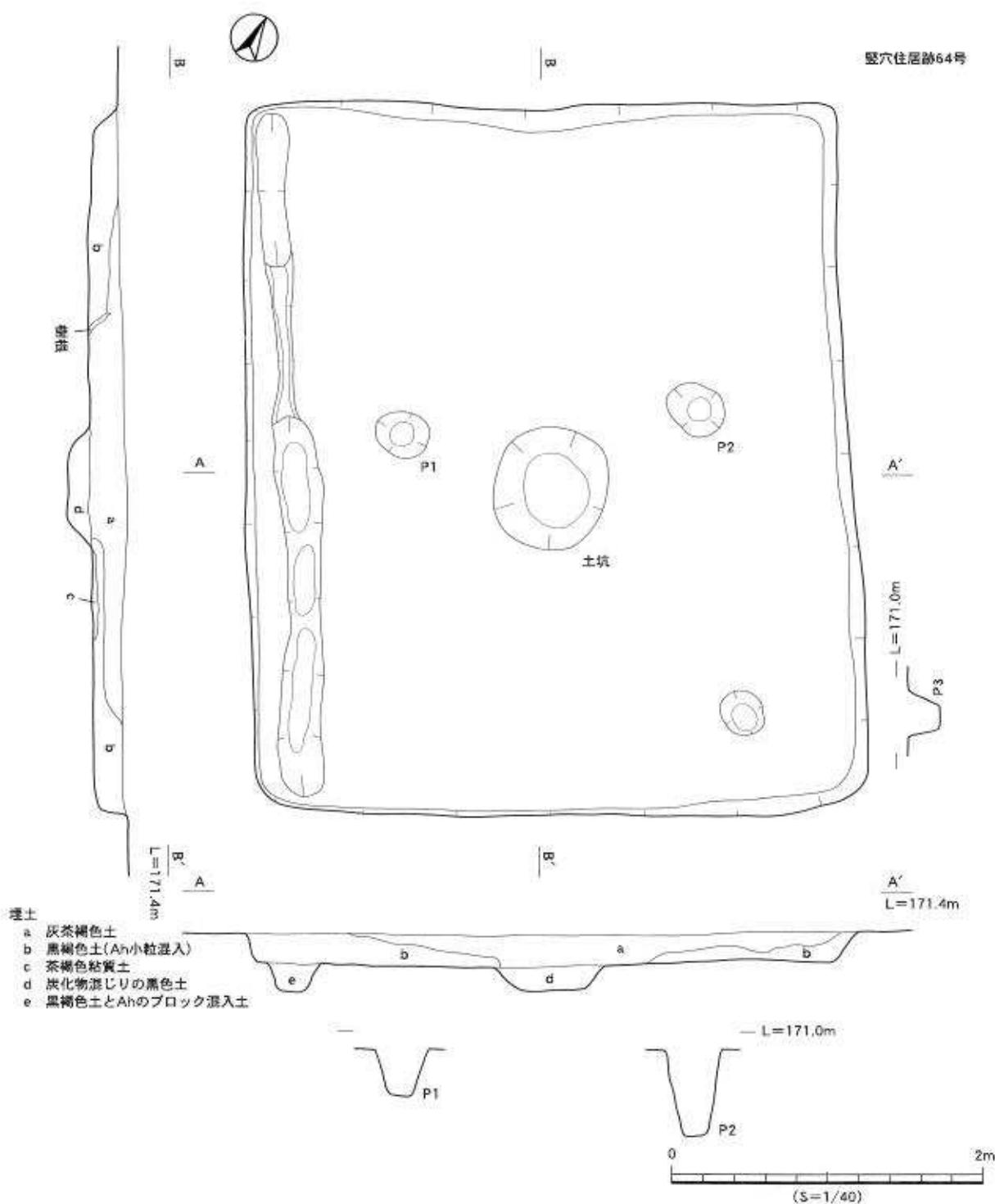


第312図 竪穴住居跡64号遺物出土状況



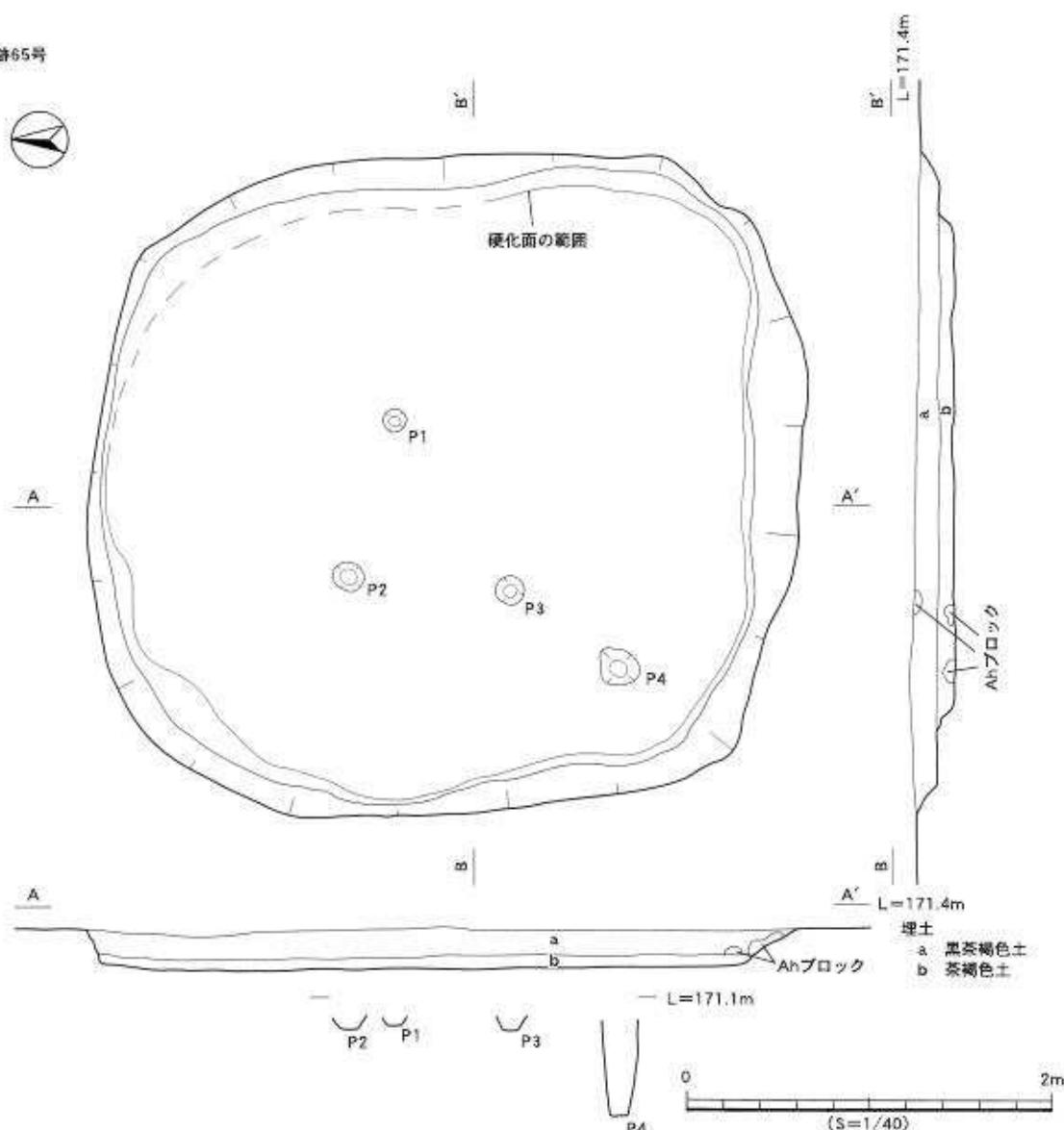
赤色顔料

第313図 積穴住居跡64号出土遺物



第314図 堅穴住居跡64号

豊穴住居跡65号



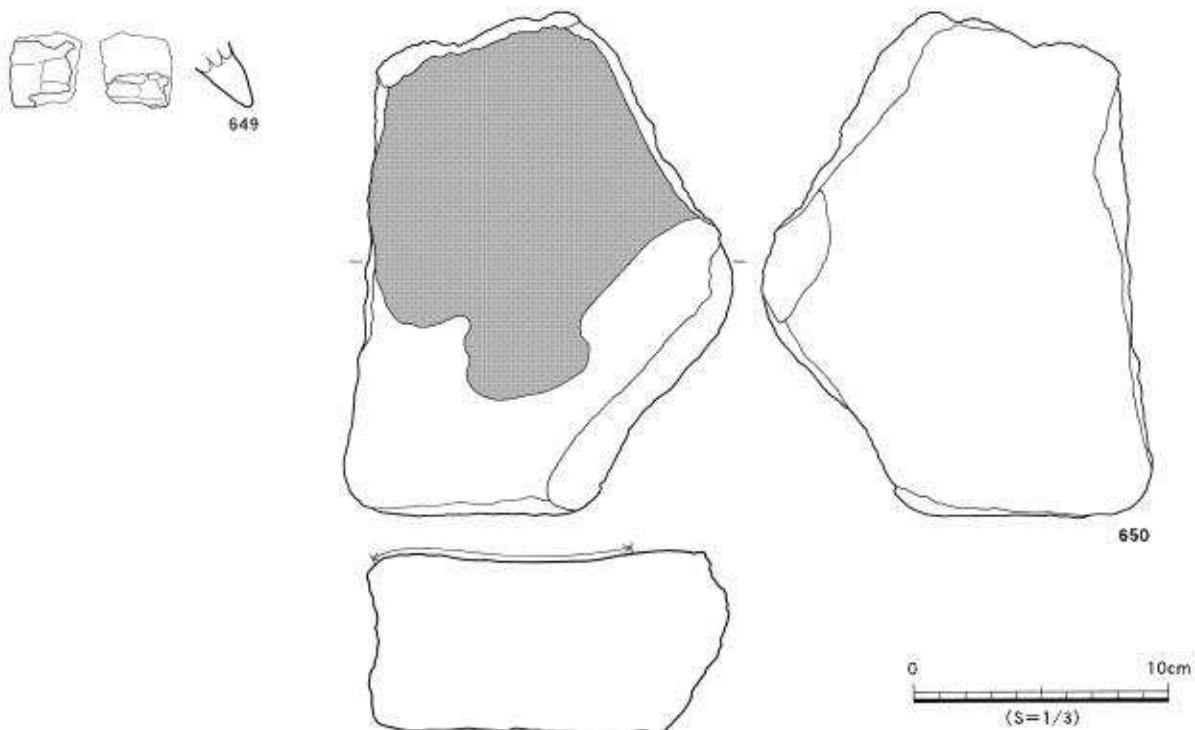
第315図 豊穴住居跡65号

## 豊穴住居跡65号（第315・316図）

H・I-26区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4m、短辺3.6mの隅丸長方形を呈する。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土aを掘り下げるに、アカホヤと茶褐色土の混在土が見られ、この上面が硬化していたためにここを床面と判断した。

柱穴などの付帯施設は、床面では捉えることが出来ず、硬化面を除去した段階で4基の柱穴が確認された。P1～3は浅く柱穴としては不安も残るが、P4は深くしっかりとをしている。全体的に柱穴の径が小さい印象を受ける。

遺物は、総点で70点が出土したが多くは小破片であり、図化できたものはこの内の2点に留まった。649は甕の脚部の破片である。650は大型の石皿片で中央部分が使用により凹んでいる。



第316図 竪穴住居跡65号出土遺物

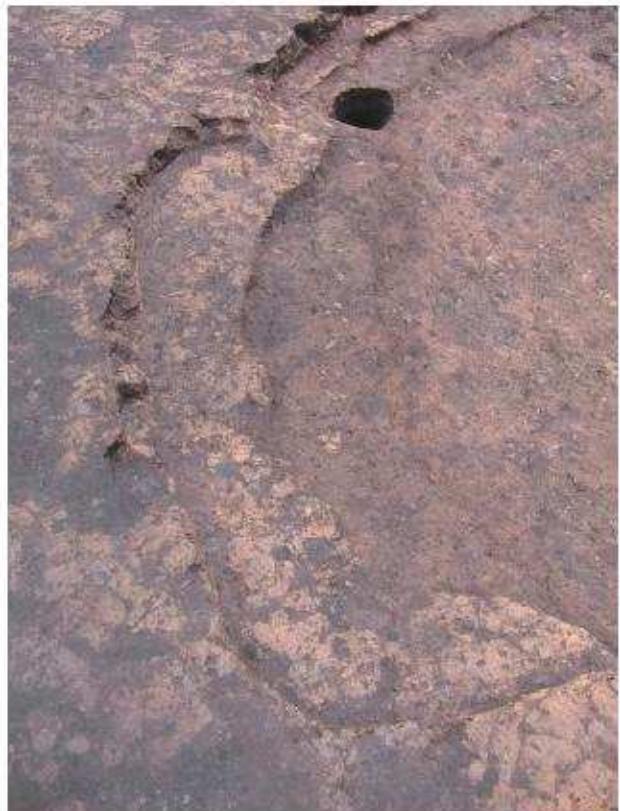
竪穴住居跡66号（第317・318図）

H・I-26・27区においてVI層上面で検出された。

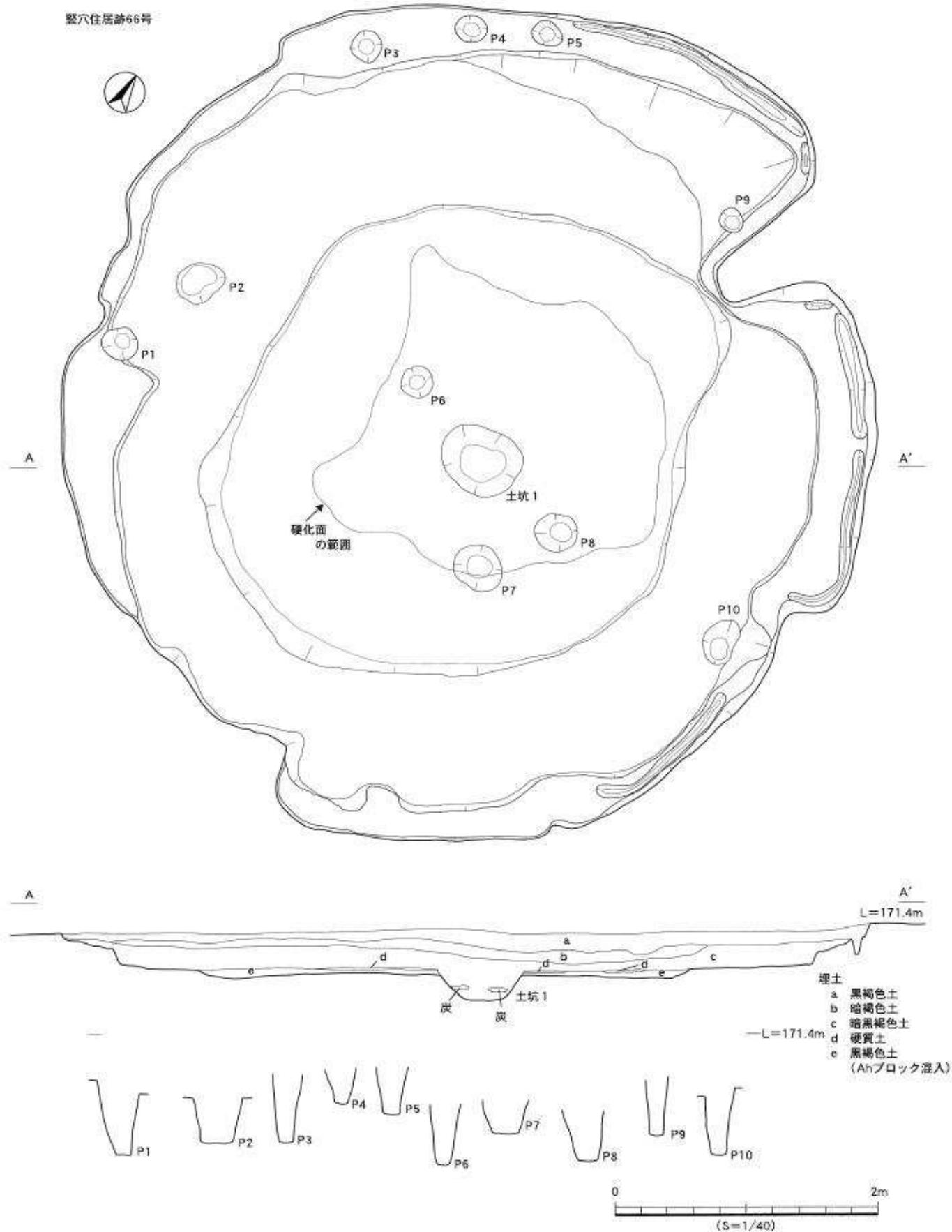
検出時のプランは、長辺6.3m、短辺6.2mの円形を基本とする。部分的にVI層のアカホヤ火山灰層が入り込んでおり花弁状を呈していた。このため、検出当初から花弁形住居を想定して調査を進めていった。

調査は、検出時にプランをつかむことのできた花弁の中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。花弁状のプランであることから、2段掘りを想定しながら調査を進めていったが、張り出しの付け根部分より外側で段落ちが見られ、北側の花弁ではなだらかな傾斜で中央に移る。中央部分には貼床と思われる埋土の変化に加えて、より中央部分では硬化面が確認された。このことから、この面を床面と判断し、埋土の記録を行いベルトを除去していった。この時中央に炭化物を多く含む土坑が検出された。この炭化物は放射性炭素年代測定を実施し、 $2,045 \pm 20$  yr BPという結果が示されている。柱穴などの付帯施設の確認は、中央では硬化面を除去した段階で3基が確認され、貼床より外側では床面検出の際に7基の柱穴が確認された。また、花弁の壁際には壁帶溝が部分的に見られた。この壁帶溝は、連続はせず途切れ途切れに検出された。

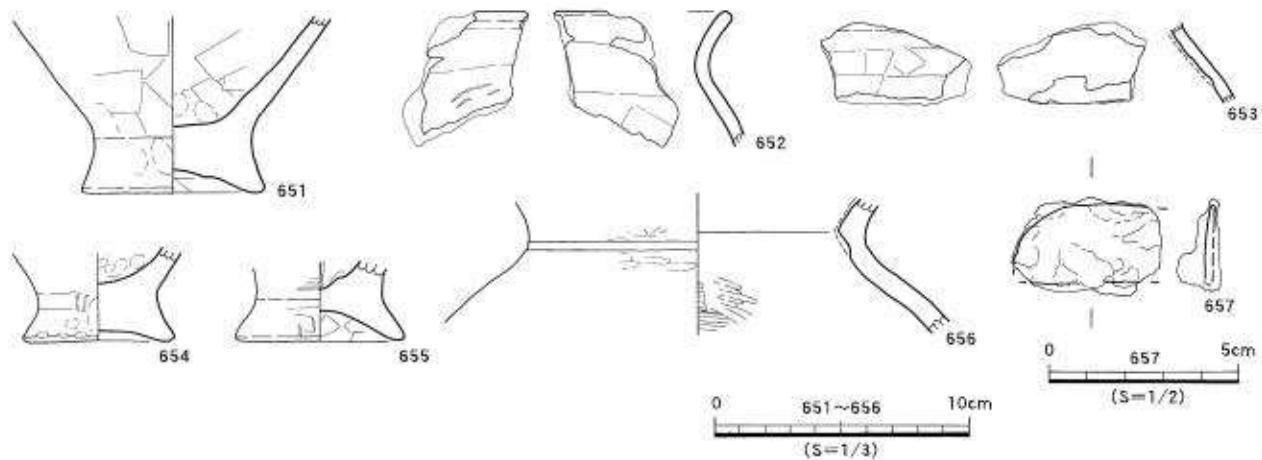
遺物は、面積の割にはほとんど出土せず、小破片が大半を占め、総点で137点が出土し、この内の7点を図化した。657は鉄製品であるが、器種や刃部を特定できなかつた。



壁帶溝検出状況



第317図 縫穴住居跡66号

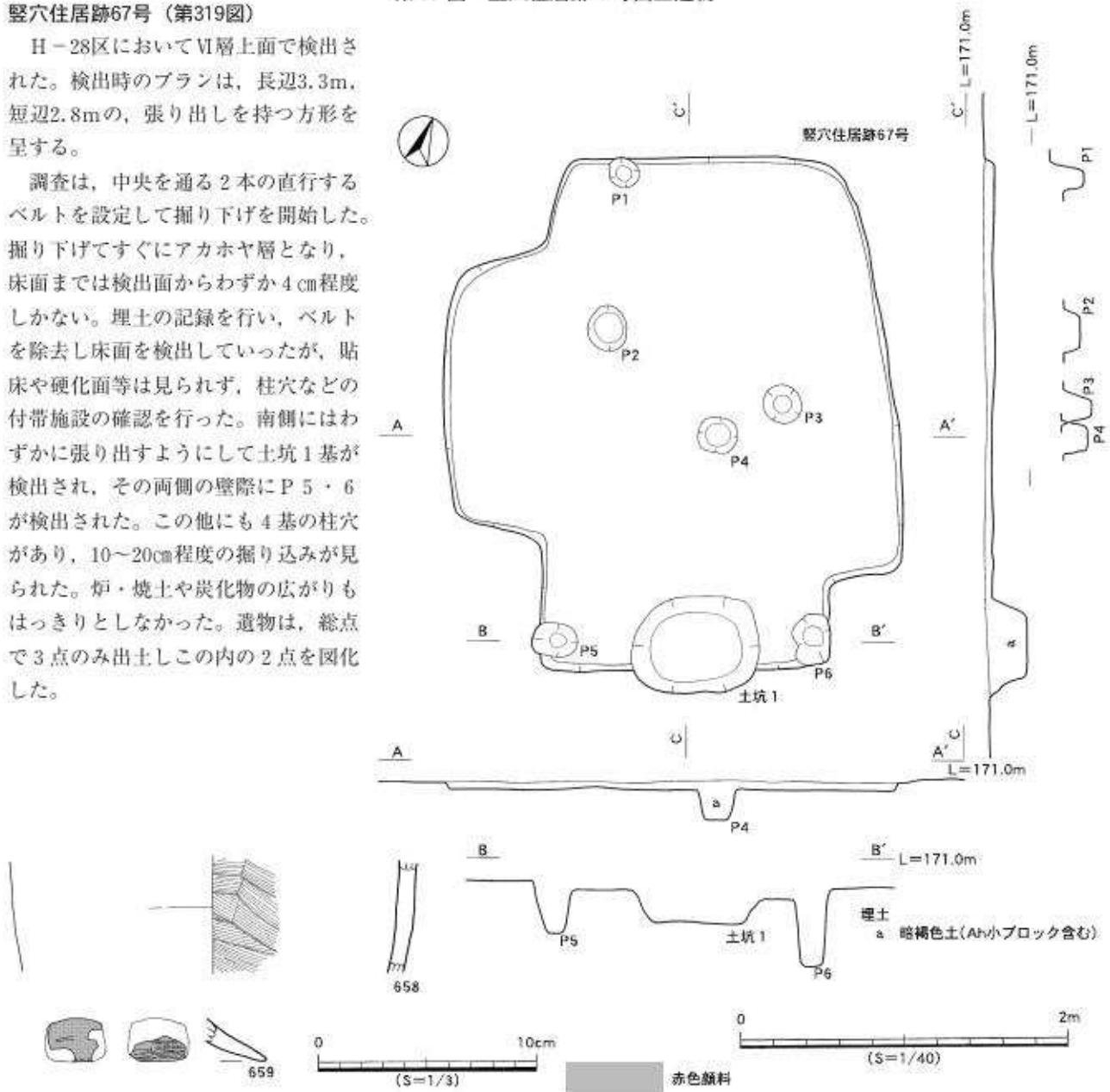


第318図 竪穴住居跡66号出土遺物

#### 竪穴住居跡67号（第319図）

H-28区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.3m、短辺2.8mの、張り出しを持つ方形を呈する。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。掘り下げてすぐにアカホヤ層となり、床面までは検出面からわずか4cm程度しかない。埋土の記録を行い、ベルトを除去し床面を検出していったが、踏床や硬化面等は見られず、柱穴などの付帯施設の確認を行った。南側にはわずかに張り出るようにして土坑1基が検出され、その両側の壁際にP5・6が検出された。この他にも4基の柱穴があり、10~20cm程度の掘り込みが見られた。炉・焼土や炭化物の広がりもはっきりとしなかった。遺物は、総点で3点のみ出土しこの内の2点を図化した。



第319図 竪穴住居跡67号・出土遺物

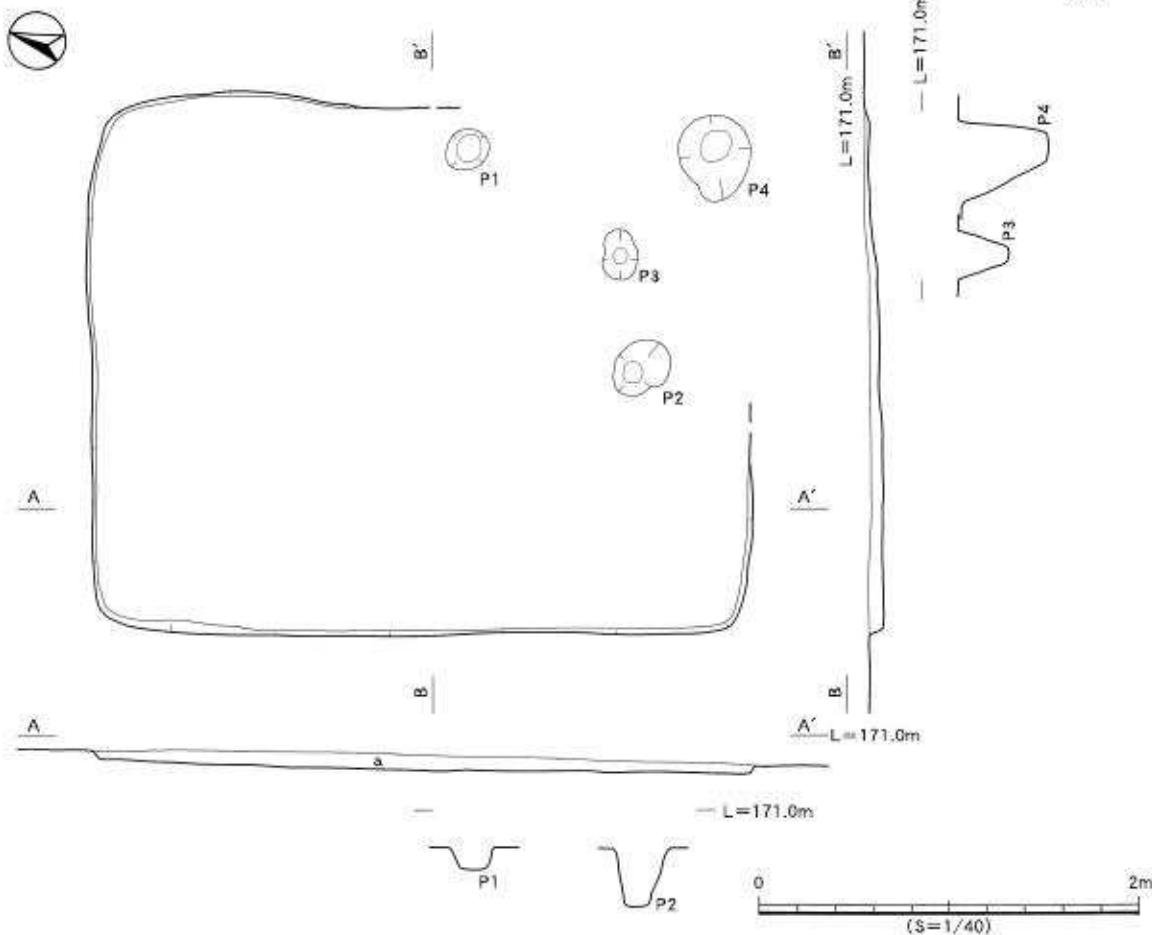
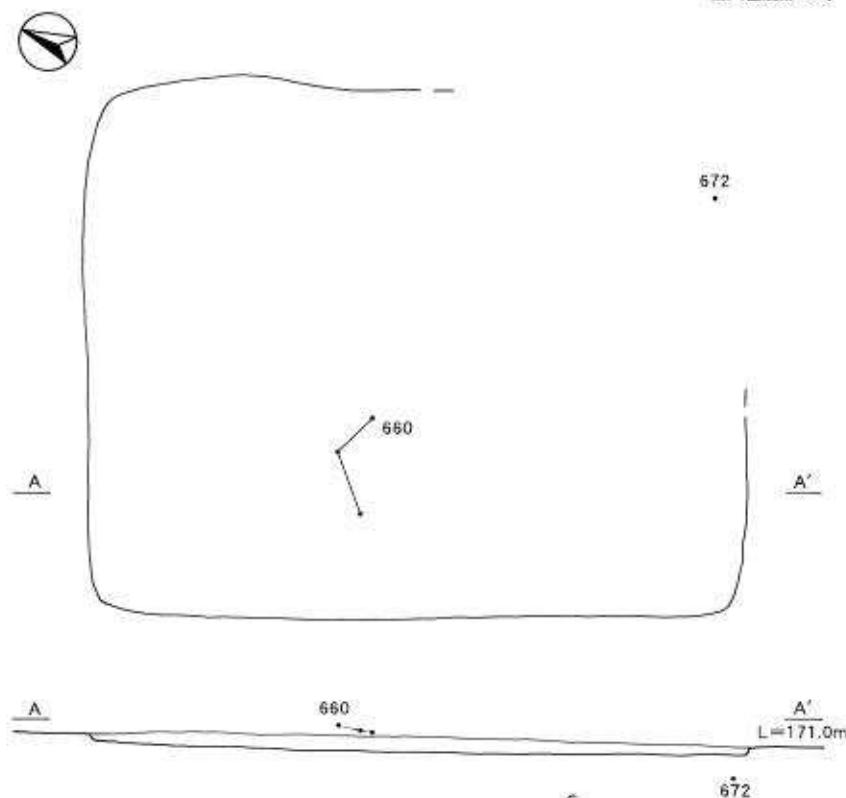
豊穴住居跡68号（第320・321図）

I-27・28区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.5m、短辺2.8mの隅丸長方形で、東南側のプランは検出できなかった。

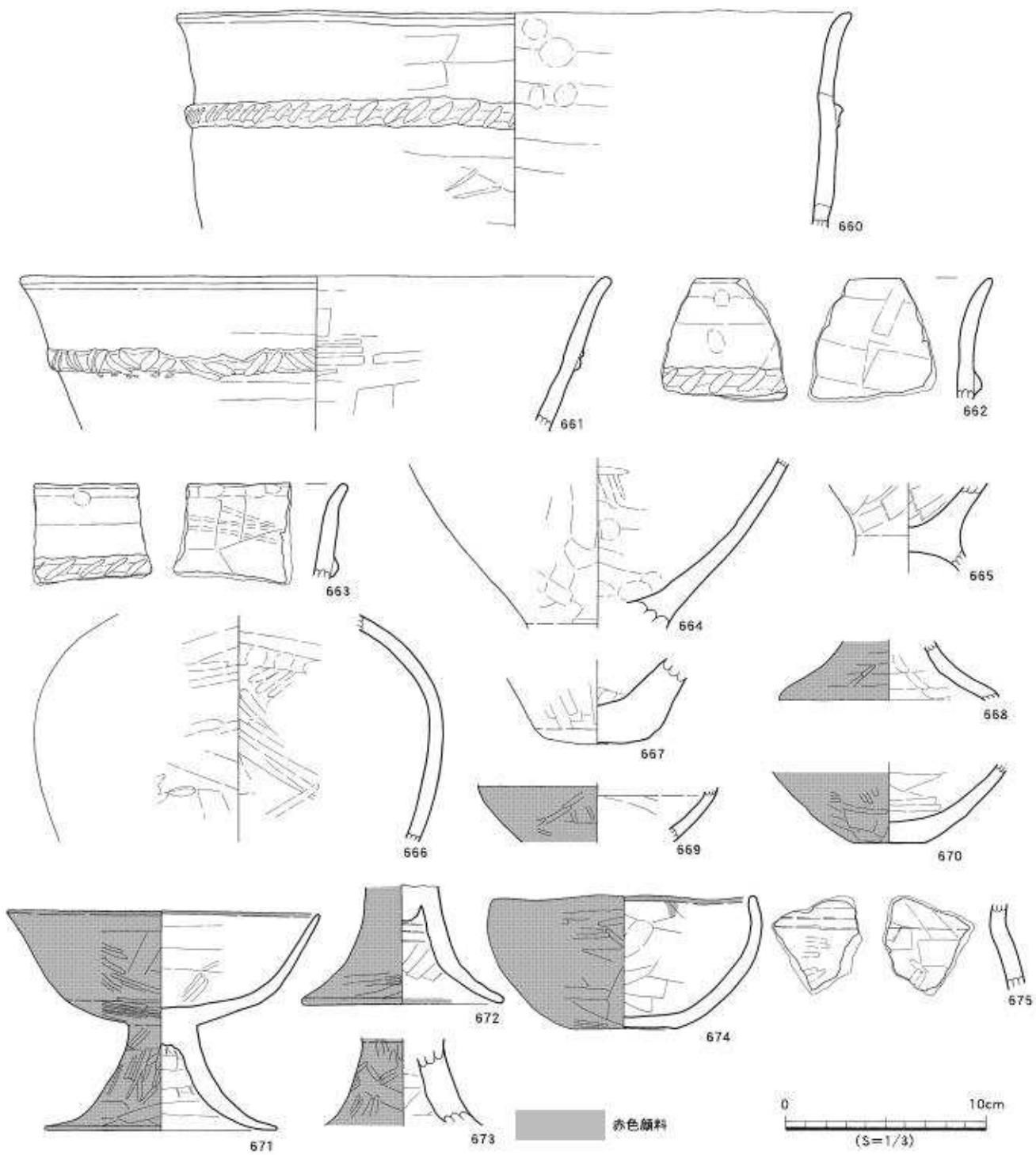
調査は、長軸プランを捉えられる箇所を基準にベルトを設定し、これに直行するもう1本のベルトを設定した。掘り下げてすぐにアカホヤ面に達し、検出面から床面まで非常に浅い。床面には硬化面などは見られず住居としての不確定な要素も多い。柱穴などの付帯施設は、床面で確認されたが、4基共に掘り込み位置を検出できなかった部分に属する。このため、これらが厳密に伴うかはわからない。炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。遺物は、総点で194点が出土し、この内16点を図化した。大半を一括して取り上げていったが、取り上げの際に赤色顔料

豊穴住居跡68号

672



第320図 豊穴住居跡68号

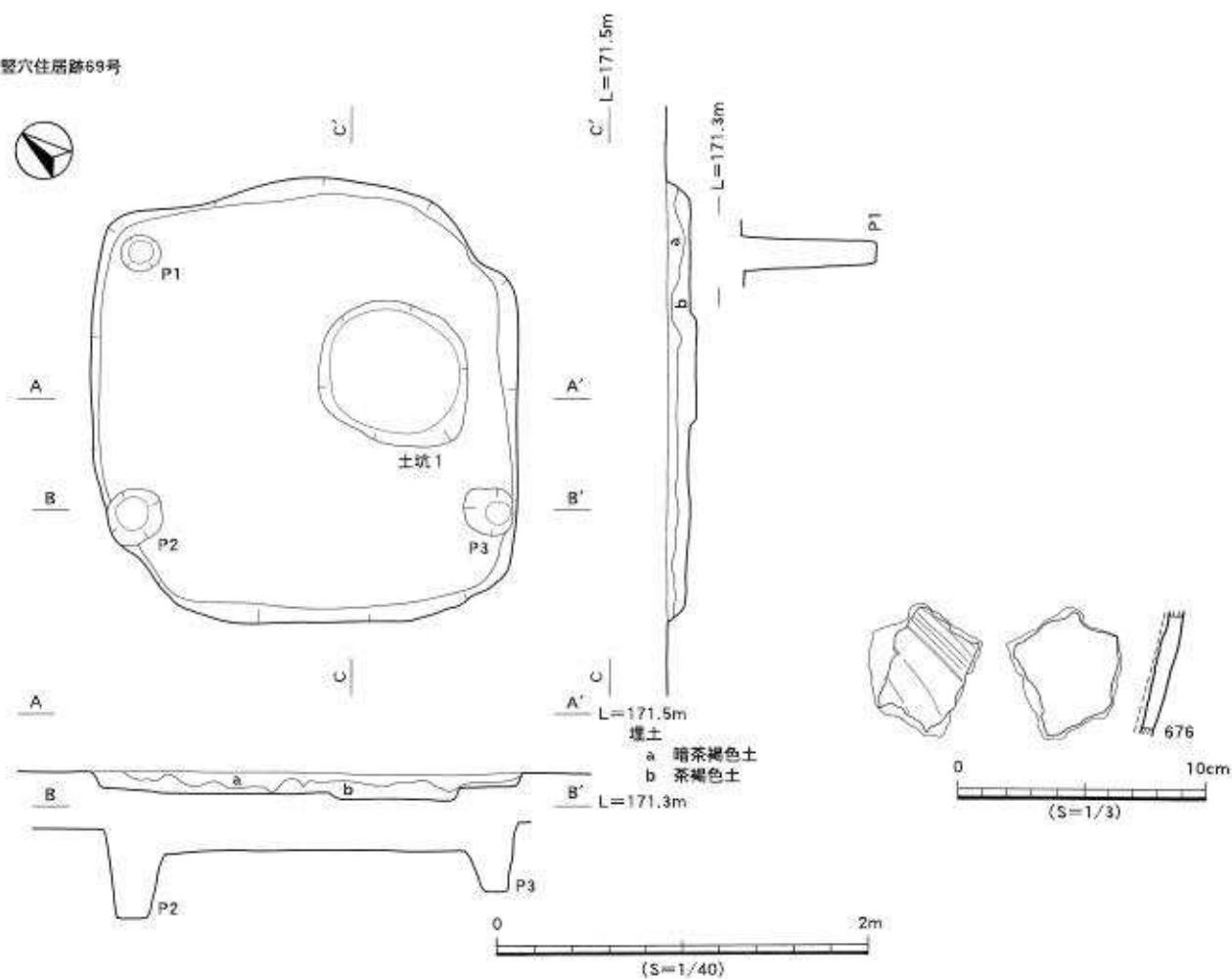


第321図 竪穴住居跡68号出土遺物

が塗布されている資料が多い印象を受けた。660～663は甕の口縁部である。口縁部がわずかに外反し、特に口縁端部を外へ折り曲げるような特徴が見られる。668・669は墘である。668が胴部屈曲部下まで、669が胴部屈曲部から底部上端まで残存している。671は高坏で、直線的

な坏部は脚部付近で弱い稜を有して屈曲する。672は、坏部と脚部との接合に粘土円塊が用いられている。674は口縁部が内湾する鉢ないしは坏である。

豊穴住居跡69号



第322図 豊穴住居跡69号・出土遺物

豊穴住居跡69号（第322図）

J-28区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.4m、短辺2.4mの隅丸方形を呈する。

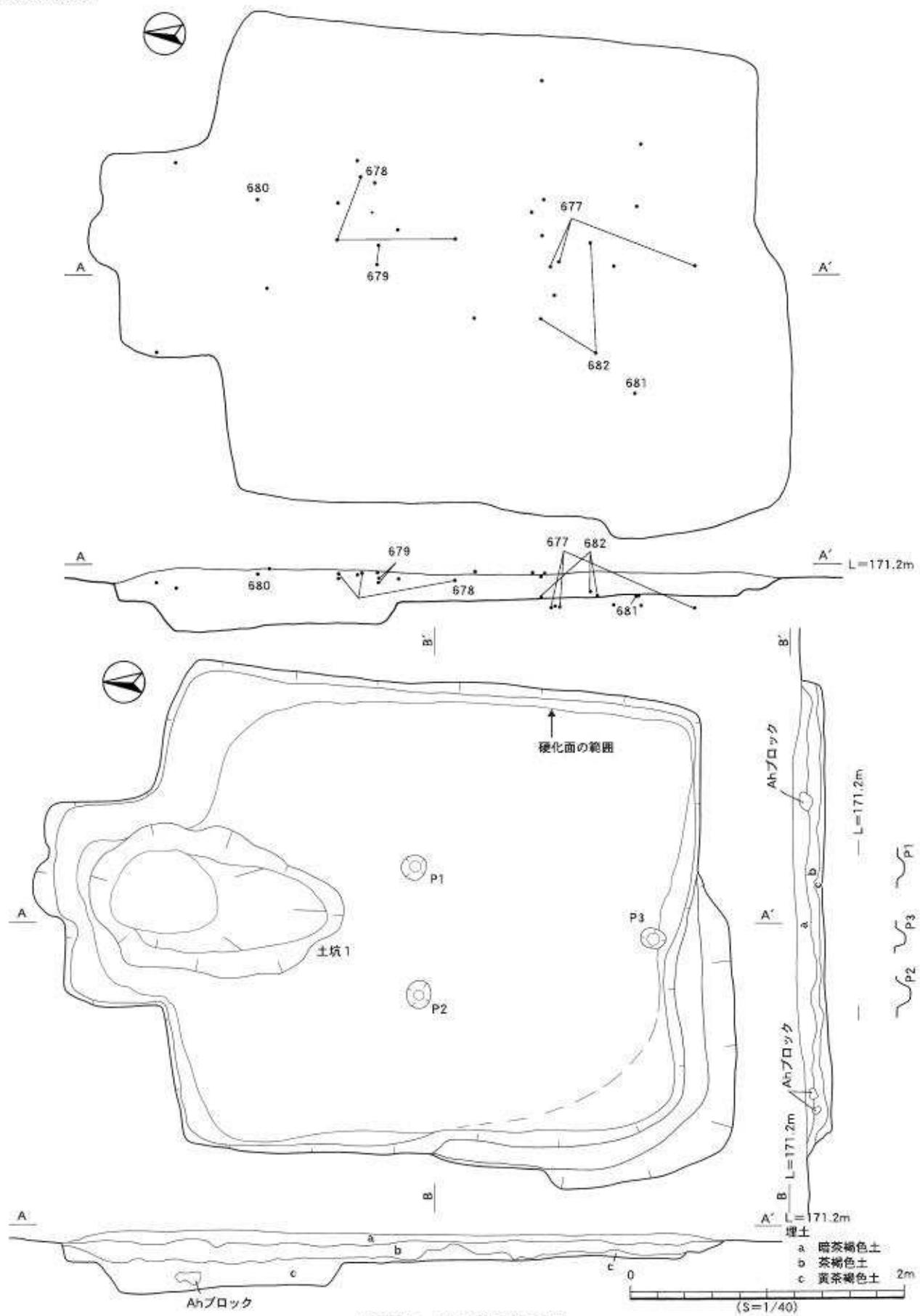
調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げていった。埋土は、2種類の堆積が見られたが、硬化面等は見られない。ベルトを除去したのちに床面を精査したところ、中央よりやや南側の所に浅い土坑が検出され、さらに、住居の四隅のうち3箇所から柱穴が検出された。この特徴から、残る一角にも柱穴があることが予想されたために検出に努めたが確認できなかった。炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。遺物は、総点で9点が出土し、この内の1点を図化した。676は甕の胴部片と思われる。内面の剥落が激しい。

豊穴住居跡70号（第323・324図）

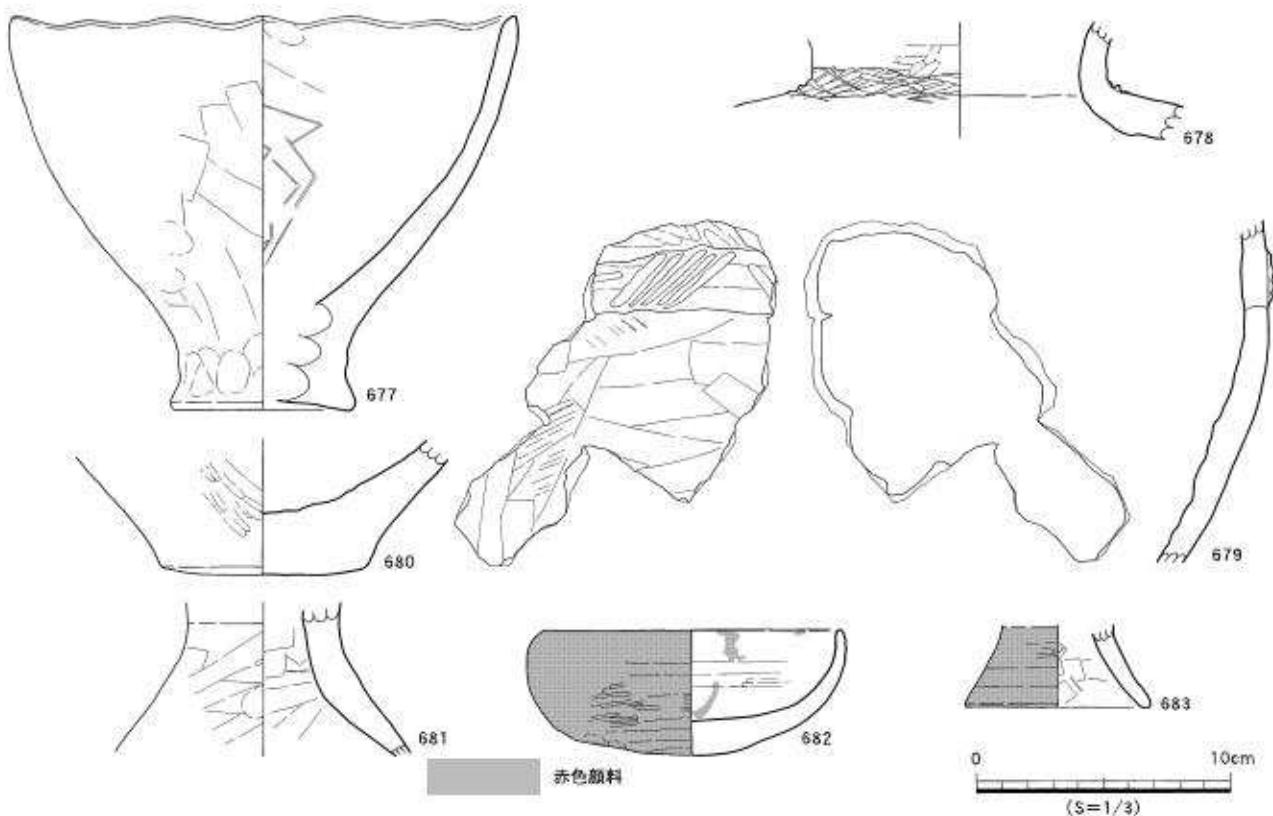
J-29区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4.9m、短辺3.5mの隅丸長方形を呈する。北側中央と南西側にやや張り出し状の突出部が認められた。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土も層下が硬化しており、中央部分が不安定ではあるがこれを床面と判断した。南西側の張り出しは、緩やかなスロープ状で平坦面は幅20cm程度ある。柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去した段階で3基の柱穴が確認された。3基共に検出面からの深さは浅い。P1とP2が住居跡のほぼ中央部に位置していることから、深さに若干の疑問も残るが両者は主柱穴であったとも考えられる。

また、北側の張り出しに合うように土坑が検出された。土坑床面北側にかけて緩やかな傾斜を有している。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしない。遺物は、総点で228点が出土し、この内の7点を図化した。



第323図 堅穴住居跡70号



第324図 竪穴住居跡70号出土遺物

#### 竪穴住居跡71号（第325・326図）

L-30区においてVI層下面で検出された。

検出時のプランは、長辺5.7m、短辺3.9mの隅丸長方形で、72号に切られている。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。検出時には中央付近に焼土・炭が集中する部分があり、検出時には床面が見えていた。埋土aは周辺の住居跡の状況などから貼床を含んだ硬化面下位に見られる土であり、この層を掘り下げると四隅が深く、中央が浅い状況になった。

柱穴などの付帯施設は、この埋土a層を掘り下げた段階で6基の柱穴が確認された。

遺物は、総点で93点が出土し、この内の8点を図化した。684・685は甕の破片である。690は高壙と判断した。このような器形は一見すると壠と捉えられなくもない。だが、口縁部が短く直線的に外傾する特徴と、胴部の球形が低く収まる点などから、竪穴住居跡62号で出土している資料との類似性を考え壠に分類した。691は棒状礫である。

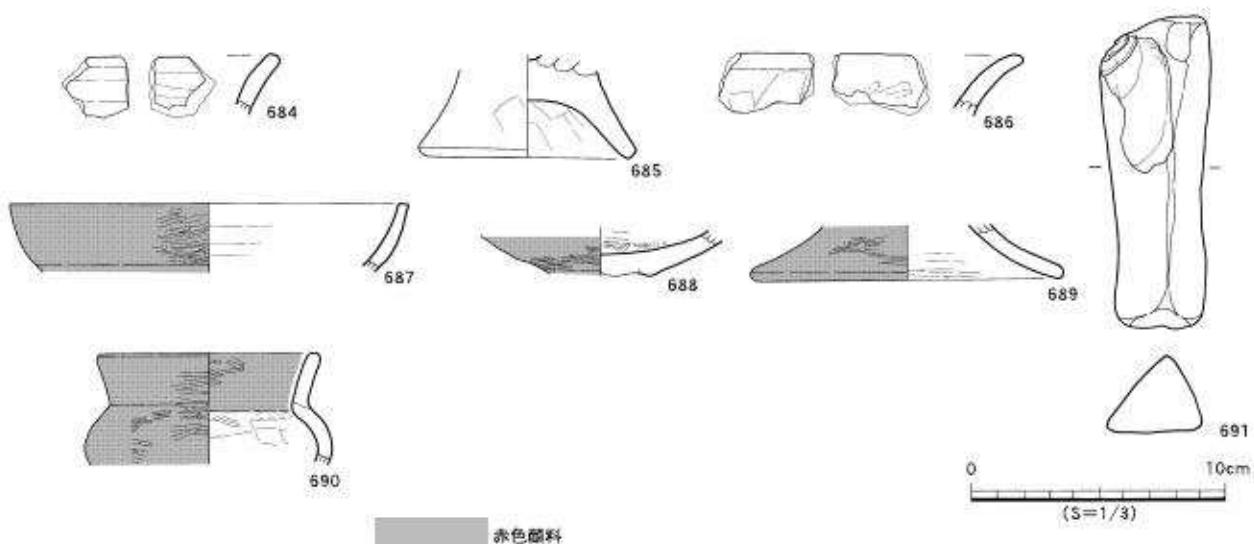
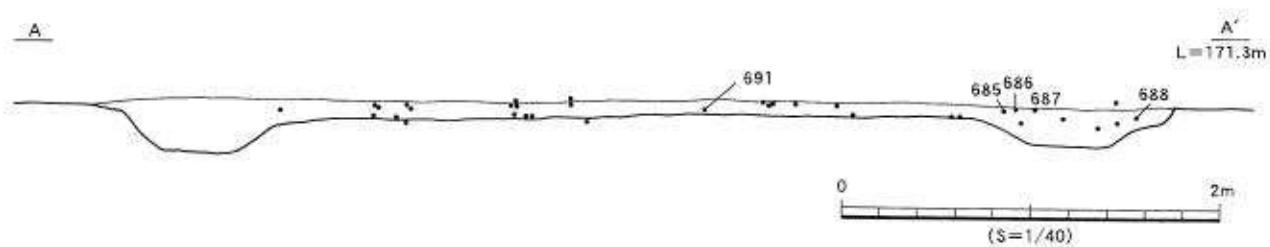
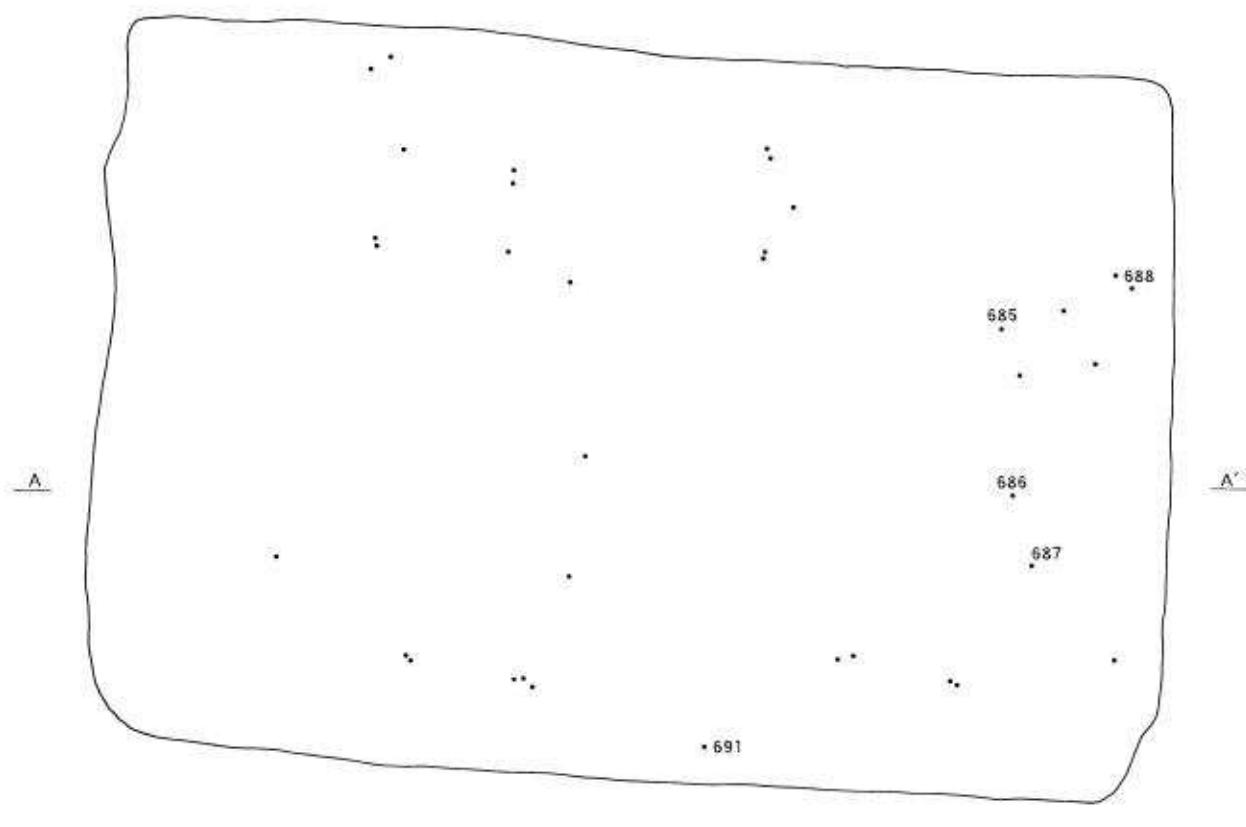
#### 竪穴住居跡72号（第327図）

L-29・30区においてVI層下面で検出された。検出時のプランは、長辺2.7m、短辺2.4mの隅丸長方形を呈する。検出時点では既に硬化面が広がっていた。南西に芋穴による擾乱があり、71号と切り合い関係もある。この関係は、検出時に既に71号を切ったプランが確認されている。

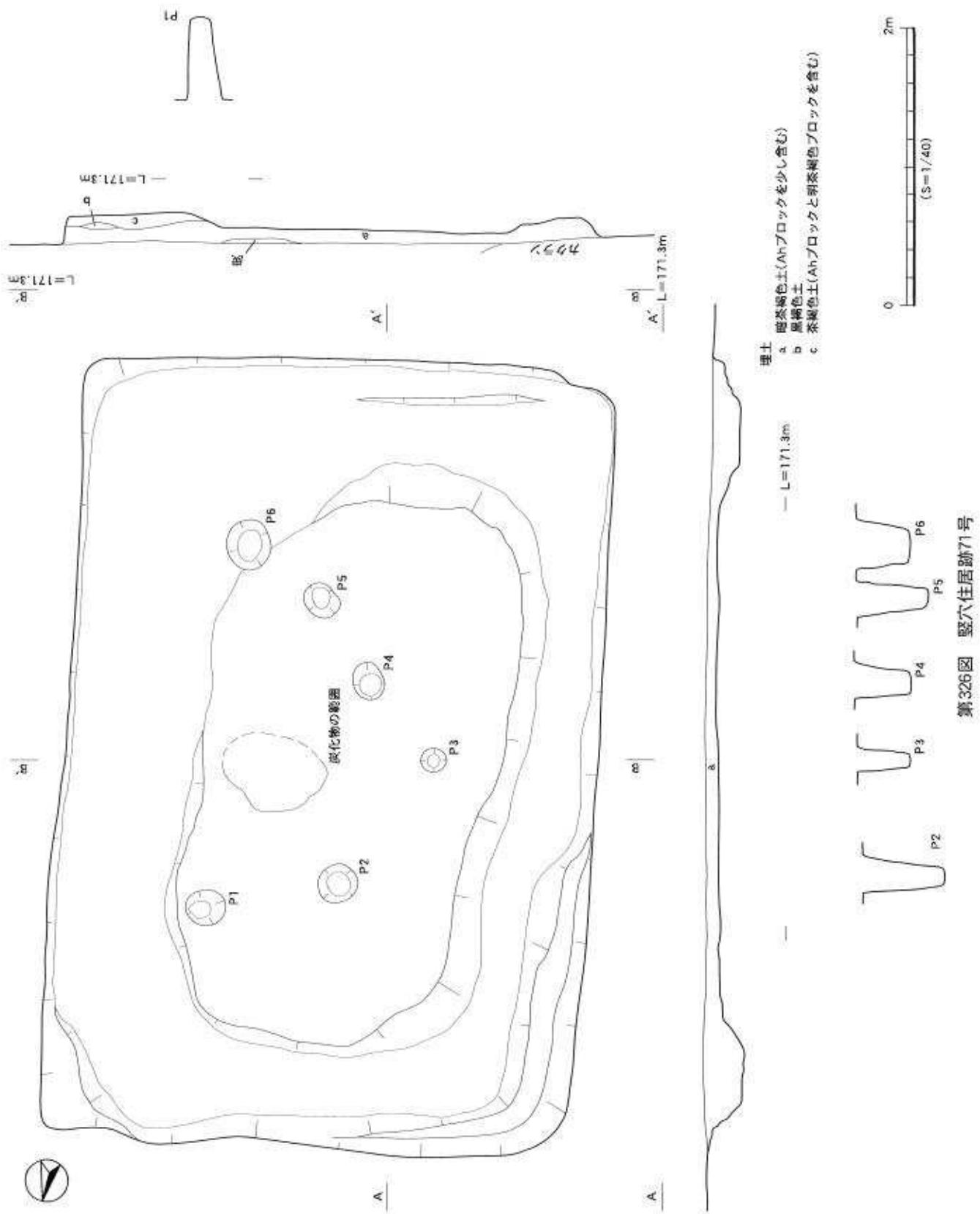
調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、硬化面を記録した後にこれを除去しながら作業を進めていった。床面は不安定で、2基の柱穴が確認できた。炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。

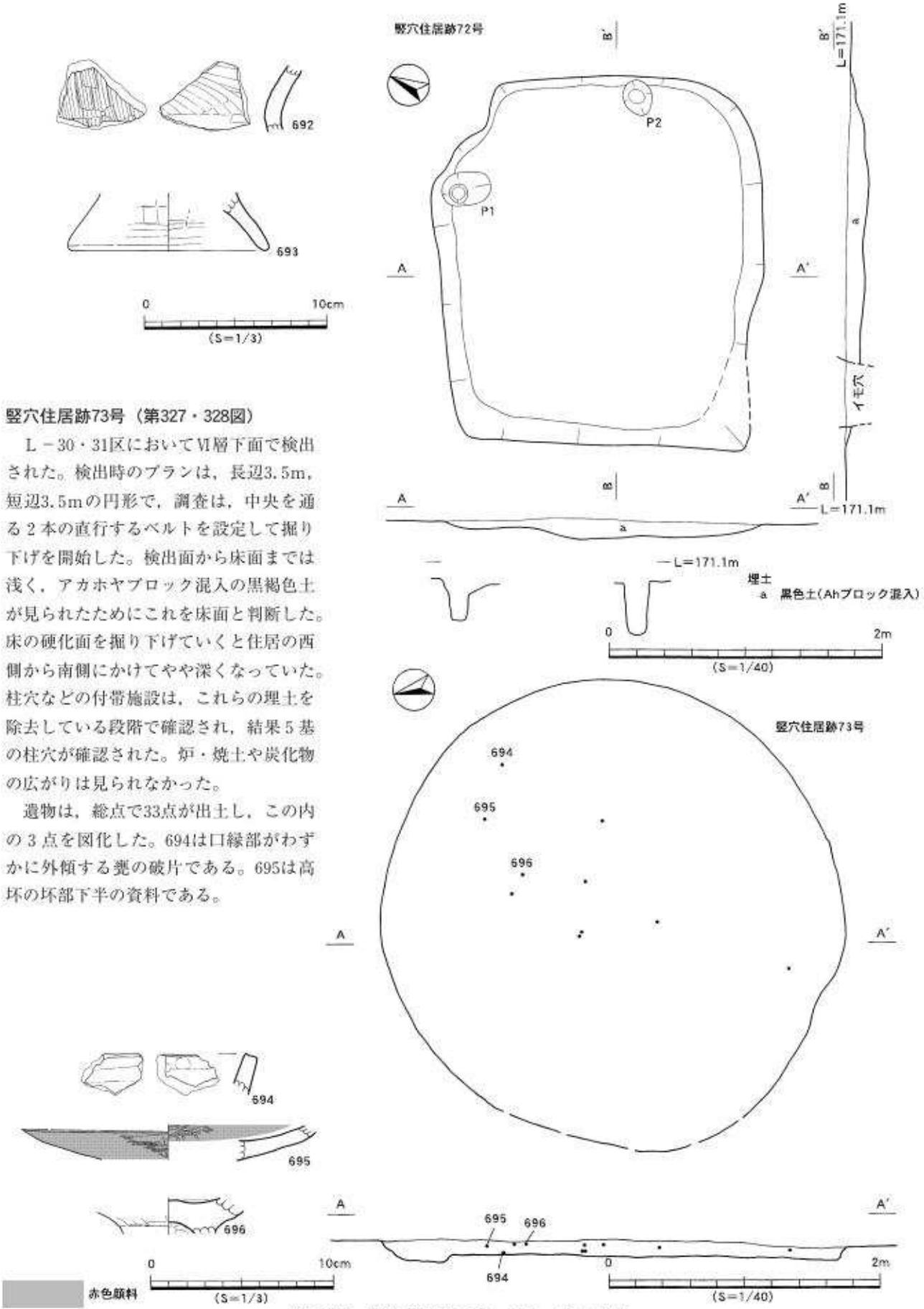
遺物は、総点で56点が出土し、この内の2点を図化した。692・693共に甕の破片である。692は口縁部付近の破片で、口縁部が外反し、外面には縦方向の工具痕が見られる。

竖穴住居跡71号

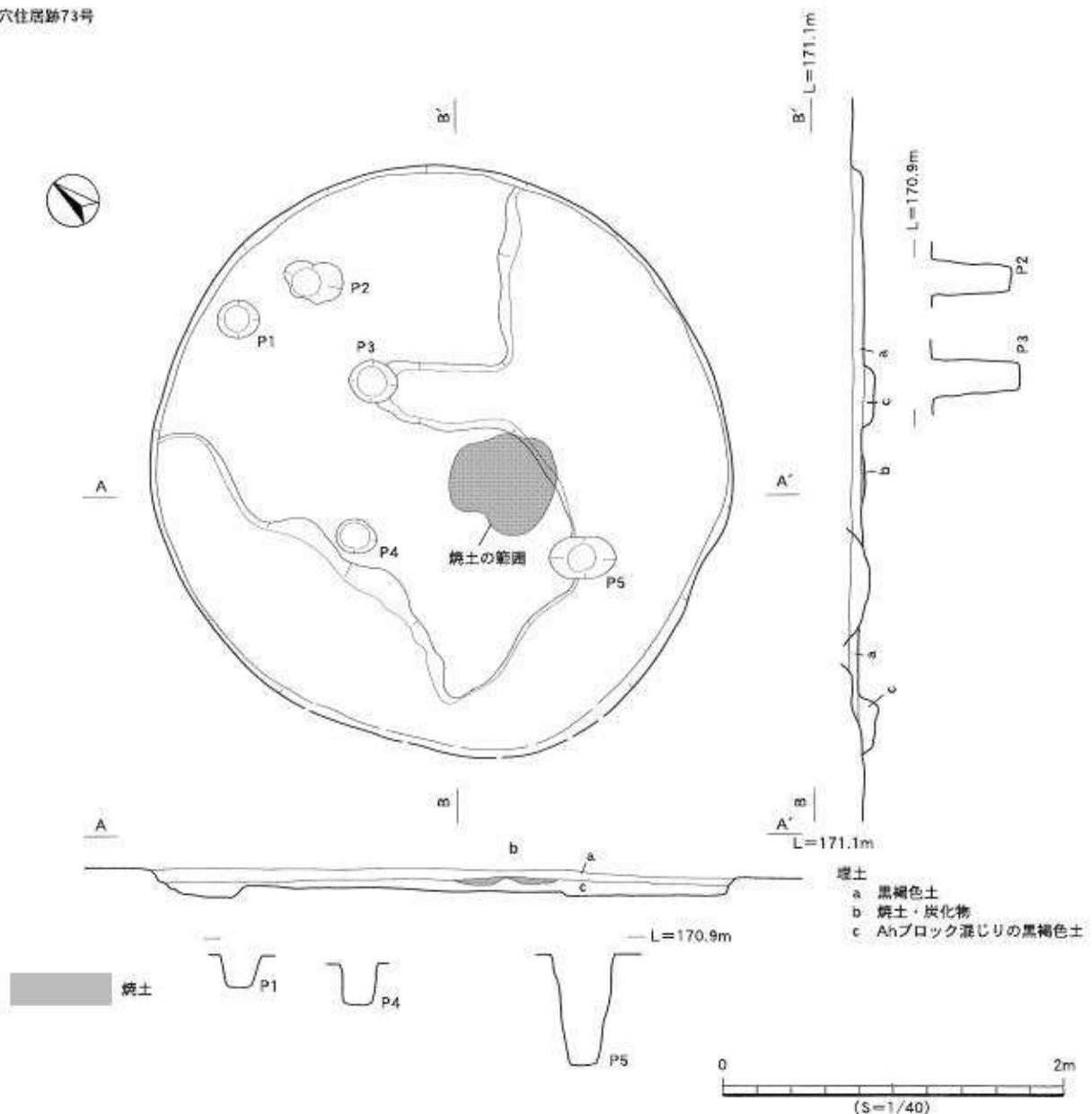


第325図 竖穴住居跡71号・出土遺物





第327図 縦穴住居跡72号, 73号・出土遺物



第328図 竪穴住居跡73号

## 竪穴住居跡74号（第329～332図）

L・M-31区においてVI層下面で検出された。検出時のプランは、長辺5.1m、短辺4.7mの隅丸長方形のプランを基調としながらも、いくつかの張り出しプランが認められた。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出を行った。その結果、西側は2段掘り状にテラス部分が検出されたが、南側へ行くに従い段は浅くなり、プランは見られなくなった。

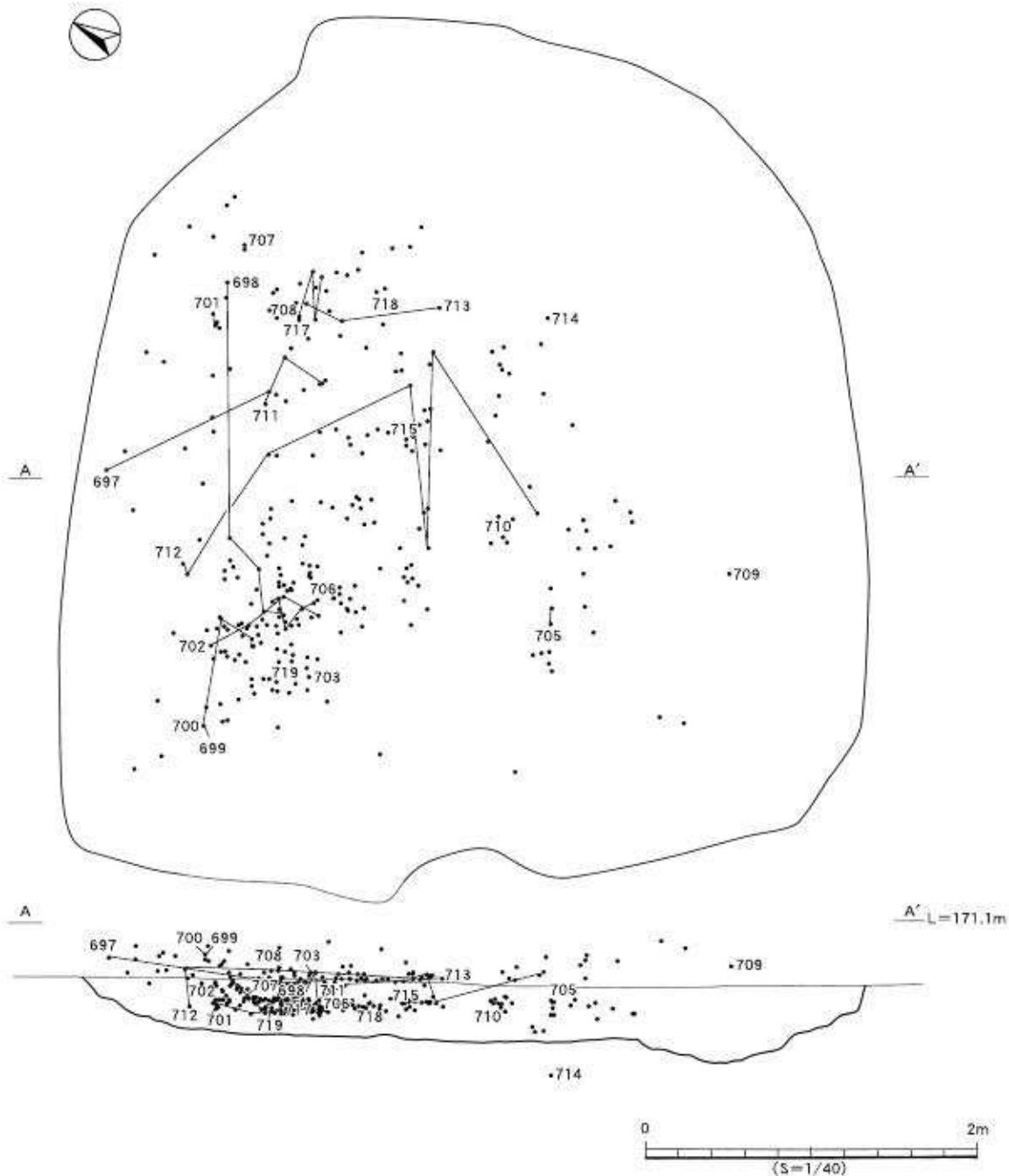
柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去した段階で9基の柱穴が確認された。P2とP5は検出面からの深さが約20cmと浅いが、2基以外のピットは深くしっかりとしている。この他に、中央が土坑状に深くなっているが、住居中央の凹みと連続するのかは両者間に攪乱が入り込

んでいるためにはっきりとしない部分もある。床面から出土した炭化物は、放射性炭素年代測定で $1,680 \pm 20$ yrBPと結果が示されている。

遺物は、総点で925点が出土し、この内の27点を図化した。697は口縁部が外反し胴部に貼付突帯をめぐらせる。突帯頂部にはキザミが施され、胴部は膨らむ。698は口縁部が外反する。胴部突帯はやや下方に貼付され、上下に交差する。胴部はわずかに膨らんで、口径や器高に比べると径の小さな底部へ至る。底部はわずかに脚が作出されている。700・701は口縁部が直行する壺である。701は胴部に浅い貼付突帯をめぐらせ、701には見られない。

706は口縁部が短く、直行する壺である。口縁部は平坦ではなく、一見すると波状口縁を呈して見える。711は高环の坏部である。口縁部は外反しやや大振りである。

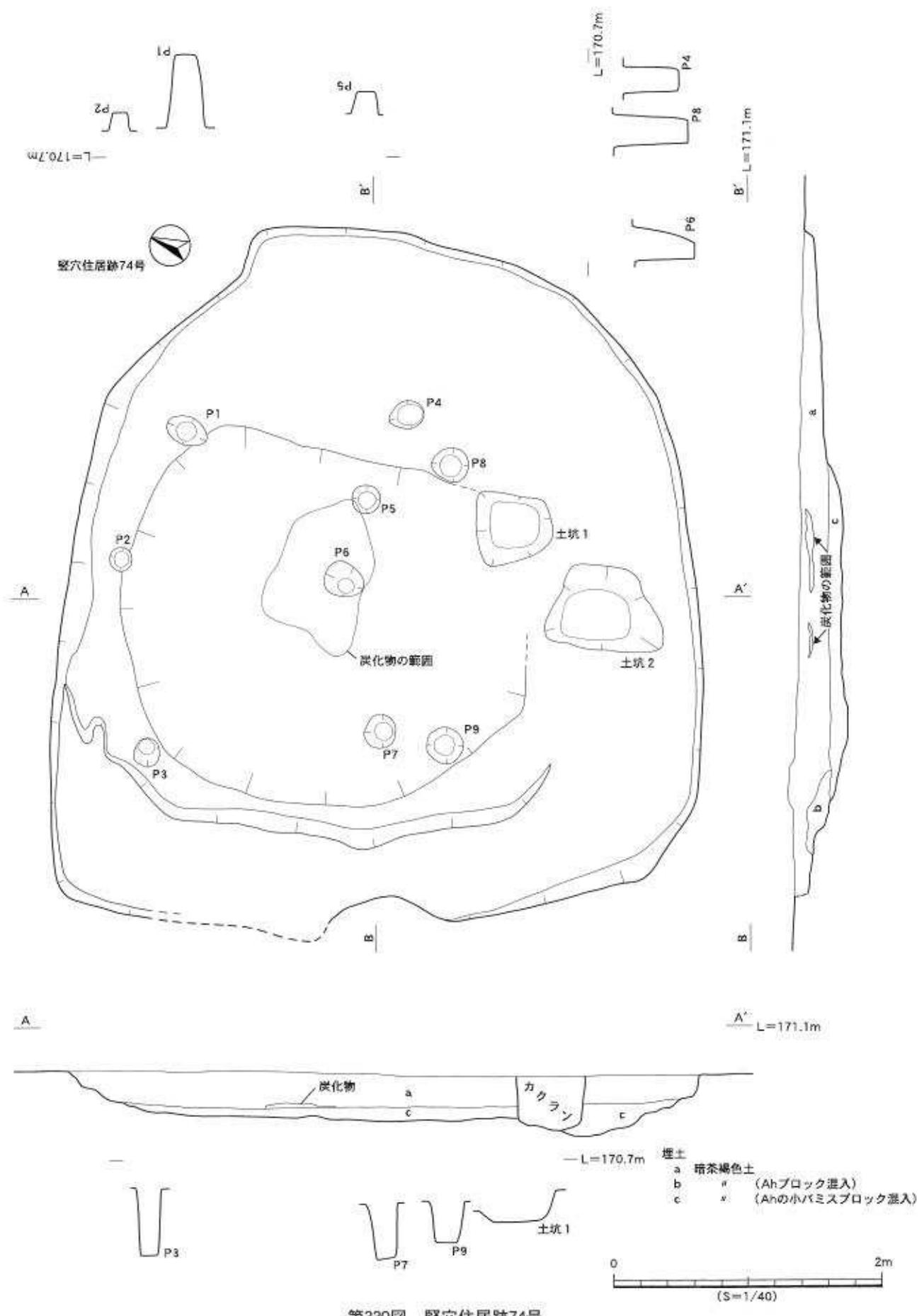
竪穴住居跡74号



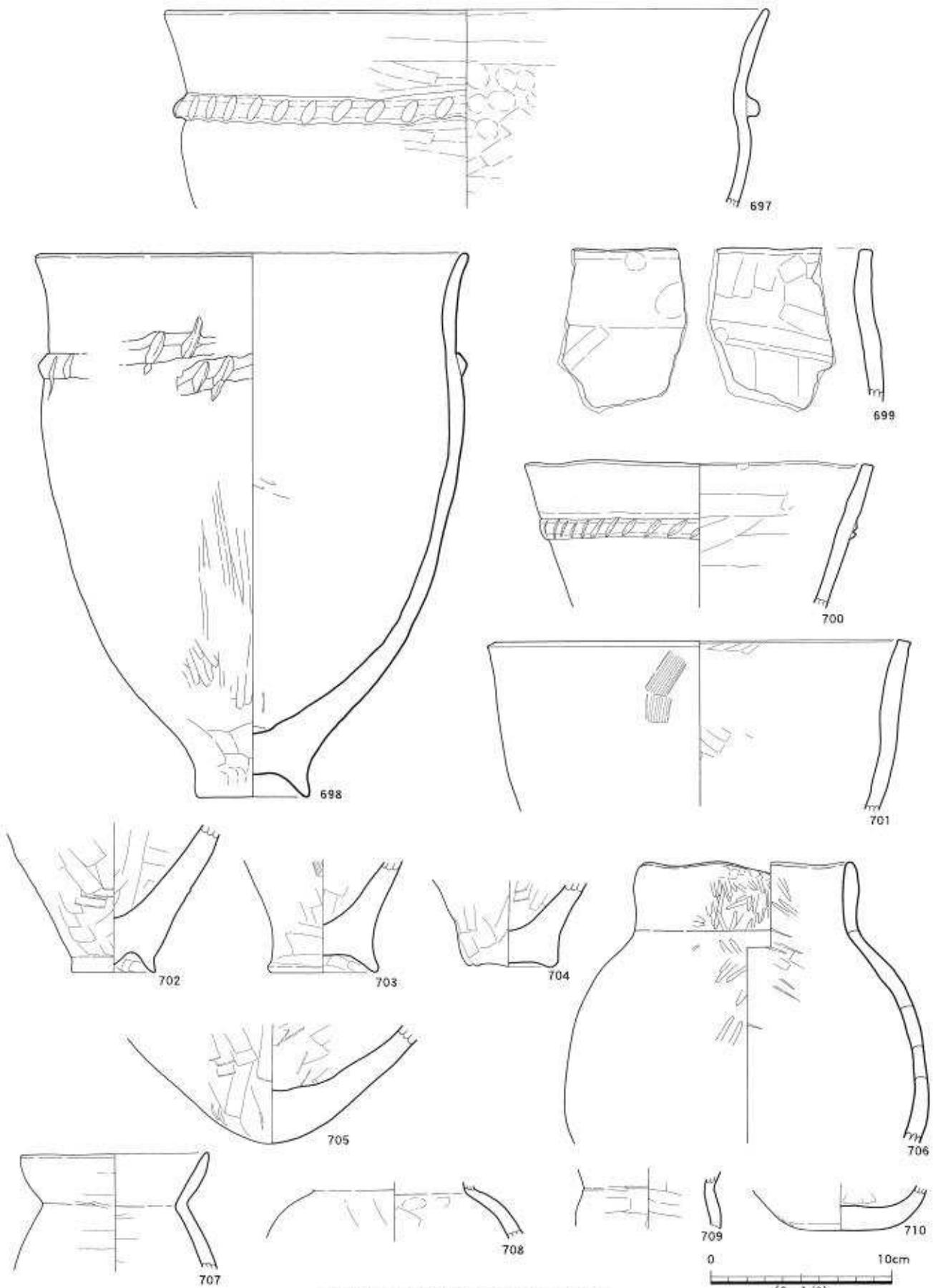
第329図 竪穴住居跡74号遺物出土状況

胴部は緩やかに丸みを帯びて脚部へと至る。712は壊部中位から脚部にかけての資料である。717は口縁部が直行してやや直線的に胴部で屈曲する。718は蓋を想定して図化した。脚部とも思える外面には指頭痕が残り、胴部は大きく外に向く。719は匙形の土製品と思われる。720は、竪穴住居跡のプラン検出時に出土したもので、磨製石斧片を転用したものかと思われる。敲打が施され

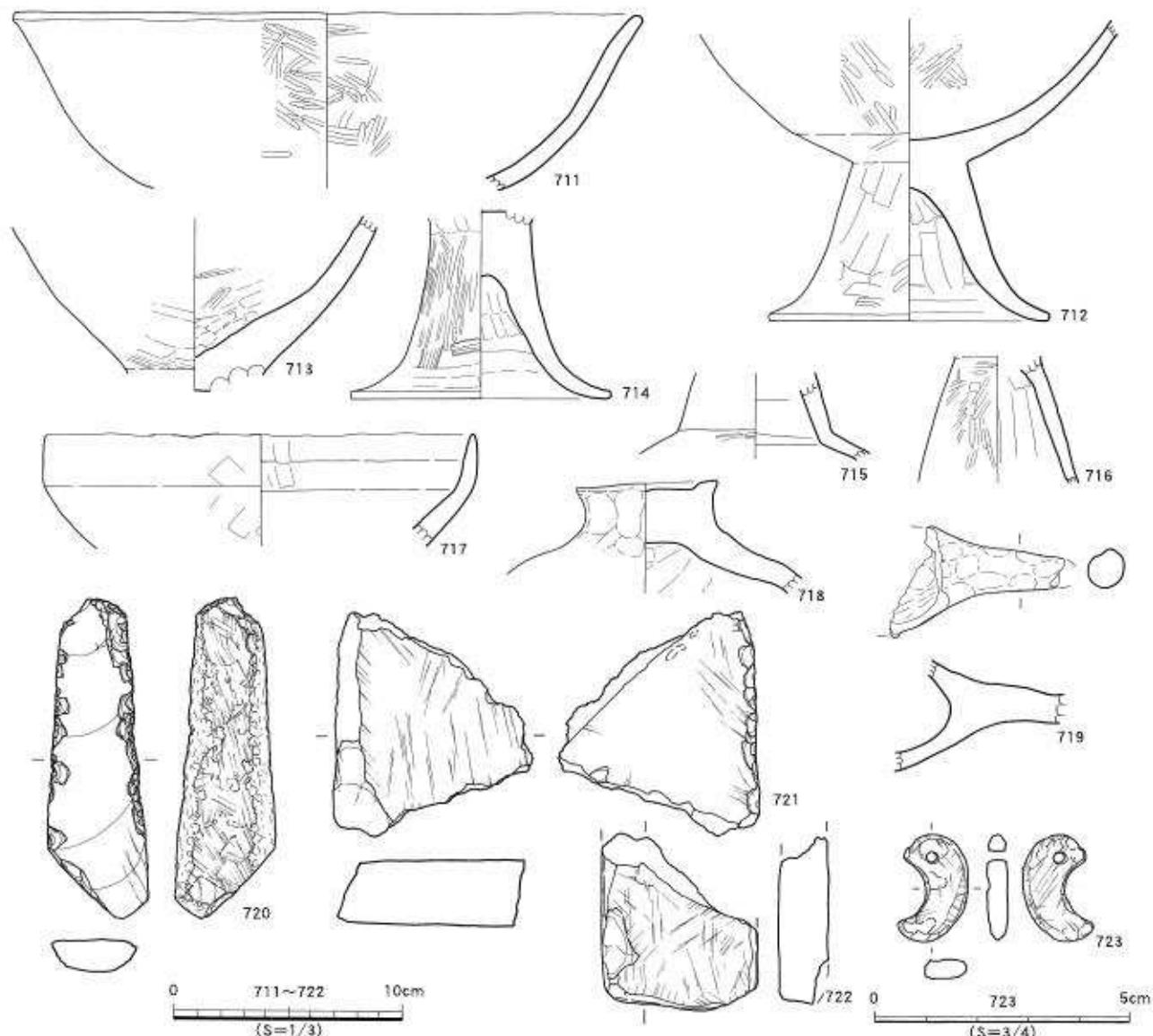
ている面から、両側辺に剥離が施されている。721・722は砥石である。723は頁岩製の勾玉である。



第330図 堅穴住居跡74号



第331図 竪穴住居跡74号出土遺物①



第332図 竪穴住居跡74号出土遺物②

竪穴住居跡75号（第333・334図）

L-32区においてVI層下面で検出された。

検出時のプランは、長辺4.2m、短辺4.2mの隅丸方形で、一見円形にも見える。

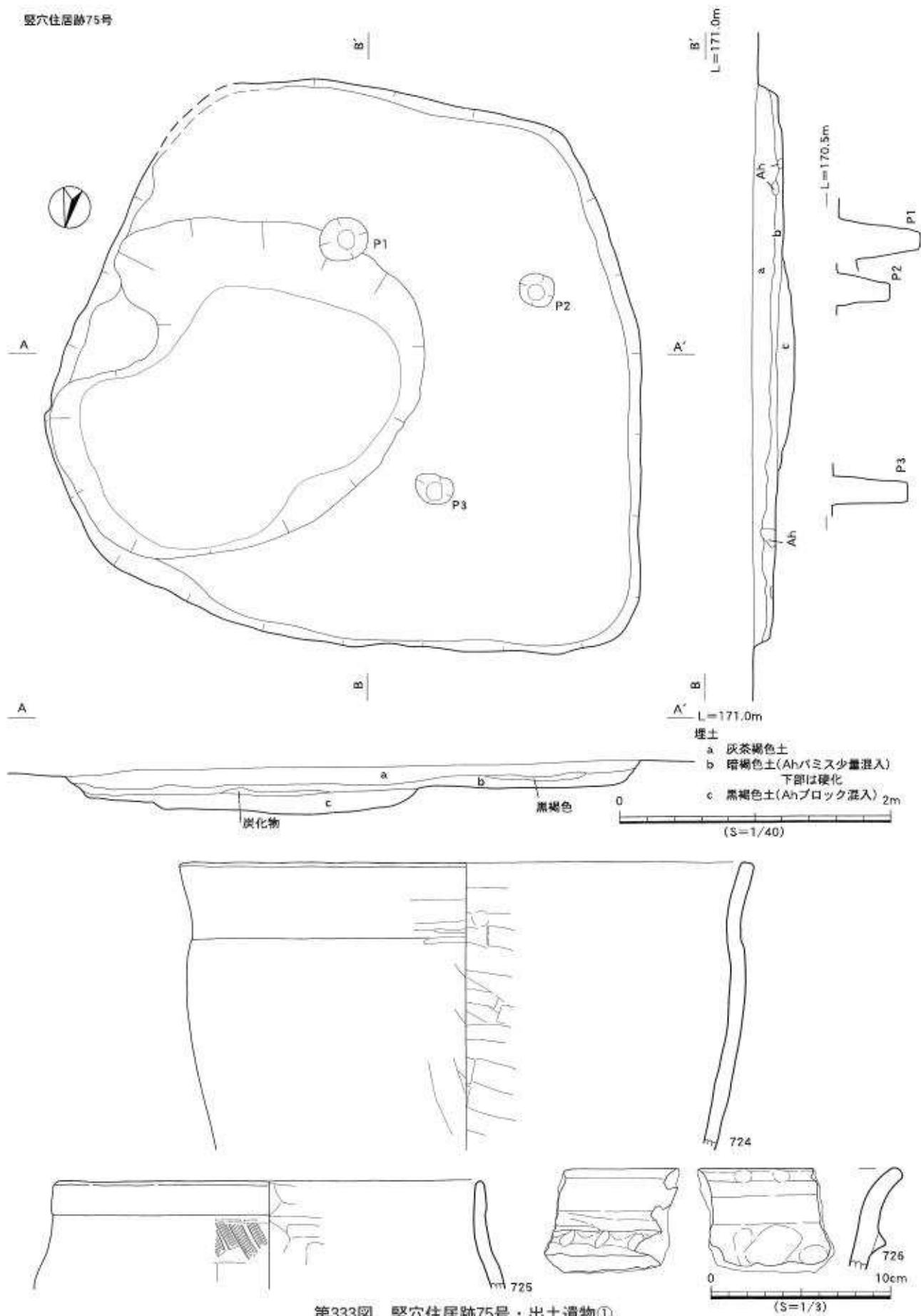
調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、埋土b層の下が硬化しており、これを床面と考え壁面検出をおこなった。埋土の記録を行った後に、ベルトを除去し床面を検出していったところ、東側には埋土cが土坑状に見られた。この埋土cは、周辺の竪穴住居跡でも貼床に用いられており、これをさらに掘り下げていったところ土坑であることが判明した。東側の一部は凹字状になる。柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去した段階で順次確認され、結果3基の柱穴が確認された。いずれも深い。炉・焼土は見られなかったが、炭化物は埋土cの土坑上面にわずかに広がっていた。遺物は、総点で241点が出土し、この内の12点を図化した。

竪穴住居跡76号（第335図）

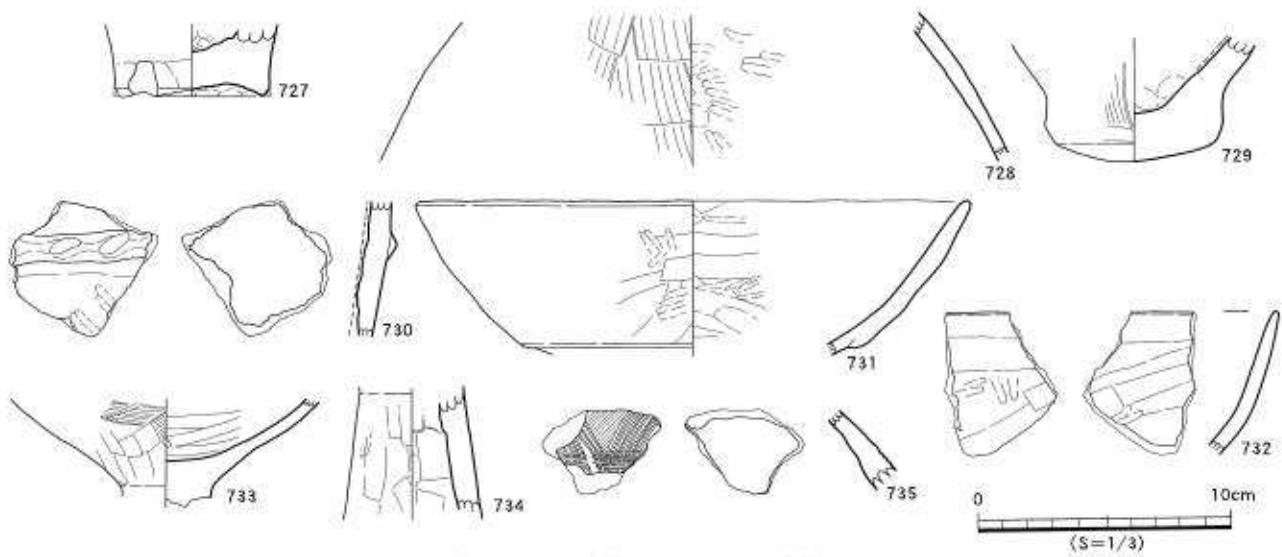
K・L-31区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.8m、短辺3.6mの隅丸方形で、上面は近現代の搅乱により大きく消失していた。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点では埋土の記録を行い、ベルトを除去し床面を検出した。床面は、東側にかけてわずかに傾斜しており、中央よりやや南側には粘土の層が薄く梢円形プランで検出された。当初、焼土等の一部の可能性を考えて精査したが、大きな変化は見られなかった。

柱穴などの付帯施設は、床面を除去した段階で5基が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られない。遺物は出土していない。

堅穴住居跡75号

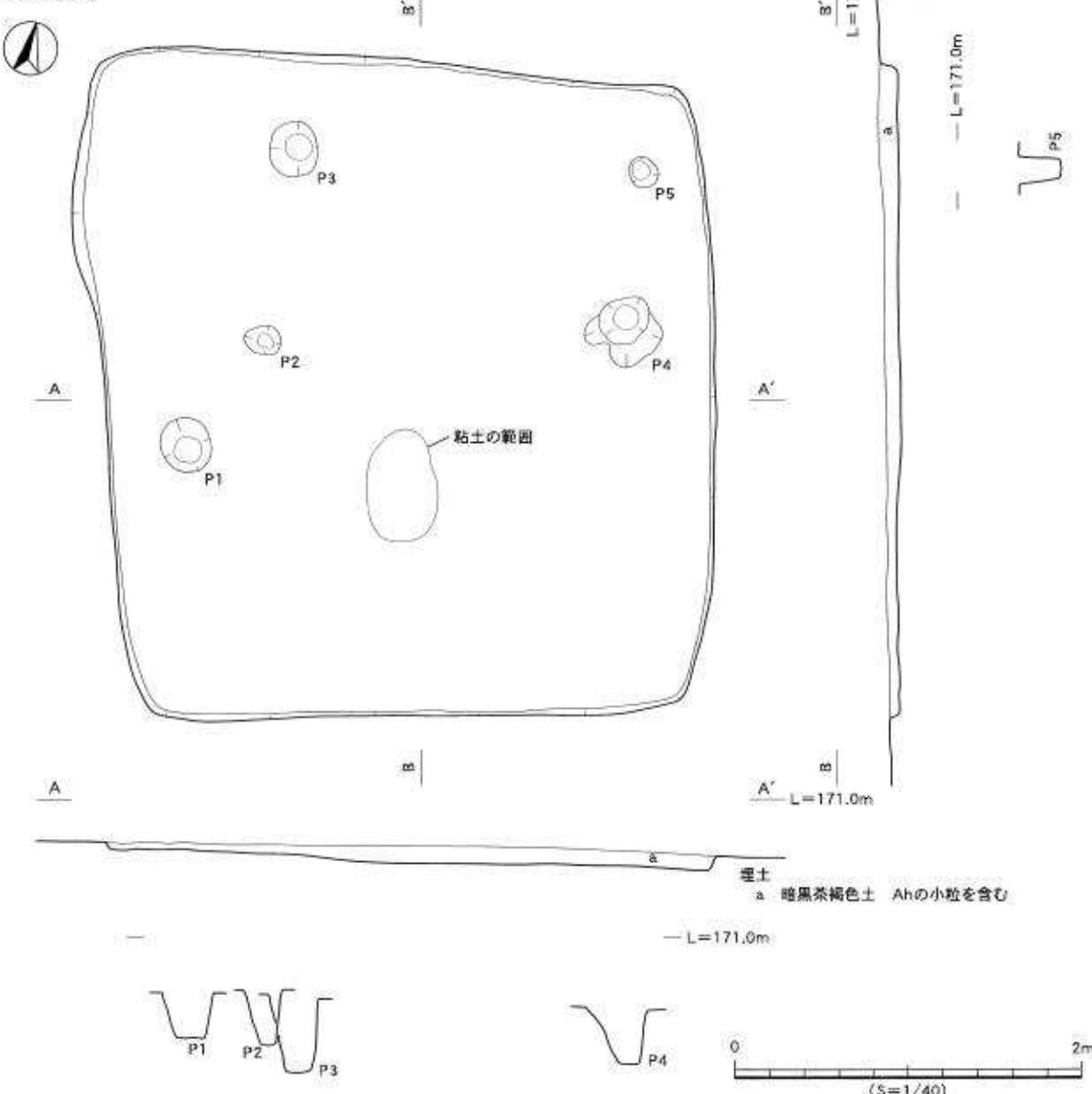


第333図 堅穴住居跡75号・出土遺物①



第334図 壇穴住居跡75号出土遺物②

壇穴住居跡76号

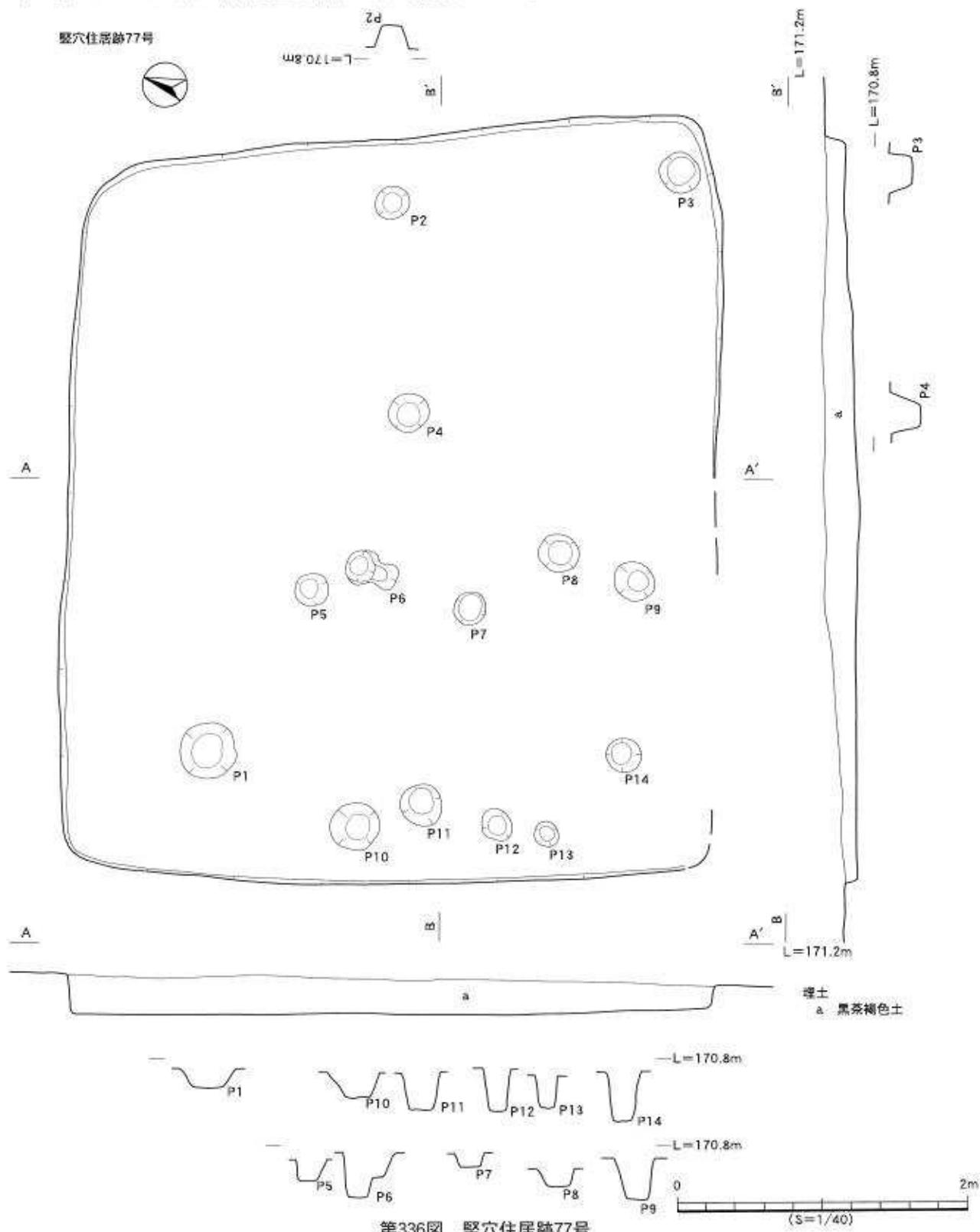


第335図 壇穴住居跡76号

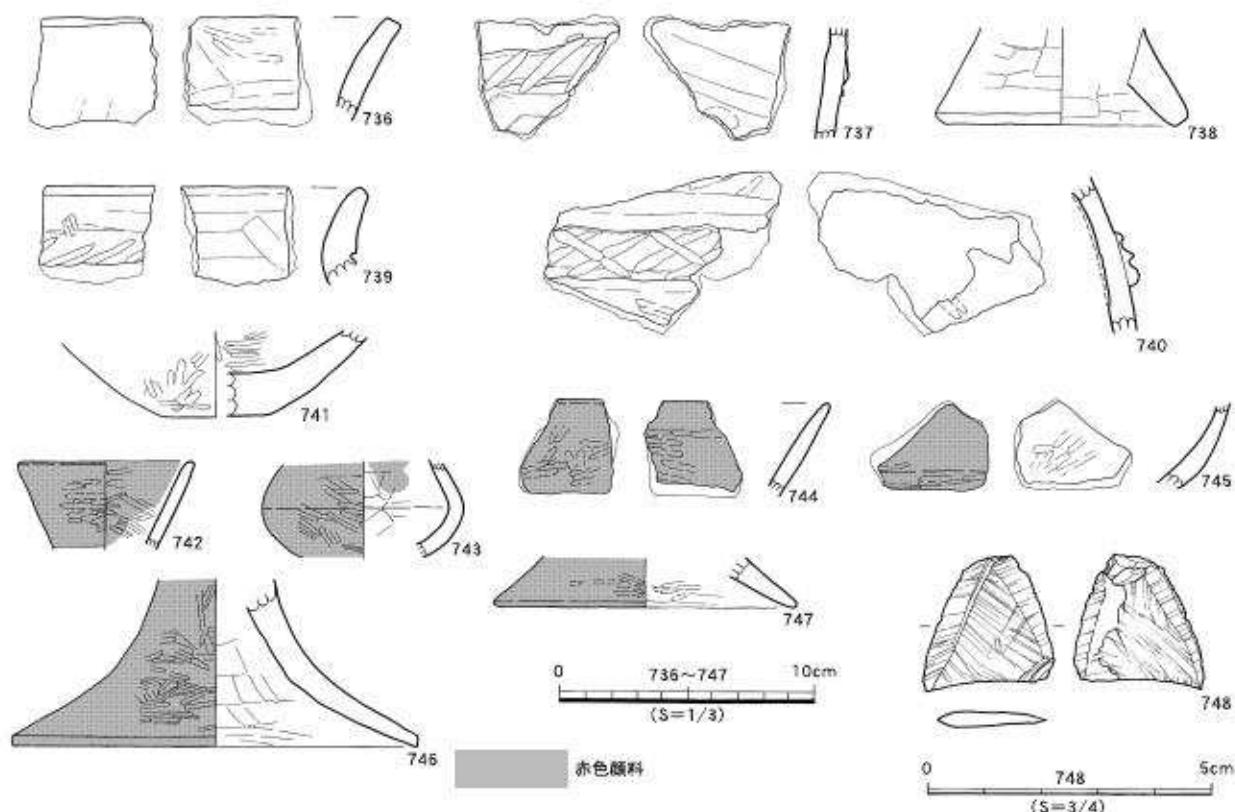
竪穴住居跡77号（第336・337図）

K-30区においてVI層下面からVII層上面で検出された。検出時のプランは、長辺5.2m、短辺4.5mの隅丸長方形で、南側がはっきりしない。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一層でアカホヤ下位の茶褐色土を床面とし、硬化面

等は確認できなかった。柱穴などの付帯施設の確認は、床面をやや掘り下げた段階で確認され、結果14基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。遺物は、総点で632点が出土し、この内の13点を図化した。748は正三角形を基調とする磨製石器である。



第336図 竪穴住居跡77号



第337図 竪穴住居跡77号出土遺物

竪穴住居跡78号

#### 竪穴住居跡78号（第338・339図）

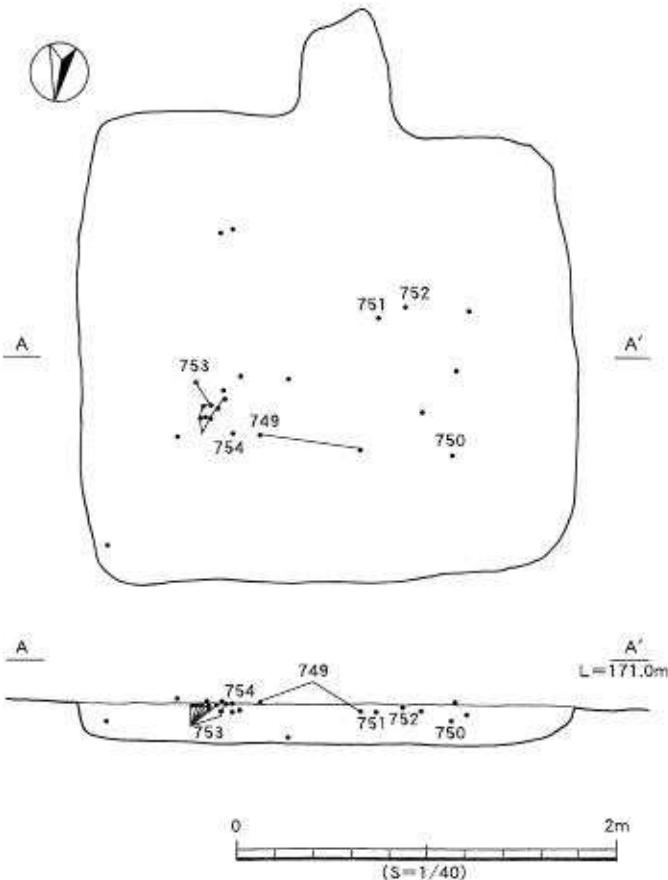
F-30区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.6m、短辺2.5mの隅丸方形で、南側に土坑状の張り出し部が認められた。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。

床面の判断は、アカホヤと黒褐色土の混入土上面が硬化していたことから、これを床面と判断した。この面で床を精査したところ、中央及びやや南側で2箇所の炭化物の集中が認められた。これらを除去したところ、中央の炭化物層の下位をはじめ7箇所で柱穴が確認された。この炭化物は放射性炭素年代測定を実施し、 $2,000 \pm 20$  yr BPという結果が示されている。

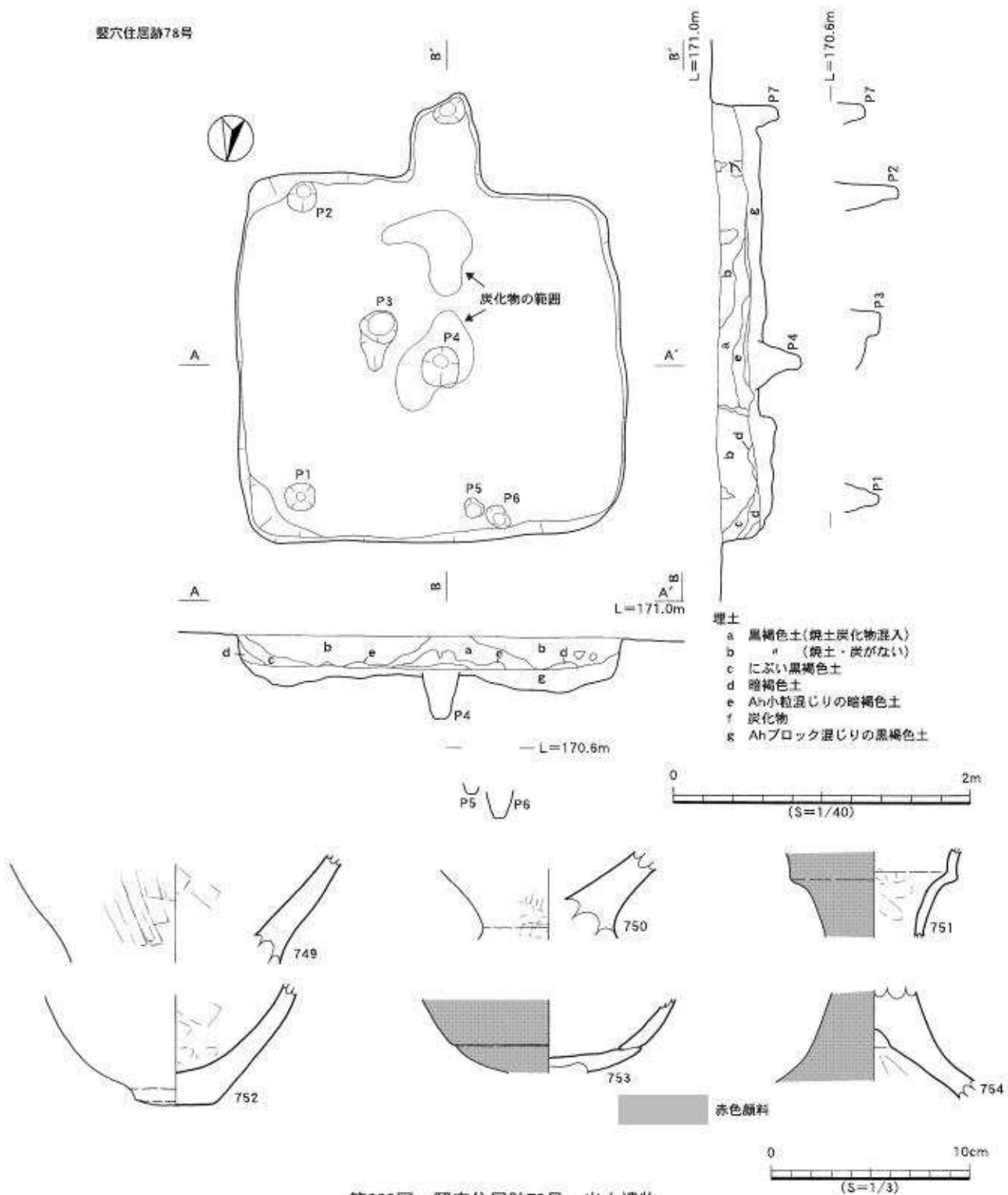
なお、竪穴住居跡検出した当初から見られていた南側の張り出しあは、竪穴住居跡の床面とレベル的にもほぼ連続しており、断面観察においても両者の切り合いを見いだすには至らなかった。このため、両者は同一時期のものである可能性が高いと判断した。

遺物は、総点で24点が出土しこの内の6点を図化した。これらの多くは検出面から10cm程度の部分で出土している。床面付近では、縄文土器片などが出土しているが、混在のためにここでは図化していない。



第338図 竪穴住居跡78号遺物出土状況

竪穴住居跡78号



第339図 竪穴住居跡78号・出土遺物

竪穴住居跡79号（第340～342図）

E-33・34区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4.8m、短辺4.8mの隅丸方形で、北側は溝状遺構に切られて検出された。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトと溝状遺構の短軸方向から住居中央へ向かうベルトの3本を設定して掘り下げを開始した。調査の過程で、須恵器環蓋の完形品や埴形土器の完形品などが出土している。床面と思

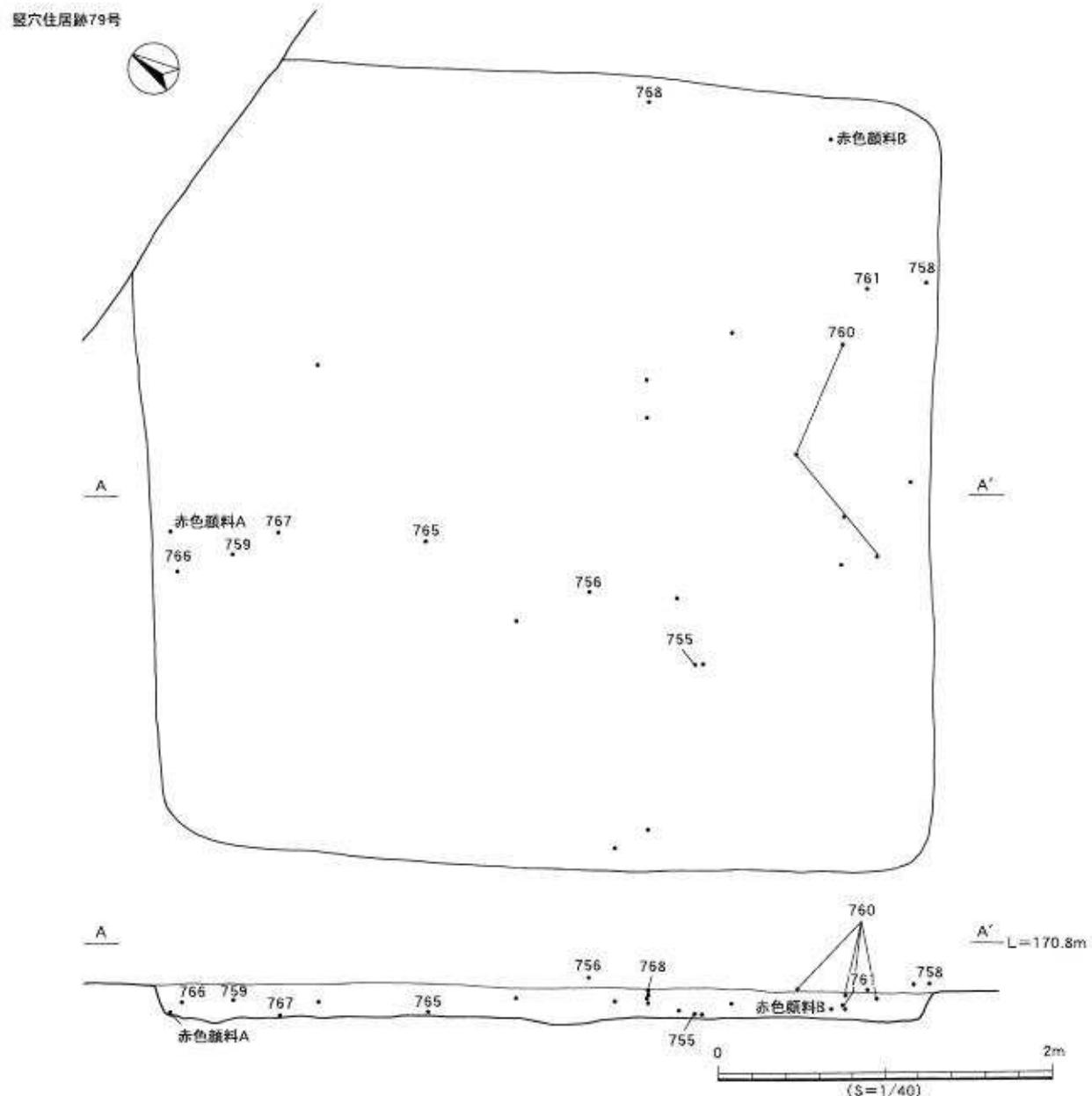
われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった際には、第181図A・Bに示したように2箇所で赤色顔料の粒子がまとまって出土した。これらは、周辺の土壤と共に取り上げ、電子顕微鏡観察及び蛍光X線分析を行っている。分析の結果、鉢物由来のベンガラで、詳細は第4章に掲載してある。

床面は、黒褐色土を掘り下げるとき全体的に硬質土が見られ、これを床面と判断した。

柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去した段階で確認され、結果5基の柱穴が確認された。また、中央には焼土・炭化物が集中する箇所があり、これを掘り下げる柱穴状のプランが検出された。加えて、東と北側の壁沿いに溝状の掘り込みも確認され、これらはL字状にめぐっている。この中の埋土は、アカホヤと黒褐色土の混入土で、周辺の竪穴住居跡の貼床に用いられている土でもある。

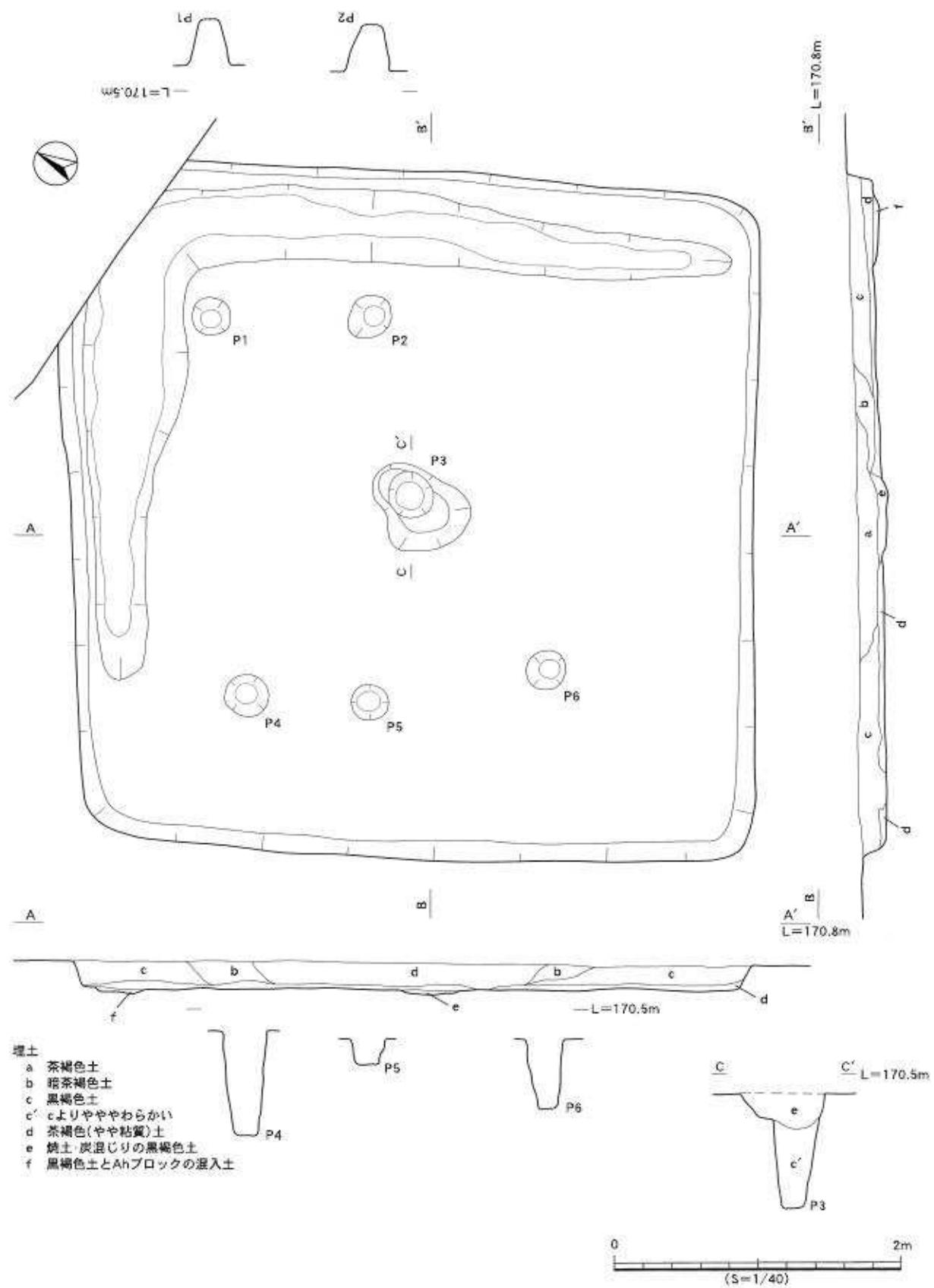
遺物は、総点で112点が出土しこの内の14点を図化した。755は口縁部が内湾する甕である。760は口縁部が外

反し、長い頸部の後に胴部が球状を呈して平底の底部へ至る。赤色顔料が塗布されている資料である。761は口唇端部をわずかに欠損しているがほぼ完全な形で出土した資料である。口縁部はわずかに内湾気味を呈し、頸部で強く屈曲して胴部はソロバン玉状に屈曲する。外面は丁寧に磨かれており赤色顔料が塗布されている。765・766は高环の脚部である。765は中空の脚から浅く広がるが、766のそれは大きく広がっている。767は完形で出土した須恵器の环蓋である。天地が逆転した状態で床面から数cm程度上のレベルで出土した。

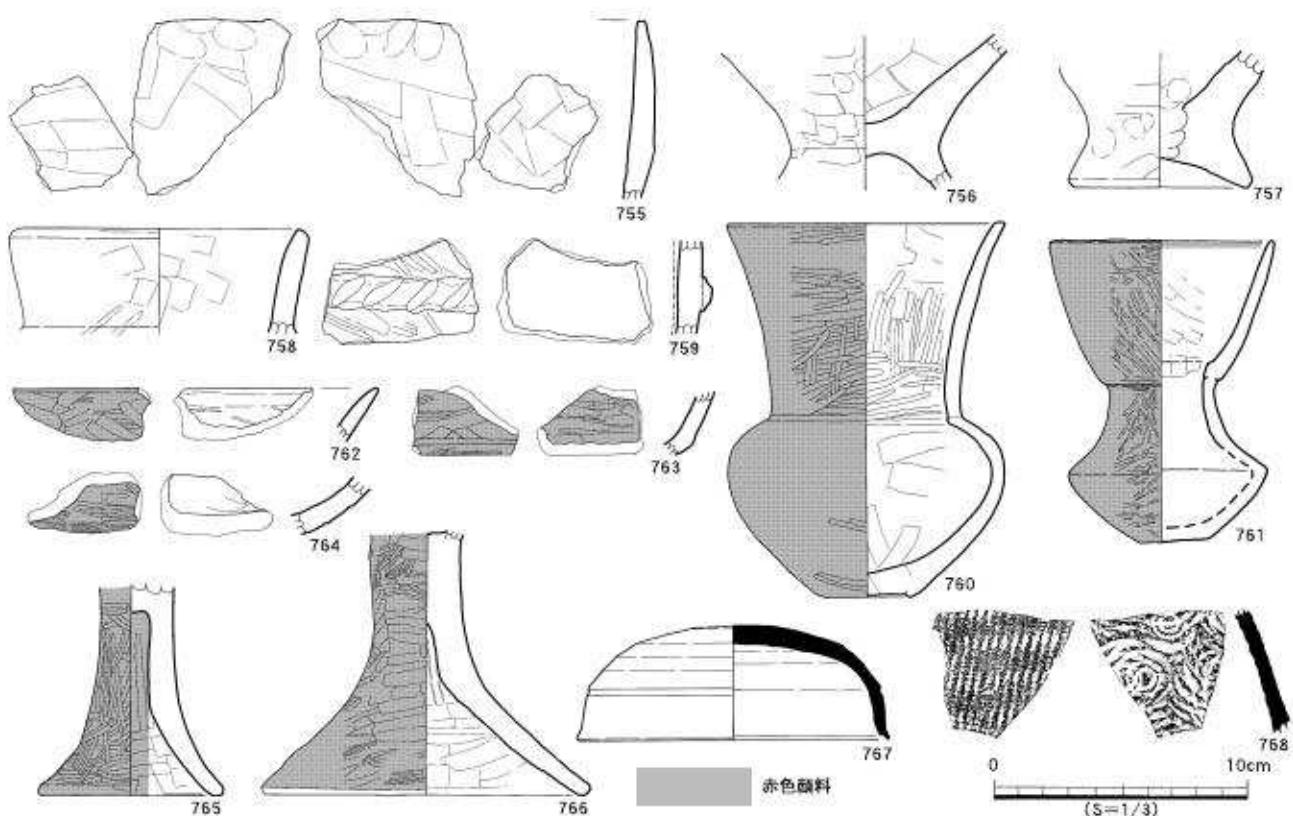


第340図 竪穴住居跡79号遺物出土状況

豊穴住居跡79号



第341図 豊穴住居跡79号



第342図 竪穴住居跡79号出土遺物

竪穴住居跡80号（第343・344図）

J・K-35区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4.6m、短辺4.1mの隅丸長方形で、南側は近世土坑と切り合い関係にある。

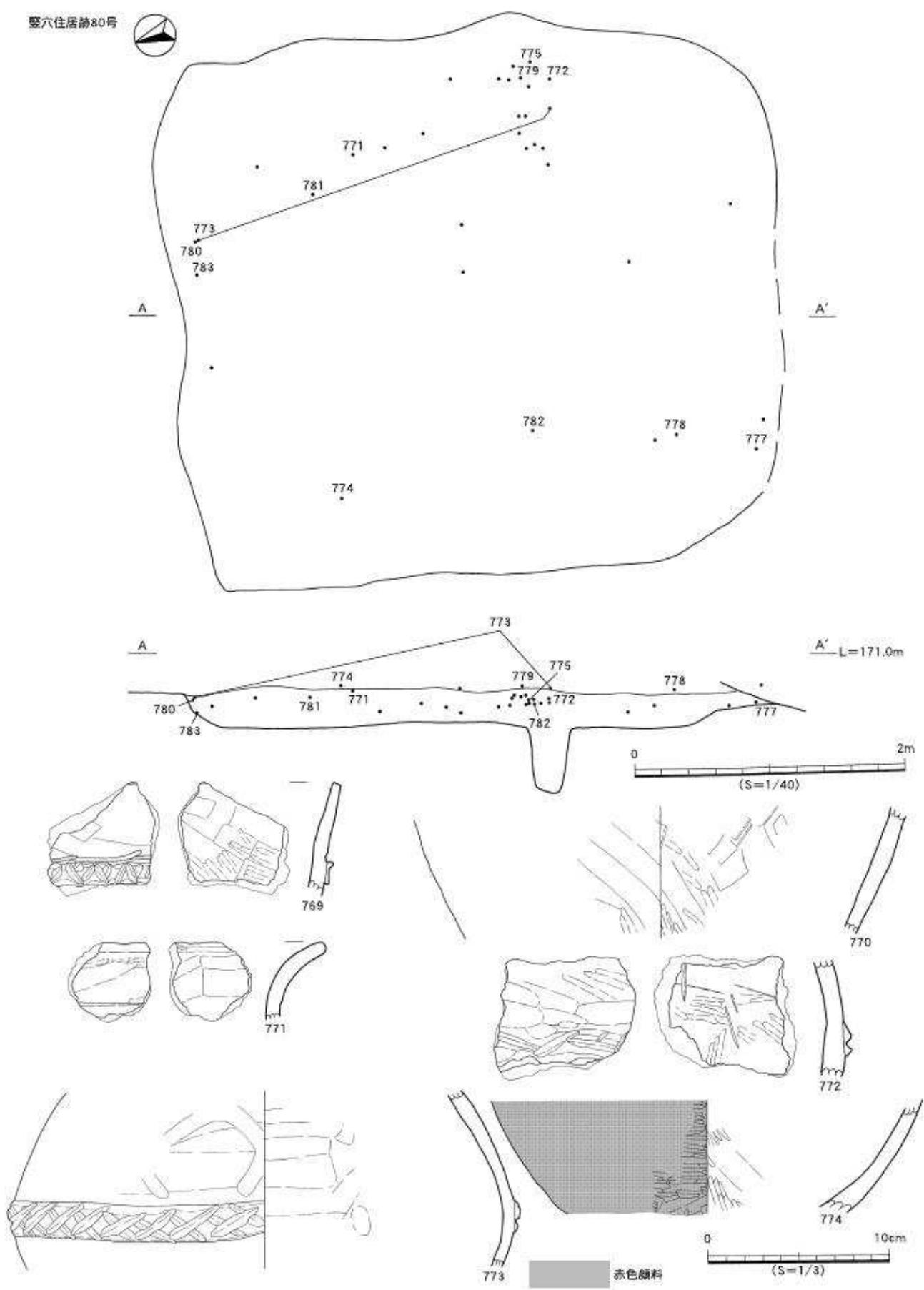
調査は、ほぼ中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、埋土a層下部で床面と思われる硬化面を捉えた。

床面中央には焼土の広がりが見られたが掘り込み等は見られなかった。この時、P-6は硬化面を切って検出されており、これ以外の柱穴は等の付帯施設の確認は、硬化面を除去した段階で確認され、P-6の他に8基の柱穴が確認された。遺物は、総点で423点が出土しこの内の15点を図化した。

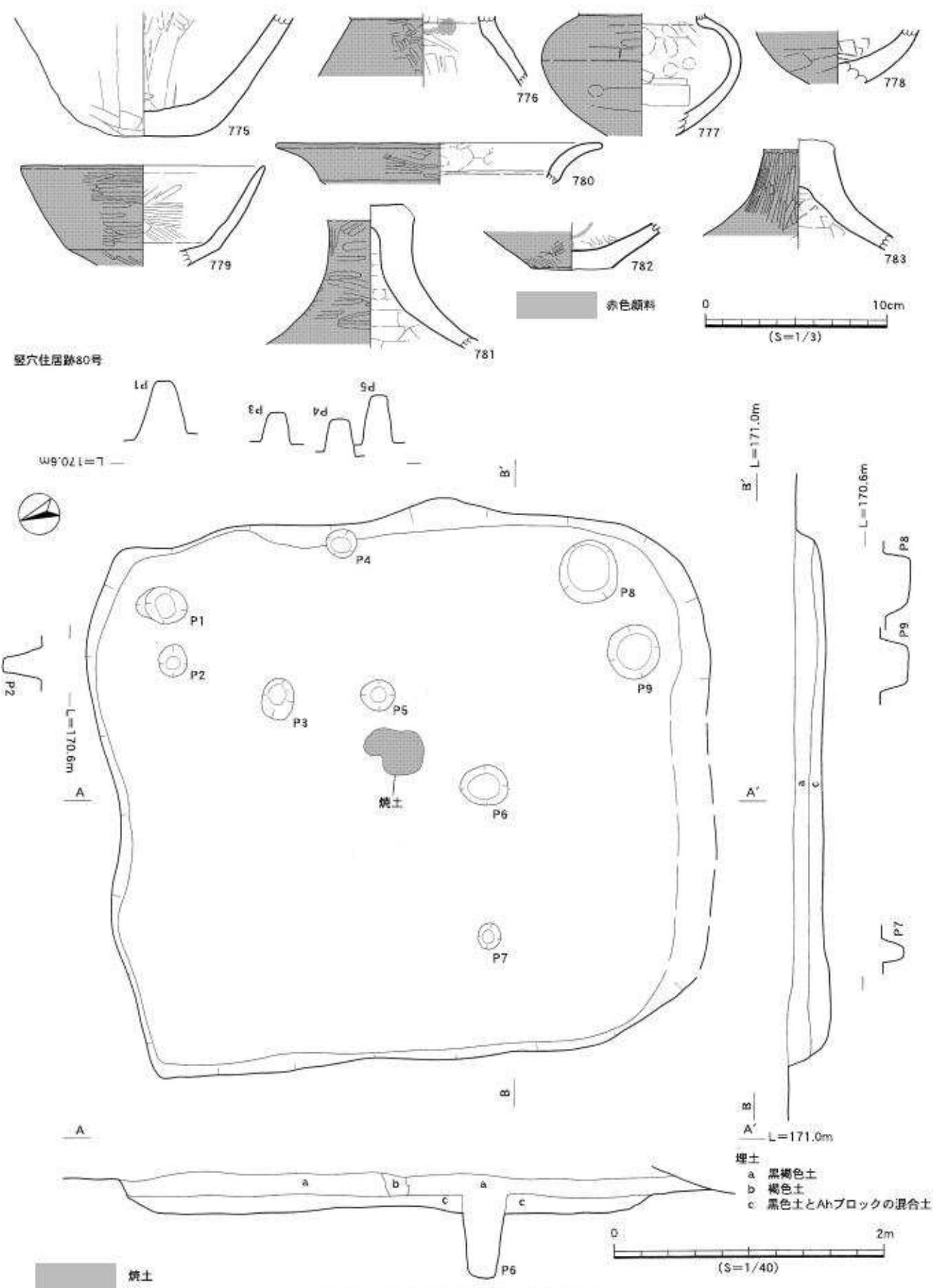
769は口縁部がわずかに外傾する甕である。胴部には貼付突帯が見られ、格子状にキザミが施される。771は壺の口縁部片である。口縁部が強く外反し、口唇部は丸みを帯びている。772は壺の胴部貼付突帯付近の破片である。773も壺の胴部片である。胴部最大径に貼付突帯が施され、キザミが格子状に施される。この貼付突帯から頸部にかけて、焼成時あるいはそれ以外の要因も考えられるが、格子状に淡く色調の変化が見られる。右の写真がその部分の写真であるが、これ以外にも同一個体と思われる破片に同様の色調の変化が見られた。775は壺の底部である。776～778は壺の破片である。779は口縁部が直線的に外傾し、胴部下半で強く屈曲する。780は

口縁部が強く外反し、胴部で屈曲する高環である。高環の脚部の可能性も考えられたが、内面の調整が丁寧であることなどから、口縁部を想定して図化した。781・783は高環の脚部である。両者とも環部との接合面が面取りされている。782は脚との接合面を擦るなどして面を形成し、あたかも平底であるかのように再加工を施している。





第343図 竪穴住居跡80号・出土遺物①



第344図 竪穴住居跡80号・出土遺物②

### 豊穴住居跡81号（第345図）

K-36区においてVI層上面で検出された。

検出時のプランは、長辺5m、短辺1.4mで、近世の溝状遺構で大きく削平されているが残された一辺より5m程度の方形であったと思われる。

調査は、溝に直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。床面までは単一層で約20cmに満たない。床面には硬化面や貼床等は見られず、柱穴等の付帯施設の確認は、床面を除去しながら確認していくが、柱穴は確認されなかった。炉・焼土や、炭化物の広がりも見られない。遺物は、総点で59点が出土しこの内4点を図化した。784は天地に不安が残るが甕の脚と思われる。

### 豊穴住居跡82号（第346・347図）

J-36区においてVI層下面からVII層上面で検出された。

検出時のプランは、長辺4.5m、短辺2.5mの隅丸長方形で、東側は道路により削平を受ける。

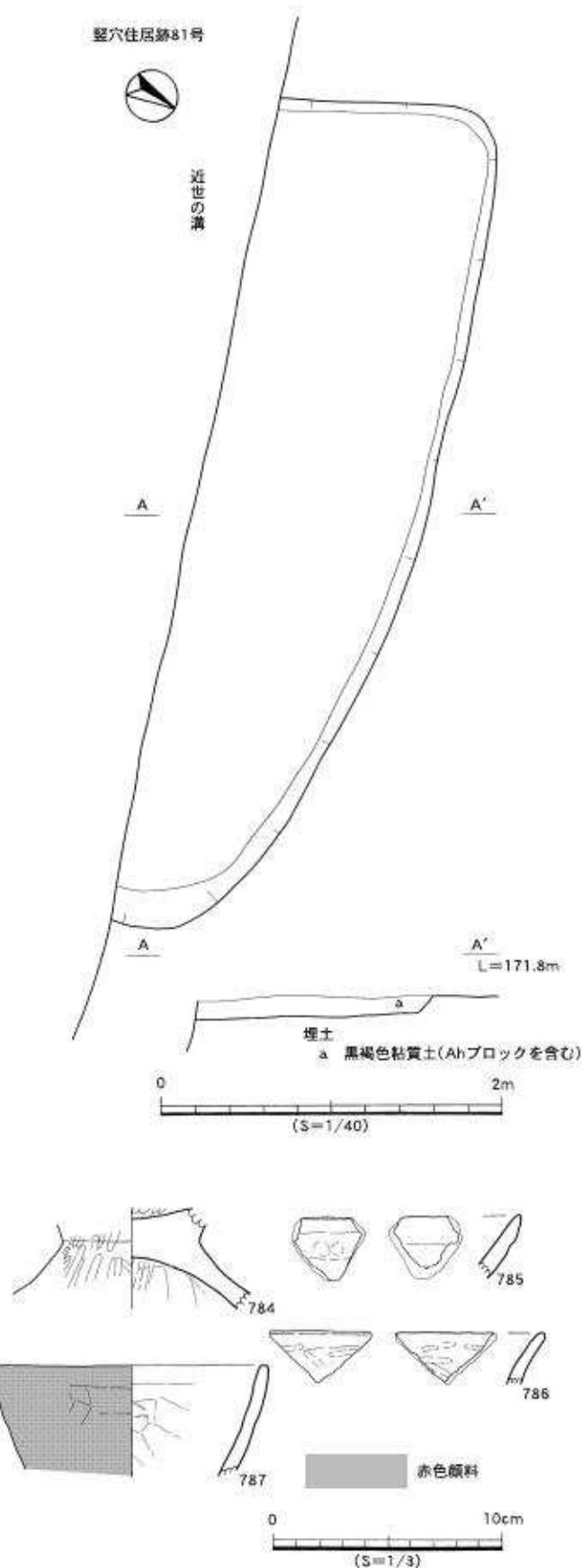
調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。中央付近には硬化面が見られ、柱穴は床面を20cm近く掘り下げたところ1基が検出された。遺物は、総点で381点が出土しこの内の14点を図化した。788は口縁部がわずかに内湾する甕である。793は高壙の壠部である。口縁部は直線的だが下位でわずかに膨らんで段を有する。794は口縁部が外反し、碗状にすぼまって脚部へと至る。801は土製品である。

### 豊穴住居跡83号（第348・349図）

羽月川横の農道により、プランの半分以上が削平を受けていた。残されたプランは北西のコーナー部分を中心とした三角形状である。

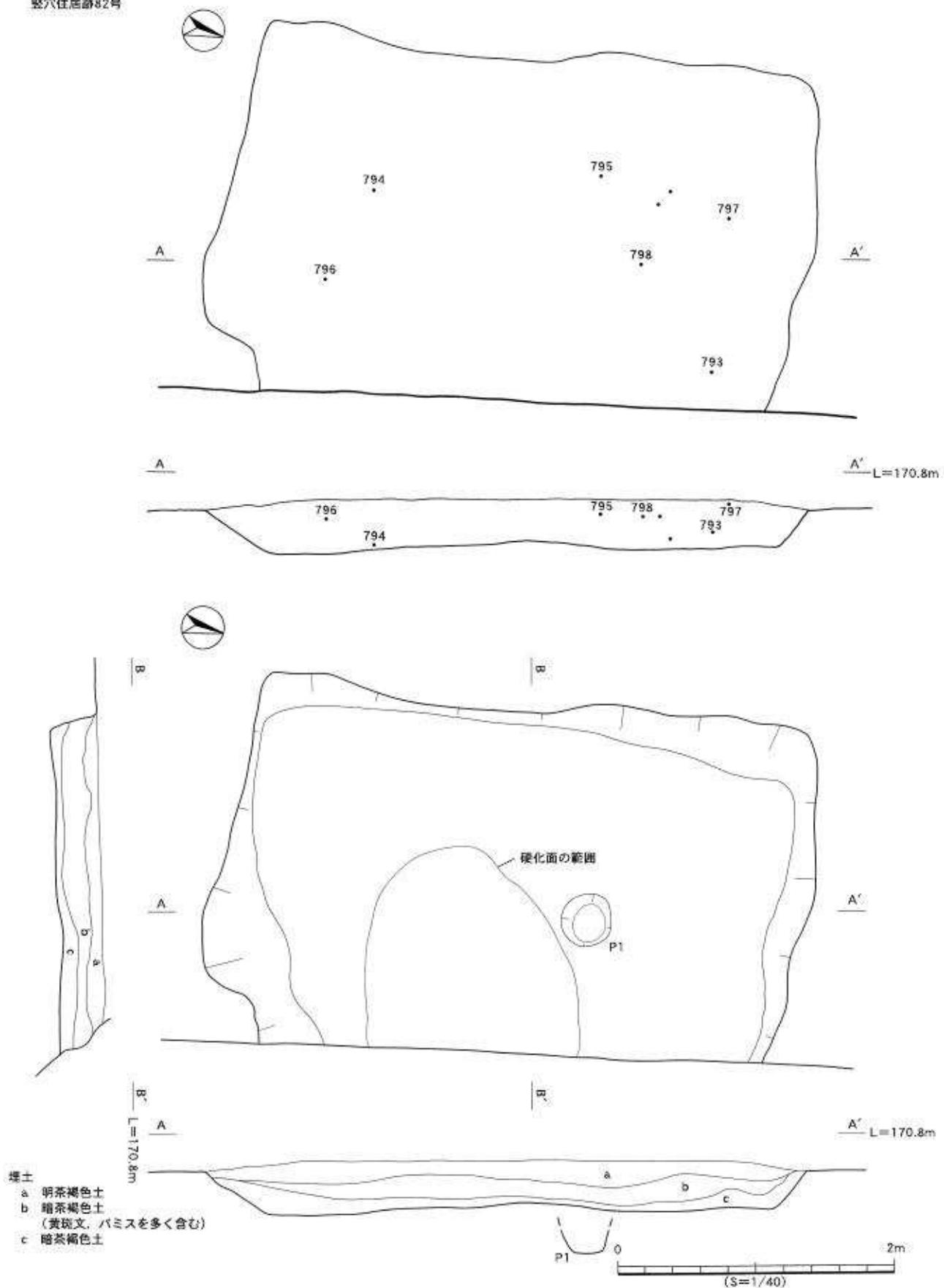
J-40区においてVI層上面で検出された。調査は、農道との境をベルトと見なし、これに直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一層で、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。柱穴などの付帯施設の確認は、床面を除去しながら確認したが、柱穴等はが確認されなかった。遺物は、総点で164点が出土しこの内の8点を図化した。802は口縁部が内湾する甕である。胴部には薄く貼付突帯が貼付され、キザミが施される。804は、直線的な壠の口縁部である。805は高壙の脚部であるが、壠部との接合面を面取りしている。

豊穴住居跡81号

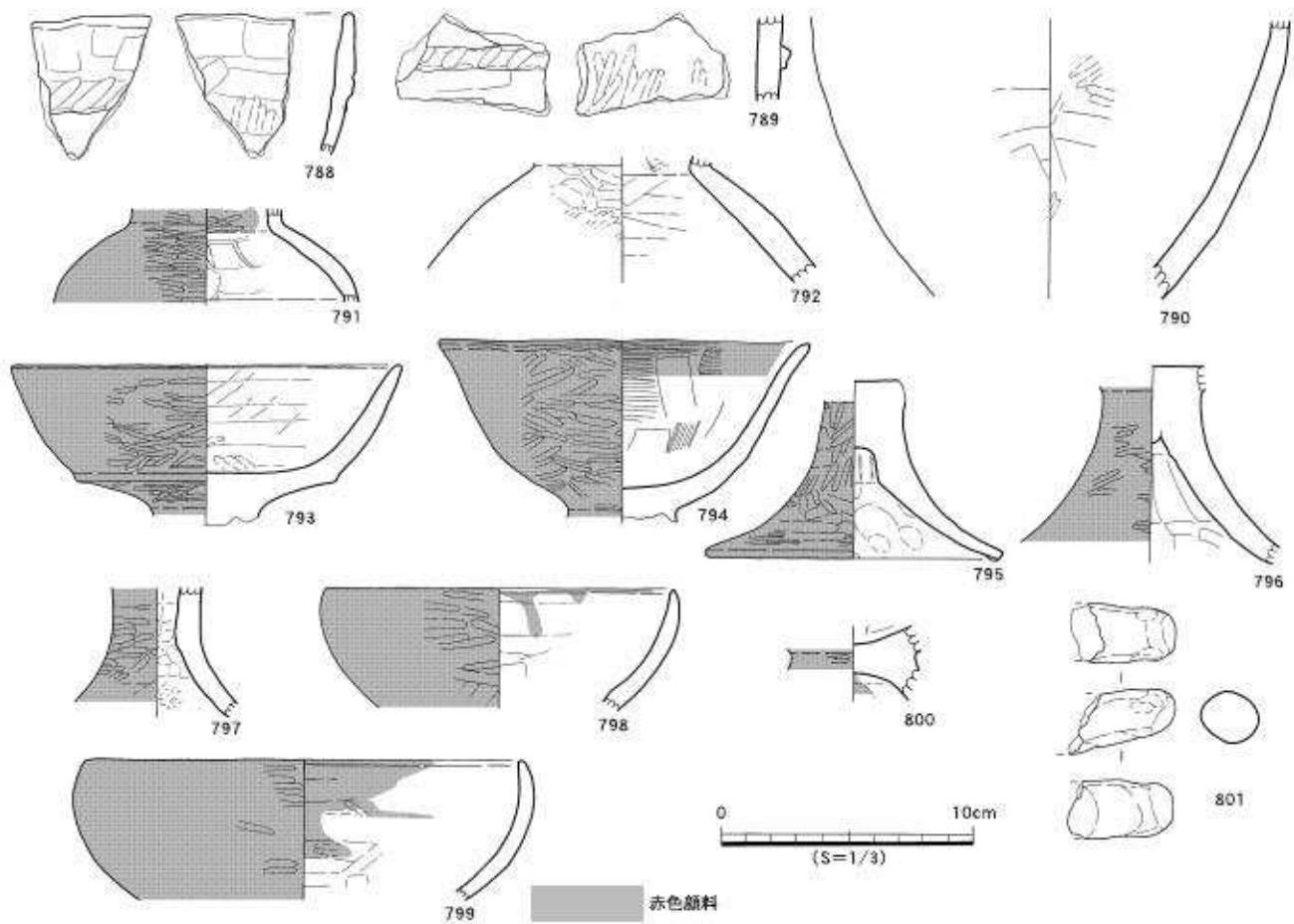


第345図 豊穴住居跡81号・出土遺物

豊穴住居跡82号

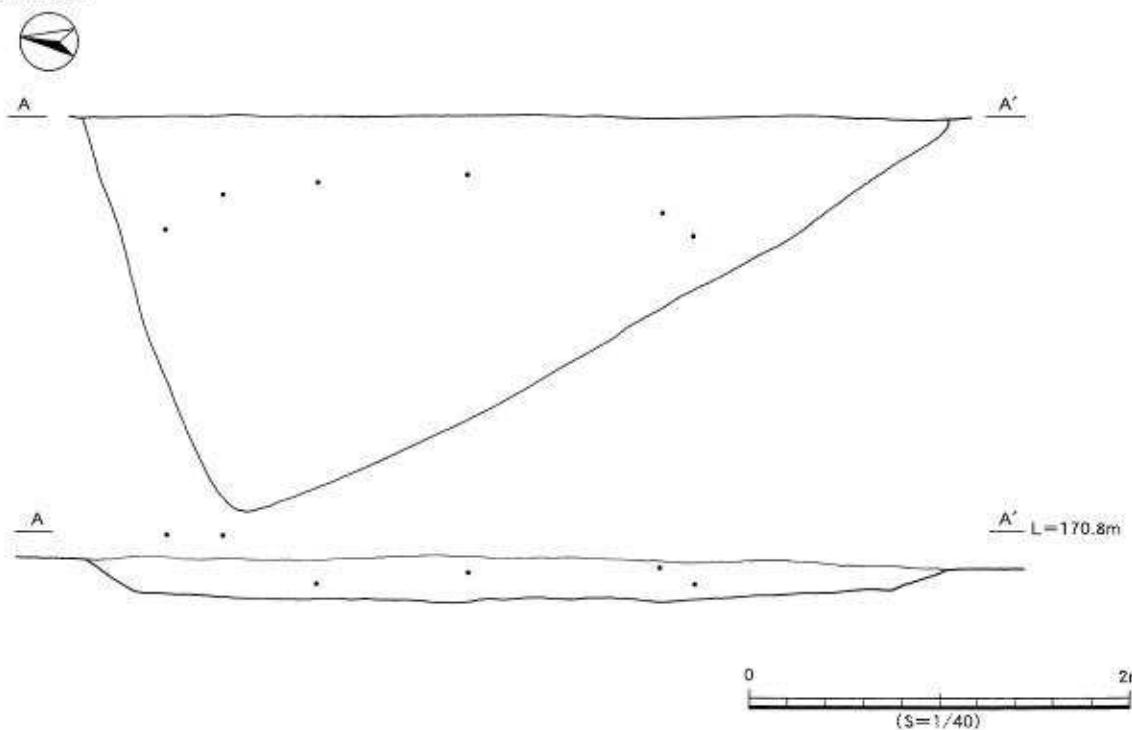


第346図 豊穴住居跡82号

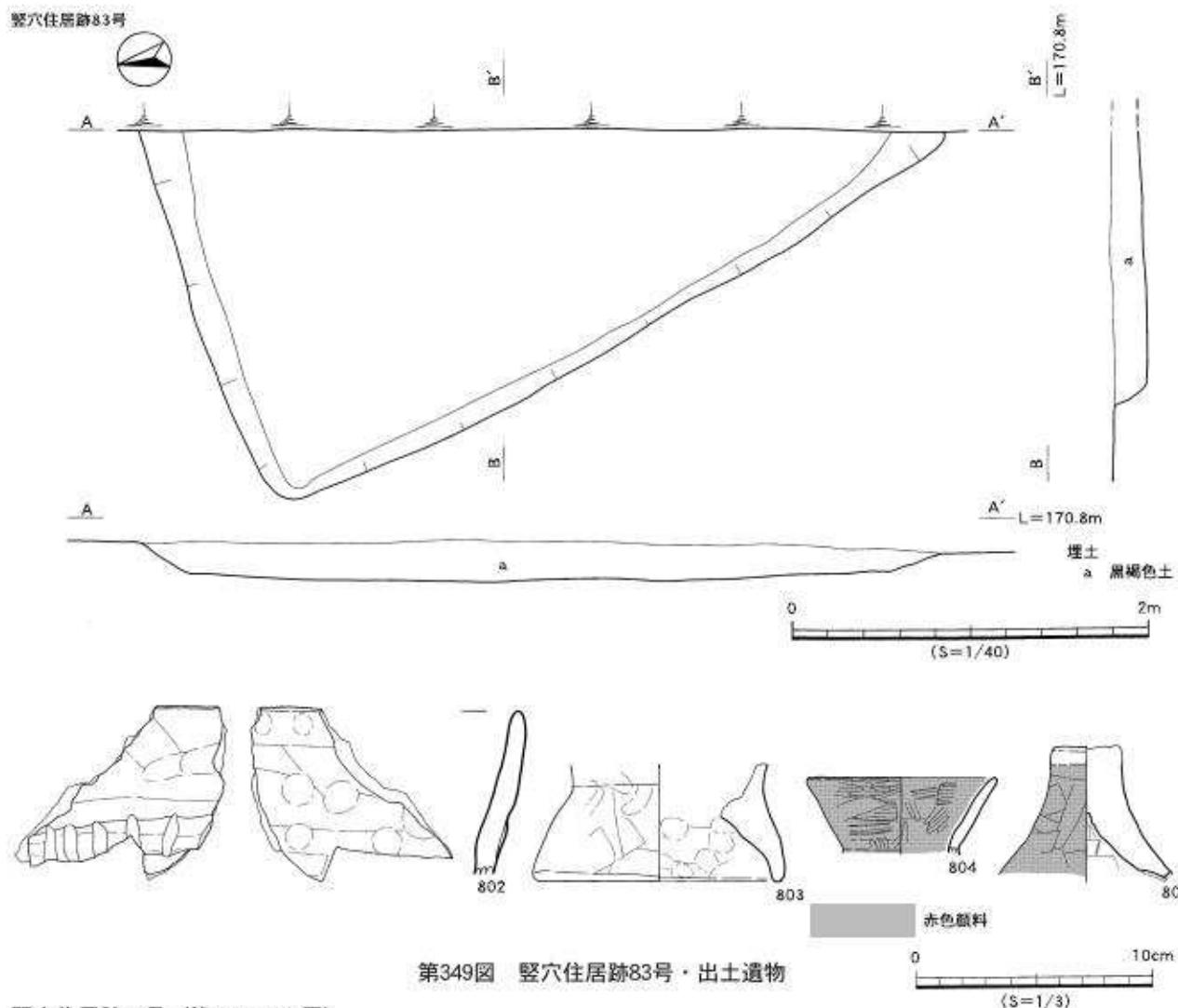


第347図 竪穴住居跡82号出土遺物

竪穴住居跡83号



第348図 竪穴住居跡83号遺物出土状況



第349図 竪穴住居跡83号・出土遺物

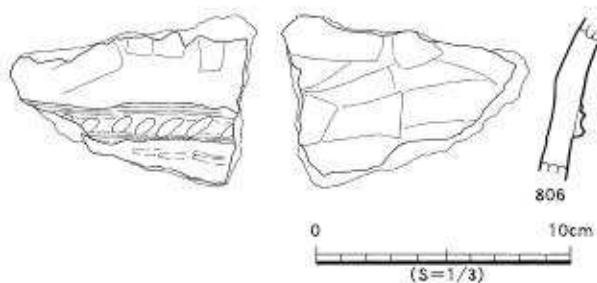
#### 竪穴住居跡84号（第350・351図）

G-36・37区においてⅦ層で検出された。周辺は近世による削平を受けており、検出時のプランは、長辺4.4m、短辺4.2mの隅丸方形に近い円形であるが、南側は近世土坑により大きく削平される。

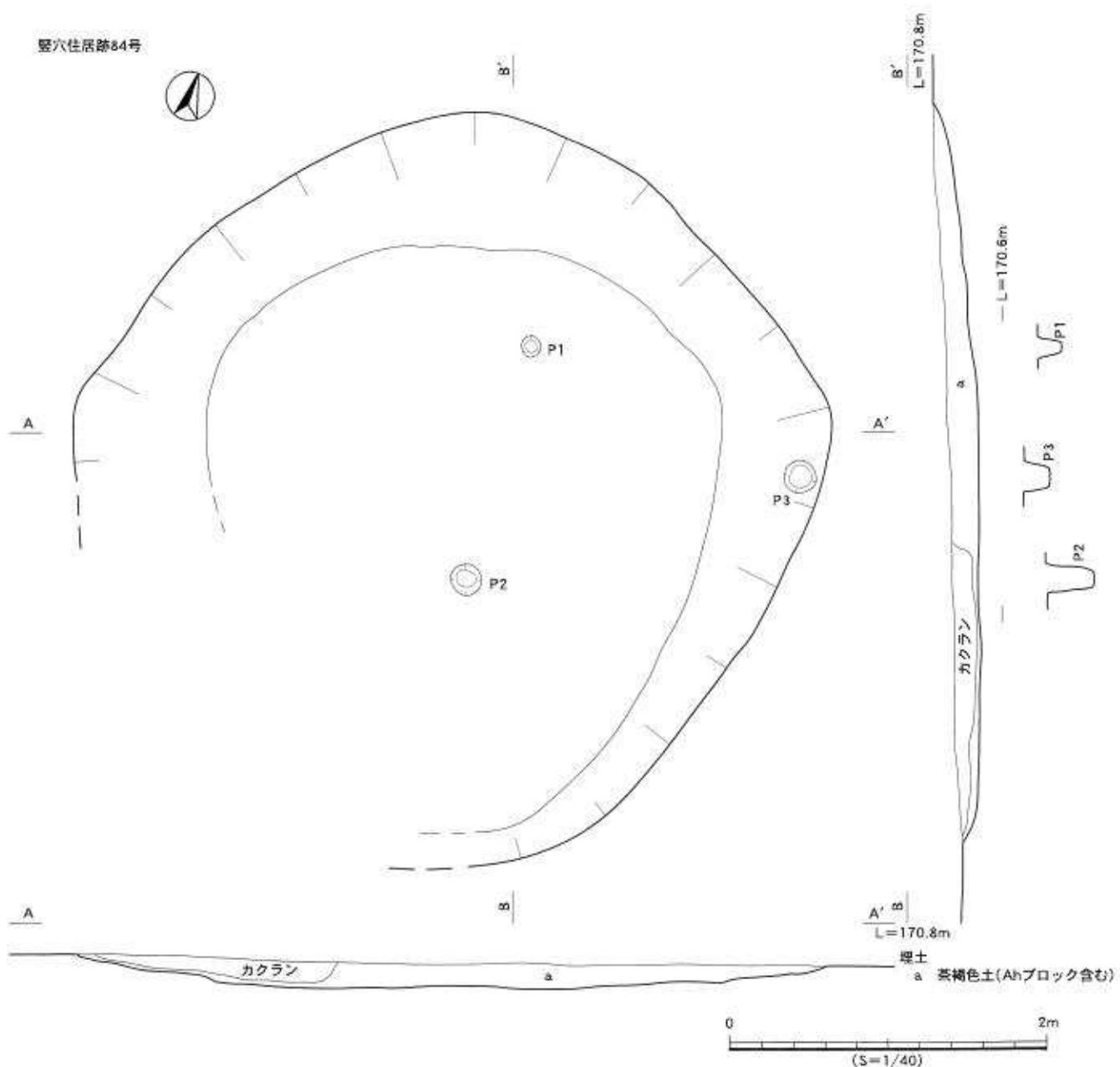
調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。

壁面の立ち上がりは緩やかで、床面と壁面との境ははっきりとしない部分も多い。この時点では床面の記録を行い、ベルトを除去し床面を検出していった。床面には、硬化面や硬質土等の確認は出来なかった。柱穴などの付帯施設は、床面を除去した段階で3基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは掘めなかった。

遺物は、総点で1点が出土しこれを図化した。



第350図 竪穴住居跡84号出土遺物



第351図 竪穴住居跡84号

竪穴住居跡85号（第352～355図）

C・D-35・36区においてVI層上面で検出された。

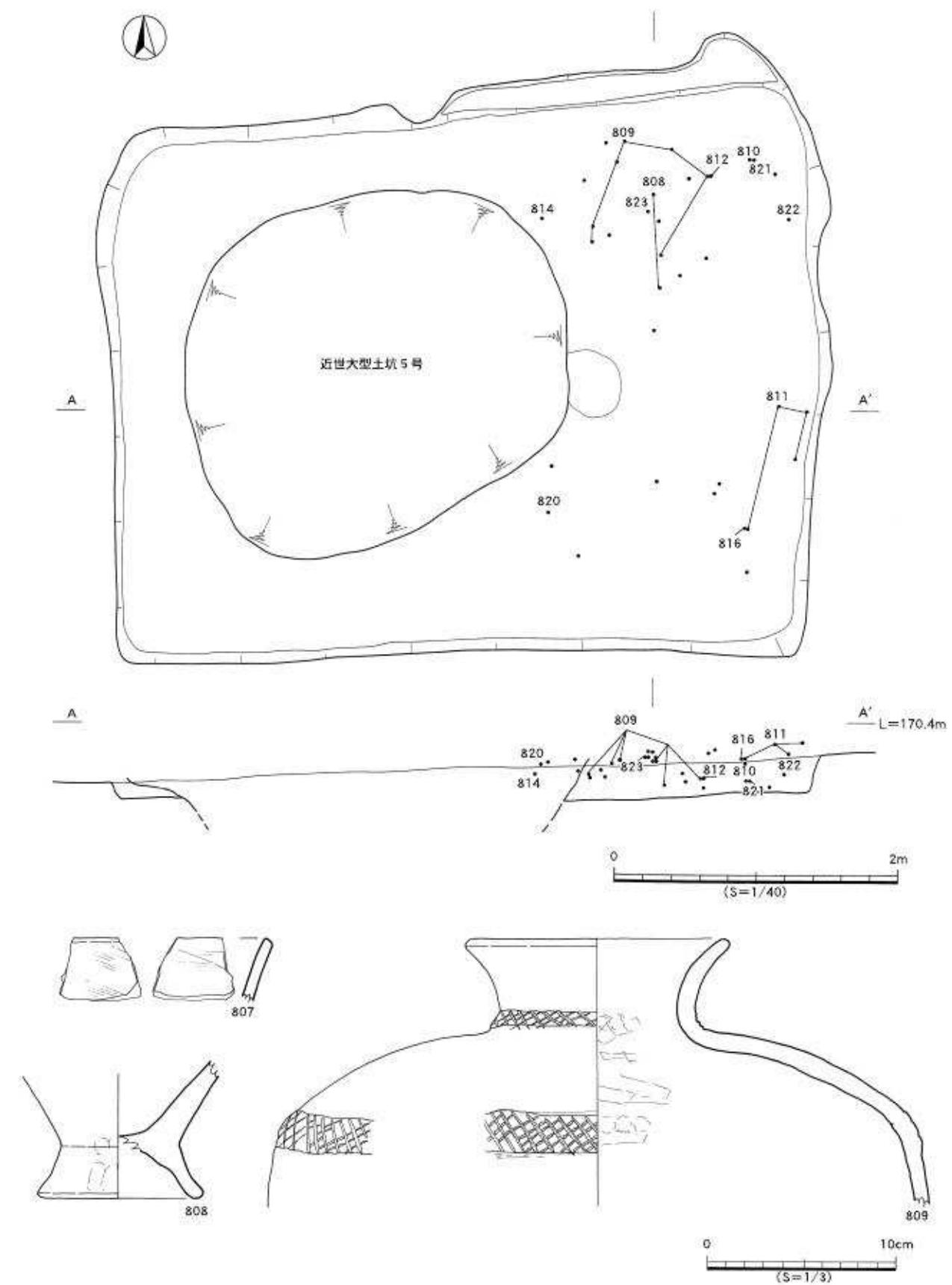
検出時のプランは、長辺5.1m、短辺4mの隅丸長方形で、中央に近世の大型土坑による擾乱が入る。このため、調査は、長軸中央と近世土坑とを通るベルトとこれに直交する2本のベルトの3本を設定して掘り下げを開始した。北東部分には、検出当初から大型の壺形土器が出土しており、この周辺では、この輪郭を検出しながら床面検出を行った。埋土は大きな変化はなく、アカホヤ下のVII層が床面であった。

なお、床面には、中央付近に焼土混じりの炭化物集中が見られた。柱穴などの付帯施設の確認は、この床面を除去しながら確認を進めたが、検出できなかった。

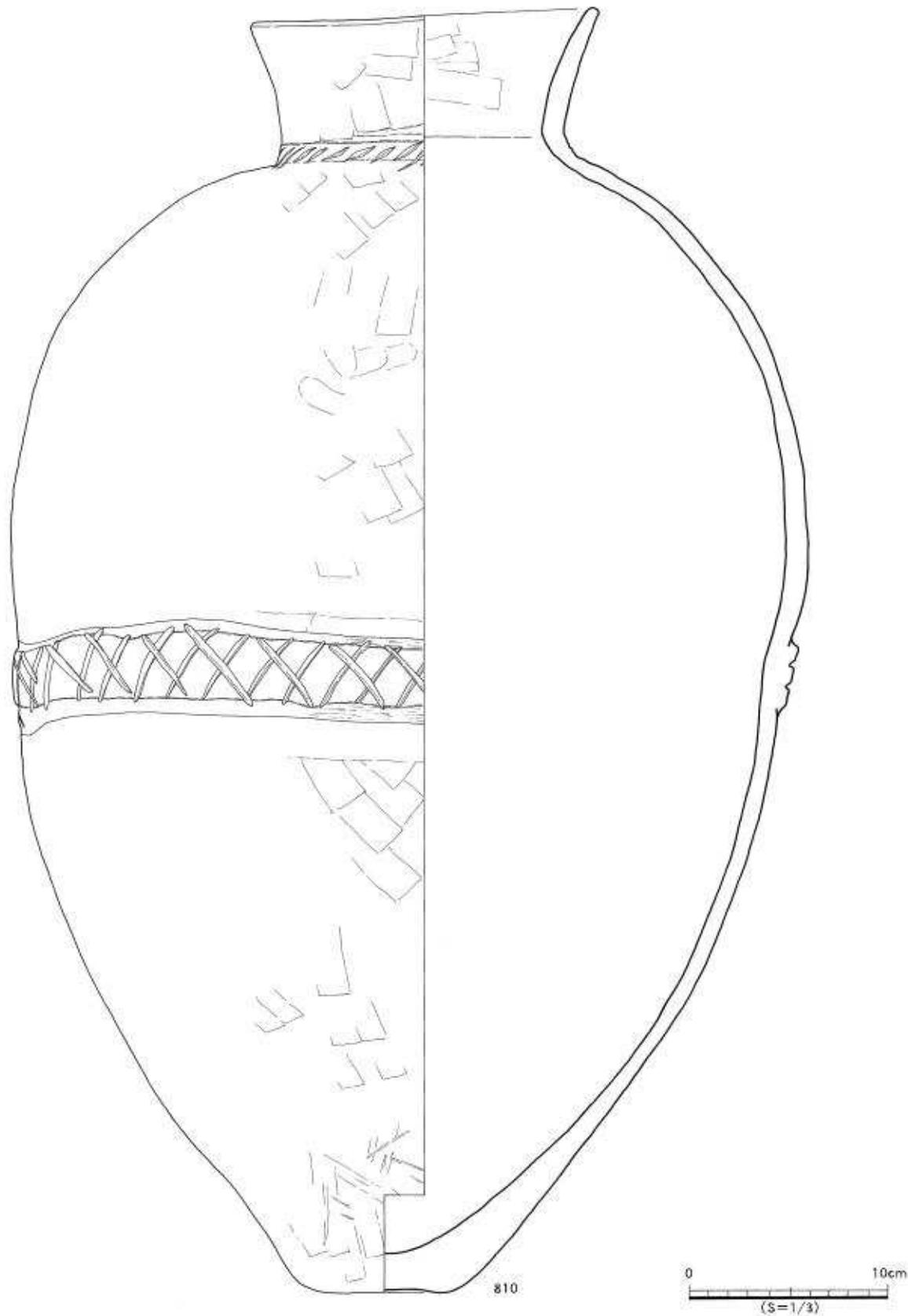
遺物は、総点で282点が出土しこの内の17点を図化した。807は壺の口縁部片である。809は口縁部がわずかに外反し、頸部には薄く突帶を貼り付けて格子状にキザミを施す。頸部から胴部へは急激に膨らみ、ここにも薄い貼付突帶を貼付して格子状のキザミを施す。810は検出当初から確認されていた大型の壺である。口縁部は短く直線的に外傾し、頸部には薄く突帶が貼り付きキザミが入る。胴部は大きく膨らむが長胴で、最大径より下方に幅広の突帶が貼付される。突帶には格子状にキザミが入る。底部はやや不安定ながらも平坦面を有する。復元高は64.5cmあり、当遺跡の復元された資料の中で、最も大型の部類に属する。

813は、口縁部が外傾し、頸部に突帶がめぐる。胴部

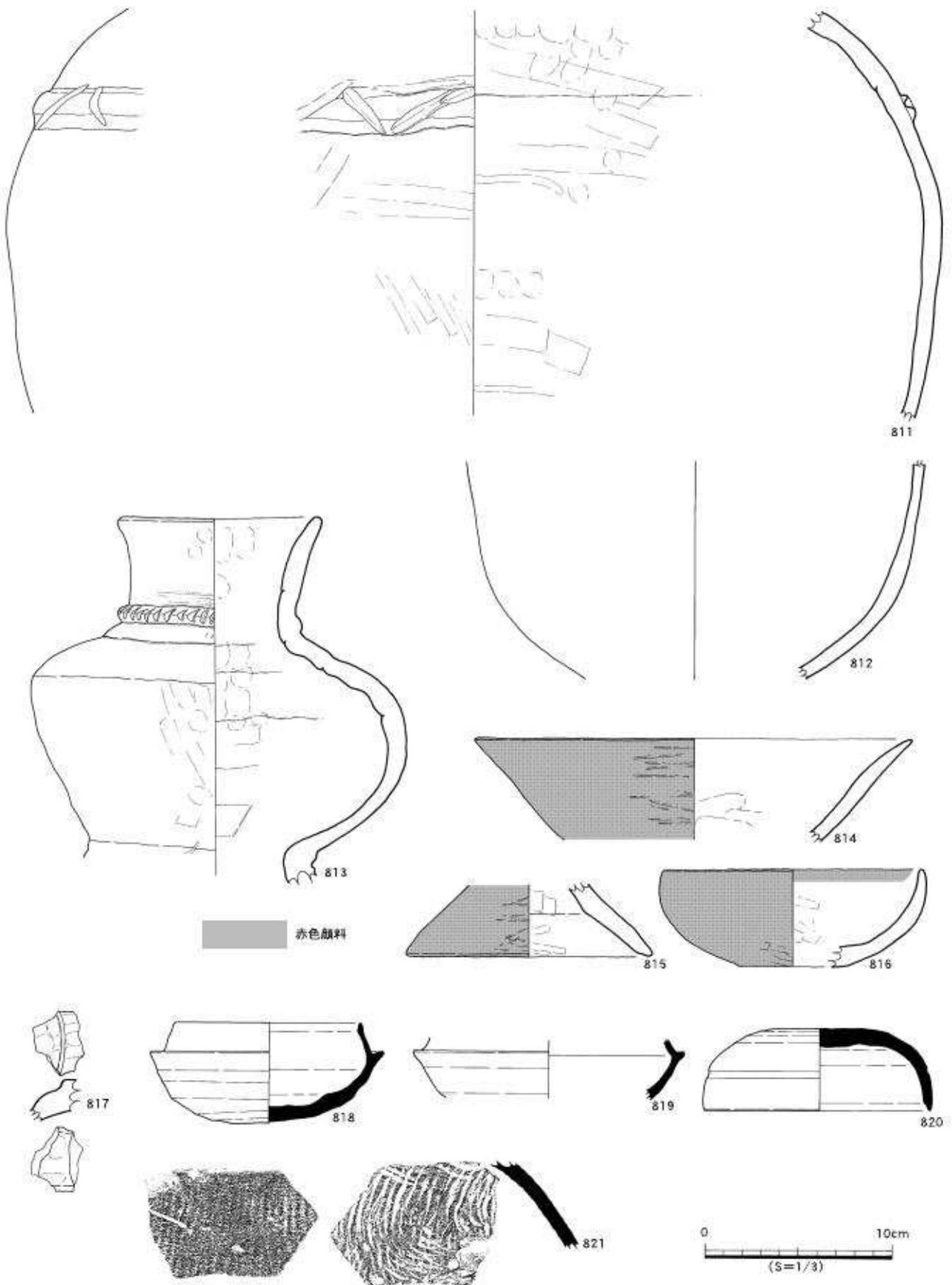
竖穴住居跡85号



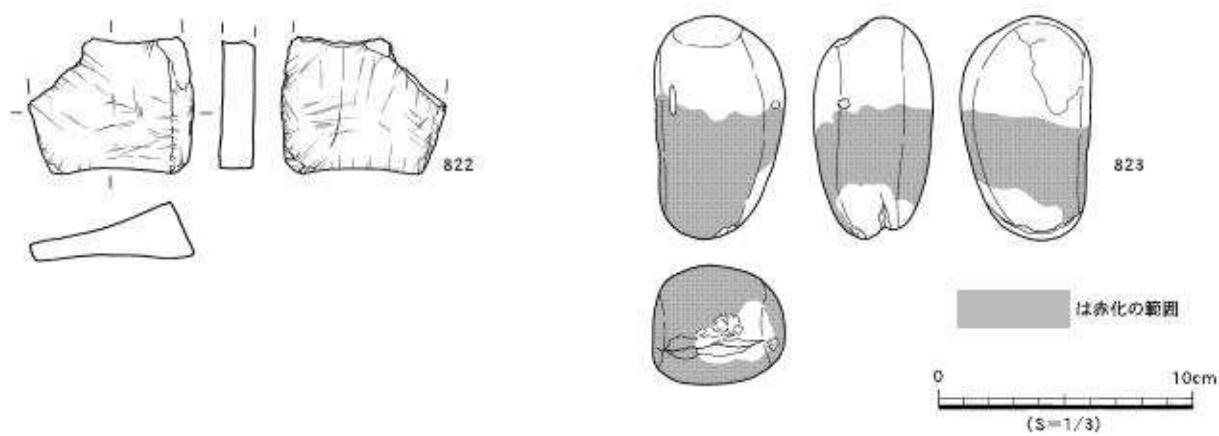
第352図 竖穴住居跡85号・出土遺物①



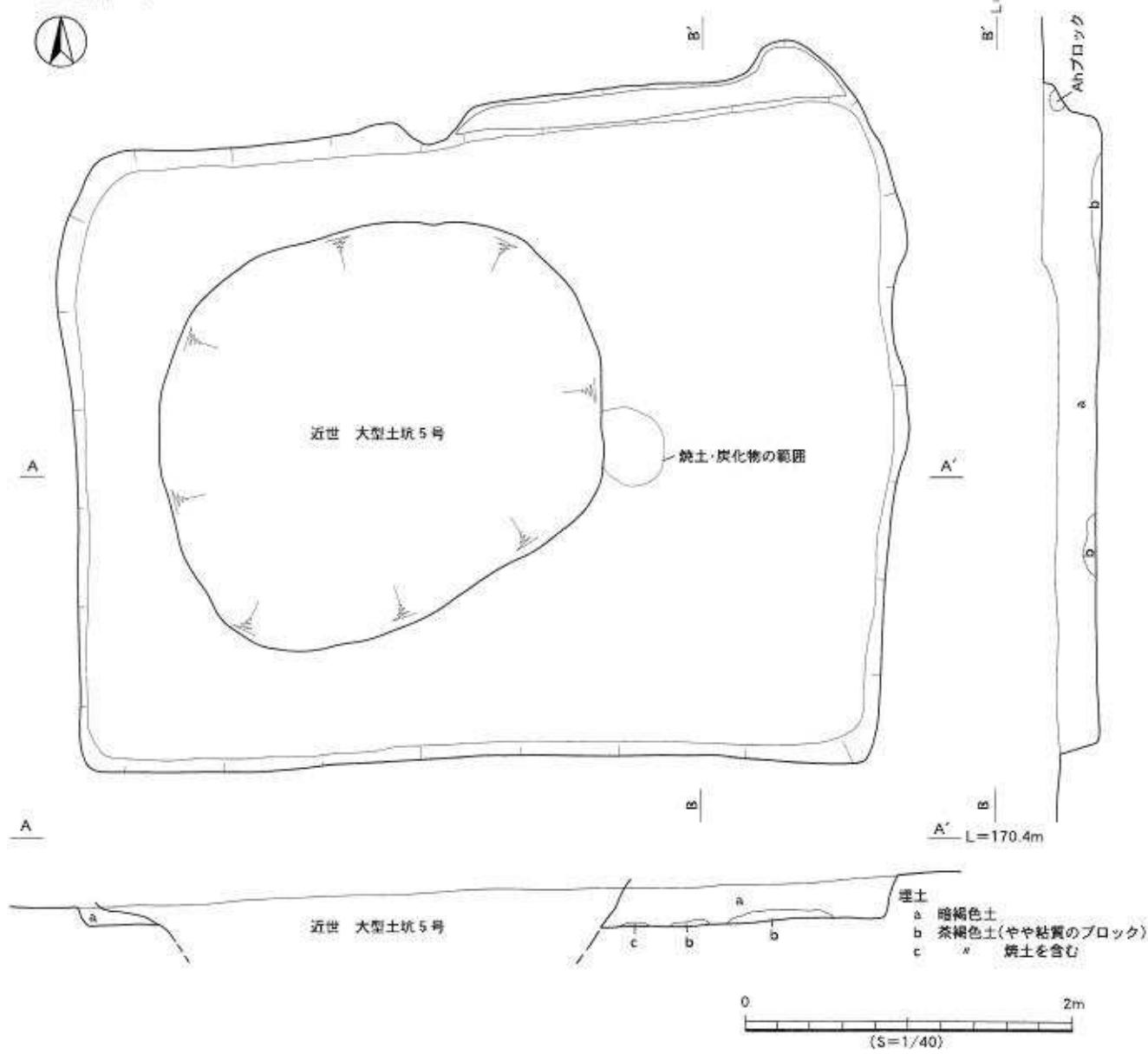
第353図 穹穴住居跡85号出土遺物②



第354図 竪穴住居跡85号出土遺物③



堅穴住居跡85号



第355図 堅穴住居跡85号・出土遺物④

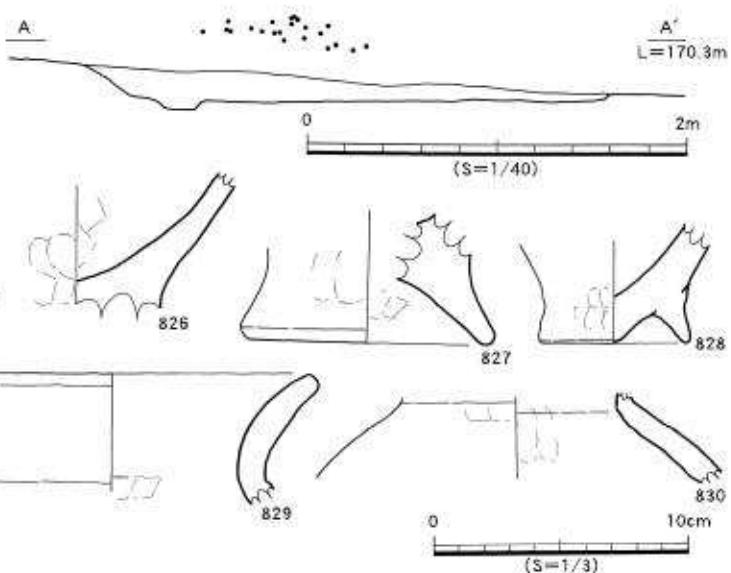
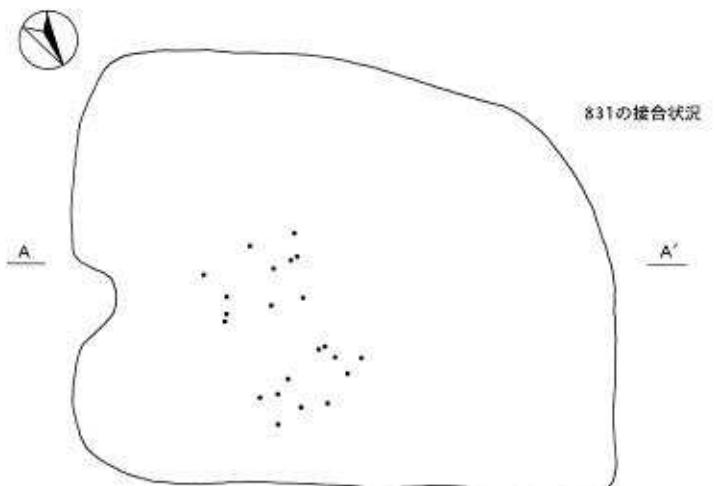
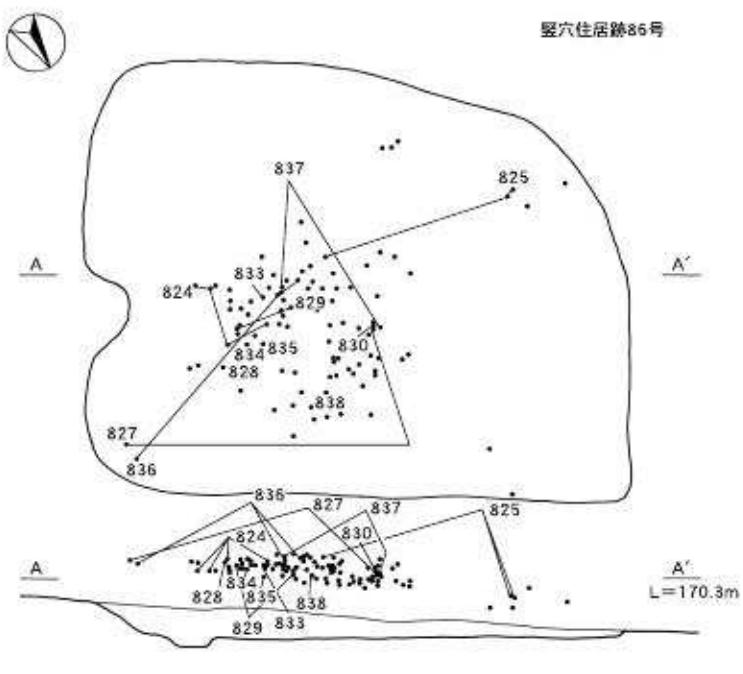
は膨らむが部分的に抜けている。底部へは再び頸部のような外反を見せており、瓢形を呈する可能性も考えられる。818は壊ないしは鉢である。817は土製品である。818~821は須恵器である。818・819は壊身、821は壊蓋である。これらは近世の土坑中からも出土して接合している。

#### 竪穴住居跡86号（第356~358図）

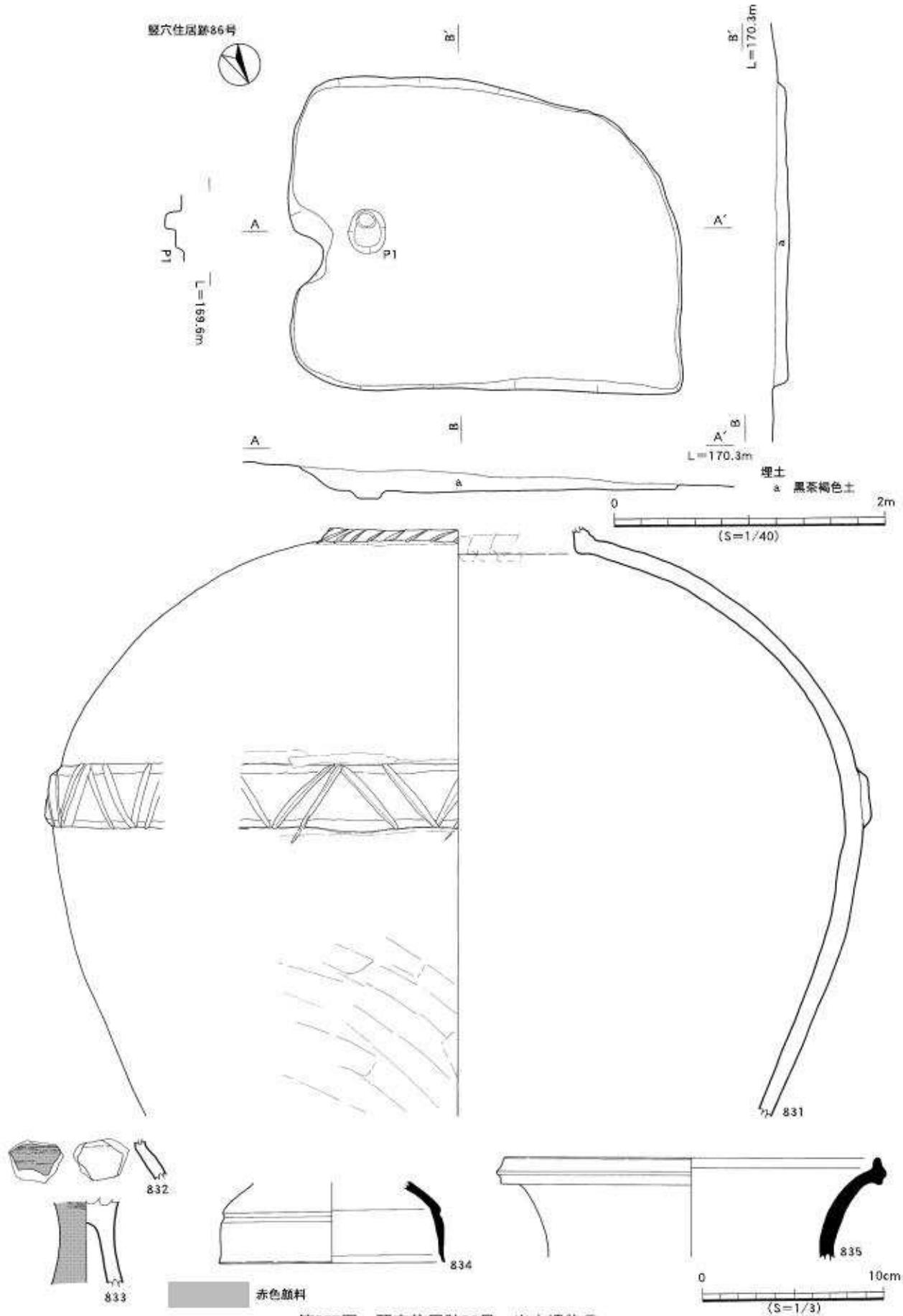
C-37区においてVI層上面で検出された。遺構としての認定は、当初土器集中が見つかり、これを精査する過程で確認された。検出時のプランは、長辺2.9m、短辺2.3mの隅丸長方形で、東側に一部が入り込む。南西側ははっきりとしない。

調査は、土器集中を取り上げた後に、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。土器集中箇所で検出されたため、その後多数の遺物出土を想定していたが、埋土中から遺物の出土は少なかった。床面はアカホヤ下のⅦ層で、貼床や硬化面等は見られなかつた。柱穴などの付帯施設は、床面を除去しながら確認作業を行い、結果1基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかつた。

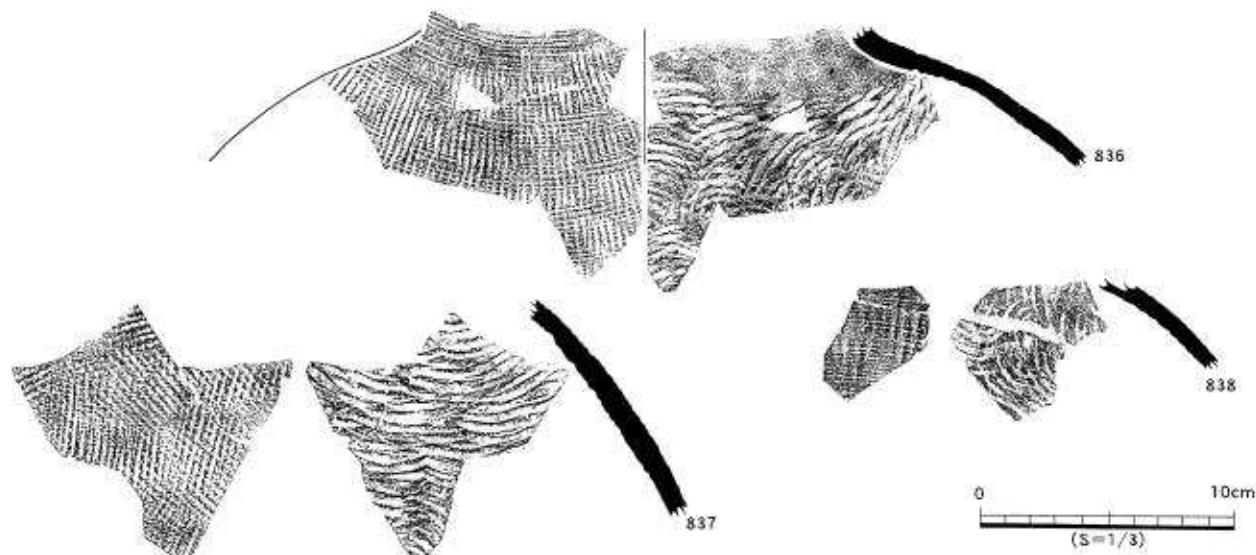
遺物は、総点229点が出土しこの内15点を図化した。825は丸底状を呈する甕である。831は頸部から胴部に至る壺である。頸部には突帶がめぐりキザミを施す。胴部には、最大径付近に幅広の突帶が貼付され、2本1組のキザミが斜位に組み合わさる。834は須恵器の壊蓋である。835と836は須恵器の甕で、色調などから同一個体であると思われるが接合できなかつた。



第356図 竪穴住居跡86号・出土遺物①



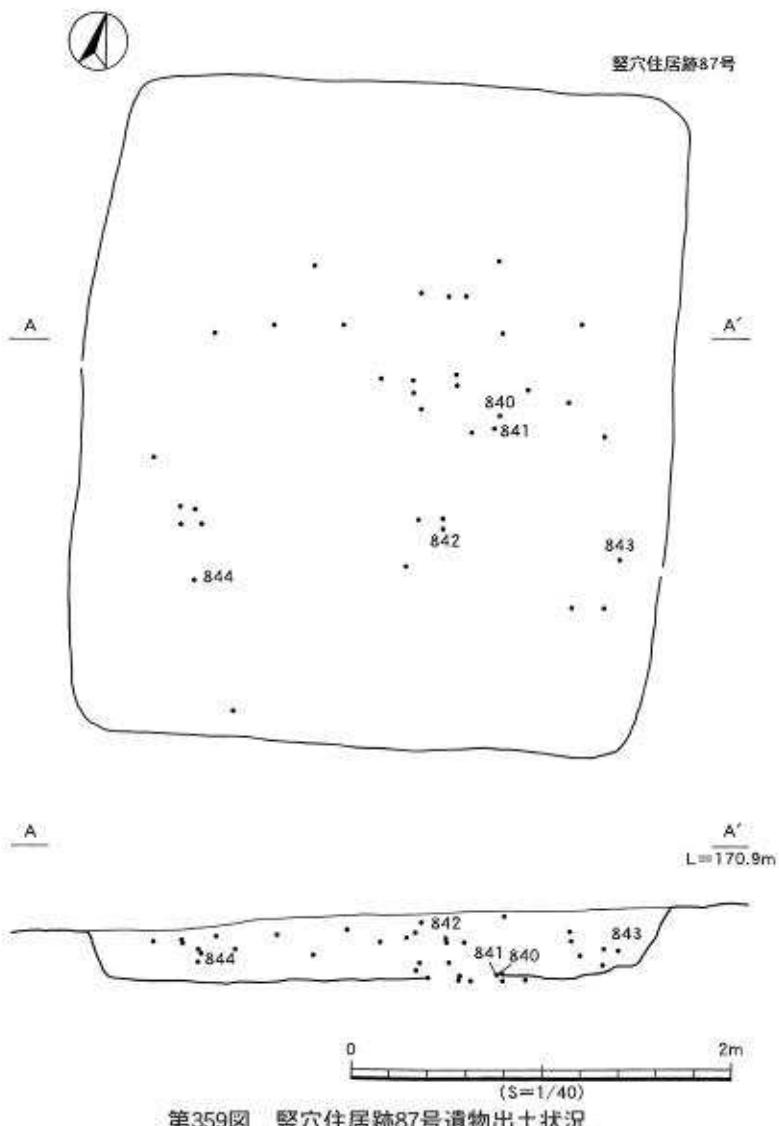
第357図 竪穴住居跡86号・出土遺物②



第358図 竪穴住居跡86号出土遺物③

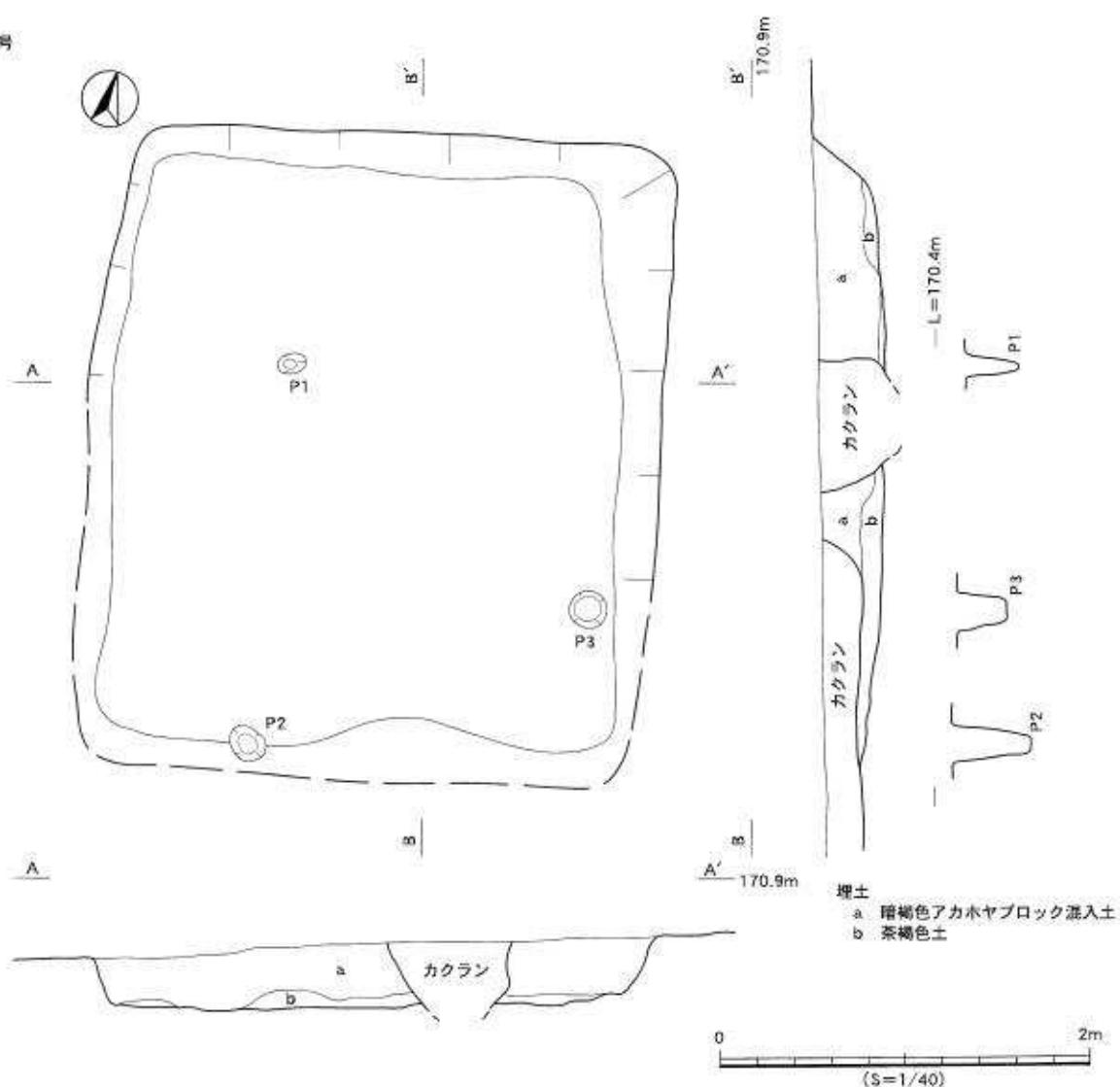
#### 竪穴住居跡87号（第359・360図）

D-39区においてVI層上面で検出された。南半分の上面が近世の擾乱で削平されているなど正確なプランは掴めなかつたが、長辺3.6m、短辺3.2mの概ね隅丸長方形のプランが想定された。調査は、擾乱を受けていない部分で残存状況の良い部分で2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなつた。柱穴などの付帯施設は、床面を除去した段階で確認され、結果3基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは確認できなかつた。遺物は、総点で61点が出土しこの内の6点を図化した。840は甕の突帶部分の破片である。突帶を上下方向からつまむ手法は、甕III類やIV類など口縁部が直行ないしはやや内湾するタイプに見られるものである。



第359図 竪穴住居跡87号遺物出土状況

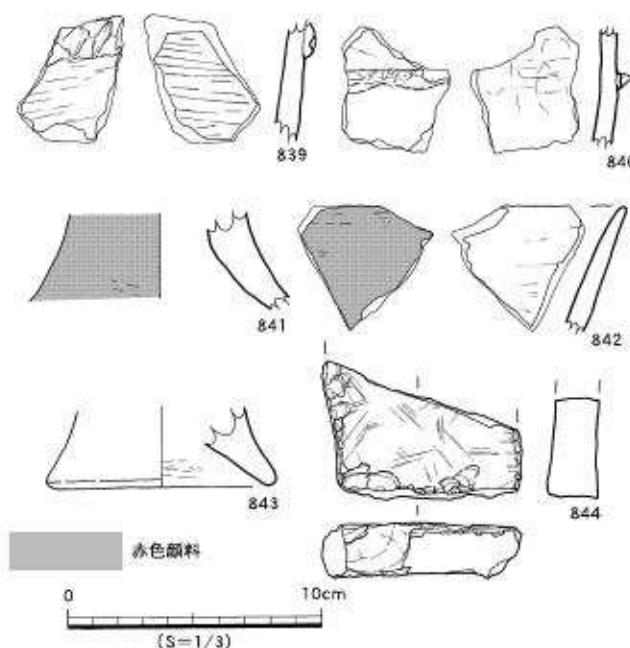
竪穴住居跡87号



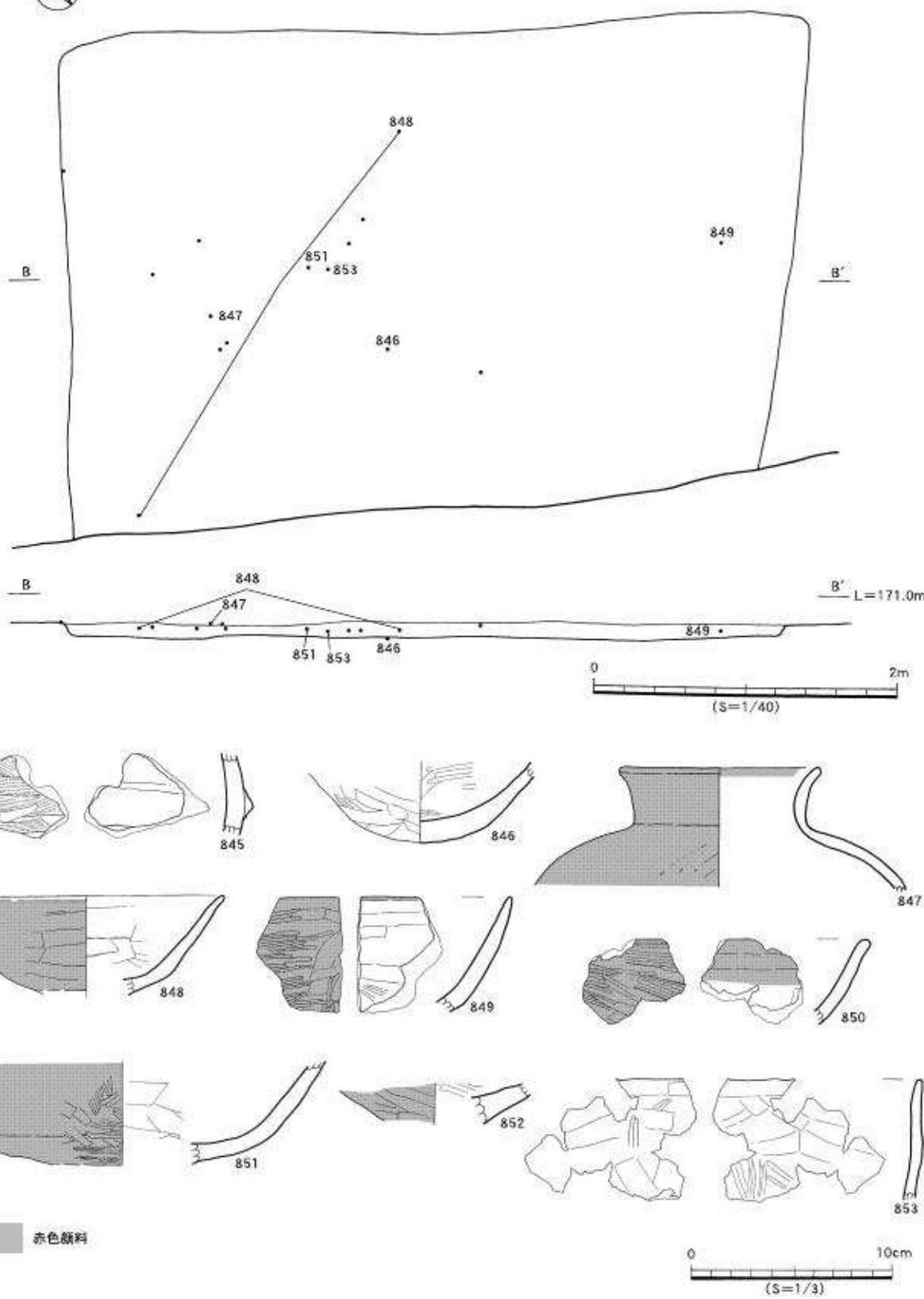
竪穴住居跡88号 (第361・362図)

G-40区においてVI層上面で検出された。周辺は近世の削平や攪乱等を激しく受け、北側のプランは消失していた。検出時のプランは、長辺4.8m、短辺3.2mの隅丸長方形。調査は、残存する部分での中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。上面が削平されていることもあります。検出面から床面までは10cmに満たない。中央に焼土と炭化物が集中する範囲が見られ、これが浅い土坑状を呈している。

柱穴などの付帯施設は、床面を除去しながら確認作業を進め、結果4基の柱穴が確認された。遺物は、総点で137点が出土しこの内の9点を図化した。

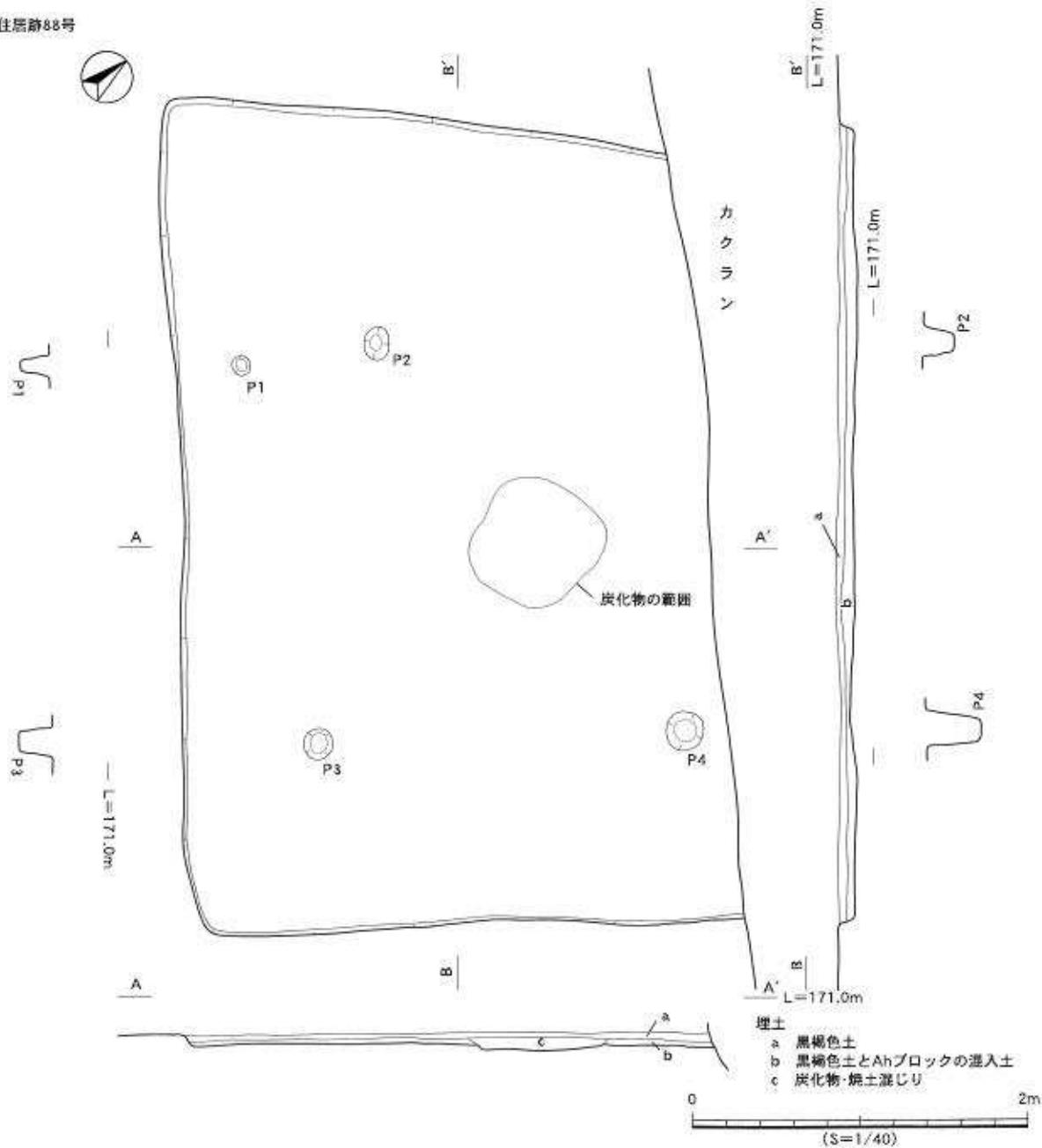


第360図 竪穴住居跡87号・出土遺物



第361図 竪穴住居跡88号・出土遺物

縫穴住居跡88号



第362図 縫穴住居跡88号

## 縫穴住居跡89号（第363図）

F-41区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺3.6m、短辺3.2mの隅丸長方形で、南側に土坑状の張り出し部を持つ。

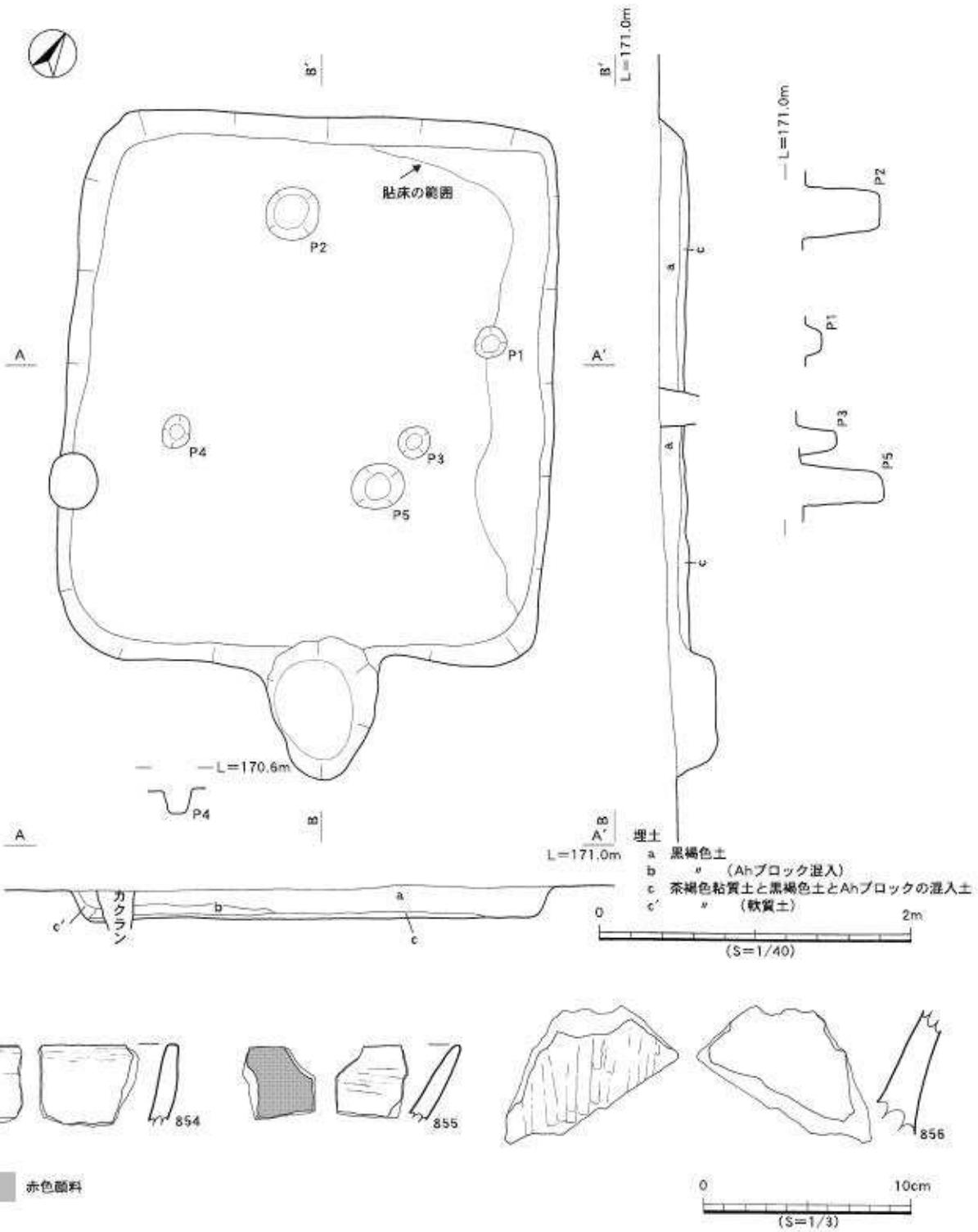
調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出を行った。住居中央には塩化ビニールの管が東西方向に入っており、これを除去しながら全体的なプラン検出に努めた。

床面は、アカホヤと黒褐色土の混入土上面にわずかではあるが、硬化が確認されたため、これを床面と判断した。柱穴などの付帯施設は、硬質土を除去した段階で5

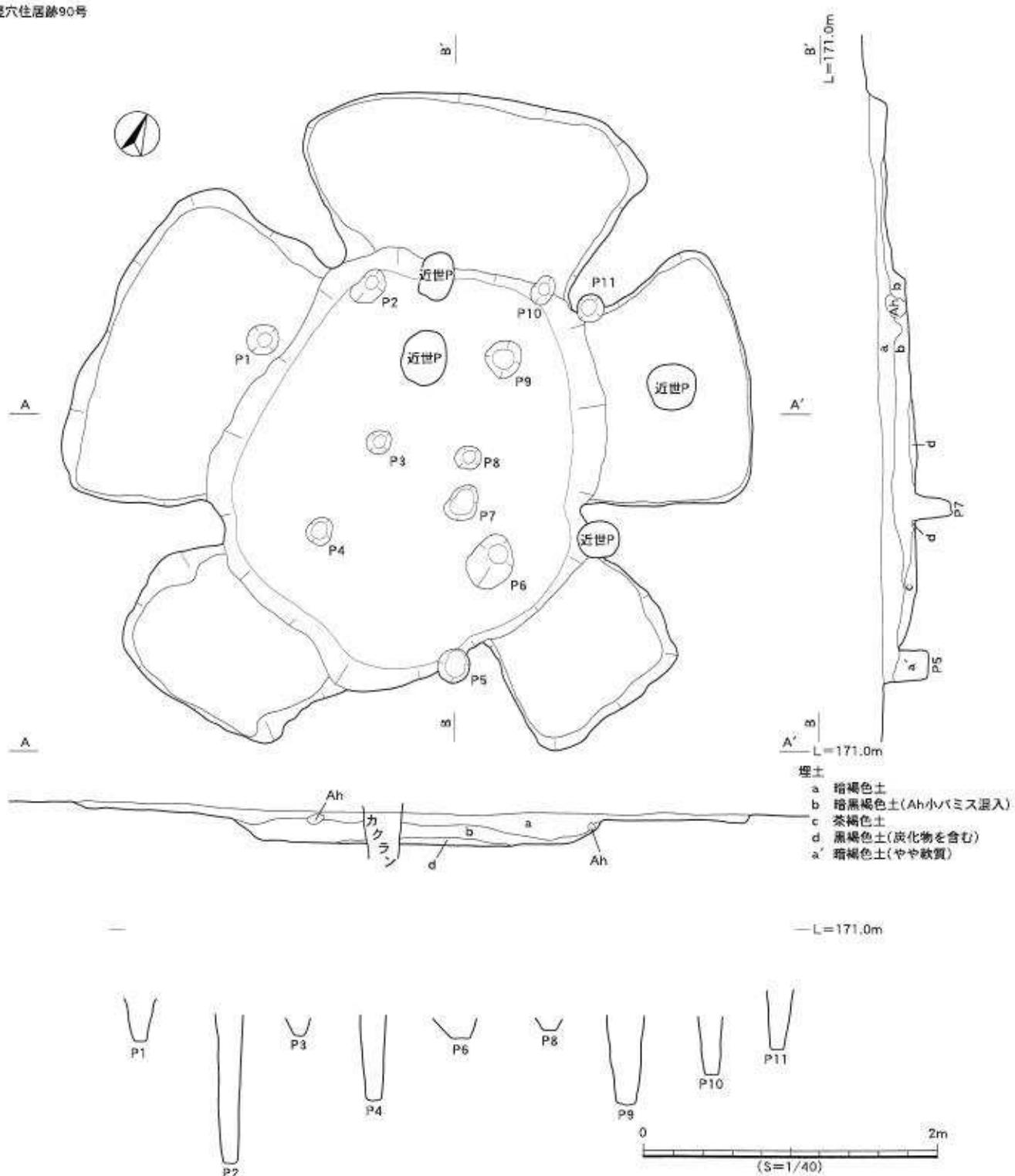
基の柱穴が確認された。

住居南側の土坑状の張り出し部は、住居と同質の埋土が堆積していた。住居床面検出段階では、住居に見られる硬質土は土坑内には堆積しておらず、切り合い関係とも考えられたが、住居短軸中央に位置している点などから、住居に伴う施設の一部であると判断した。

なお、土坑内からは炭化物等はほとんど出土していない。加えて、炉・焼土や炭化物の広がりもつかめなかつた。遺物は、総点で37点が出土しこの内3点を図化した。



第363図 竪穴住居跡89号・出土遺物



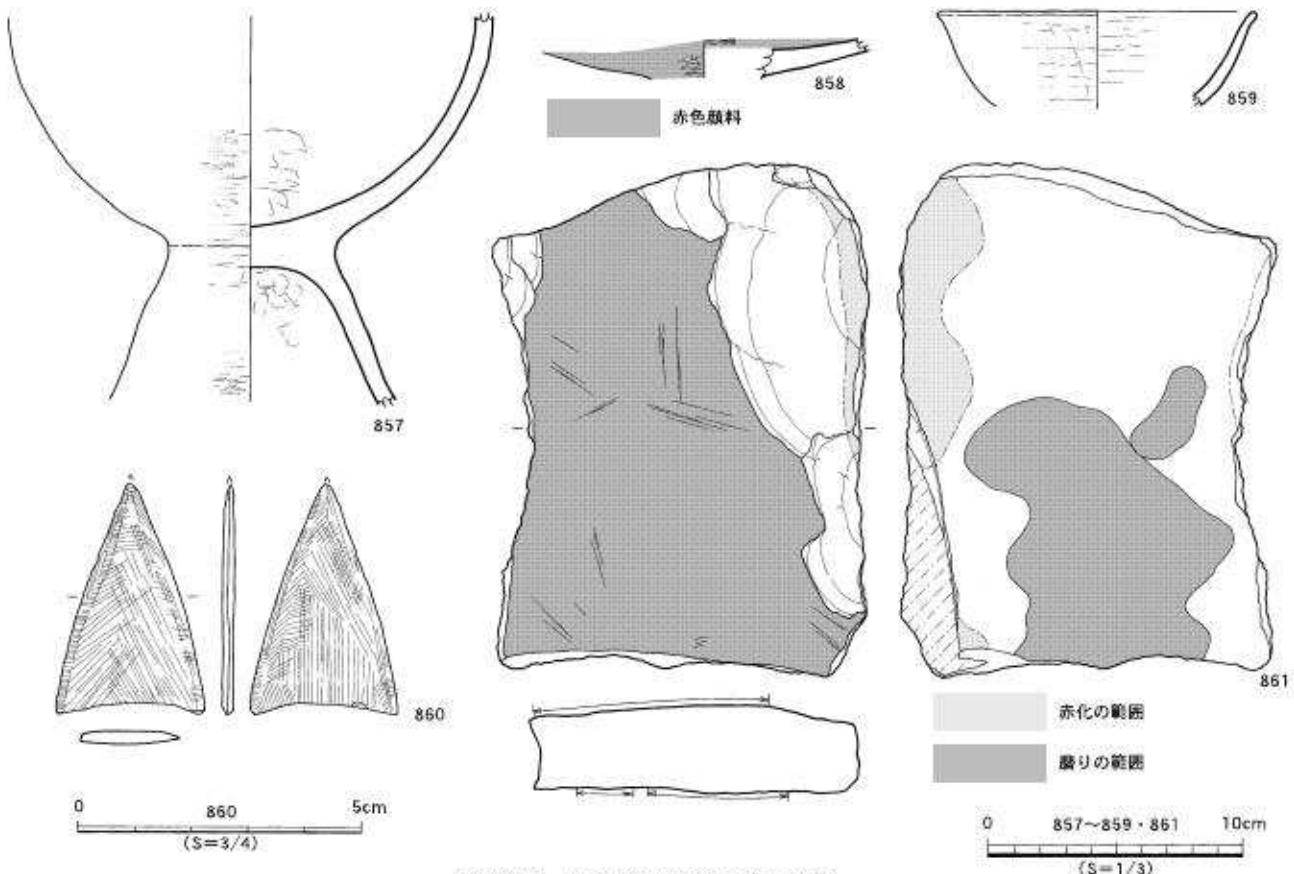
第364図 豊穴住居跡90号

## 豊穴住居跡90号（第364・365図）

E + F - 41・42区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺4b6m、短辺4mの花弁形で、5カ所に張り出し状のプランが認められた。この内、北側と東西側の3カ所についてはやや大きめで、残りはやや小さいという特徴が見られた。また、部分的に後世の灰褐色埋土（I-b層に該当）の柱穴と切り合う。

調査は、豊穴部及び平面形が確認できた張り出し部を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出を行った。中央部分は多角形状に深くなり、床面は全体的にアカホヤブロックと黒色土とが混在した状態で硬質であったが、硬化面とまでは呼べない。

中央よりやや南側の位置には炭化物が広がっていた。



第365図 積穴住居跡90号出土遺物

放射性炭素年代測定で、 $1,725 \pm 20$ yrBPと結果が示されている。

柱穴などの付帯施設は、床面を除去しながら確認していく。その結果、11基の柱穴が確認された。特に、P 2は検出面から1mと深い。なお、やや硬質の床面を除去していくと、花弁の中心部分が浅いすり鉢状に凹んでいることがわかった。造成時の掘り方であろうか。

遺物は、総点で72点が出土しこの内の5点を図化した。857は長い脚部を有する。胴部は球状を呈しており、壺状の器形が想定されるが、内面の状態や器壁の薄さなどから決め手を欠く。589は口縁部が丸みを帯びて外反する。内外面共に入念な調整が施されている。860は、二等辺三角形状の磨製石鏃である。床面ではなく、埋土中からの出土である。

#### 積穴住居跡91号（第366図）

C-42区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺2.9m、短辺2.5mの隅丸方形で、南側に楕円形の張り出し部が認められた。

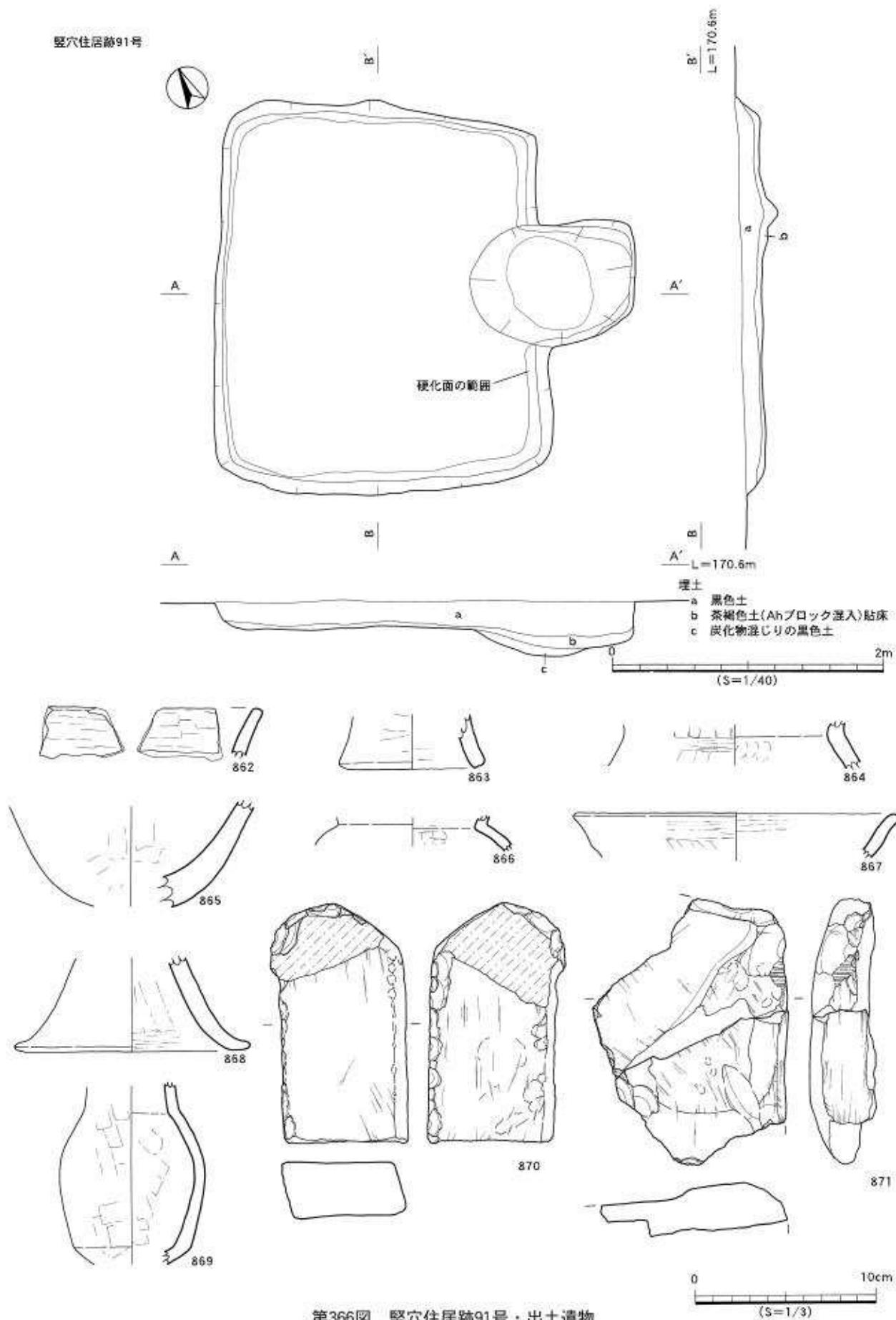
調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。床面には硬化面が確認され、これは住居から南側の楕円形土坑上面に至るまでは全面に見られた。

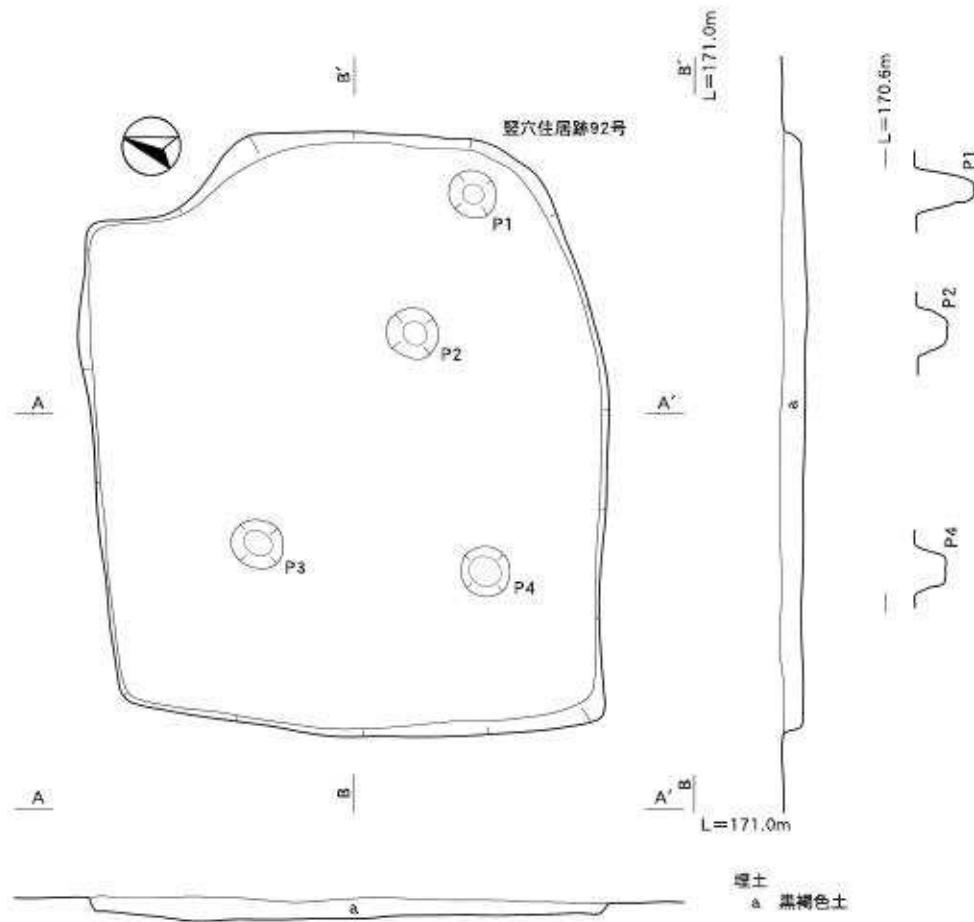
なお、土坑上面に位置する硬化面は、住居床面と比べてやや落ち込んでいる。これは、硬化面下の埋土cが比較的軟質であるために、硬化面が落ち込んだのではないかと思われる。

柱穴などの付帯施設は、硬化面を除去しながら確認を進めていったがはっきりと検出できなかった。炉・焼土や炭化物の広がりも捉えられなかったが、南側土坑埋土中には炭化物が比較的多く見られた。放射性炭素年代測定で、 $1,675 \pm 20$ yrBPと結果が示されている。

遺物は、総点で136点が出土しこの内の10点を図化した。いずれも小破片が多く、図化は困難なものが多い。862・863は甌の破片である。864・865は壺の破片と思われる。866は甌の頸部である。868は高環の脚部である。これは南側の土坑を調査中に硬化面下から出土したものである。869は、小型の壺状を想定して図化したが、詳細は不明である。870・871は砥石と思われる。

豊穴住居跡91号





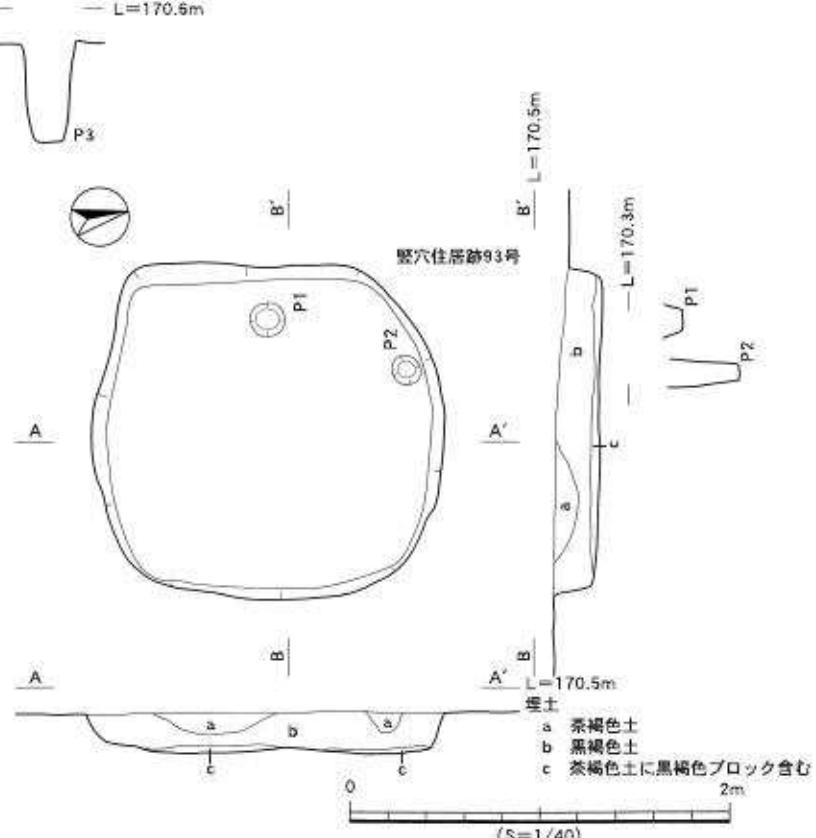
豊穴住居跡92号（第367図）

D・E-50区においてVI層上面からVII層にかけて検出された。包含層も含めて、上面がかなり削平を受けての検出であった。検出時のプランは、長辺3.2m、短辺2.6mの隅丸長方形を基調とするが、東側にやや張り出し部が認められた。

調査は、豊穴部と張り出し部との中央を通る2本の直行するベルトを設定して埋土の掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出を行った。検出面から床面までの深さは10cmと全体的に浅く、張り出し部はさらに浅く、はっきりとしたプランを捉えることができなかった。床面には、硬化面や焼土等は認められず、アカホヤ火山灰層の面がそのまま床面として利用されていたようである。

柱穴などの付帯施設は、床面の検出状況を記録した後に、床面を除去しながら確認作業を行った。その結果4基の柱穴が確認された。検出面からの深さは、P1・3は深く、P2・4が浅い。

遺物は、遺構検出面から浅いこともあります。



第367図 豊穴住居跡92号、93号

総点で2点出土し、全て一括して取り上げた。いずれも小破片であり、図化するに至る資料ではないことから時期判断は困難であった。また、周辺も後世の削平を受けているため、正確な時期判断を示すことはできないが、埋土等から概ね古墳時代と考えここに掲載した。

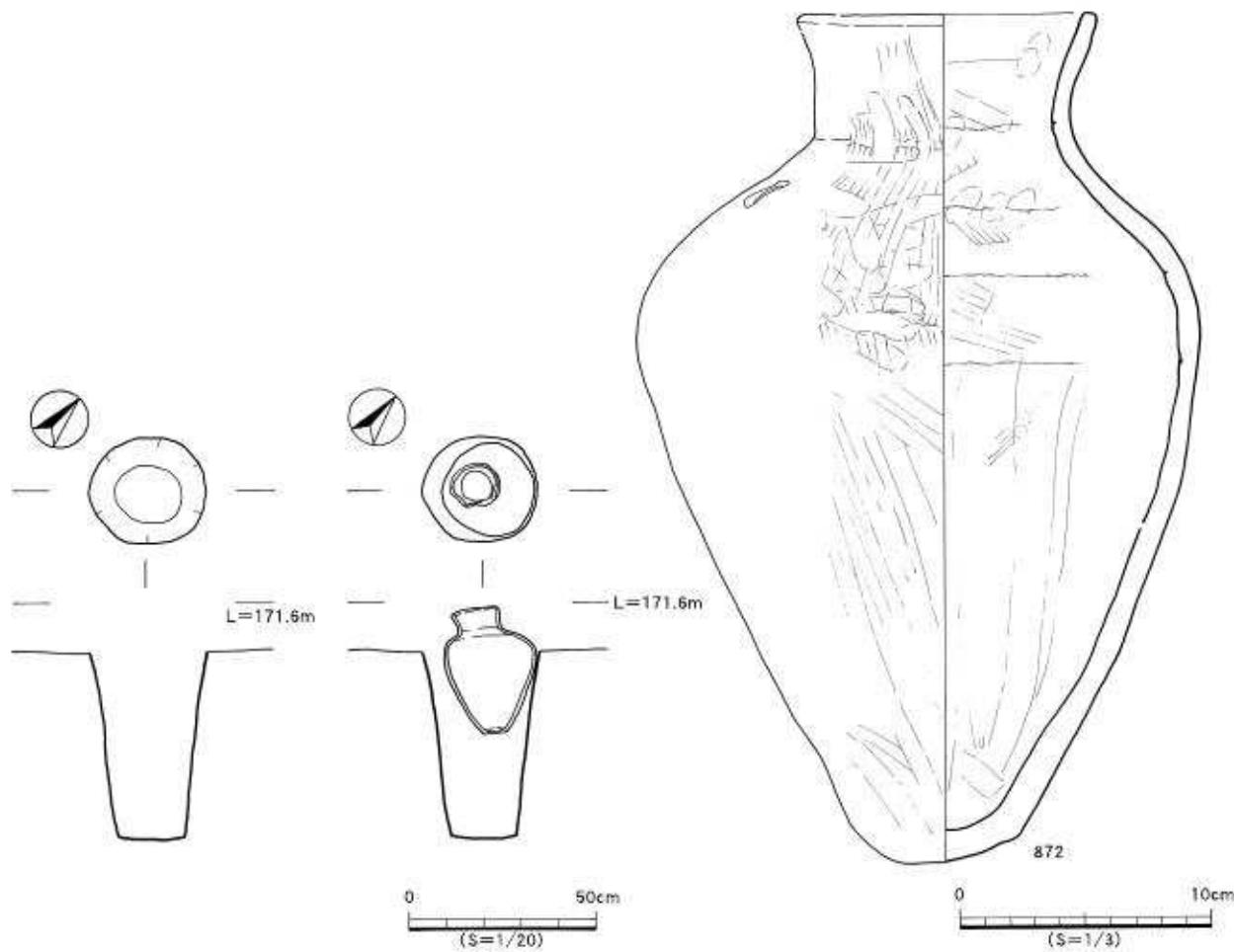
#### 竪穴住居跡93号（第367図）

D-51区においてVI層上面で検出された。検出時のプランは、長辺1.9m、短辺1.8mの隅丸長方形で、検出時には一辺の長さから土坑を想定した。調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し、床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で埋土の記録を行い、ベルトを除去し床面を検出していった。硬化面や貼床等は見られず、柱穴などの付帯施設の確認は、床面を除去した段階で1基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られない。

住居としての判断材料は乏しいが、周辺の土坑とは様相が異なっており、住居としてここに掲載した。遺物は、2点出土したが図化困難であった。

#### 埋設土器（第368図）

J-5区で、柱穴内に壺形土器がほぼ関係の状態で検出された。口縁部を上にしている点や埋土中に浮いている点、肩部に焼成後の打ち欠きによる穿孔が見られる点などから意図的に埋設したものと判断した。872は、器高34cm、胴部最大径が22cmある壺形で、口縁部から頸部にかけては短く、わずかに外傾する。壺内の土は、リン・カルシウム分析を実施した。包含層土壤との特異差は明確ではない（第4章参照）。



第368図 埋設土器出土状況・出土遺物

### 土坑（第369図～第377図）

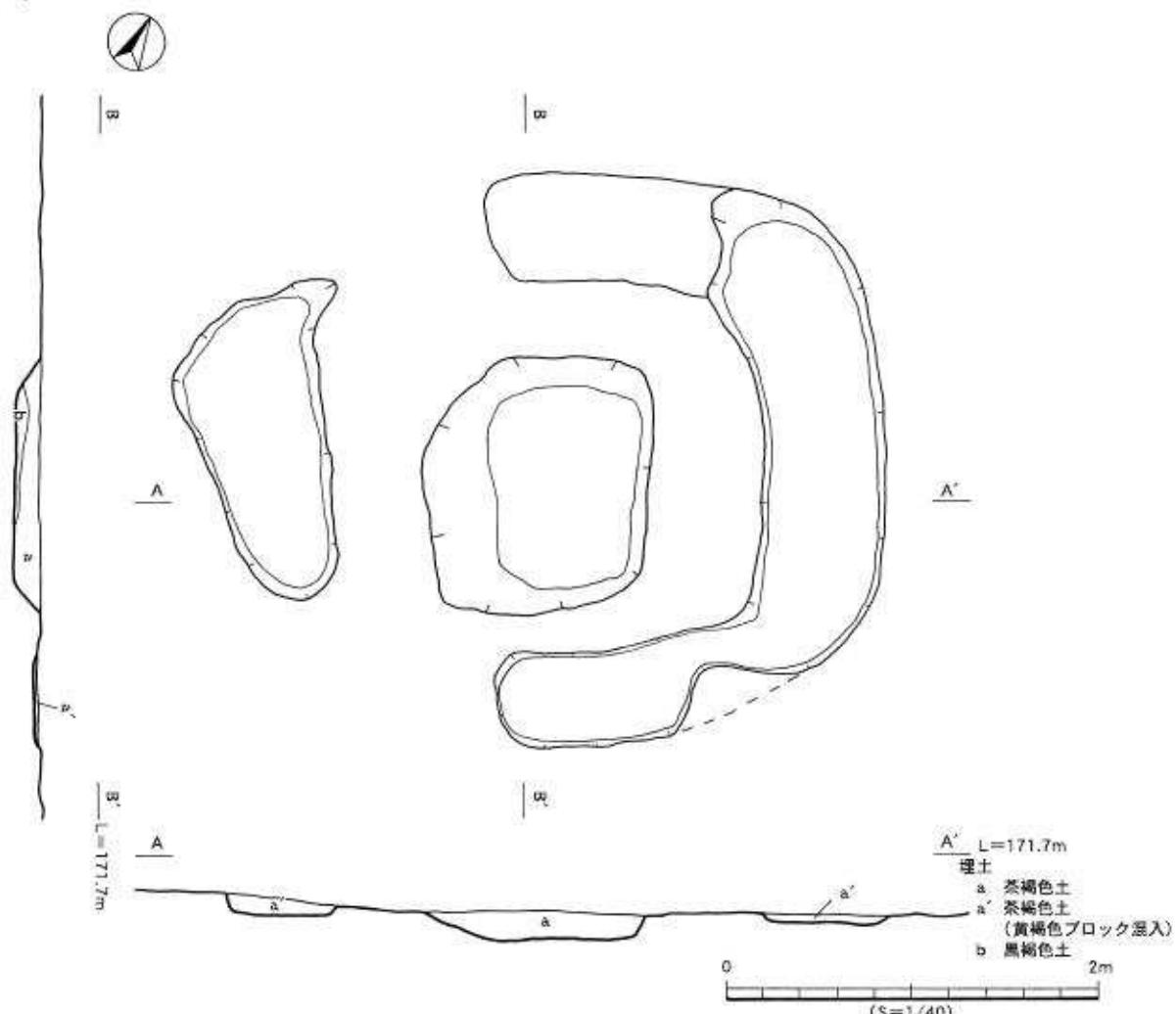
土坑は、28基が検出された。形態では周溝が隣接するもの（11・12号）、円形で深いもの（1・3号）、隅丸方形ないしは隅丸長方形（4・5・9・14・15・23・24号）、円形（6・7・13・19・20・22号）、梢円形（16・21・26・25・27号）、不定形（2・8・17・18号）の6種類に大別できる。土坑11号は北西と南西の2方向の周溝を欠く。北側も検出時既に痕跡のもの部分もあり、残存部は全体的に浅い。中央にある隅丸長方形の土坑はやや深く、この中から877～879などの遺物が出土している。土坑12号は南側半分の周溝が残存していた。中央土坑とほぼ同じ深さを呈するが、東側はやや浅い。遺物は出土していない。隣接する11号内の遺物と埋土状況から時期判断を行った。1号土坑は、竪穴住居跡13号の床面において確認された。23・24号は隣接して検出された（図版54参照）。7号土坑は、大型の礫や石皿、土器片を他の土坑よりは多く含んでいる。小破片が多いが、2点を図化することができた。21号土坑からは北側に885と886の

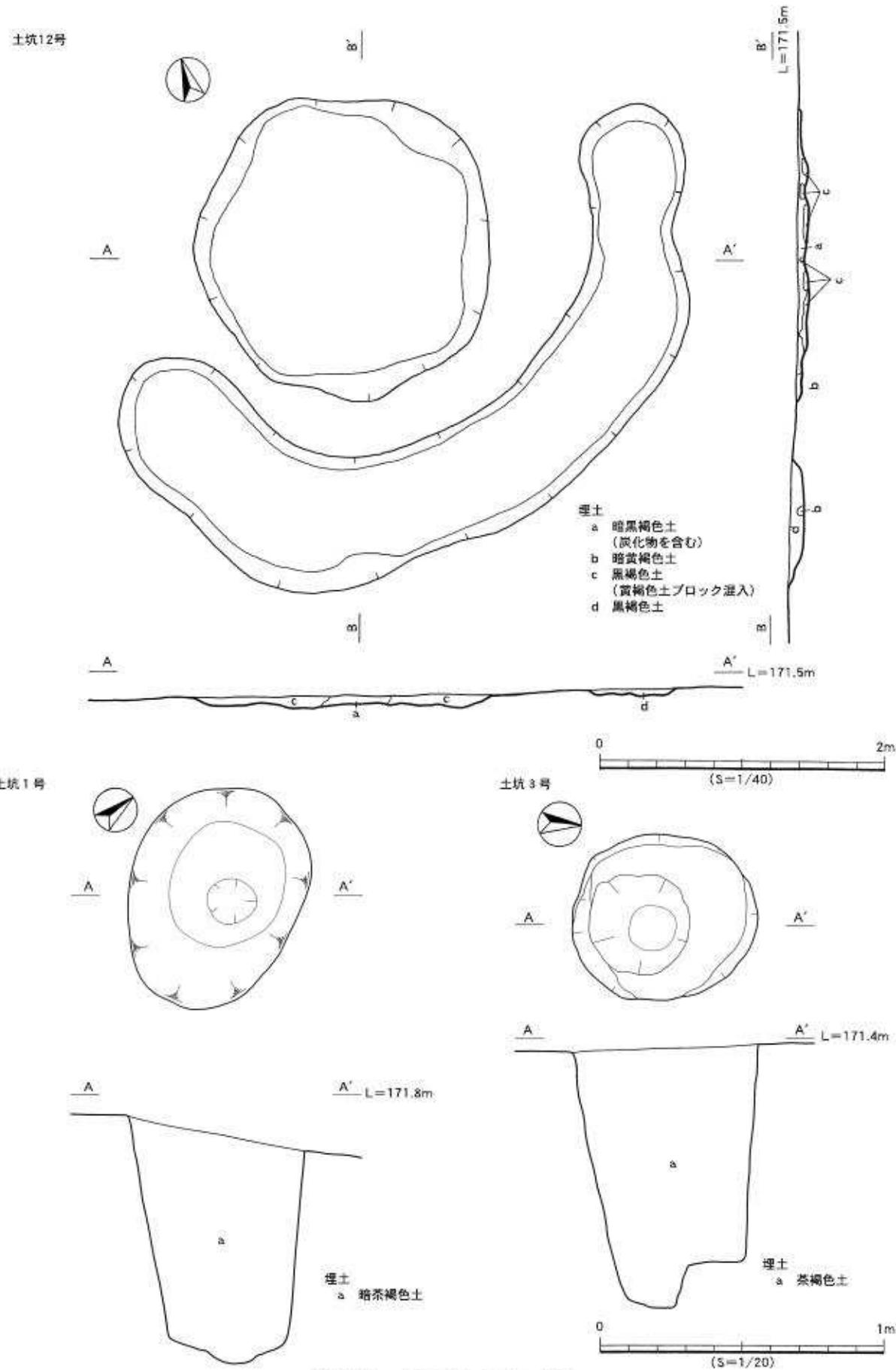
破片がまとめて出土していた。28号は調査区南端に近い位置で検出されている。埋土の状況から時期判断を行った。

### 柱穴（第162図～第194図）

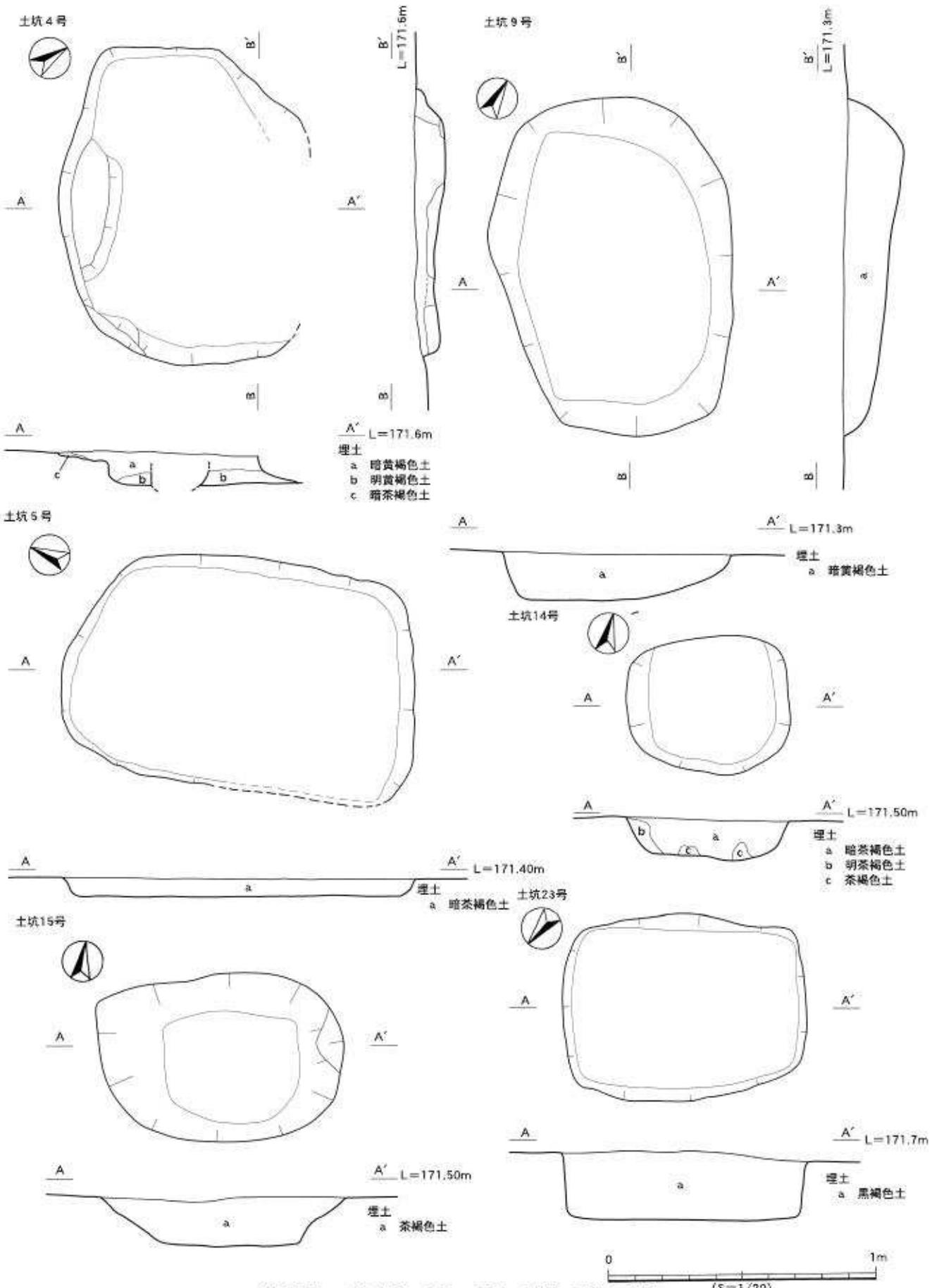
調査区のほぼ全域にわたって検出されている。調査中並びに報告書作成中において掘立柱建物跡等を想定して復元を試みたが、復元するに至らなかった。そのため、遺構配置図上に平面プランのみを掲載している。これで見ると、竪穴住居跡が密集している北側において、柱穴のあまり見られないエリアが浮かび上がったり、逆に、密集してあるエリアが浮かび上がったりする。柱穴内からは当該期の遺物も若干出土しているが、これらの多くは小破片であり、これらから意図的な行為等は想定できなかった。唯一、壺形土器が出土した柱穴があるが、これは、埋設土器として先述の通りである。

土坑11号

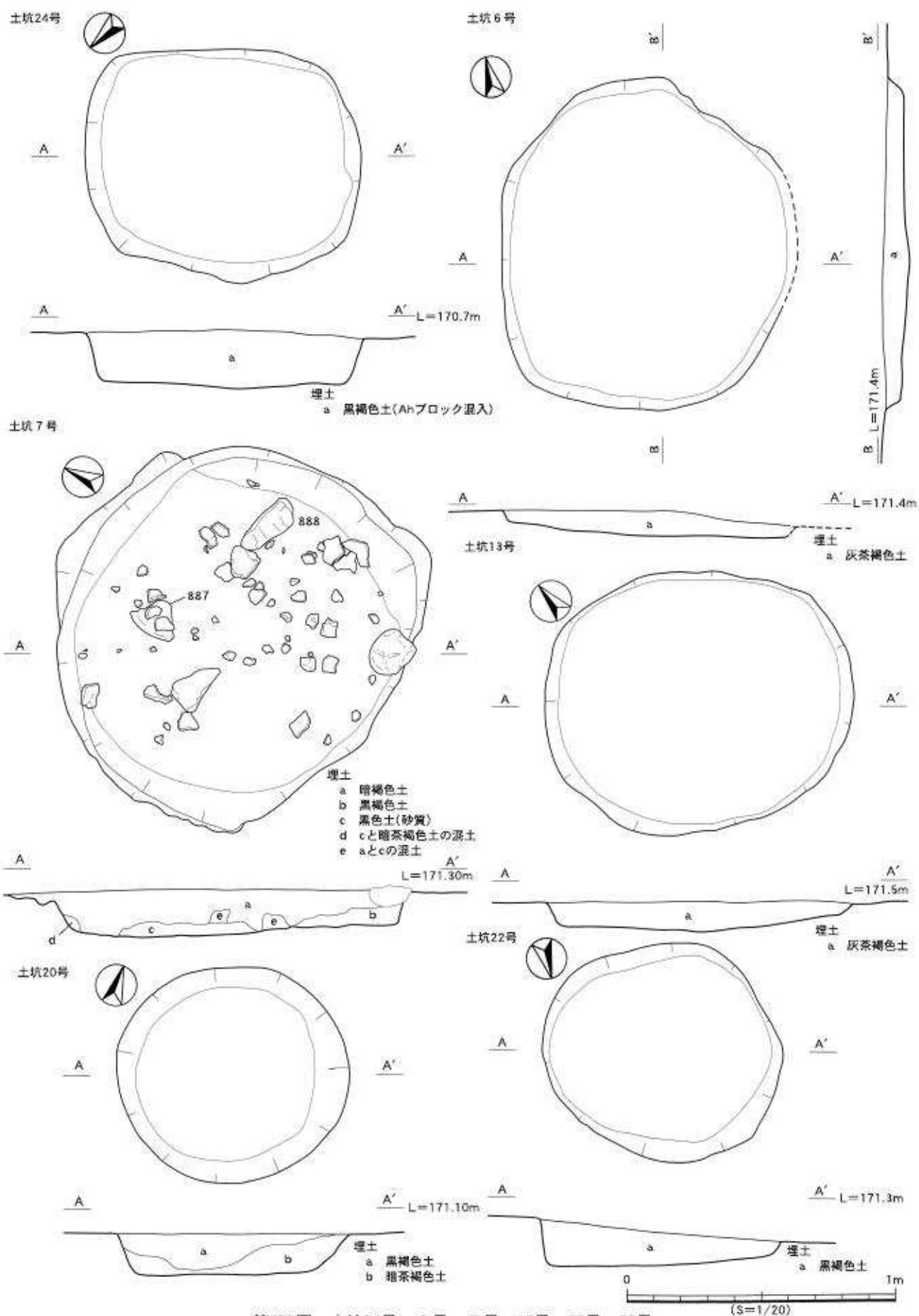




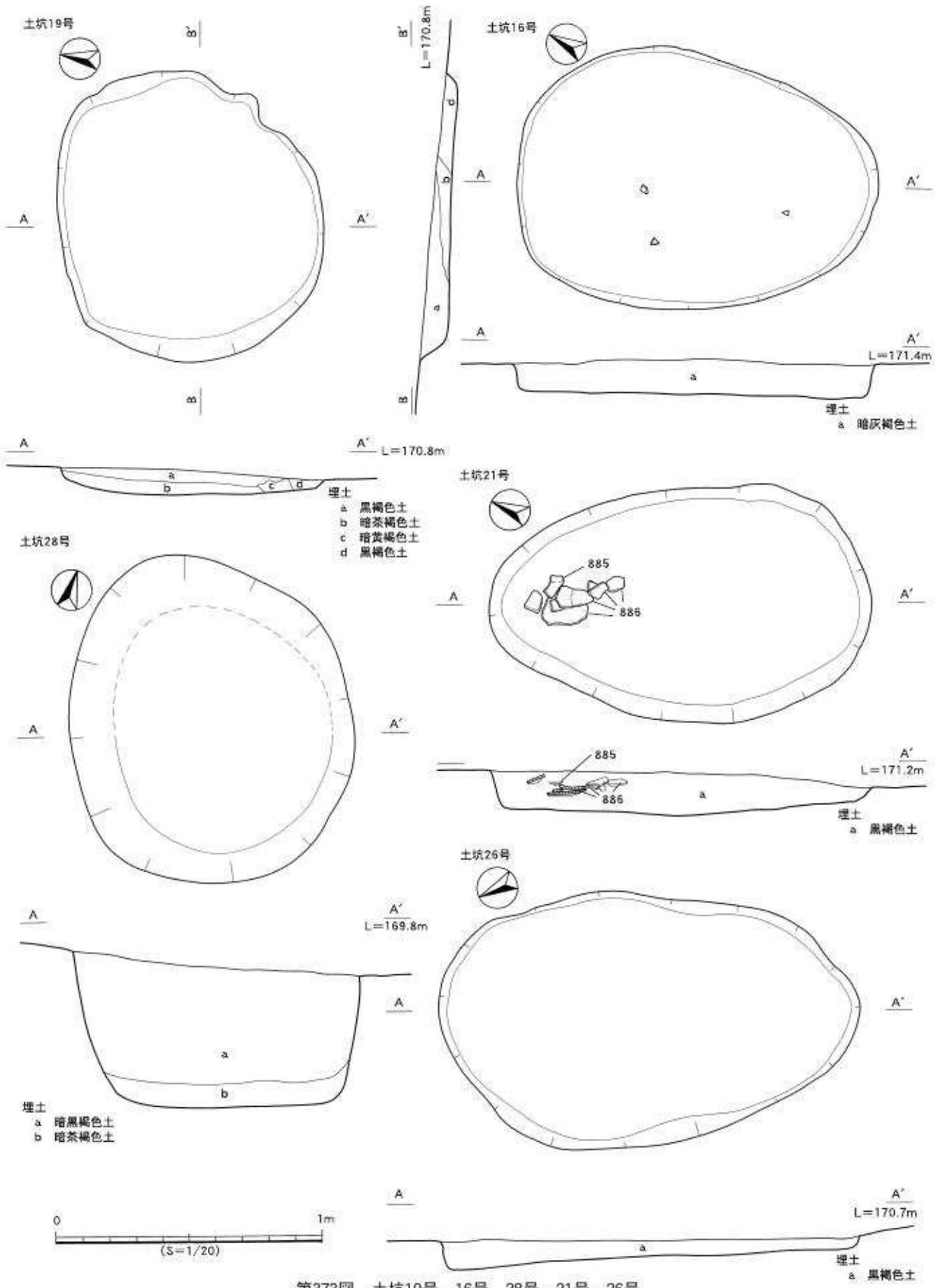
第370図 土坑12号、1号、3号



第371図 土坑 4 号, 9 号, 5 号, 14 号, 15 号, 23 号

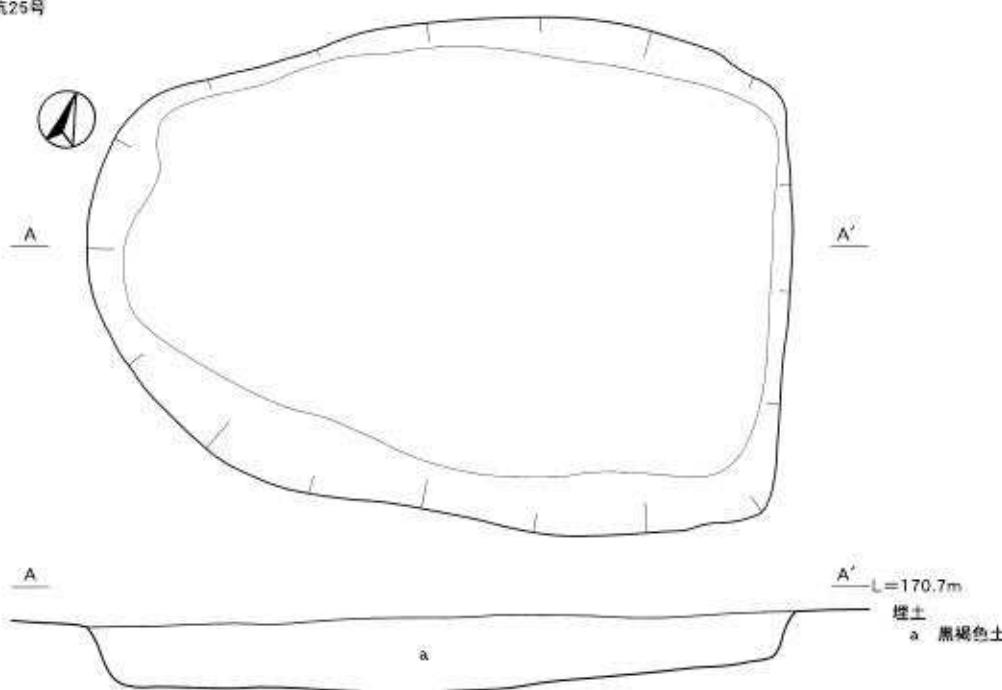


第372圖 土坑24号、6号、7号、13号、20号、22号

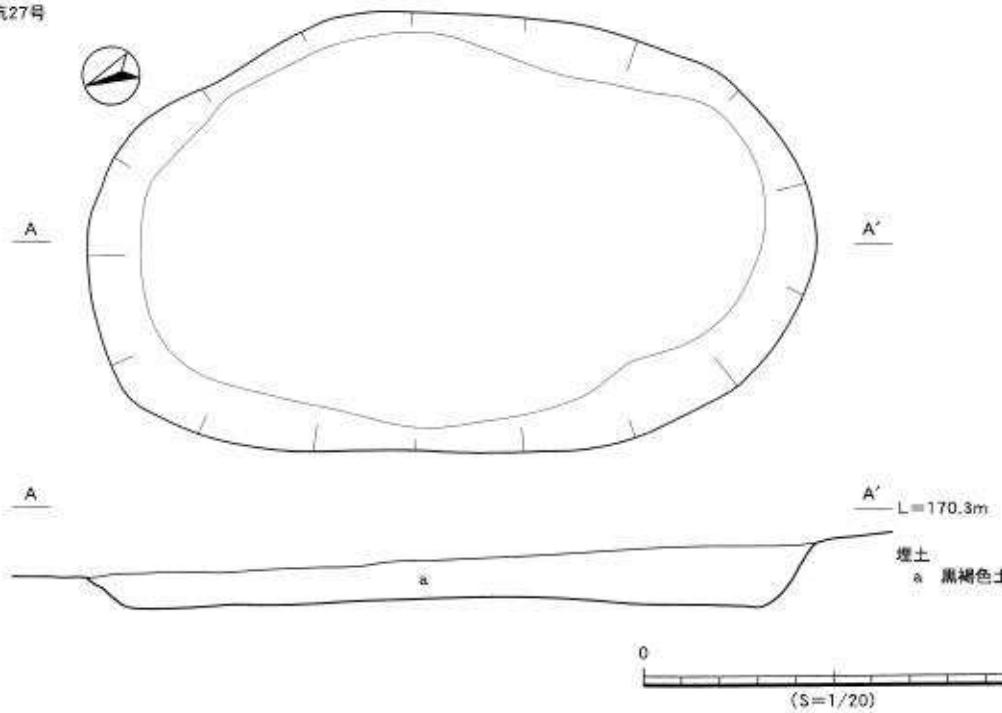


第373図 土坑19号、16号、28号、21号、26号

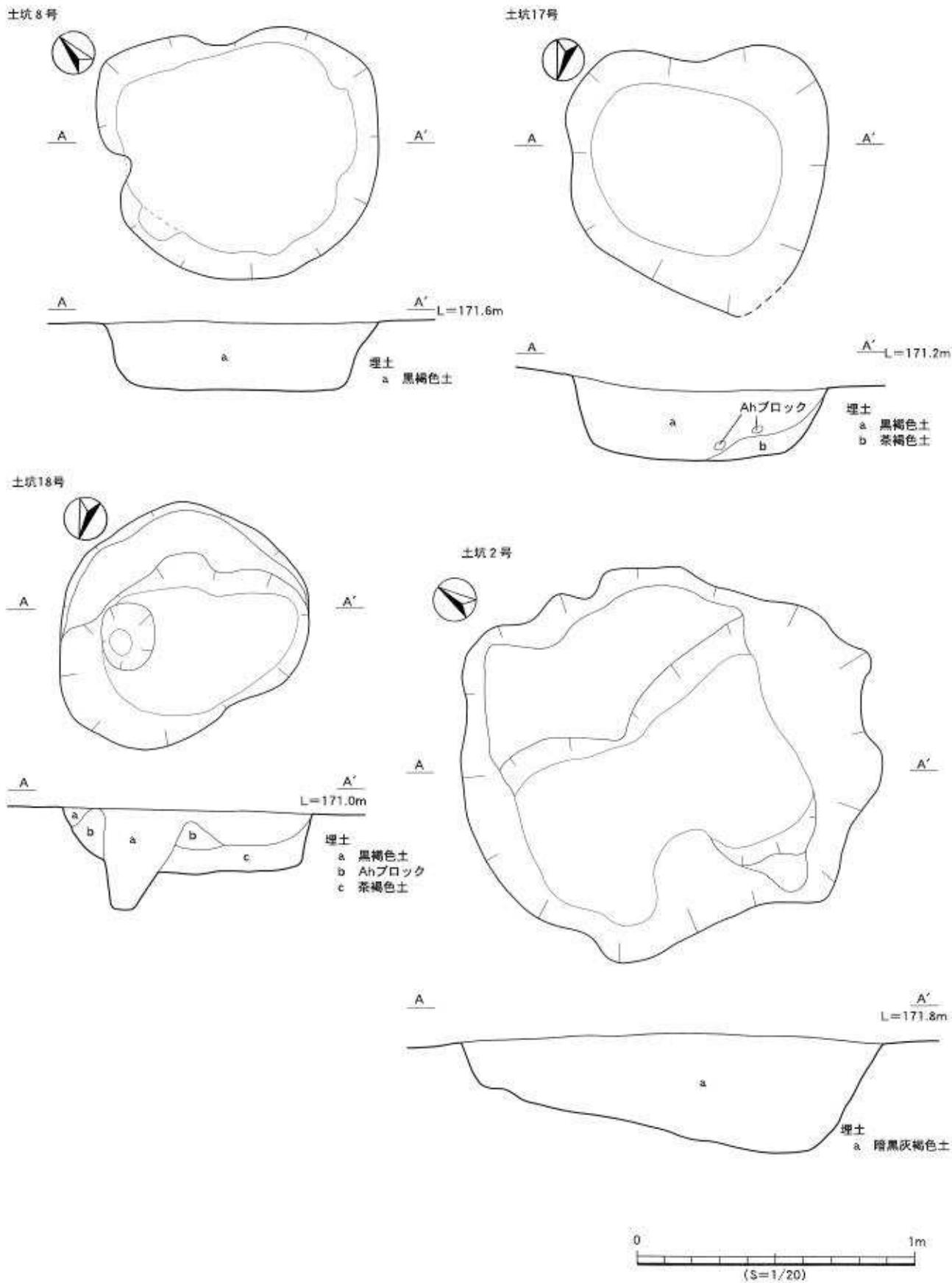
土坑25号



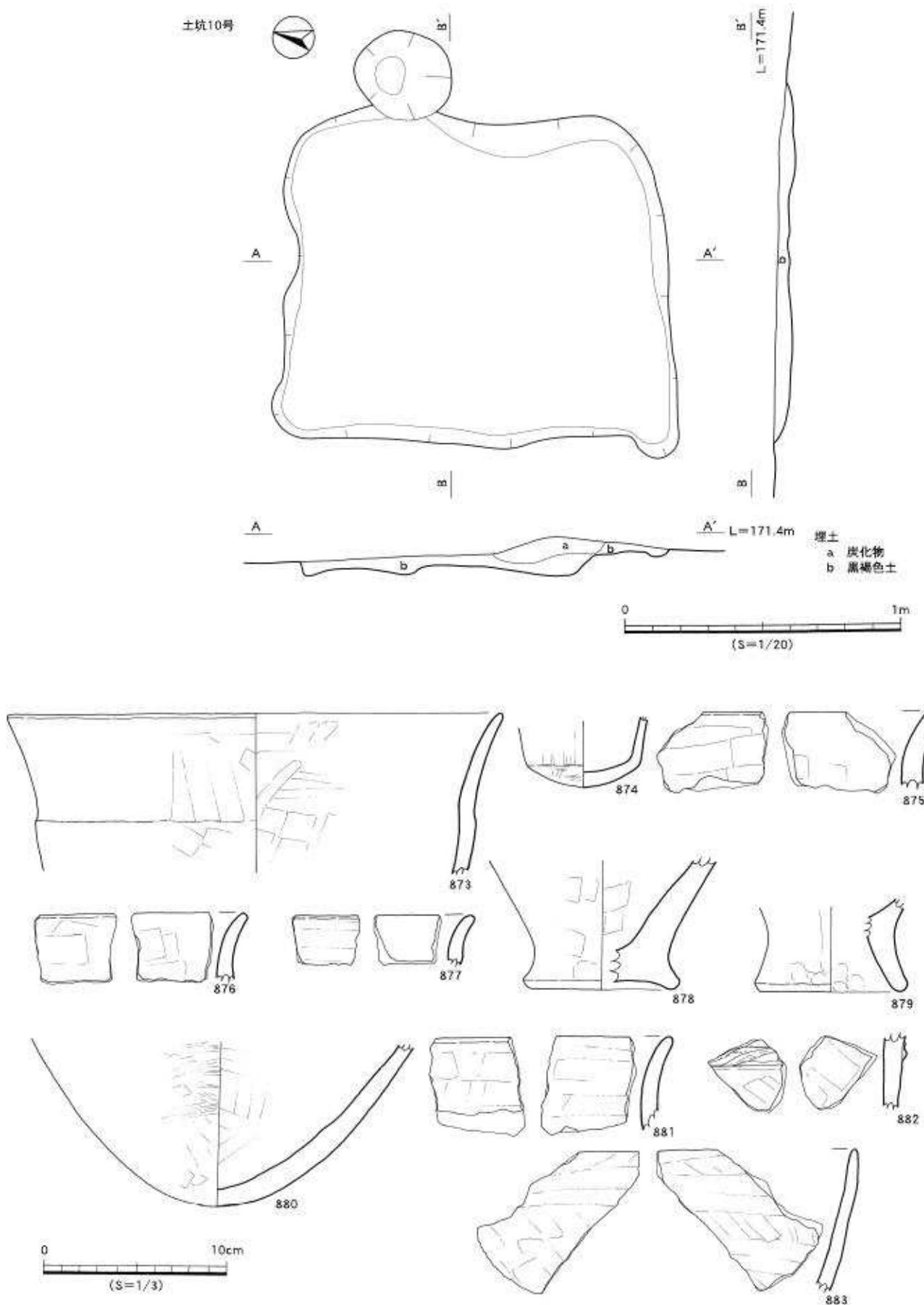
土坑27号



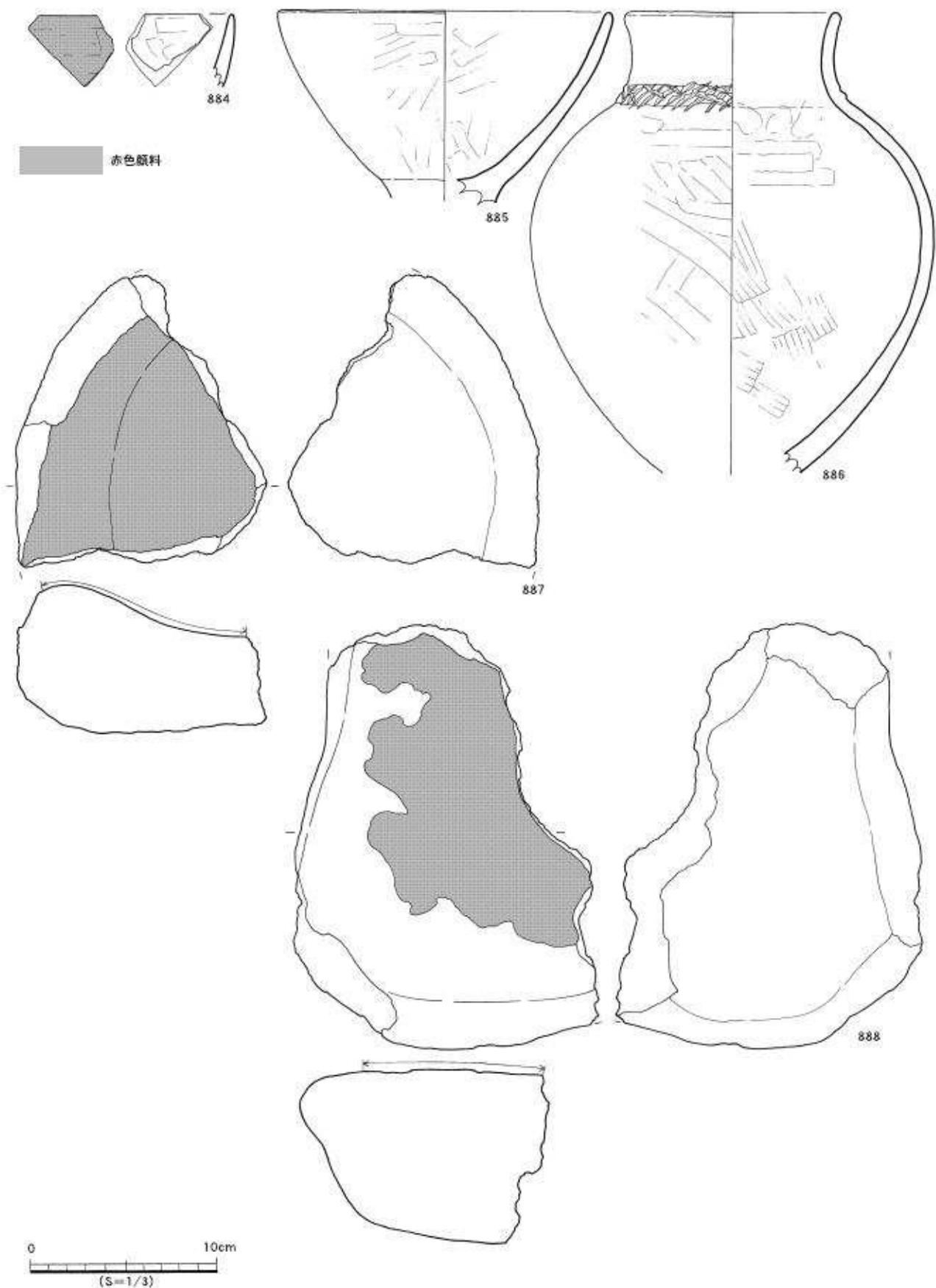
第374図 土坑25号, 27号



第375図 土坑 8号, 17号, 18号, 2号



第376図 土坑10号・土坑出土遺物①



第377図 土坑出土遺物②

### (3) 遺物

包含層からは、多くの土器や石器が混在して出土している。これらの中多くは小破片が中心であり、特徴的な破片に関しては器種ごとに分類を行っていったが、多くの胴部片では不明瞭な点も多い。このため、類別は口縁部や底部といった特徴のある部位を中心にして作業を進め、これらの破片から様相のうかがい知れる胴部片については各類に分類した。この結果、当該期資料中で類別が出来たものは2,448点に留まった。

#### 壺 (第380図889～第383図917)

口縁部の形状及び外反度合いで、I～IV類に細分している。I類は、口縁部が外反し、胴部はやや膨らむ。口縁部内面には稜が見られ、対応する外面にも稜が形成されるものもある。総点で19点が出土している。II類は、口縁部が外反する点ではI類に類似するが、内外面に稜が見られない。外面には、かき上げ状の調整痕を残すものが多い。胴部は、突帯があるものと無いものがあり、突帯があるものはキザミが施される。キザミは棒状工具に布を巻き付けているものも見られ、キザミ内に布目圧痕が見られる。胴部は、膨らむものとやや直線的なものとがある。総点で480点が出土している。III類は、口縁部が直行するもので、資料によっては口唇端部のみ外側へ折り返して外反を意識しているものもある。総点で130点が出土している。IV類は、口縁部が内湾気味を呈するものである。胴部の突帯には、指頭つまみにより貼り付けているものも見られる。総点で97点が出土している。

889～891はI類に属する。889は口縁部が外反し、胴部はやや膨らむ。890は胴部の膨らみが強い。892～902はII類に属する。892は口縁部が外反し、胴部の膨らみはやや上方にある。895は口縁部下位に沈線が2条めぐる。900～902はII類の中でも胴部に突帯をめぐらせるものである。900は口縁部がわずかに外反しているが、特に口唇端部が外側へ折り曲がるように開いている。903・904はIII類に属する。903は口縁部はほぼ直行している。胴部の貼り付け突帯は一部で下方に垂下している。904～906はIV類に属する。905は口縁部がはっきりと内湾する。突帯がやや不規則にめぐっている。906の突帯は摘むような指頭圧痕が観察される。907～913は当初竪穴住居跡を想定していた部分からの出土である。

#### 壺 (第383図918～第384図933)

口縁部の形状でI～III類に細分している。I類は口縁部が外反してやや長めに垂下する頸部を有し、胴部との境にははっきりとした稜が見られる。総点で20点が出土している。II類は、口縁部が直行ないしやや外反して頸部は短い。胴部は球状に膨らむ。総点で58点が出土している。III類は、口縁部が外反して頸部で更に屈曲するいわゆる2重口縁の器形を呈する。この屈曲部分にキザミが施されるものや、頸部に突帯がめぐるものなど、バリエーションも豊富である。総点で29点が出土している。

918はI類に属する。口縁部が外反し、頸部は緩やかに長い。919～921はII類に属する。921は口縁部がわずかに外反し、頸部に格子状のキザミが施される。この部分は、断面観察では明確に出来なかつたが、粘土を貼り付けて突帯を意識していると思われる。922～926はIII類に属する。922は口縁部が外反し、頸部で屈曲をする。924は屈曲部に薄く突帯がめぐりキザミが施されている。926～933はI類からIII類に分類できなかつたものである。933は細沈線が施されている。

#### 壺 (第384図934～946)

底部形態や屈曲部の位置など多くのバリエーションが

存在する。特徴的な資料を中心に図化したが、大別すると赤色顔料を施さないものと赤色顔料を施すものに分けられる。前者が190点、後者が255点出土している。出土状況図は、この赤色顔料の塗布の有無により作成した。935は口縁部が直線的に外反し、胴部で屈曲する。底部へは丸みを持つが、器壁は均一である。936は口縁部が長い。底部は厚いが尖底ぎみである。945は、外面に赤色顔料が塗布されている。底部中央が厚く膨らむ。946はわずかに平底状を呈している。

#### 高壺 (第384図947～第385図957)

口縁部の形態や、壺部にある屈曲部、脚部の形態などバリエーションが豊富である。壺同様、赤色顔料を施すものと施さないものとに大別でき、この観点で出土状況も作成している。前者が967点、後者が184点出土している。947は口縁部が外反し頸部で屈曲する。他の資料と比べて壺部が浅い。952～954は脚部片である。954・956は穿孔が施されている。

#### 鉢 (第385図958～967)

深い壺状を呈するものや、脚を有して赤色顔料を施すものなど様々なバリエーションが見られる。ここでは一括した。

#### 瓶 (第385図968・969)

瓶の可能性がある2点を図化した。同一個体と思われる胴部片が他に1点ある。968は口縁部片である。969は968と胎土や色調が類似しており、同一個体の可能性がある。

#### ミニチュア (第385図970)

1点を図化した。970はやや不安定な底部である。

#### 須恵器 (第385図971～973)

18点が出土し、この内3点を図化した。

#### 石器 (第386図974～984)

石器に関しては、時期特定が困難であり形態的特徴や出土状況から判断していく。ただし、器種によっては弥生時代との区別が困難であったため、ここに一括して掲載したものもある。

974～979は磨製石鎌である。5点が出土し、この内5点を図化した。974は正三角形に近い。977は先端部で角度の変化が見られる。978は未製品の可能性もある。979は先端部片である。

980～983は石庖丁である。4点が出土し、この内4点を図化した。980は穿孔が貫通していない。981はわずかに穿孔部分が観察されるが、刃部等を打ち欠いており、再加工あるいは転用品かと思われる。982～984は欠損品である。

#### 砥石 (第386図984)

1点を図化した。984は扁平で両面に使用痕が見られる。

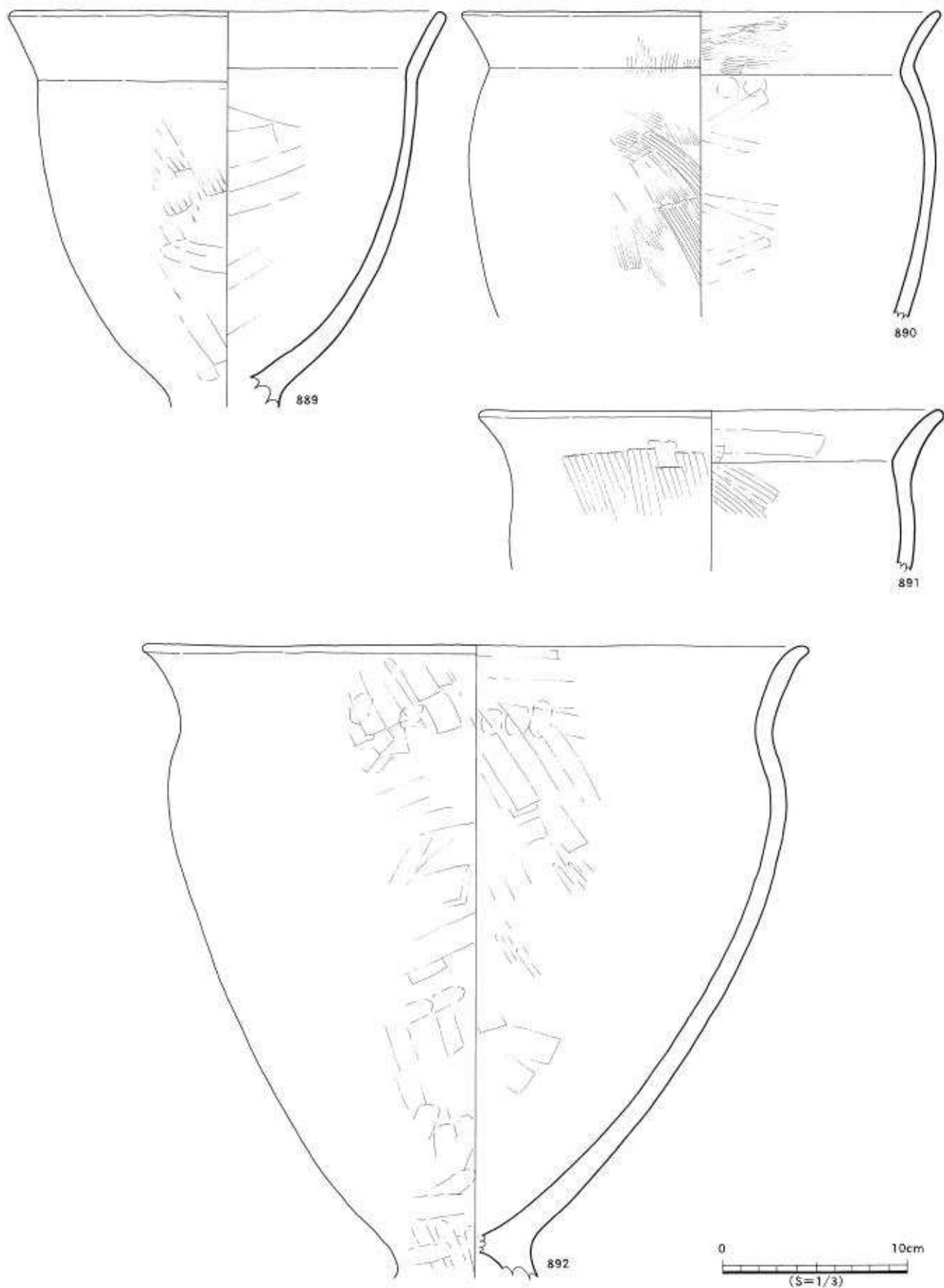
#### 玉類 (第386図985～989)

勾玉と小玉が出土している。勾玉は2点出土し、小玉は3点出土している。985は頁岩製である。先端部を欠損する。986は緑色の石材を用いている。近世遺構内から出土していたが、ここに掲載した。

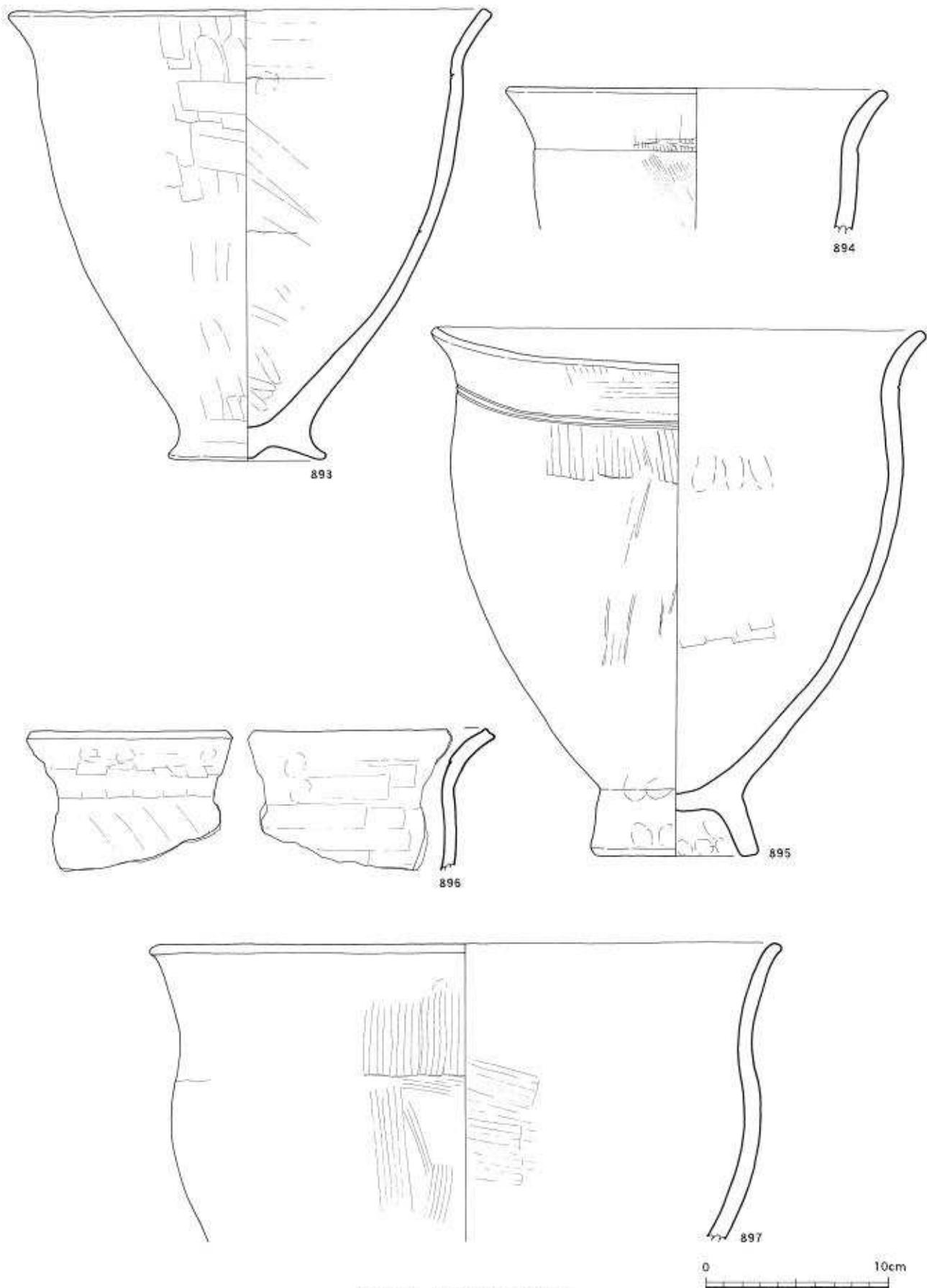
小玉は、いずれも径が5mm前後と小さい。蛍光X線分析の結果987・988が鉛ガラス、989がカリ石灰ガラスであった。

第378図 包含層遺物出土状況①

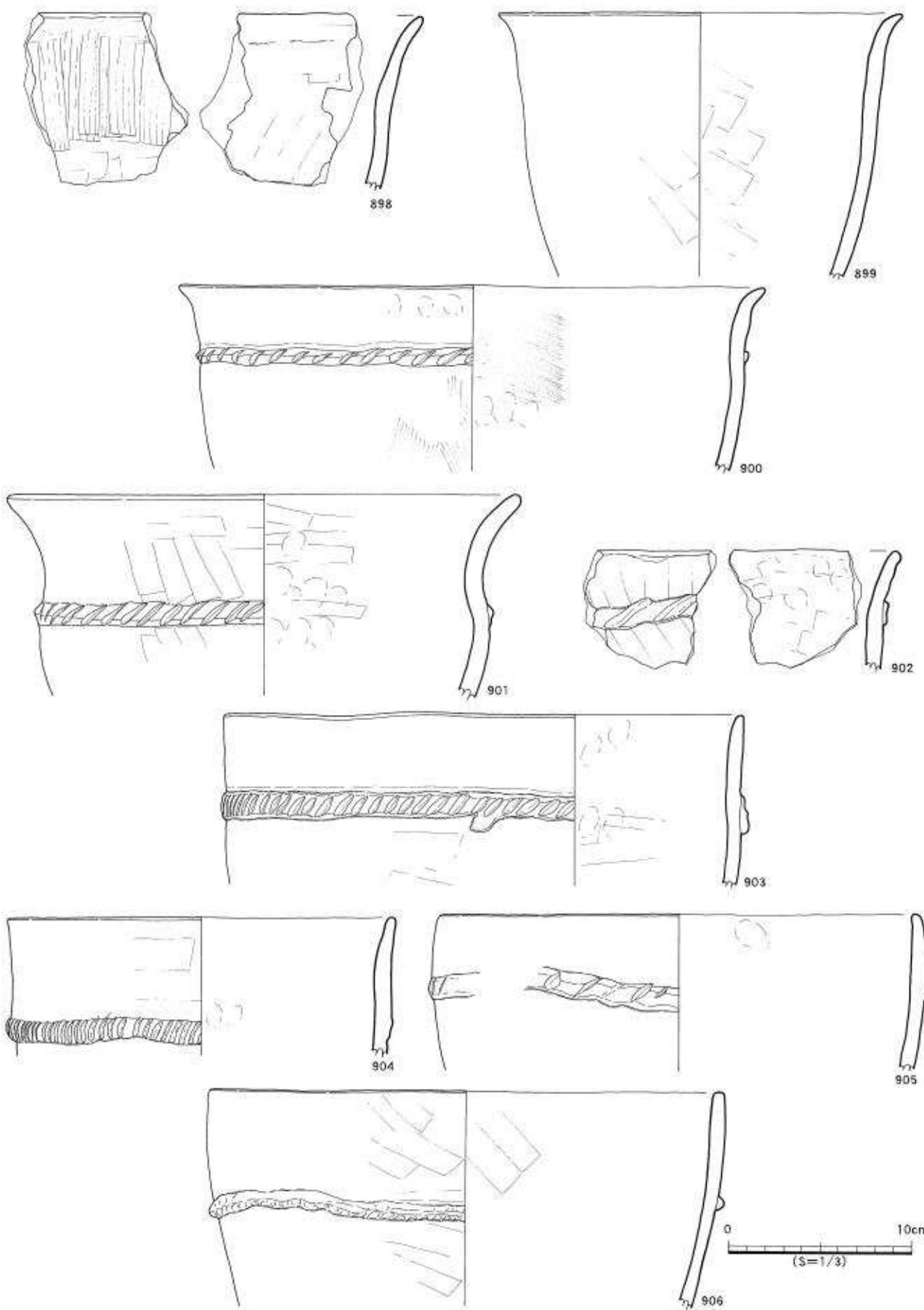
第379図 包含層遺物出土状況②



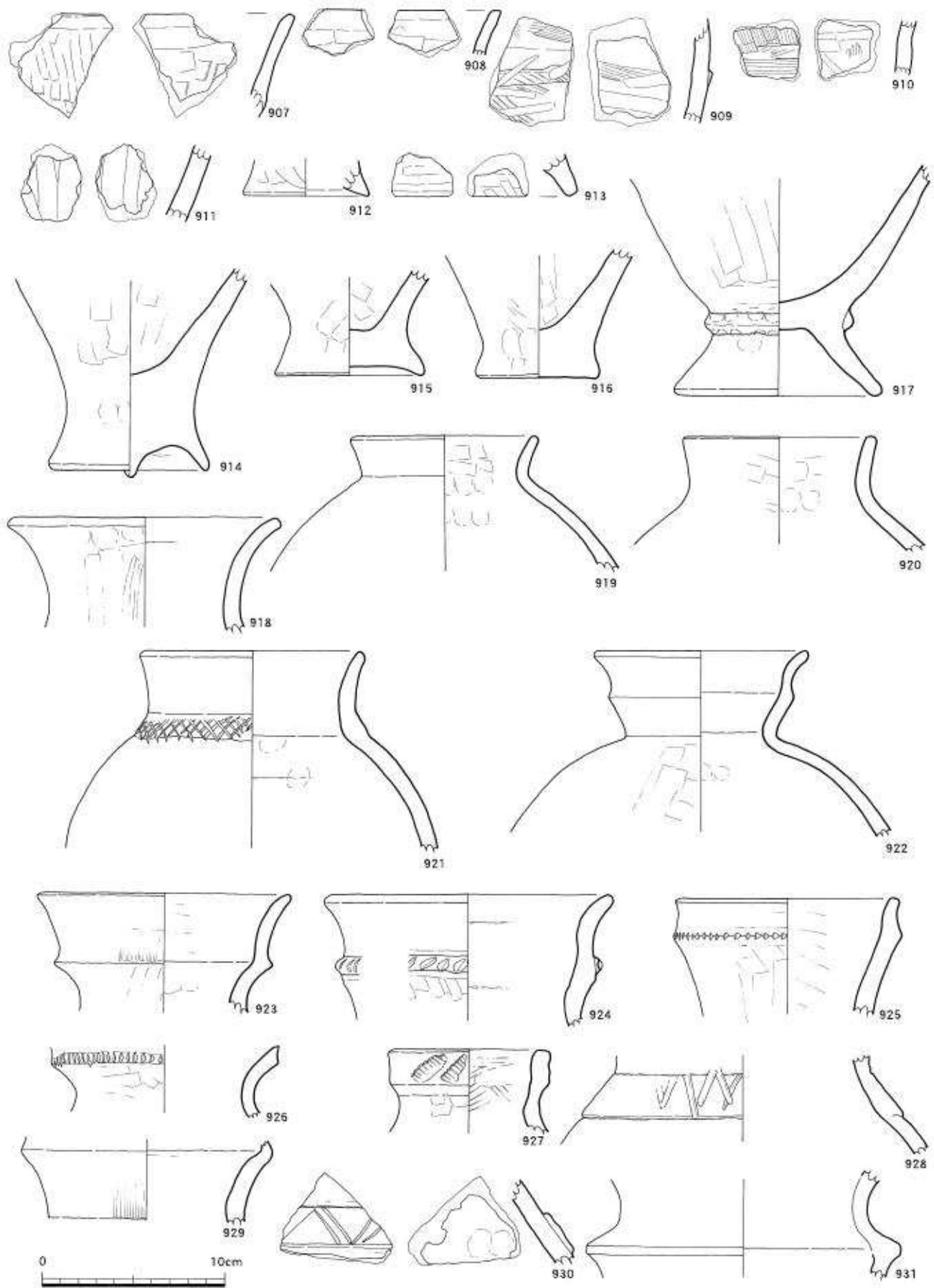
第380図 包含層出土遺物①



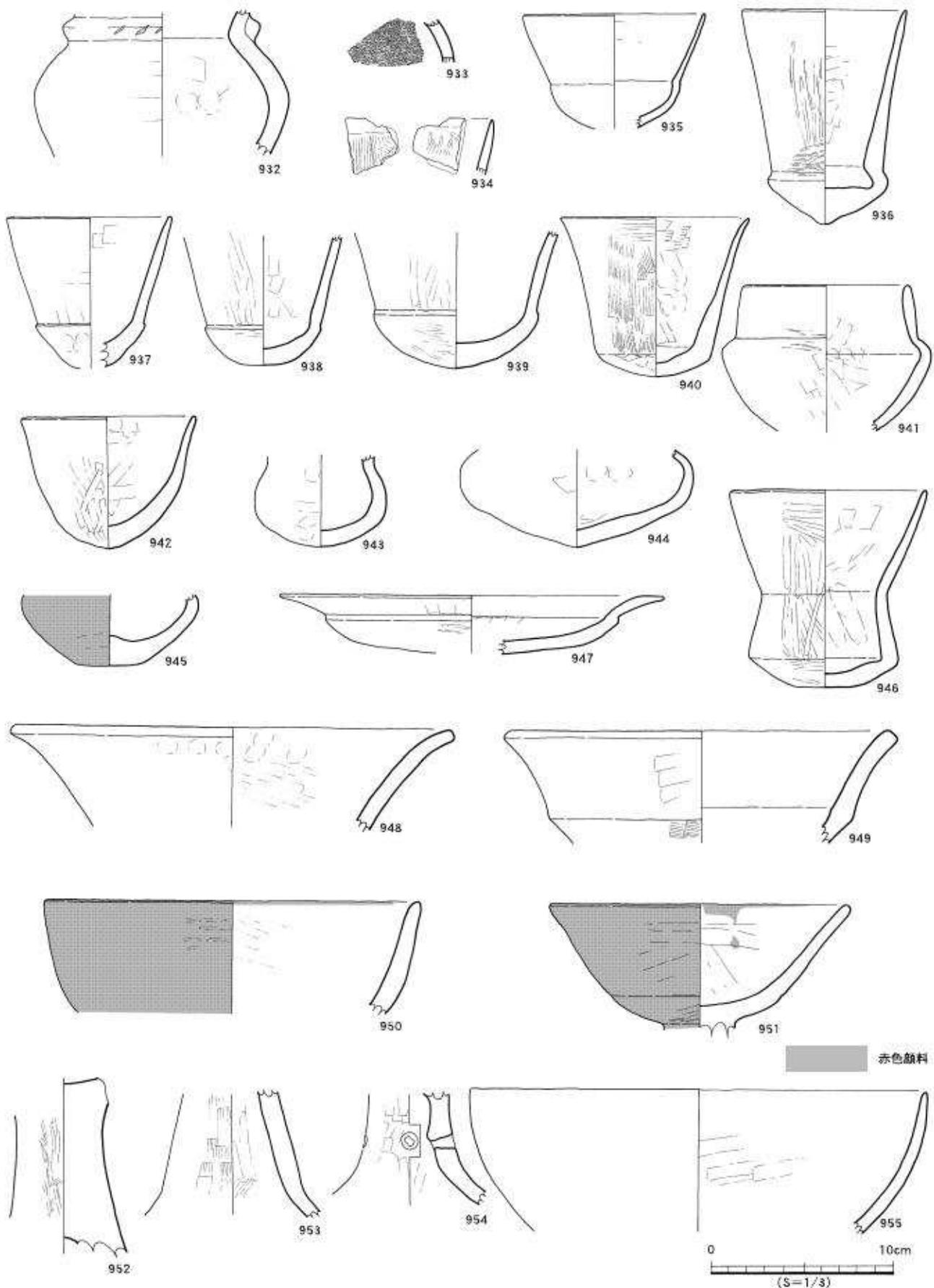
第381図 包含層出土遺物②



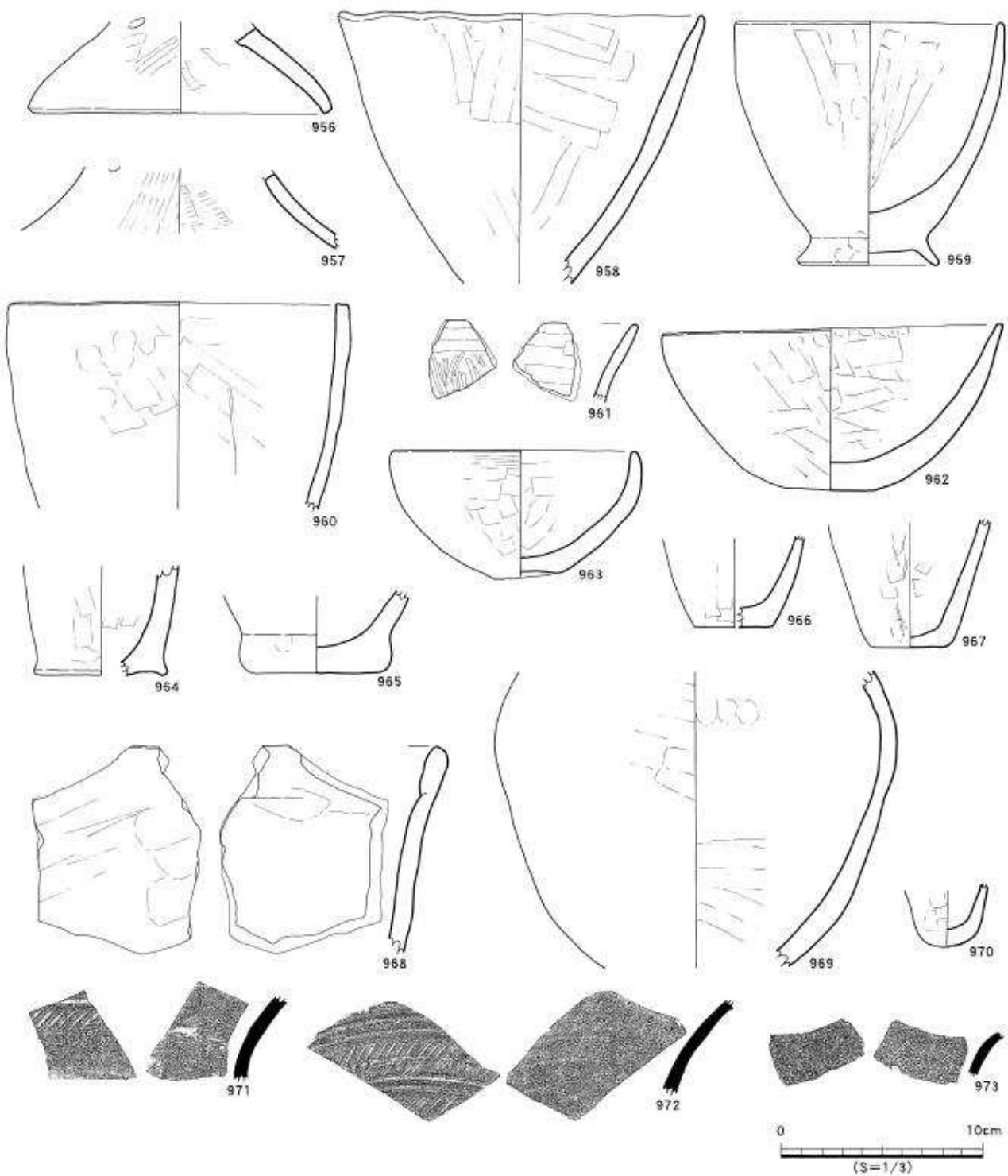
第382図 包含層出土遺物③



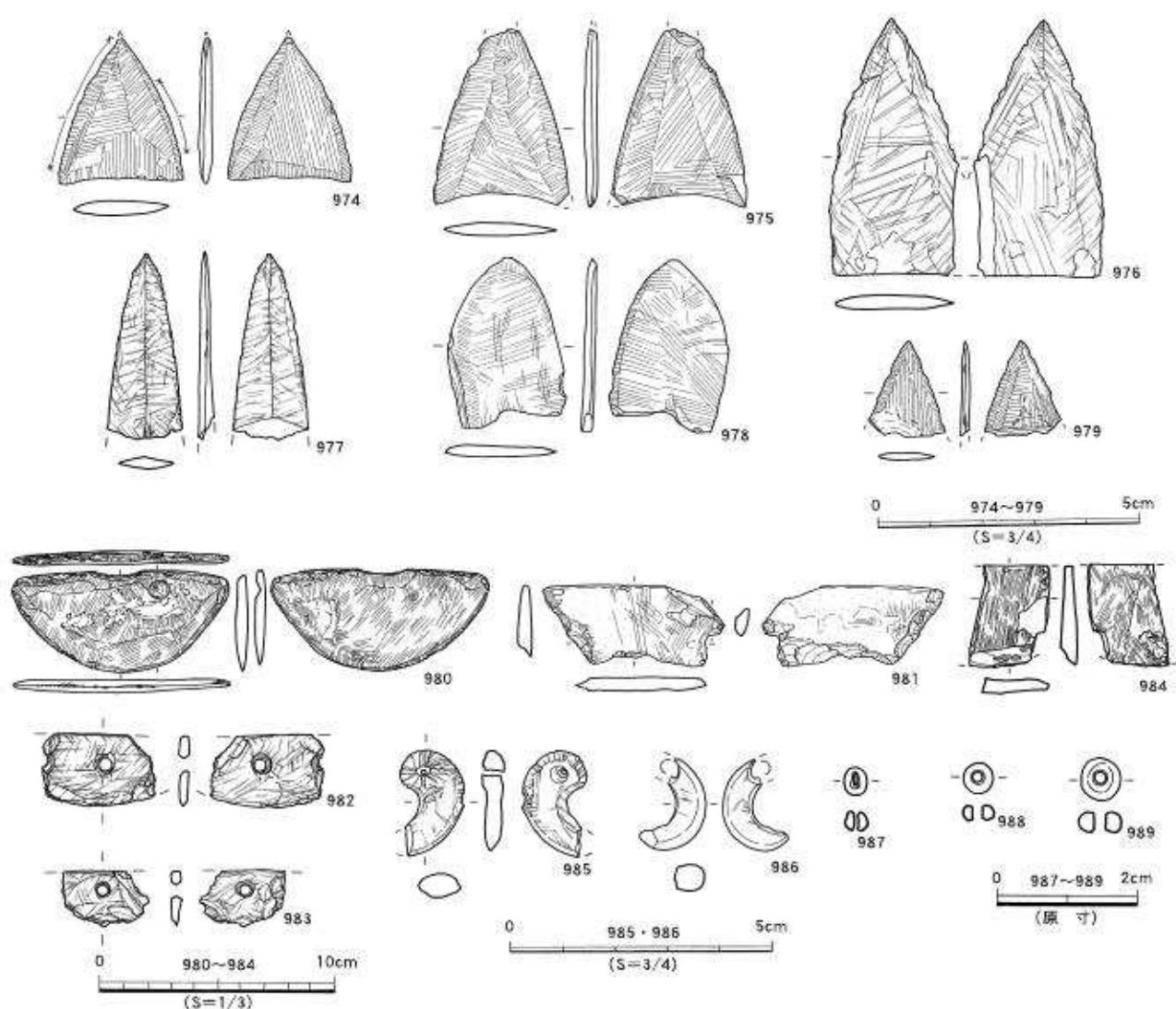
第383図 包含層出土遺物④



第384図 包含層出土遺物⑤



第385図 包含層出土遺物⑥



第386図 包含層出土遺物⑦

## 4 古代の調査

### (1) 調査の概要

古代の調査は、主にⅡ層で行ったが、遺物包含層の残存状況は悪く、遺構検出はⅥ層のアカホヤ火山灰層上面で行った。遺物包含層が残存している場合、大型の破片についてはトータルステーションで取り上げを行い、小破片はグリッドごとに一括取り上げを行った。

遺構は、掘立柱建物跡が1棟、土坑が3基検出されている。遺物は、下流側調査区（46区～57区）に集中している。主な遺物としては、土師器（环、塊、皿、小皿、甕、鉢、瓶、移動式竈、土錘、焼成粘土塊）、黒色土器A類、黒色土器B類、須恵器（环、甕、壺）、綠釉陶器、越州窯系青磁、砥石、軽石などがある。なお、遺物包含層から出土した遺物総数は5,736点に及び、第392・393図に出土状況を示した。

### (2) 遺構

#### 掘立柱建物跡（第389図）

G・H-21区で検出された。規格は2間×3間で、大きさは4.0m×6.0mである。柱穴の深さは、最も浅いもので32cm、最も深いものでは66cmとなるが、残存値で55～60cm程度の深さのものが多い。柱穴内からは4点の遺物が出土し、このうち3点を図化した。

1はピット3より出土した土師器で环の口縁部から底部で、胴部～底部間にふくらみがあり、口縁部外面、胴部～底部間内面にススが付着する。

2、3はピット6より出土した土師器である。2は、环の口縁部から底部で口径12.8cm、器高4.5cmを測り、外面胴部から底部にかけてススが付着する。3は塊の底部で底径5.8cmを測り、内外面にススが付着する。

#### 古代土坑1号（第389・第390図）

I-22区で検出され、前述の掘立柱建物跡と位置的に近い。径70cm×70cmのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは5cmとかなり浅い。埋土の大部分はⅡ層の黒褐色土で、土師器の塊が出土したことにより、古代の遺構と認定することができた。土師器塊が1点と碟1点が出土し、このうち土師器塊を図化した。

4は土師器塊の胴部から底部で、充実高台をもつ。底径は5.4cm。内外面ともヨコナデ調整を施し、底部にヘラケズリの痕跡がある。

#### 古代土坑2号（第389・第390図）

E-45区で検出され、径140cm×150cmの円形を呈する。検出面からの深さは30cmとかなり深い。埋土はⅡ層の黒褐色で、アカホヤ小ブロックが混在する。土坑北側に石皿片の集中が見られ、その中から土師器の甕が出土した。遺物は29点出土し、5点を図化した。

5は土師器塊の口縁部で、先端は直線的である。6は土師器甕の口縁部から胴部である。外面にふきこぼれが

古代掘立柱建物跡 柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	38	35	63
2	43	38	32
3	46	36	45
4	45	38	62
5	44	39	59
6	40	36	66
7	45	30	59
8	38	34	50
9	38	33	55
10	46	44	47

古代掘立柱建物跡 規模表

梁方向<タテ>		軸方向<ヨコ>	
柱穴間	距離(m)	柱穴間	距離(m)
1～9	4.06	1～4	6.33
1～10	2.1	1～2	2.07
10～9	1.96	2～3	2.13
2～8	4.05	3～4	2.13
3～7	4.1	10～5	6.25
4～6	4.1	9～6	6.22
4～5	2.06	9～8	2
5～6	2.04	8～7	2.18
		7～6	2.04

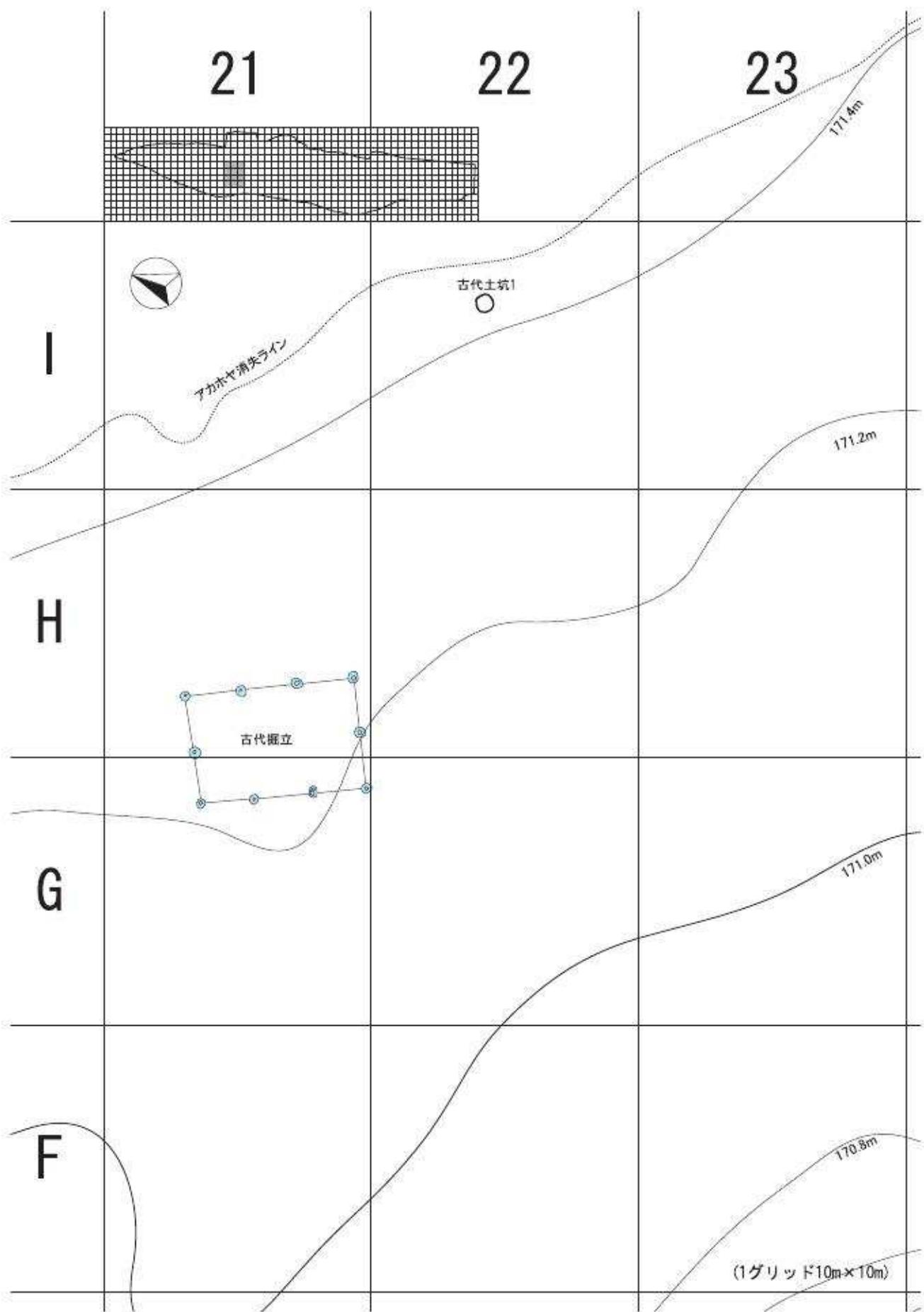
見られ、内外面ともにハケ、ナデの調整が施される。7は黒色土器A類の塊で、口縁部は外反する。外面にススの付着が見られる。8は砥石で天草石を用いている。9は石皿で、破片4点が接合した。

#### 古代土坑3号（第389・第391図）

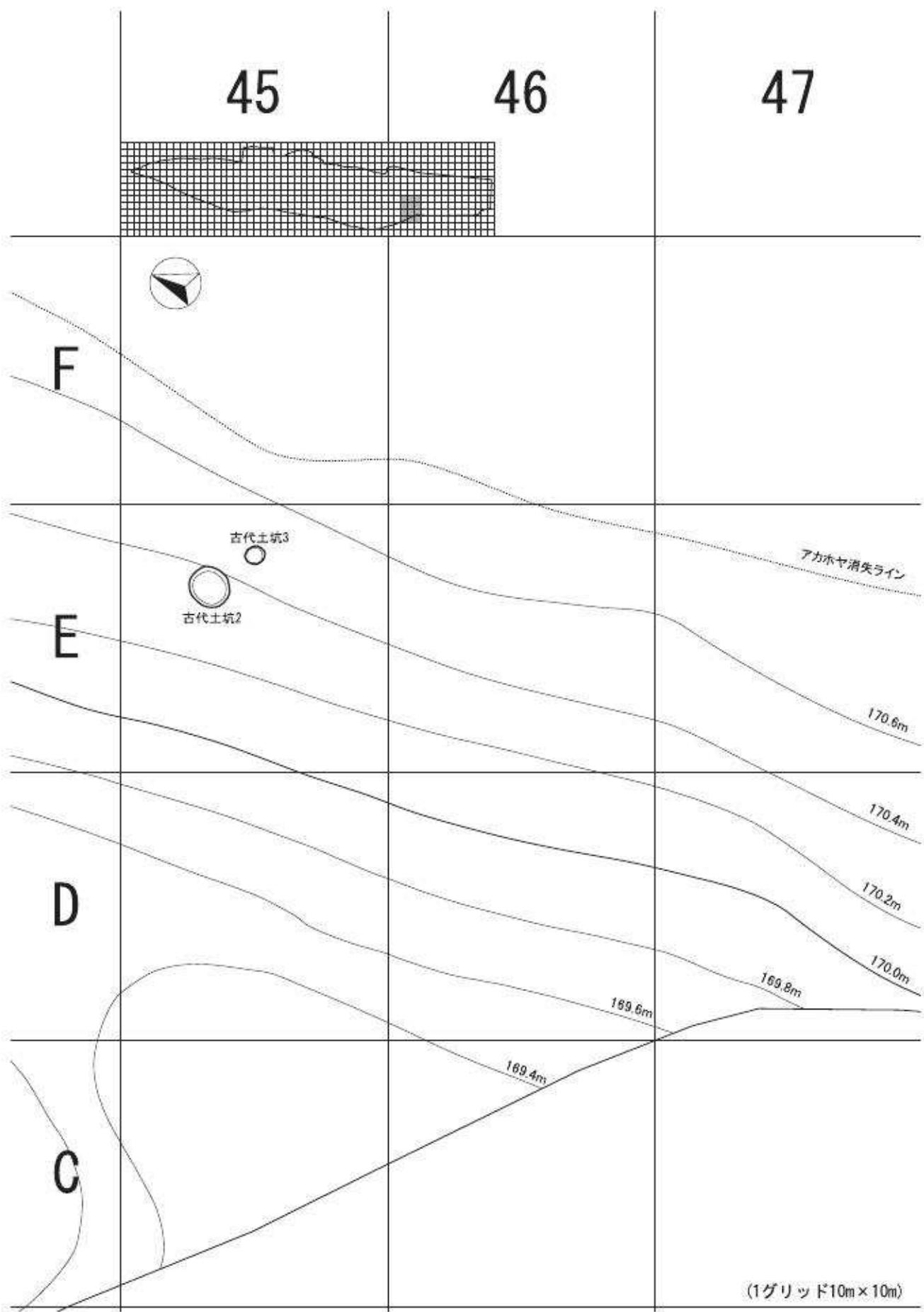
E-45区で検出され、径70cm×70cmの円形を呈する。検出面からの深さは20cmである。埋土はⅡ層の黒褐色で、アカホヤ小ブロックが混在する。

遺物は50点出土し、12点を図化した。

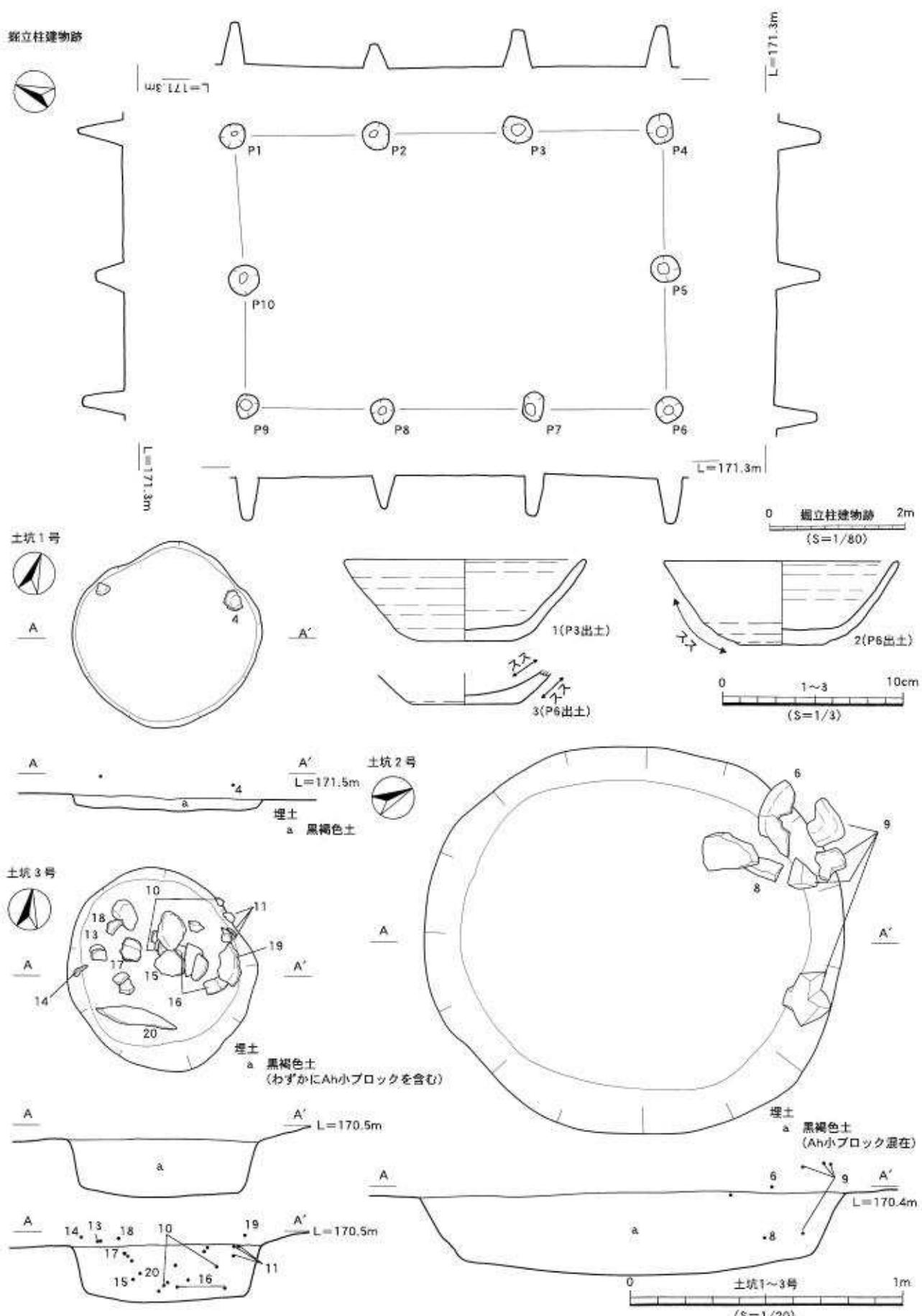
10、11は土師器塊の口縁部から底部である。10は充実高台を持ち、底部はヘラ切りを施し、口縁部先端は直線である。11は残存状態も良好で、口縁部先端がやや外反する。12は土師器塊の口縁部から胴部で外面をナデ調整する。口縁部の先端は直線になる。13、14は土師器塊の胴部から底部で、13はハの字状の高台をもつ。14は高台が欠損し、内外面ともに胴部下位にススが付着する。15、16は黒色土器A類塊で、15は内面をミガキ、外面をヨコナデで器面調整する。16は高台が欠損する。底部を含む外面にススが付着し、内面にはヨコナデ、ミガキの調整を施す。17は黒色土器A類塊の胴部である。18は土師器甕の口縁部から胴部で、内面にススの付着とともに、ケズリと指頭圧痕が見られる。19は土師器甕の胴部で、内外面ともハケメを施し、ススが外面に付着する。20は



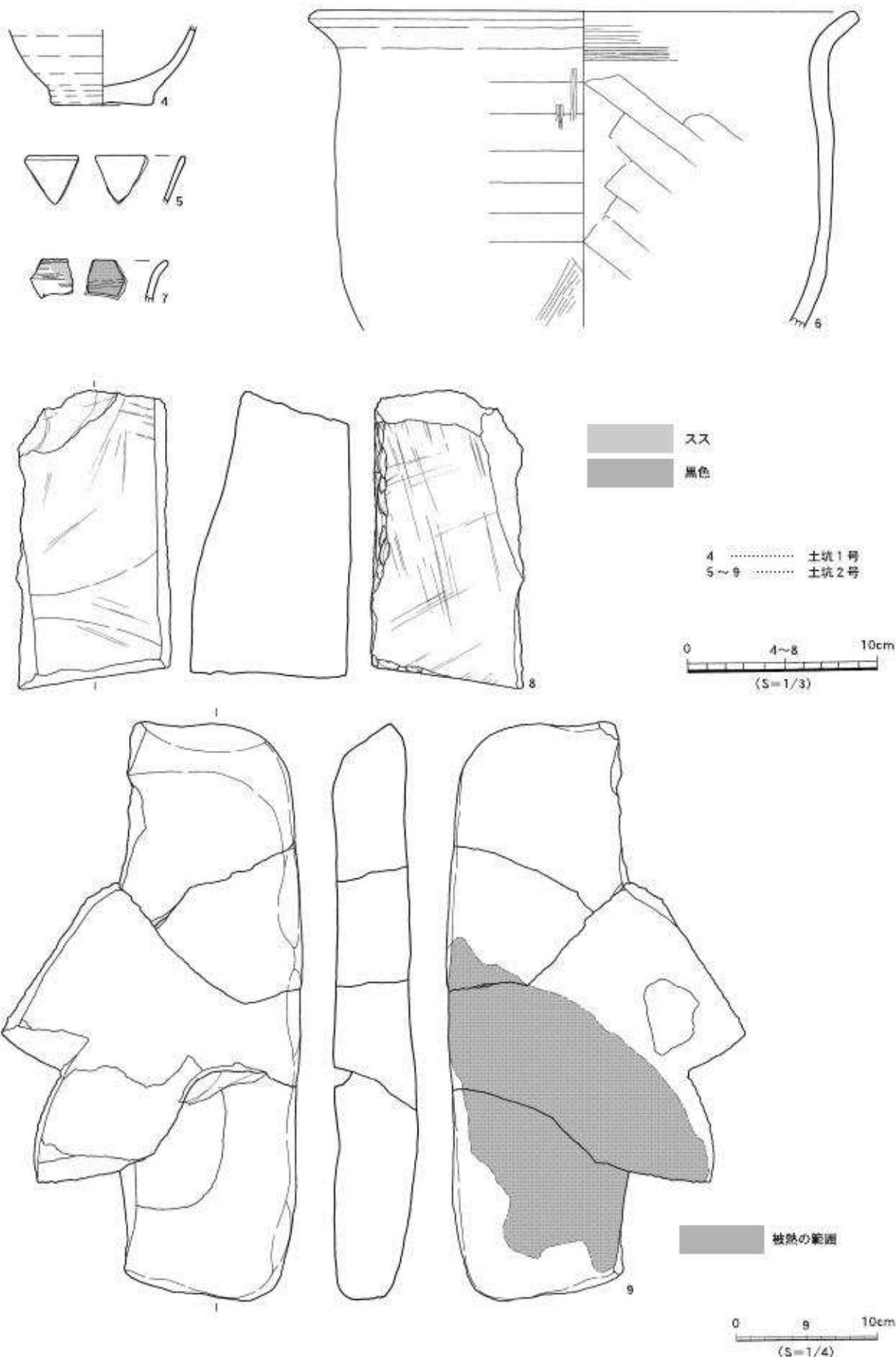
第387図 遺構配置図①



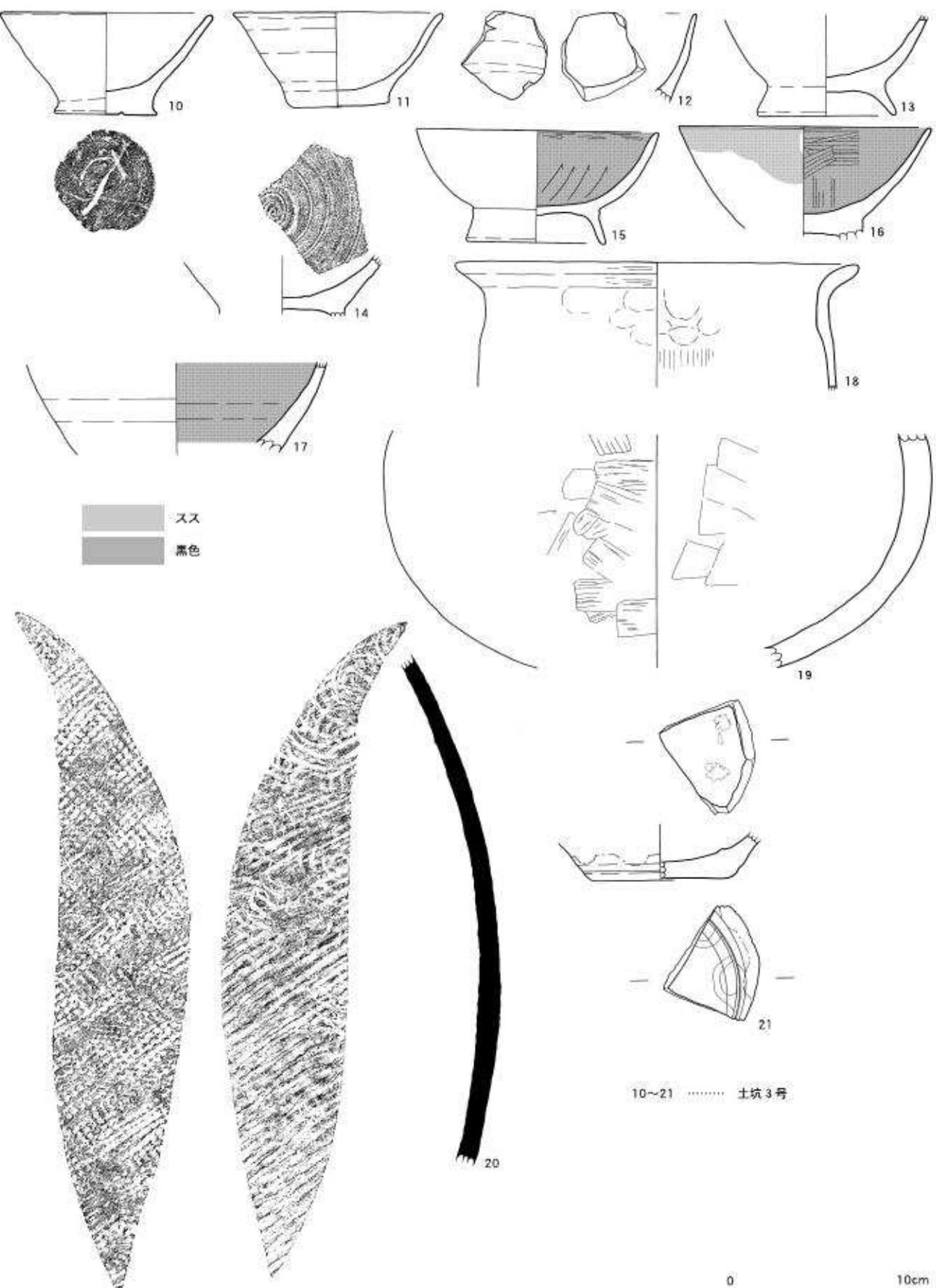
第388図 遺構配置図②



第389図 挖立柱建物跡・出土遺物、土坑1～3号



第390図 土坑1号、2号出土遺物



第391図 土坑3号出土遺物

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	
H	海	地	面	水	天	空	气	温	度	湿	度	风	速	压	力	气	压	差	温	度	变	化	气	温	变	化
M	海	地	面	水	天	空	气	温	度	湿	度	风	速	压	力	气	压	差	温	度	变	化	气	温	变	化
S	海	地	面	水	天	空	气	温	度	湿	度	风	速	压	力	气	压	差	温	度	变	化	气	温	变	化
W	海	地	面	水	天	空	气	温	度	湿	度	风	速	压	力	气	压	差	温	度	变	化	气	温	变	化

第392図 包含層遺物出土状況①

第393図 包含層遺物出土状況②

須恵器甕の胴部で、外面を格子目タタキ、内面を平行文タタキ、同心円当て具痕で器面を調整する。21は越州窯系青磁の底部である。

### (3) 包含層

土師器

壺、壇、皿、小皿などの供膳具や、甕、鉢、甌などの煮炊具、黒色土器A類、黒色土器B類が確認できた。また、土製品で、移動式竈、土錘、焼成粘土塊なども出土した。総点で5,627点出土し、122点を図化した。

坏 (第395图22~30)

9点を図化した。22~24は口縁部から底部で、口縁部先端が直線になる。22は立ち上がりに沈線を施す。内面にスス付着が見られるのと同時にヘラケズリの痕跡がある。23の底部付近には、削り取られた痕跡があり、内外面にナデを施す。24は底部から胴部までは平坦で、胴部付近で多少のふくらみを呈する。底部にはヘラケズリの痕跡があり、胴部との境目はほとんどない。

25~29は口縁部から胴部で、内外面ともナデを呈する。29以外は口縁部先端が直線となり、25は立ち上がりで薄くなつたのち口縁部付近で厚みを増す。26~29の立ち上がりは厚く膨らみをもち口縁部へと続く。

30は胴部で、胴部下位または底部上位に位置する。器面調整は内面ヘラミガキを呈する。

擦（第395図31～60、第396図61～78）

48点を図化した。31~34は口縁部から胴部を残す。H-49区Ⅱ層より出土し、口縁部は直線に近い。31は立ち上がりがやや内湾する。32は立ち上がりが直線的である。33の立ち上がりは胴部付近でややふくらみをもつ。34は底部付近の胴部になり、口縁部先端にやや厚みがある。

35～39は口縁部から脣部を残し、口縁部先端が外反す

る。38以外H-49区Ⅱ層より出土し、38はF-28区Ⅱ層で出土、立ち上がりに厚みを伴う。35はふくらみ後直線の立ち上がりを備え、大きめの塊となり、内外面ともナデを施す。36、37はふくらみ後立ち上がる。39は胴部付近で厚みがあり、ふくらみのち直線になる。

40~44は口縁部から底部で、充実高台を持ち、底部にヘラ切りの痕跡がある。40はほぼ完形で出土した。口縁部にわずかなススの付着があり、内外面に工具ナデが施される。41、43は底部と胴部の境目が区別でき、くの字状で屈曲し、胴部で外反し口縁部へと続く。ススが外面で口縁部全体に、内面で口縁部の一部に付着する。42は高台左側に小さな突出部があり、内湾後立ち上がり胴部へ続き、口縁部先端は直線に近い。外面では胴部表面に線刻、内面に指頭圧痕が見られる。43は胴部がふくらみを持ち、口縁部が直線となり、内面にケズリを残す。44は口縁部手前でややくぼみ後直線になる。

45~63とともに充実高台を含む平底を底部とする。底部にヘラ切りの痕跡があり、底部と胴部の境目が明瞭である。47, 48, 52, 53, 56, 57, 58, 59, 60, 62はH-49区Ⅱ層から出土した。45はくの字状から胴部へと続く。内外面に赤茶色の斑点が点在する。46は、外面で胴部表面から底部に赤褐色の斑点が点在、内面にも赤褐色の斑点が点在し、充実高台上面から底部に同心円状のケズリが確認できる。小さな突出部が胴部まで続き、口縁部手前で外反し、厚みが薄くなる。47には稜線が入る。外面に2か所のスス付着と内面にナデを形成する。48は、底部から胴部はなだらかに立ち上がり、内面にケズリらしきものが見られる。50は、底部付近胴部で屈曲し胴部へ続き、外面にはスス付着の痕跡がある。51は胴部はじめの部分で微妙なふくらみの後口縁部へ続く。49, 51,

53, 54, 55, 56は、底部の接地面にわずかな突帯らしきものが見られる。52の立ち上がりは底部から胴部にくの字状に屈曲後、口縁部へと続き、内面に渦巻き状のケズリを呈する。53は内面にススが付着し、十字を模したヘラ線刻が確認できる。55の底部には平行文の跡らしきものが確認できる。57の底部外面に反時計回りの渦巻きがある。58は外面にススの付着と指頭圧痕がある。59の立ち上がりはなだらかに口縁部へと続く。60~62は内外面ともに茶色の斑点を呈する。63は高台の接地面にわずかな凹凸が見られ、底部外面に5本の線が確認できる。

64~71はハの字状高台で底部を残し、64は残存状況がよく、底部裏面に圧痕がある。65は内外面ともにナデを呈する。66は内面に反時計回りの渦巻きをもつ。67は立ち上がりがくの字状で、内面を木の葉模様で呈する。68は高台部分が欠損し、内面に木の葉模様が付着している。69は内面にススの付着と、十字のヘラ記号が2か所確認できる。70は短い高台を維持する。71は他と比べて、底部裏面がやや直線に近い。

72~78は、高台が欠損しているものである。72は内面に布目が圧痕されている。外面にスス付着が濃い部分、薄い部分各1か所ある。73は底面ヘラケズリに伴う立ち上がりと、内面にヘラミガキとススが付着する。74は外面にヘラ記号、内面にタタキ痕を施す。75は内面を十字ヘラ記号で調整する。76は高台をヘラで削られ、摩滅する。内面に指頭圧痕が確認できる。77はゆるやかに立ち上がり、内面にタタキが見られる。78は内面にヘラミガキを施す。

#### 皿および小皿（第396図79~81）

3点を図化した。79は皿の口縁部から胴部で、ススが外面に少し胴部付近に付着する。80は皿の底部で、内面に凹凸がある。81は完形品としての小皿で、口縁部の先端がほぼ直線になる。底部はヘラ切りで、内外面ともススが付着する。

#### 壺（第396図82~86・第397図・第398図97・98）

17点を図化した。82~86は口縁部が外反し、口縁部と体部（頸、肩、胴）の間に稜線がない。82は内外面にスス付着、内面にヘラケズリを施す。83は内外面にナデ、ヘラケズリを呈し、外面にハケメがある。84は内面にヘラケズリ、指頭圧痕を確認できる。85, 86は内外面ともスス付着、ハケメを呈する。86は口唇部手前に凹みが見られる。

87~96は口縁部が外反し、口縁部と体部（頸、肩、胴）の間に稜線がある。87~91は、くの字状に外反する。87は外面にスス付着と指頭圧痕があり、内面はヘラケズリを呈する。88は外面をヘラナデで表面全体にススが付着し、内面に指頭圧痕を施す。89は内面にヘラケズリ、外面に指頭圧痕が見られる。90は内外面ともにケズリがあ

り、91は外面にススが付着する。92はくの字状に外反するも窄んだ様相を呈し、内外面ともにススを付着する。93~96は口縁部がより外反する。93は内面にヘラケズリ、外面にハケメを呈する。94, 95は外面にススを付着し、95の内面に指頭圧痕がある。

97, 98は胴部で、外面に格子目タタキを呈し、97の内面にはケズリが確認できる。

#### 鉢（第398図99~101）

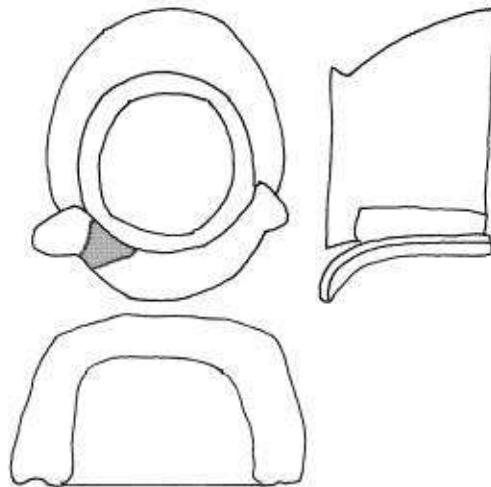
3点を図化した。99は、外面にススが付着する。胴部から口縁部までの立ち上がりは、口縁部手前で厚みがうすくなる。100の胴部から口縁部にかけての立ち上がりは、数回の凹凸を経て口縁部へと続く。101は99と対照的に内外面ともススの付着が見られなかった。また、脚の外面に指頭圧痕、内面に稜線らしきものが確認できた。

#### 甌（第398図102・103）

2点を図化した。102は内面にヘラケズリ、外面にケズリを施す。103は把手と推定される。

#### 移動式壺（第398図104）

104は移動式壺の一部と思われる。小破片だが、焚き口の上部で庇状を呈するものと推定される。また、中央部の方が幅広になる状況が観察される。下面は全面にススが付着し、復元図のアミ伏せ部分の位置に相当するとと思われる。



第394図 移動式壺の復元図

#### 黒色土器A類（第398図105~121・第399図122~126）

22点を図化した。105の底部はハの字状高台をもつ。底部よりくの字に反り、胴部付近でふくらみをもち、口縁部がわずかに外反する。底部内面にはミガキが施され、外面にはススが付着する。106は口縁部が外反する。底部には切り離しの痕跡があり、外面にススが付着する。

立ち上がりは胴部でわずかなふくらみの後107, 109, 111, 112, 114は口縁部が外反するのに対し、108, 110, 113は直線となる。107, 108の内面にはヘラミガキが施される。108は黒色化が弱い。ススが付着している



第395図 包含層出土遺物①